（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 174 集

枚方市

茄　子　作　遺　跡

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008 年　3 月

財団法人　大阪府文化財センター

茄子作遺跡

二〇〇八年三月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第174集

枚方市

茄子作遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

茄子作遺跡出土　初期須恵器

序　　文

茄子作遺跡は、枚方市の東南部、交野市との市境付近に位置しています。この遺跡は、弥生時代後期から古墳時代の集落遺跡として早くから周知されてきましたが、一般国道１号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路の建設に伴う埋蔵文化財の確認調査によって、平成16年３月、南西方向へ範囲が拡大されました。

現在、淀川左岸一帯にあたる北河内地域では、一般国道１号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路工事に先立つ発掘調査によって、新たに多くの遺跡が見つかっています。また、周知の遺跡についても、これまでの認識を覆すような、貴重な発見が報告されています。発掘調査が終了した遺跡では、その成果を盛り込んだ報告書を刊行してまいりますが、本書もそのひとつであり、これまで知られていなかった茄子作遺跡の実態を、みなさまにご報告するものであります。

茄子作遺跡が立地する枚方丘陵の近辺では、大阪における縄文時代早期の指標となる土器が出土した神宮寺遺跡、弥生時代の大型建物が検出された上の山遺跡など、これまでにも多くの遺跡が報告されています。

今回の茄子作遺跡の調査では、古墳時代から中近世にいたるまでの遺構面が確認されました。このうち、古墳時代に営まれた集落の発見と、その集落に起居した人物が精製したと考えられる初期須恵器の出土は、これまで描かれていた当地域のイメージを一新するものとして注目されます。また、全国的にも珍しい織機部材が出土したことから、織物生産技術の導入に関する新たな見解を得ることができました。

これらの調査成果について、詳細な記録と担当者の知見を本書に集約いたしました。本書が、この地域の歴史的理解を探る一助となれば、幸いに存じます。

最後に、調査にあたってご助力・ご協力をいただきました関係諸機関・地元関係者各位、また埋蔵文化財の調査に対してご理解とご教示をいただきました地域のみなさまに、深く謝意を表します。これからも、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成19年９月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、大阪府枚方市茄子作南町地先に所在する、茄子作遺跡の発掘調査報告書である。

2．この発掘調査は、一般国道１号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路建設に伴うものである。
平成 16 年度～ 18 年度までは、西日本高速道路株式会社　関西支社（平成 17 年 10 月 1 日付で日本道路公団関西支社より社名変更）から、財団法人　大阪府文化財センターが委託を受け、調査および整理作業をおこなった。
平成 19 年度は、引き続き、近畿地方整備局　浪速国道事務所および西日本高速道路株式会社　関西支社から委託を受け、整理作業をおこなった。委託期間・および調査期間・整理期間は以下のとおりである。
平成 19 年度に本書の刊行を以って、すべての業務を完了した。
委託期間　平成 16 年 5 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日
調査期間　平成 16 年 6 月 9 日～平成 18 年 2 月 28 日
整理期間　平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 9 月 30 日

3．発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。
〔平成 16 年度〕調査部長　玉井　功、調整課長　赤木克視、京阪調査事務所長　渡邊昌宏、京阪調査事務所調査第五係長　秋山浩三、同技師　木下保明、同技師　黒須亜希子
〔平成 17 年度〕調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所長　山本　彰、京阪調査事務所調査第五係長　秋山浩三、同技師　南　孝雄、同技師　黒須亜希子、同専門調査員　三浦基行
〔平成 18 年度〕調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所長　山本　彰、同主査　上野貞子〔遺物写真〕、京阪調査事務所調査第四係長　石神幸子、同技師　鈴木廣司、同技師　黒須亜希子、同専門調査員　吉田綾子
〔平成 19 年度〕調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘、京阪調査事務所長　山本　彰、同主査　上野貞子〔遺物写真〕、京阪調査事務所調査第三係長　秋山浩三、同技師　黒須亜希子、同専門調査員　松岡淳平

4．今回の調査では、以下の機関に、自然科学分析および保存処理作業を委託した。
〔平成 16 年度〕放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）分析　……パリノ・サーヴェイ株式会社
珪藻分析・花粉分析　……パリノ・サーヴェイ株式会社
植物珪酸体分析　……パリノ・サーヴェイ株式会社
〔平成 18 年度〕樹種同定分析（一部）　……パリノ・サーヴェイ株式会社
放射性炭素年代測定（ＡＭＳ）分析　……株式会社パレオ・ラボ
大型植物遺体同定分析　……株式会社パレオ・ラボ
花粉分析　……株式会社古環境研究所
出土木製品保存処理作業（一部）……財団法人大阪市文化財協会
なお、樹種同定分析の大半については、中部調査事務所主査　山口誠治がおこなった。

5．発掘調査および整理作業の実施にあたっては、京阪調査事務所をはじめとする当センター職員の協

力を得た。

6．発掘調査および整理作業の過程で、地元交野市教育委員会、茄子作地区自治会、茄子作広野地区自治会、茄子作地区水利組合をはじめ、下記の方々にご協力、ご指導を賜った。記して謝意を表したい。酒井清治（駒沢大学）・金斗喆（釜山大學校）・權五榮（韓神大學校）・河承哲（立命館大学研究員・慶南発展研究員歴史文化センター）・ひろいのぶこ（京都市立芸術大学）・東村純子（京都造形芸術大学）・松尾信裕（大阪城天守閣）・奥野和夫・真鍋成史・小川暢子（交野市教育委員会）・濱田延充（寝屋川市教育委員会）・大竹弘之（枚方市教育委員会）・宇治田和生・三宅俊隆・西田敏秀・下村節子（財団法人　枚方市文化財研究調査会）・野島　稔・村上　始（四條畷市教育委員会）・田中清美・寺井　誠・伊藤幸司（財団法人　大阪市文化財協会）・樋上　昇（財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター）・藤原　学（吹田市立博物館）・穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）・田中元浩（財団法人　和歌山県文化財センター）・大平　茂(兵庫県教育委員会）・若林邦彦・浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）〔敬称略　順不同〕

7．本報告書は、黒須亜希子・南　孝雄・山口誠治・松岡淳平・舘　邦典（京阪調査事務所調査補助員）・竹原千佳誉（京阪調査事務所調査補助員・神戸女子大学院研究生）・大木　要（京阪調査事務所調査補助員・滋賀県立大学院生）が執筆した。執筆分担については、目次および文末に示した。なお、個々の文章表現は、執筆者個人の意見を尊重し、あえて統一していない。

8．本報告書の編集は、黒須が担当した。また、校正等の作業は、黒須・松岡がおこなった。

9．本調査に関わる遺物、写真、図面、データ等は、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。なお、これらの資料についてすべて「茄子作・茄子作下浦遺跡 04-1」の調査区名称を冠し、分類した。

凡　　例

1．挿図の縮尺は、各図内にスケールバーを掲げ、縮尺率を明示した。
遺構図および断面図の使用単位尺は、mを基準とした。基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を使用した。また、遺物図の使用縮尺は、cmを基準とした。記述もこれに習った。
2．遺構平面図の使用測地系は「世界測地系（測地成果2000）」を使用した。単位はすべてmで表記した。
3．本書で用いた遺構平面図に付す方位針は、座標北を示す。
4．現地調査や遺物整理の主な手法については、『遺跡調査マニュアル』財団法人大阪府文化財センター2003.8に準拠した。遺物の取り上げについては、国土座標軸（世界測地系）を使用した地区割を設定しておこなった。
5．土層や土器胎土の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用して識別した。
6．遺構番号は、本書の編集に伴い、新たに付番した。このため、現地調査資料とは差異が生じている。現地調査では、出土遺物が確認できた遺構および特徴的である遺構について付番した。
7．遺構平面図における「⊥」マークは、断面観察をおこなった地点を指す。観察方向は、断面図に記載された方位（N＝北・S＝南・E＝東・W＝西）によって判断されたい。また、断面図におけるアミカケ部は、原則として地山土（人的関与が認められない土層）を示している。
遺物図（主として土器）におけるアミカケは、陶磁器になされた絵付けや文字の書き込み、あるいは、木製品の漆塗布範囲を示す。アミカケの濃淡によって、色の差異を表現した。また黒色ベタ塗りは、煤・焦げの付着範囲を示している。その他、釉薬のたまりによってできた器壁色の濃淡は、原則として破線または実線で記入した。詳細は、解説文中において記述した。
9．挿図中の遺物番号は、挿図ごとに付番した。この番号は、巻末の遺物観察表と一致させている。なお、写真図版中に番号が付されていない遺物は、実測図の作成が困難ではあるが、報告が必要であると判断されたため、写真図版において掲載したものである。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
第１章　調査にいたる経緯と経過 ……〔黒須〕 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 3
　第３節　調査方法 …… 9
第２章　調査地周辺の地理と環境 ……〔黒須〕 13
　第１節　調査地周辺の地理と地形 …… 13
　第２節　調査地周辺の遺跡と調査成果 …… 15
第３章　基本層序 ……〔黒須〕 22
第４章　調査成果（遺構） ……〔黒須〕 53
　第１節　第１調査区の調査成果 …… 53
　第２節　第２調査区の調査成果 …… 88
　第３節　第３調査区の調査成果 …… 107
　第４節　第５調査区の調査成果 …… 111
　第５節　第６調査区の調査成果 …… 147
　第６節　第７調査区の調査成果 …… 158
第５章　調査成果（遺物） ……〔南・黒須・松岡・舘・大木〕 167
　第１節　出土遺物（土器） …… 167
　第２節　出土遺物（縄文土器） …… 196
　第３節　出土遺物（初期須恵器） …… 198
　第４節　出土遺物（石器） …… 203
　第５節　出土遺物（金属器・銭貨） …… 207
　第６節　出土遺物（木製品） …… 208
第６章　自然科学分析成果 ……〔山口・黒須／編〕 217
　第１節　自然科学分析の種類と目的 …… 217
　第２節　珪藻分析 …… 219
　第３節　花粉分析（１） …… 230
　第４節　花粉分析（２） …… 236
　第５節　植物珪酸体分析 …… 240
　第６節　大型植物遺体同定分析 …… 244
　第７節　放射性炭素年代測定（AMS）分析（１） …… 247
　第８節　放射性炭素年代測定（AMS）分析（２） …… 251
　第９節　放射性炭素年代測定（AMS）分析（３） …… 253

第 10 節 樹種同定分析（1） …… 256
第 11 節 樹種同定分析（2） …… 264
第 12 節 茄子作遺跡の堆積土壌と古環境復元 …… 276
第 7 章 総括 …… 〔南・黒須・松岡・竹原・大木〕 287
第 1 節 遺構の変遷とその特徴 …… 287
第 2 節 茄子作遺跡出土の遺物の特徴 …… 294

挿入写真目次

写真 1 小川水路下層 立会調査状況 …… 5
写真 2 調査地より東方をのぞむ …… 8
写真 3 各種作業状況 …… 11
3-1 重機掘削作業状況
3-2 人力掘削作業状況（1）
3-3 人力掘削作業状況（2）
3-4 出土遺物取り上げ作業状況
写真 4 第 1 調査区 流路 13 より出土した焼台 …… 200
写真 5 珪藻写真 …… 229
写真 6 花粉化石写真 …… 233
写真 7 花粉・胞子化石写真 …… 239
写真 8 植物珪酸体写真 …… 243
写真 9 大型植物化石写真 …… 246
写真 10-1~5 木材写真（1）～（5） …… 260 ～ 264
写真 11-1~4 木材写真（1）～（4） …… 272 ～ 275

挿 図 目 次

第 1 図 茄子作遺跡位置図 …… 1
第 2 図 茄子作遺跡周辺の水路と里道位置図 …… 3
第 3 図 調査区設定図 …… 7
第 4 図 大阪地区割り基準・名称図 …… 9
第 5 図 調査区地区割り設定図 …… 10
第 6 図 調査地周辺の地質図 …… 13

第７図　調査地周辺の遺跡分布図 …… 17
第８図　調査成果遺構概念図 …… 19
第９図　調査地内における確認調査成果 …… 20
第 10 図　基本層序模式図（１） …… 22
第 11 図　基本層序模式図（２） …… 23
第 12 図　調査区層序対応図 …… 24
第 13 図　調査区断面図（１） …… 29・30
第 14 図　調査区断面図（２） …… 31・32
第 15 図　調査区断面図（３） …… 33・34
第 16 図　調査区断面図（４） …… 35・36
第 17 図　調査区断面図（５） …… 37・38
第 18 図　調査区断面図（６） …… 39・40
第 19 図　調査区断面図（７） …… 41・42
第 20 図　調査区断面図（８） …… 43・44
第 21 図　調査区断面図（９） …… 45・46
第 22 図　調査区断面図（10） …… 47・48
第 23 図　調査区断面図（11） …… 49・50
第 24 図　調査区断面図（12） …… 51・52
第 25 図　第１調査区東半部　中世末期～近世初頭遺構面　全体図 …… 55
第 26 図　第１調査区東半部　中世遺構面　全体図 …… 57
第 27 図　第１調査区（1-1 区）　遺構平面断面図 …… 58
第 28 図　土器だまり１　遺物出土状況　実測図 …… 59
第 29 図　第１調査区東半部　古墳時代～古代遺構面　全体図 …… 60
第 30 図　竪穴住居３　平面断面図 …… 61
第 31 図　竪穴住居３　遺構平面断面図 …… 62
第 32 図　井戸２　平面断面図 …… 64
第 33 図　第１調査区（1-2 区）　遺構平面断面図 …… 65
第 34 図　第１調査区西半部　中世末期～近世初頭遺構面　全体図 …… 67・68
第 35 図　溝２　断面図 …… 69
第 36 図　溝４・５　断面図 …… 70
第 37 図　第１調査区西半部　中世後期遺構面　全体図 …… 71・72
第 38 図　溝８　平面断面図 …… 73
第 39 図　第１調査区西半部　中世前期遺構面　全体図 …… 75・76
第 40 図　第１調査区西半部　遺構断面図（１） …… 77
第 41 図　第１調査区西半部　遺構平面断面図 …… 79
第 42 図　第１調査区西半部　古代初頭遺構面　全体図 …… 81・82
第 43 図　第１調査区西半部　遺構平面図 …… 84
第 44 図　第１調査区西半部　遺構断面図（２） …… 85

第 45 図　第 1 調査区西半部　遺構断面図（3）…… 86
第 46 図　第 2 調査区　中世末期～近世初頭遺構面　全体図 …… 89
第 47 図　第 2 調査区　土坑・井戸　平面断面図 …… 91
第 48 図　第 2 調査区　中世前期遺構面　全体図 …… 93
第 49 図　第 2 調査区　古代末期～中世前期遺構面　全体図 …… 95
第 50 図　第 2 調査区　古代末期～中世前期水田畦畔　断面図 …… 96
第 51 図　第 2 調査区　古代初頭遺構面　全体図 …… 97
第 52 図　第 2 調査区　遺構平面断面図（1）…… 98
第 53 図　第 2 調査区　遺構断面図（1）…… 99・100
第 54 図　第 2 調査区　遺構平面断面図（2）…… 102
第 55 図　第 2 調査区　遺構断面図（2）…… 103
第 56 図　第 2 調査区　古墳時代初頭遺構面　全体図 …… 106
第 57 図　第 3 調査区　中世末期～近世初頭遺構面　全体図 …… 108
第 58 図　溝 25・溝 26・土坑 13　断面図 …… 108
第 59 図　第 3 調査区　中世前期遺構面　全体図 …… 109
第 60 図　溝 27　断面図 …… 109
第 61 図　第 3 調査区　古代遺構面　全体図 …… 110
第 62 図　第 5 調査区　竪穴住居 4・5　平面断面図 …… 112
第 63 図　第 5 調査区　中近世遺構　配置図 …… 113・114
第 64 図　第 5 調査区　古墳時代～古代遺構　配置図 …… 115・116
第 65 図　第 5 調査区　竪穴住居 6　平面断面図 …… 117
第 66 図　第 5 調査区　掘立柱建物 1　平面断面図 …… 119
第 67 図　第 5 調査区　掘立柱建物 2　平面断面図 …… 121
第 68 図　第 5 調査区　掘立柱建物 3　平面断面図 …… 123
第 69 図　第 5 調査区　掘立柱建物 4　平面断面図 …… 125
第 70 図　第 5 調査区　掘立柱建物 5　平面断面図 …… 127
第 71 図　第 5 調査区　掘立柱建物 6　平面断面図 …… 129
第 72 図　第 5 調査区　柱列 1　平面断面図 …… 131
第 73 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（1）…… 133
第 74 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（2）…… 137
第 75 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（3）…… 139
第 76 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（4）…… 141
第 77 図　第 5 調査区（5-2 区）　遺構平面断面図 …… 143
第 78 図　第 5 調査区（5-3 区）　遺構平面断面図 …… 145
第 79 図　第 5 調査区北東部　遺構平面断面図 …… 146
第 80 図　第 6 調査区　古墳時代～中近世遺構面　全体図 …… 149・150
第 81 図　第 6 調査区　竪穴住居 1　平面断面図 …… 151
第 82 図　第 6 調査区　遺構平面断面図（1）…… 152

第 83 図　第 6 調査区　遺構平面断面図（2）…… 155
第 84 図　第 6 調査区　遺構平面断面図（3）…… 157
第 85 図　第 7 調査区　古墳時代～中近世遺構面　全体図 …… 159
第 86 図　第 7 調査区　竪穴住居 2　平面断面図 …… 161
第 87 図　第 7 調査区　竪穴住居 2　遺構平面断面図 …… 162
第 88 図　第 7 調査区　遺構平面断面図 …… 165
第 89 図　第 1 調査区東半部（1-1 区）出土遺物実測図 …… 168
第 90 図　第 1 調査区東半部（1-2 区）出土遺物実測図 …… 168
第 91 図　第 1 調査区西半部　第 2 層・第 3 層　出土遺物実測図 …… 170
第 92 図　第 1 調査区西半部　第 3 層・第 4 層・溝 9　出土遺物実測図 …… 171
第 93 図　第 1 調査区　流路 14・流路 17・流路 20・流路 21　出土遺物実測図 …… 173
第 94 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（1）…… 174
第 95 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（2）…… 175
第 96 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（3）…… 176
第 97 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（4）…… 177
第 98 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（5）…… 178
第 99 図　第 1 調査区　流路 13　出土遺物実測図（6）…… 179
第 100 図　第 1 調査区　流路 18　出土遺物実測図 …… 180
第 101 図　第 1 調査区西半部　1-4 区・1-6 区　第 5 層　出土遺物実測図 …… 180
第 102 図　第 2 調査区　第 1 層・第 2 層　出土遺物実測図 …… 181
第 103 図　第 2 調査区　第 3 層　出土遺物実測図（1）…… 182
第 104 図　第 2 調査区　第 3 層　出土遺物実測図（2）…… 183
第 105 図　第 2 調査区　第 3 層　出土遺物実測図（3）…… 184
第 106 図　第 2 調査区　第 4 層　出土遺物実測図 …… 185
第 107 図　第 2 調査区　落込み 1　出土遺物実測図 …… 187
第 108 図　第 2 調査区　落込み 3・落込み 6　出土遺物実測図 …… 187
第 109 図　第 2 調査区　流路 30　出土遺物実測図（1）…… 188
第 110 図　第 2 調査区　流路 30　出土遺物実測図（2）…… 189
第 111 図　第 2 調査区　流路 33　出土遺物実測図 …… 191
第 112 図　第 2 調査区　その他流路　出土遺物実測図 …… 192
第 113 図　第 2 調査区　落込み 5　出土遺物実測図 …… 193
第 114 図　第 3 調査区　出土遺物実測図 …… 194
第 115 図　第 5 調査区　出土遺物実測図 …… 195
第 116 図　第 6 調査区・第 7 調査区　出土遺物実測図 …… 195
第 117 図　調査区内出土　縄文土器　実測図 …… 197
第 118 図　調査区内出土　初期須恵器壷・甕体部　拓影実測図 …… 199
第 119 図　ヘラ記号　拓影 …… 200
第 120 図　調査区内出土　初期須恵器壷・甕底部　拓影実測図（1）…… 201

第 121 図　調査区内出土　初期須恵器壷・甕底部　拓影実測図（2）…… 202
第 122 図　調査区内出土　石器実測図（1）…… 204
第 123 図　調査区内出土　石器実測図（2）…… 205
第 124 図　調査区内出土　石器実測図（3）…… 206
第 125 図　調査区内出土　金属器実測図 …… 207
第 126 図　調査区内出土　銭貨拓影 …… 207
第 127 図　調査区内出土　木器実測図（1）…… 209
第 128 図　調査区内出土　木器実測図（2）…… 211
第 129 図　調査区内出土　木器実測図（3）…… 212
第 130 図　調査区内出土　木器実測図（4）…… 213
第 131 図　調査区内出土　木器実測図（5）…… 214
第 132 図　自然科学分析試料採取地 …… 218
第 133 図　花粉分析・珪藻分析試料採取地点 …… 219
第 134 図　茄子作遺跡の主要珪藻化石群集の層位分布 …… 224
第 135 図　茄子作遺跡の主要花粉化石群集の層位分布（1）…… 231
第 136 図　茄子作遺跡の主要花粉化石群集の層位分布（2）…… 238
第 137 図　茄子作遺跡の植物珪酸体層位分布 …… 242
第 138 図　第 2 調査区出土自然木の樹種同定結果 …… 271
第 139 図　調査地周辺の地形起伏 …… 277
第 140 図　茄子作遺跡における谷地の堆積層序模式図 …… 279
第 141 図　古墳時代初頭以前　遺構概念図 …… 289
第 142 図　古墳時代中期～古代初頭　遺構概念図 …… 290
第 143 図　古代前期　遺構概念図 …… 291
第 144 図　古代末期～中世前期　遺構概念図 …… 292
第 145 図　中世後期以降　遺構概念図 …… 293
第 146 図　茄子作遺跡出土の楠葉型瓦器椀末期の諸形態と土師皿 …… 296
第 147 図　茄子作遺跡から出土した初期須恵器分布図 …… 297
第 148 図　茄子作遺跡出土の初期須恵器（1）…… 298
第 149 図　茄子作遺跡出土の初期須恵器（2）…… 299
第 150 図　小型壷口縁の諸形態 …… 300
第 151 図　中型壷口縁の諸形態 …… 301
第 152 図　大甕口縁分類図 …… 301
第 153 図　初期須恵器窯　大甕口縁形態図 …… 303
第 154 図　茄子作遺跡・上の山遺跡調査地　位置図 …… 304
第 155 図　北河内地域出土の初期須恵器 …… 305

表 目 次

表1　茄子作遺跡　壷・甕類タタキ分類表…… 198
表2　珪藻分析結果…… 225 ～ 228
表3　花粉分析結果（1）…… 232
表4　花粉分析結果（2）…… 238
表5　植物珪酸体含有量一覧…… 241
表6　大型植物化石出土一覧…… 245
表7　放射性炭素年代測定試料一覧（1）…… 248
表8　放射性炭素年代測定値および暦年較正の結果（1）…… 248
表9　放射性炭素年代測定試料一覧（2）…… 252
表10　放射性炭素年代測定値および暦年較正の結果（2）…… 252
表11　放射性炭素年代測定試料一覧（3）…… 254
表12　放射性炭素年代測定値および暦年較正の結果（3）…… 255
表13　樹種同定結果（1）…… 259
表14　樹種同定結果（2）…… 268 ～ 271
表15　出土遺物観察表（土器）…… 311
表16　出土遺物観察表（石器）…… 337
表17　出土遺物観察表（金属器）…… 338
表18　出土遺物観察表（銭貨）…… 338
表19　出土遺物観察表（木器）…… 339 ～ 340
表20　遺構対応一覧表…… 341 ～ 344

写真図版目次

写真図版1　1. 第1調査区（1-1区・1-2区）　中世末期～近世初頭遺構面　全景（南から）
　　2. 第1調査区（1-2区）　中世遺構面　全景（西から）
写真図版2　1. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3　完掘状況（北西から）
　　2. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3　遺物出土状況（東から）
　　3. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3　遺物出土状況（南から）
　　4. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3　遺物出土状況（東から）
　　5. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3　遺物出土状況（北から）
写真図版3　1. 第1調査区（1-1区）　竪穴住居3土坑4　遺物出土状況（西から）
　　2. 第1調査区（1-2区）　土器だまり1　遺物出土状況（南から）
　　3. 第1調査区（1-2区）　古代初頭遺構面　全景（東から）

4. 第 1 調査区（1-2 区） ピット群　半裁状況（北から）
5. 第 1 調査区（1-2 区） 井戸 2　完掘状況（東から）

写真図版 4　1. 第 1 調査区（1-2 区） 古代初頭遺構面　全景（南から）
2. 第 1 調査区（1-3 区） 南東部　古代初頭遺構面　遺構完掘状況（南東から）

写真図版 5　1. 第 1 調査区（1-3 区） 中世末期～近世初頭遺構面　全景（西から）
2. 第 1 調査区（1-3 区） 井戸 3　検出状況（東から）
3. 第 1 調査区（1-3 区） 井戸 4　検出状況（東から）
4. 第 1 調査区（1-3 区） 井戸 5　検出状況（東から）
5. 第 1 調査区（1-3 区） 中世末期～近世初頭遺構面　遺物出土状況

写真図版 6　1. 第 1 調査区（1-3 区） 中世後期遺構面　全景（西から）
2. 第 1 調査区（1-3 区） 中世前期遺構面　全景（西から）

写真図版 7　1. 第 1 調査区（1-3 区） 古代初頭遺構面　全景（東から）
2. 第 1 調査区（1-3 区） 古代初頭遺構面　全景（西から）

写真図版 8　1. 第 1 調査区（1-4 区） 中世前期遺構面　全景（東から）
2. 第 1 調査区（1-4 区） 古代初頭遺構面　全景（東から）

写真図版 9　1. 第 1 調査区（1-4 区） 溝 15　完掘状況（北西から）
2. 第 1 調査区（1-4 区） 流路 13　断面（東から）
3. 第 1 調査区（1-4 区） 流路・溝群　完掘状況（北東から）
4. 第 1 調査区（1-4 区） 流路内　倒木　出土状況
5. 第 1 調査区（1-4 区） 弥生土器　出土状況（南から）

写真図版 10　1. 第 1 調査区（1-5 区） 中世末期～近世初頭遺構面　全景（南東から）
2. 第 1 調査区（1-5 区） 中世後期遺構面　全景（南東から）

写真図版 11　1. 第 1 調査区（1-5 区） 溝 8　土留め杭　検出状況
2. 第 1 調査区（1-5 区） 溝 8　木杭・横木　出土状況（北西から）
3. 第 1 調査区（1-5 区） 溝 8　木杭・横木　出土状況（南西から）
4. 第 1 調査区（1-5 区） 中世後期遺構面　水口　検出状況 (北から）
5. 第 1 調査区（1-6 区）　中世末期～近世初頭遺構面　全景（南東から）

写真図版 12　1. 第 1 調査区（1-5 区） 中世後期遺構面　全景（東から）
2. 第 1 調査区（1-5 区） 古代初頭遺構面　全景（東から）

写真図版 13　1. 第 1 調査区（1-6 区） 中世後期遺構面　全景（東から）
2. 第 1 調査区（1-6 区） 中世前期遺構面　全景（東から）
3. 第 1 調査区（1-6 区） 流路 13　完掘状況（南から）

写真図版 14　1. 第 1 調査区（1-6 区） 流路 13　完掘状況（南から）
2. 第 1 調査区（1-6 区） 流路 13　遺物出土状況
3. 第 1 調査区（1-6 区） 流路 18　完掘状況（南から）
4. 第 1 調査区（1-5 区） 埋没樹木　検出状況（北から）
5. 第 1 調査区（1-5 区） 埋没樹木　検出状況（東から）

写真図版 15　1. 第 2 調査区（2-1 区） 南半部　中世末期～近世初頭遺構面　全景（北西から）

2. 第２調査区（2-1 区） 北半部　中世末期～近世初頭遺構面　全景（南西から）
写真図版16　1. 第２調査区（2-1 区） 南半部　中世後期遺構面　全景（北西から）
2. 第２調査区（2-1 区） 北半部　中世後期遺構面　全景（南西から）
写真図版17　1. 第２調査区（2-1 区） 南半部　中世前期遺構面　全景（北西から）
2. 第２調査区（2-1 区） 北半部　中世前期遺構面　全景（南西から）
写真図版18　1. 第２調査区（2-1 区） 南半部　古墳時代中期～古代初頭遺構面　全景（北西から）
2. 第２調査区（2-1 区） 北半部　古墳時代中期～古代初頭遺構面　全景（北西から）
写真図版19　1. 第２調査区（2-1 区） 落込み 1　木器出土状況
2. 第２調査区（2-1 区） 流路 33　木器出土状況
3. 第２調査区（2-1 区） 流路 33　木器出土状況
4. 第２調査区（2-1 区） 流路 33　木器出土状況
5. 第２調査区（2-1 区） 落込み 7　木器出土状況
6. 第２調査区（2-1 区） 流路 33　土器出土状況
7. 第２調査区（2-1 区） 流路 31　木器出土状況
8. 第２調査区（2-1 区） 落込み 7　土器出土状況
写真図版20　1. 第２調査区（2-1 区） 南半部　古墳時代初頭遺構面　全景（北西から）
2. 第２調査区（2-1 区） 北半部　古墳時代初頭遺構面　全景（南西から）
写真図版21　1. 第２調査区（2-2 区） 中世末期～近世初頭遺構面　全景（北西から）
2. 第２調査区（2-2 区） 中世後期遺構面　全景（北西から）
3. 第２調査区（2-2 区） 中世前期遺構面　全景（北西から）
4. 第２調査区（2-2 区） 古代末期～中世前期遺構面　全景（北西から）
5. 第２調査区（2-2 区） 古代初頭遺構面　全景（北西から）
写真図版22　1. 第３調査区　西半部　中世前期遺構面　全景（南西から）
2. 第３調査区　東半部　中世前期遺構面　全景（南西から）
写真図版23　1. 第３調査区　西半部　中世末期～近世初頭遺構面　全景（南西から）
2. 第３調査区　東半部　中世末期～近世初頭遺構面　全景（南西から）
3. 第３調査区　西半部　中世後期遺構面　全景（南西から）
4. 第３調査区　東半部　中世後期遺構面　全景（南西から）
5. 第３調査区　西半部　古代遺構面　全景（南西から）
6. 第３調査区　東半部　古代遺構面　全景（南西から）
7. 第３調査区　完掘状況　全景（西から）
8. 第３調査区　埋没樹木　出土状況
写真図版24　1. 第５調査区（5-1 区） 遺構面　全景（北西から）
2. 第５調査区（5-1 区） 遺構面　全景（南西から）
写真図版25　1. 第５調査区（5-1 区） 溝 28　遺物出土状況（南から）
2. 第５調査区（5-1 区） 掘立柱建物 1（南西から）
3. 第５調査区（5-1 区） 堀立柱建物 2（南から）
4. 第５調査区（5-1 区） 堀立柱建物 4（南東から）

5. 第５調査区（5-1 区） 流路 31・32　完掘状況（南西から）
写真図版26　1. 第５調査区（5-2 区） 遺構面　全景（北西から）
2. 第５調査区（5-2 区） 堀立柱建物６（北西から）
3. 第５調査区（5-2 区） 土坑 40　遺物出土状況
4. 第５調査区（5-2 区） 堀立柱建物５（北西から）
5. 第５調査区（5-2 区） 井戸８　半裁状況（南東から）
写真図版27　1. 第５調査区（5-2 区） 竪穴住居４・５　検出状況（南東から）
2. 第５調査区（5-2 区） 竪穴住居６　検出状況（南東から）
写真図版28　1. 第５調査区（5-3 区） 遺構面　全景（北から）
2. 第５調査区（5-3 区） 西端部　完掘状況（西から）
写真図版29　1. 第５調査区（5-3 区） ピット群　検出状況１（南から）
2. 第５調査区（5-3 区） ピット群　検出状況２（南から）
3. 第６調査区（6-1 区） 遺構面　全景（南西から）
4. 第６調査区（6-1 区） 谷　完掘状況（南から）
5. 第６調査区（6-1 区） 井戸 15　半裁状況（南東から）
写真図版30　1. 第６調査区（6-2 区） 遺構面　全景（西から）
2. 第６調査区（6-2 区） 竪穴住居１　完掘状況（西から）
写真図版31　1. 第６調査区（6-2 区） 竪穴住居１　遺物出土状況
2. 第６調査区（6-2 区） 竪穴住居１　遺物出土状況
3. 第６調査区（6-2 区） 竪穴住居１　遺物出土状況
4. 第６調査区（6-2 区） 竪穴住居１　土層断面
5. 第７調査区（7-2 区） 竪穴住居２　完掘状況（北西から）
写真図版32　1. 第７調査区（7-2 区） 竪穴住居２　完掘状況（南東から）
2. 第７調査区（7-2 区） 竪穴住居２　遺物出土状況
3. 第７調査区（7-1 区） ピット群　検出状況（北から）
4. 第７調査区（7-1 区） 区画溝　完掘状況（南から）
5. 第７調査区（7-1 区） 第１面　全景（北西から）
写真図版33　1. 出土遺物　縄文土器
2. 出土遺物　石器・サヌカイト片・石
写真図版34　1. 出土遺物　弥生土器
写真図版35　1. 出土遺物　庄内式・布留式土師器
写真図版36　1. 出土遺物　初期須恵器
写真図版37　1. 出土遺物　初期須恵器（壷・甕口縁部）
写真図版38　1. 出土遺物　初期須恵器（器台）
写真図版39　1. 出土遺物　初期須恵器（器台）
写真図版40　1. 出土遺物　初期須恵器（壷・甕体部）
写真図版41　1. 出土遺物　初期須恵器（壷・甕体部）
写真図版42　1. 出土遺物　初期須恵器（壷・甕底部）

写真図版43　1. 出土遺物　古代土師器
写真図版44　1. 出土遺物　古代須恵器
写真図版45　1. 出土遺物　瓦器椀
　　2. 出土遺物　土師器皿
写真図版46　1. 第1調査区　井戸2　井戸枠・井戸掘り方内出土木材
　　2. 第2調査区　中近世包含層出土　木製品
写真図版47　1. 第2調査区　落込み7出土　直柄鍬身
　　2. 第2調査区　第4面出土　板状木製品
　　3. 第2調査区　流路30出土　棒状木製品
　　4. 第2調査区　流路33出土　用途不明木製品
写真図版48　1. 第2調査区　落込み1出土　板状木製品
　　2. 第2調査区　流路33出土　織機部材
　　3. 第2調査区　流路33出土　織機部材糸圧痕拡大
写真図版49　1. 第2調査区　流路33出土　机天板
写真図版50　1. 第2調査区　中近世包含層出土　木製品
　　2. 第6調査区　池1出土　木製品

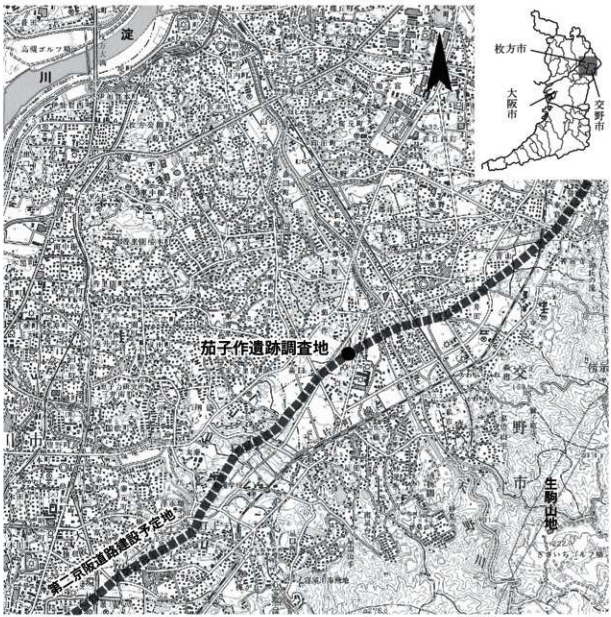
第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

１．調査事業の概要

茄子作遺跡発掘調査は、一般国道１号バイパス（大阪北道路）と、これに平行して建設される第二京阪道路の当該予定地について、工事に先立ち、埋蔵文化財の調査を実施したものである。

一般国道１号バイパス（大阪北道路）および第二京阪道路とは、京都府久御山町から枚方市を経て交野市・寝屋川市・四條畷市を横断し、近畿自動車道路門真ジャンクションへとつながる区間において建設が予定されている国道および自動車専用道路である。現在、淀川左岸（いわゆる北河内地域）を通っ



第１図　茄子作遺跡位置図

て京都一大阪間を移動するには、片側二～三車線を有する現一般国道１号線を通行するのが一般的なルートであるが、この車道は交通量の多さから慢性的に渋滞し、早くから当該ルートにおける自動車専用道路の必要性が唱えられてきた。

これに伴い、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所は、新たな道路の建設を計画し、日本道路公団関西支社（当時・平成 17 年 10 月からは西日本高速道路株式会社　関西支社）とともに用地買収と併行して、事業予定地内における埋蔵文化財の確認調査を継続的におこなった。

大阪府内では、財団法人大阪府文化財センター（以下当センター）が、平成８年度に新一般国道１号線の一部にあたる府道深野南寺方大阪線～大阪中央環状線間における道路整備に伴う調査（門真市三ツ島地先）を受託したのをはじめとして、十年間余の長きにわたり、事業予定地内の確認調査を重ねてきた。確認調査とは、小規模なトレンチを設定して掘削をおこない、遺構面残存の有無と、その深度を把握することを主な目的とするものである。結果、新たに遺構面の残存が確認された地点については新規確認遺跡として登録され、また、これまで報告されてきた遺跡の延長にあると考えられる場合は、遺跡の範囲拡大がおこなわれることとなる。今回の茄子作遺跡発掘調査は、後者の例にあたる。

２．確認調査の成果

茄子作遺跡が範囲拡大された背景には、平成 15 年度におこなわれた確認調査の成果がある（平成 15 年度茄子作遺跡他確認調査）。

このときの確認調査は、枚方市茄子作南町から市境を西に越え、交野市星田北５丁目から９丁目を経、さらに寝屋川市との市境付近までをふくむ約 1.2㎞（96,000㎡）の区間を対象としておこなわれた。掘削したトレンチは計 47 本にのぼり、このうち、枚方市茄子作南町区域と、星田北９丁目を中心とした区域において、遺物をともなう遺構の残存が認められた。このため、前者を茄子作遺跡の範囲拡大とし、後者を新規発見遺跡（交野市平池遺跡）として、周知がなされた。

今回の調査地となる茄子作南町区域では、東北部の谷地に設定した７箇所のトレンチにおいて、古墳時代初頭以前にさかのぼると考えられる時代から中世後期にいたるまでの遺構面を確認することができた。また、縄文土器・土師器（古墳時代前期～中世）・須恵器（古墳時代中期～中世）・瓦器・陶磁器・石器（サヌカイト製有舌尖頭器）・木器（横櫛・曲物底板・漆器椀）・鉄器（馬鍬歯）などの遺物が、出土した。

これまでの周辺の調査成果から、中世期の耕作土層が厚く存在することは予想されていたが、中世包含層直下より縄文土器および石器が確認されたことにより、遺跡の想定存続期間が大幅に拡大されることになった。また、古墳時代・古代の遺物がまとまって出土したことから、周辺に当該時期の遺構が存在することが、新たに予想された。さらに、出土遺物のなかには、溶着や焼け歪みが認められる初期須恵器の破片が含まれていたことから、須恵器焼成に関する遺構の発見が期待された。

また、谷地から西側へ続く丘陵地上のおいて設定した４箇所のトレンチでは、弥生時代末期～古墳時代初頭に設営されたとみられる竪穴住居や古代に遡る柱列、６世紀に掘削されたとみられる土坑など、重要遺構の発見が相次いだ。遺構埋土からは、古墳時代中期～古代の土師器・須恵器片が出土した。

なお、同時に調査がおこなわれた星田北９丁目地内のトレンチでは、ピット・溝を有する古墳時代中期から中世と推定される遺構面と、後期旧石器から中世の遺物が発見された。この範囲は、平池遺跡として周知された。

第２節　調査の経過

１．調査着手までの経緯

これらの成果を鑑みた結果、縄文時代から中世にいたるまでの集落が当該地に残存する可能性が濃厚に示されることとなった。この報告をうけて、大阪府教育委員会は、当該地における平面調査の必要性を認め、当センターが確認調査に引き続き本調査をおこなう運びとなった。

調査の着手にあたっては、地元自治会から要望や留意すべき点が示された。このため、事業者、建設業者、当センター、調査担当事業者等が、随時協議をおこなった。

まず、水利組合からは、調査期間が農作業の繁忙期にあたるため、水田用水（取排水）や農業機器の搬入経路を断つことがないこと、また、調査地東側を流れる小川（河川の固有名称）とこれに合流する用水路（通称:小川水路）を汚損することのないよう注意をうながされた。重ねて、地元自治会からは、周辺住宅地への砂塵被害をできるだけおさえるよう心がけることが要求された。

このため、調査に先駆けて、まず水田への取水時期（５月）を前に、井戸からの汲上水を主とする用水路の付け替え作業をおこなった。さらに重機の搬入に際し、用水路を損なわないよう、水路の補強や給水管への代替、復旧作業を重ねた（第７調査区・第１調査区・第２調査区）。

また、夏期には工区内への立ち入り防止策に努め、ネット付き防護柵にシートを貼り、砂塵の飛散防止に努めた（すべての工区を含む作業区一帯）。

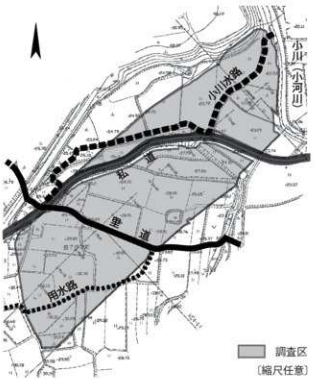
さらに、収穫期（10 月）には、農業用機器の搬入搬出作業の妨げにならないよう、作業区域の分割をおこない、里道や通路の確保に努めた（第１調査区・第 6-1 調査区）。調査区内は傾斜地にあたるため地表面の起伏がはげしく、崖裾では湧水および流水による土砂の滑落が随所に認められる。このため、往来者および作業者の安全を確保するため、里道等の付け替えに際しては、特に入念な土砂の敷設等をおこなった。

なお、これらの作業は、逐一、地元自治会および水利組合役員に立会いを願い、その了承と確認を得た上で遂行した。

２．調査区設定の経緯

今回の調査では、工程上、本体事業建設作業と工区を接して作業をおこなうこととなったため、綿密なる事業者間の調整を要した。調査区についても、相互の工程を妨げることのないよう、設定した。

当初、本体事業建設部署（浪速国道事務所工事課）からは、調査地を横方向に等分割し、東側より順次調査を進める方法が提案された。しかし、東端部に未売地が含まれていること（第 2-2 区）、また、東側府道（府道交野久御山線）からの重機搬入が困難であること、調査地の東



第２図　茄子作遺跡周辺の水路と里道位置図

側より北方向へとつづく私道沿いに設置された電柱の移設に時間がかかること等が問題となった。

調整の結果、まず重機を東側の市道（泉佐野線）から迂回させて搬入することが決定された。これを受けて、調査は、その搬入路を確保するため、搬入路該当区画（第７調査区・第 6-2 調査区・第 5-1 調査区）から着手することとなった。ただし、第７調査区相当区域には、上述のとおり、農業用水路がめぐらされていたため、さらなる調整が必要となった。

また、もっとも掘削深度が予想される第２調査区についても、未売地と電柱設置周辺地を除く区域について、先行して調査をおこなうことが決定された。このため、調査区は細分化され、これに伴う名称変更が頻発した。計画当初は７箇所の調査区を設定していたものが、最終的には 16 箇所に細分される結果となった。

調査は、平成 16 年度・平成 17 年度の２ヵ年度にわたり、計画実行された。平成 16 年度の調査では、まず、用水路の移設に伴い、第７調査区のうち西側半分にあたる第 7-1 区に着手した。また、これと平行して、重機搬入路予定地にあたる第５調査区東南側半部を、第 5-1 区として調査を開始した。用水路の移設を完了した後、里道を除く第６調査区東南側半部である第 6-2 区と、第７調査区の残地である第 7-2 区の調査をおこなった。第 5-1 区の調査を終えた後、里道を第 5-1 区の西端に沿って移設し、第 6-2 区からつづいて、里道下の調査をおこなった。

一方、第 5-1 区の調査を終了した後、重機は第２調査区へと進み、掘削を開始した。第２調査区では、未売地を除く範囲を第 2-1 区として、調査をおこなった。また、第３調査区の掘削も平行して進めた。

つづく、平成 17 年度には、未売地が解消したため、第２調査区の残地を第 2-2 区として掘削した。その間、本体事業者工事による搬入路が整備された。しかし、この時点で、本体建設工事では、橋脚基礎の設営工事が調査区西側より打設されることが決まり、第６調査区の調査を先行して完了することが求められた。このため、急遽、第 6-1 区の調査に着手することとなった。

一方、この時期には、来るべき農作業繁忙期（田植え期）の到来に備えて、周辺耕作への給水管復旧をおこなう必要があった。従来、調査地北側の水田へは、小川水路東側に設置された井戸からのポンプアップによる給水がおこなわれている。この管の移設には、第１調査区の北半部があてがわれることが決定したためため、この部分を先行して調査をおこなった（1-1 区・1-2 区）。

この頃になると、調査地東側の谷地の様相が徐々に明らかとなり、出土遺物のなかには予想以上の希少な製品が含まれていることが確認されるようになった。このため、大阪府教育委員会より、計画当初は調査区外とした小川水路の地下部分についても調査をおこなうよう、指導がなされた。これを受けて、現地では、第２調査区の南辺に沿って小川水路を移設する作業に着手した（第１次移設）。

調査区では、小川水路の移設に伴い、第１調査区と第４調査区の境界が曖昧となった。このため、両調査区を同時に開口し、掘削を進めた。本書では、後述する第４章調査成果でも、第１調査区と第４調査区を同調査区として報告している。

残る第１調査区残部と、第５調査区残部は、同時に掘削をおこなった。第１調査区では、小川水路の上流部を調査区北西辺に沿って移設し（第２次移設・1-6 区範囲が該当）、これ以外の部分については、本体事業者工事業者との協議に基づいて、1-3 区・1-4 区・1-5 区に分割した。1-5 区の調査終了後、仮移設した小川水路を原位置に復旧し、1-6 区の調査をおこなった。第５調査区は、排土置場確保のため、第 5-2 区と第 5-3 区に分割して調査をおこなった。

調査を終了した区画に関しては埋め戻した後、事業者立会いの下で順次引渡しをおこなった。引渡し

がなされた調査区では、時をおかずして道路建設用重機が搬入され、本体工事が着手された。このことは、発掘調査担当者と本体工事事業担当者が肩を並べて作業に従事するという事態を招いたが、それぞれの担当者が現地において綿密な打ち合わせを重ねることができるという利点をも生み出した。結果として、時間的な短縮のほか、現地における迅速なる引渡しや、実態に即した引継ぎがなされたものと考えている。

なお、今回の調査では、調査区に東接する小川水路本体の移設に伴う立会い調査が平行しておこなわれた（写真１）。

写真１　小川水路下層　立会調査状況

２．調査区の現況と特徴

以下、細分した調査区の形状と、調査着手以前の状況を述べる。

第１調査区　第１調査区は、調査地東部に位置する谷地のうち、北辺に沿って設定したトレンチである。平面形状は細長い三角形であり、東と南、北西の三方に辺をもつ。北西辺は調査区限界、東辺は小川水路を挟んで第２調査区と接する。南辺には、小川水路を有しており、水路と第４調査区、私道を通して、調査区南側丘陵を見ることができる。今回は、第４調査区の大半部を第１調査区の一部として読み替えたため、調査区の南辺は、私道に面するラインを指す。

調査区の北東部には、調査区北側丘陵の一角がかかっている。この丘陵の上位面は、造成された住宅地であり、最高地の標高は T.P.32m 程度を測る。調査区の北東端部は、この丘陵が南へ下がる斜面にあたり、T.P.27.0m の標高を測る。この丘陵斜面は、調査区限界より南へ５m程度下がった地点で鋭く切り削がれており、黄褐色から灰黄色の岩肌が、崖状に露出する。この丘陵斜面の切り崩しは、近現代の造作であり、本来は、丘陵斜面がより南へ延びていたものと考えられる。

丘陵崖裾から谷地にかけての低地部は、水田および畑作地として利用されている。耕作地の基盤層は、谷地の埋没堆積であり、この谷地が西から東へむかって開くことから、水田は階段状に整形されている。ただし、南北双方から張り出した丘陵地の堆積作用により、水田区画は必ずしも四辺形を呈してはいない。

今回の調査では、斜面地にあたる崖上部分を 1-1 区とした。また、削平された崖裾から水路にいたるまでの部分を 1-2 区とした。本書では、1-1 区および 1-2 区を、第１調査区東半部として調査成果を報告する。また、協議や水路の付け替えに伴い、細分した 1-3 区・1-4 区・1-5 区・1-6 区を、第１調査区西半部として記述をおこなう。

第２調査区　第２調査区は、調査地東部に位置する谷地のうち、東辺に沿って設定したトレンチである。平面形状は南北に長い三角形であり、西、東、南の三方に辺をもつ。西側には小川と小川に沿って延びる里道があり、南側は調査地を東西へ通る私道と接する。西辺は、小川水路に沿って調査区限界とするため、逆Ｓ字形に緩く湾曲する。小川水路の西側は、第１調査区および第４調査区である。

調査区は、すべて谷地内にあたる。第２調査区から北を見ると、第１調査区において、古墳時代中期

の竪穴住居が確認された、調査地北側の丘陵斜面を見上げることができる。反転して南を見ると、一段上がったところに私道があり、その向こう側に第３調査区が見える。第３調査区の背後には、調査地南側丘陵と、切り崩された崖面が聳える。

一方、東に目を転じると、鋼矢板で護岸が施された小川水路と、これに沿って南北方向に続く里道がある。この里道は、茄子作地区と上の山地区を分ける大字の境線である。この里道の東側が、上の山遺跡調査地である。上の山遺跡調査地は、東に独立丘陵を有するため、東に高く、西に低い。茄子作遺跡調査地とは東西の地形が逆転したような景観を呈している。

平成 15 ～ 16 年度におこなわれた上の山遺跡の調査では、茄子作遺跡に近い低地部において、古墳時代の流路群および古代末期の水田跡が確認された。また、東側丘陵の斜面では、テラス状に整形された段丘崖上において、古墳時代の竪穴住居数棟が検出された。さらに、その丘陵の頂部において、弥生時代中期初頭に遡る棟持柱付大型掘立柱建物跡が発見され、最古級の発見として耳目を集めた。このため、隣接する茄子作遺跡第２調査区でも、これに続く遺構の発見が期待された。

第２調査区の現況は、水田および雑草地である。この雑草地は、かつての鉄塔（送電塔）用地にあたる。この地に送電線が敷かれたのは、昭和27年に稼動を開始した関西電力枚方変電所の建設時であるが、その送電塔が、今回の調査区内に一基建設されていた。昭和 60 年代、北側丘陵上へ送電ルートが変更された事により、旧鉄塔は解体撤去されたため、現在は空地となっている。今回の調査では、この鉄塔用地を 2-2 区、これを囲むように広がる水田地を 2-1 区とした。調査ははじめ、2-1 区より着手し、つづいて 2-2 区の調査をおこなった。

第３調査区　第３調査区は、調査地南川丘陵から谷地へ下がる斜面上に設定したトレンチである。このため、現地表面は、南西部分がもっとも高い。平面形状は北西－南東に長い三角形であり、南東、北東、南西に辺をもつ。調査区南東辺は調査区限界、調査区北東辺は私道に面する。南西側には丘陵斜面の裾を取り巻く崖面が、聳えている。この崖を上ると、第５調査区に達する。

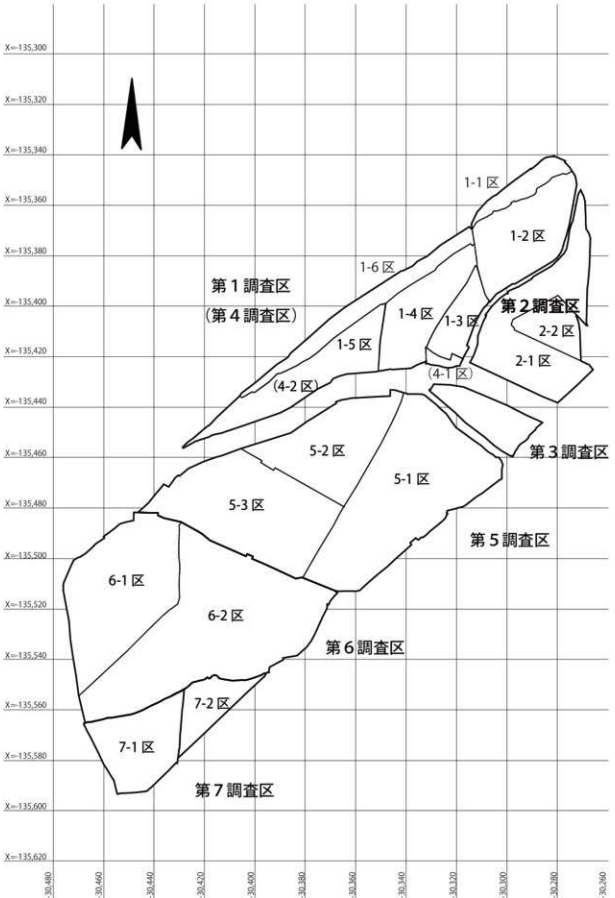
この崖面を背にして北に目を向けると、谷地をはさんだ向こうに、調査地北側丘陵を望むことができる。北側丘陵と同様、第３調査区南西側の南側丘陵斜面も近代以降の切り崩しが為されているが、比して小規模である。元来、崖面であったものを、わずかに整形した程度である。

第３調査区の現況は、水田耕作地である。北西－南東方向に畦畔を伴う段があり、二筆の水田が営まれている。水田への給水は、谷下手に設けられた井戸からのポンプアップであり、丘陵上からの水が誘導された痕跡はない。

第５調査区　第５調査区は、調査地南側丘陵上に設定したトレンチである。調査区の平面形状は、東西に長い平行四辺形に似ており、北西、北東、南西、南東に四辺をもつ。東西の最大長は 150 m、南北は 80 mを測る。北西辺は、私道をはさんで第１調査区と相対する。北東辺の崖下には、第３調査区がある。南東辺は調査区限界、南西側は第６調査区と接している。

第５調査区北東辺に立って北方向を眺めると、第１・第２・第３調査区が位置する谷地が眼下に広がっており、対岸に調査地北側丘陵を臨むことができる。また、東方向に目を転ずると、小川とこれをとりまく低地の向こうに、上の山遺跡を見ることができる。すなわち、小川周辺の谷地に向かって、北、南、東の丘陵が、三方から鼻先を突き出すように張り出しており、第５調査区の北西辺は、このうちの一方にあたる。

丘陵の尾根筋は、第５調査区の中央を南西－北東方向に通っている。このため、調査区南西辺の中央


X=-135,300
X=-135,320
X=-135,340
X=-135,360
X=-135,380
X=-135,400
X=-135,420
X=-135,440
X=-135,460
X=-135,480
X=-135,500
X=-135,520
X=-135,540
X=-135,560
X=-135,580
X=-135,600
X=-135,620
Y=-30,480
Y=-30,460
Y=-30,440
Y=-30,420
Y=-30,400
Y=-30,380
Y=-30,360
Y=-30,340
Y=-30,320
Y=-30,300
Y=-30,280
Y=-30,260
1-1 区
1-2 区
1-6 区
第１調査区
（第４調査区）
1-4 区
1-3 区
第２調査区
2-2 区
1-5 区
2-1 区
(4-1 区)
(4-2 区)
5-2 区
第３調査区
5-1 区
5-3 区
第５調査区
6-1 区
6-2 区
第６調査区
7-2 区
7-1 区
第７調査区

第３図　調査区設定図

部がもっとも高く、北西、南東、北東の三方へ緩やかに下がる。調査区南西辺中央部の標高は T.P.28.9 m、北東端中央では T.P.27.5 m、南東辺では T.P.29.7 ～ 28.6 mを測る。包含層の堆積も、調査区の北西、南東、北東の三方に向かって徐々に厚くなっており、調査区南西辺中央部にはほとんど認められない。

第５調査区の現況は、水田耕作地である。南西から北東へ向かって緩やかに下がるため、現況の水田もその方向に即して、階段状に整形されている。ただし、谷地斜面に作られた水田よりも一筆あたりの面積が広く、その整形時期は新しい。この周辺では、水田への給水が難しく、現在では、水田横に掘削された井戸が主な水源である。汲み上げられた井戸水は、水田畦に沿って廻らされた暗渠によって四方へ運ばれており、給水栓の開閉によって、田畑を水を満たしている。このため、上流からの水利に頼らざるをえなかった近世以前において、この場所は、水田開発に適した土地であったとは言いがたい状況にある。

第６調査区　第６調査区は、調査地南側丘陵上に設定したトレンチである。調査区の平面形状は、東西に長い四辺形に似る。北西、北東、南西、南東に四辺があり、東西の最大長は約 110 m、南北は約 85 mを測る。北西辺および南西辺は、調査区限界に接する。南東辺には第７調査区があり、北東辺には里道を隔てた先に、第５調査区が位置する。今回の調査では、この里道下においても遺構の存続が予想されたため、里道範囲も第６調査区に含め、調査をおこなった。

前述したとおり、第６調査区が位置する調査地南側丘陵の北裾では、南方向および西方向から流れる小河川が合流して北へ向かう。このため、両者に挟まれた南側丘陵は、北へ向かって舌状に延びる地形を呈する。調査区の中央には尾根筋が通るため、東・北・西の三方には、斜面の先に谷地を見ることをができる。南方向へは、なだらかに上る丘陵地が続く。

第６調査区の現況は、水田耕作地である。地表面の標高は、もっとも高い調査区中央南辺あたりで T.P.30.3 m、もっとも低い北西端で 29.4 mを測る。調査区の北側に隣接する里道は、盛土のため周辺よりも 0.4 ～ 0.45 m程度高く作られている。この里道と北接する第５調査区南辺との間には、１m近い比高差が認められる。これは、里道の盛土に加え、第５調査区南辺が大きく削平されていることに起因する。第６調査区は、工程上、6-1 区と 6-2 区に分割して調査をおこなった。

第７調査区　第７調査区は、工程上、7-1 区と 7-2 区に分割して調査をおこなった。平面形状は、北東－南西方向に長い三角形を呈する。北東－南西方向の最大長は約 80 m、南東－北西方向は 35 m程度を測る。調査区の北辺は第６調査区、それ以外は調査区限界ラインに接する。

現況は、水田耕作地であるが、一部では畑作が営まれている。

第６調査区および第７調査区内の地形変化は、比較的緩やかである。これは、丘陵地上に広がる水田の歴史が浅く、大規模な削平を含む種々の開発行為が、水利の便が整った近世以降におこなわれたためと考えられる。

なお、周辺の地盤は、硬くしまった粗砂まじり粘土を主体とするため、樹林帯の形成には時間を要するようである。周辺は、草目類の繁茂が顕著である。

写真２　調査地より東方をのぞむ（上位半部は上の山遺跡）

第３節　調査方法

１．調査グリッドの設定

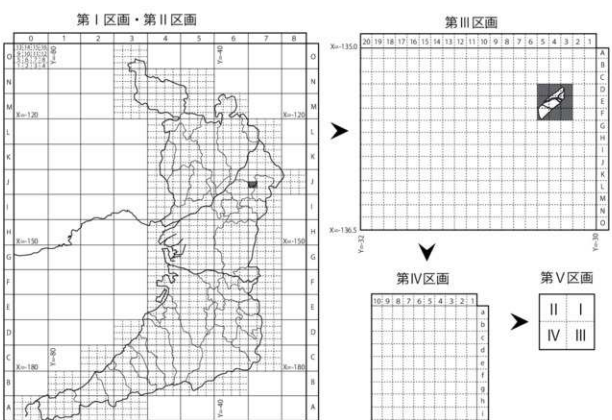
発掘調査の手順は以下のとおりである。

まず調査区内に繁茂する草木の伐採をおこい、ネットフェンスによる仮囲いをおこなった。この伐採した草木の形態や、場内に残置された廃棄物については、事業者と協議の上、相応の処分をおこなった。

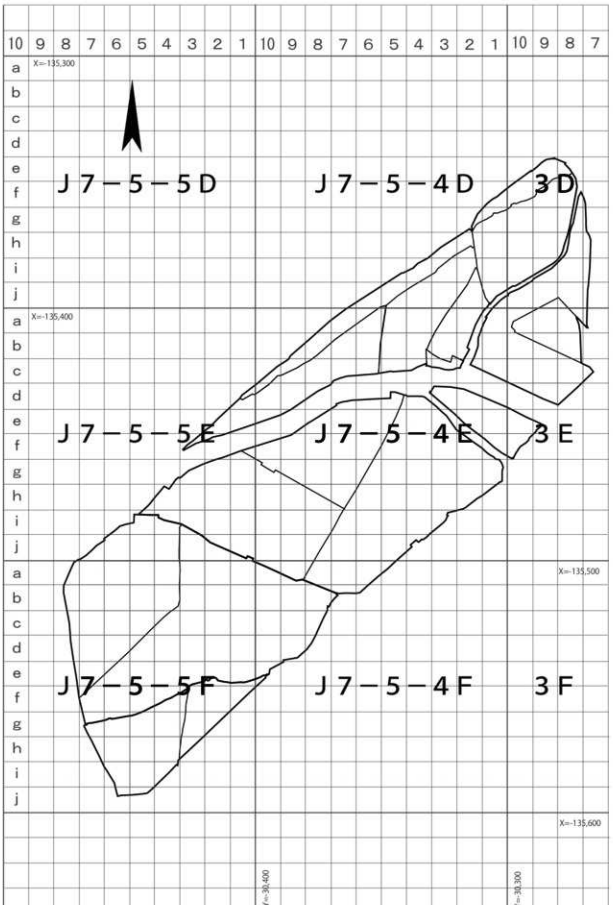
次に、基準点測量をおこない、XY 座標点および水準点である３級点、４級点を設置した。これを測量基準点として調査区範囲を確定し、作図の基本とした。

検出遺構および出土遺物は、国土座標軸（第Ⅳ座標系）を基盤とし、一辺 10 mのグリッドを目安として管理している。このグリッドは、世界測地系の国土座標軸に則した基準線を用いて設定したものである（第４図）。

国土座標軸に則したグリッドでは、第Ⅰ区画から徐々に細分された第Ⅴ区画までを定めている。第Ⅰ区画とは、大阪府の南西端 X=-192,000 m、Y=-88,000 mの交点を始めとして、南北６km、東西８kmの面積で府域を 62 分割した区画をいう。このうちの１区画をさらに南北 1.5km、東西 2.0kmの範囲で各々４分割し、計 16 区画としたもののひとつを第Ⅱ区画とする。さらにこの第Ⅱ区画を南北に 15 分割、東西に 20 分割した一辺 100 mの範囲を第Ⅲ区画とし、さらにこれを東西、南北ともに 10 分割した一辺 10m の範囲を第Ⅳ区画とする。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を５m単位で分割した区画となるが、今回の調査では、第Ⅳ区画までを使用した。



第４図　大阪地区割り基準・名称図



第５図　調査区地区割り設定図

遺物は、グリッドごとに第Ⅲ区画・第Ⅳ区画および出土遺構や層位、遺構面などを記入したラベルとともに取り上げ、登録番号を付した。また、検出遺構は、実測図作成に際してグリッド名を明記して、後に一覧とした。

今回の調査区は、第Ⅰ区画が「J 7」、第2区画が「5」、第3区画が「3D～5F」までの範囲に含まれている（第5図）。

2．現地調査の方法

調査区の掘削には重機および人力を用いた（写真3参照）。今回の調査では、近現代の耕作土や盛土および撹乱土などの調査不要土層は、重機を用いて掘削除去をおこなった（写真3-1）。

中世包含層以下の土層については、人力掘削をおこない、主要遺構面の検出に努めた。土層の掘削は、シャベルやツルハシ、鋤簾を用い、土砂はベルトコンベアを使用して排出した（写真3-2・3-3）。掘削中に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げ、取り上げ番号（登録番号）を付して管理をおこなった。

なお、残存状態が良好な遺物や特異な遺物については、出土状況写真撮影と出土状況図作成の後に取りあげた。また、木製品など脆弱な遺物については、水分補給をおこない、劣化の防止に努めた。また、取り上げに際しては、細心の注意を払った（写真3-4）。

3-1　重機掘削作業状況

3-2　人力掘削作業状況（1）

3-3　人力掘削作業状況（2）

3-4　出土遺物取り上げ作業状況

写真3　各種作業状況

作業中、地表に溜まった湧水や雨水は、ポンプを用いて汲み取り、沈砂槽を介して場外へと排出した。遺構面に溜まった水に関しては、遺構を損なわないよう柄杓やバケツ、スポンジを用いた人力排水を旨としている。今回の調査地のうち、丘陵地に設定した調査区は、雨水の地下への浸透が悪いため、遺構面の損失がみられた。このため、こまめな養生をおこなう等、その保全には心を砕いた。

一方、谷地に設定した調査区では、湧水および水路からの出水がはげしく、壁面の崩落や土砂の流出を食い止めることに奔走した。少雨においても、周辺の雨水および排水が小川水路を通じて調査区内へと集中するため、インチ数の高いポンプを稼動させて、適切な管理に努めた。

今回の調査では、古墳時代～中近世にいたるまでの遺構面を検出した。このうち、主要な遺構面（古墳時代～古代）については、航空測量をおこなった。測量図は、50分の1スケールの平面図として納品されている。その他の遺構面については、平板測量をおこない、平面図を作成した。また、遺構は半裁して断面図を作成し、記録写真を撮影した。各調査区の周囲壁は、連続した土層断面図を作成した。

なお、現地調査において、記録撮影に使用したカメラは、6×7カメラ、35㎜カメラであり、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いた。また、台帳作成や作業状況写真については、デジタルカメラによる撮影も随時おこなった。

調査は、すべての工程を終えた後、事業者へ引渡し、終了とした。

3．整理作業の方法

出土遺物の整理作業は、登録、洗浄、注記までの基本的な整理作業を、現場事務所にておこなった。基本整理作業終了後は、交野分室（平成19年度より京阪調査事務所に改称）において遺物実測作業とトレース、図版作成、データ編集作業など、報告書作成にかかわる作業を実施した。

出土遺物は、登録番号に順じて洗浄し、注記をおこなった。注記を終えた遺物は、接合復元し、彩色を施した。また、残存状態が良好なものや特に重要なものについては、実測図を作成し、写真撮影をおこなった。

現場で作成した遺構図と土層断面図に関しては、原図をスキャナーによって画像データとしてとりこみ、コンピュータ画面上でデジタルトレースをおこなった。また、出土遺物図に関しては、ロットリングを用いたトレースをおこなった。

また、これら一連の作業によって得られたデータは、コンピュータ入力によって記録し、担当者間での情報共有を図った。

整理作業は、本報告書の刊行をもって終了した。　〔黒須亜希子〕

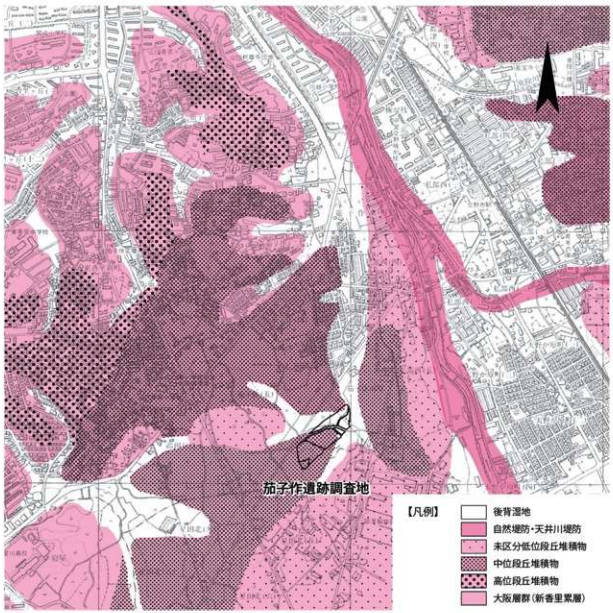
第２章　調査地周辺の地理と環境

第１節　調査地周辺の地理と地形

１．調査地周辺の地形

茄子作遺跡は枚方市茄子作地区（大字茄子作・茄子作東町・茄子作南町）を中心として広がる周知の遺跡である。古くは「ナシツクリ」と呼称されたが、現在の大字表記は「ナスヅクリ」であり、遺跡名もこれに拠るものである。

今回の調査は、この茄子作遺跡の範囲を一部含む、枚方市茄子作南町地先についておこなった。茄子作地区は、枚方市の南東部にあたり、交野市との市境にも近い位置にあたる。



枚方市発行枚方市全図(平成７年　1:15,000図)に、
経済産業省産業技術総合研究所地質研究所発行地質図（平成13年　1:50,000）
を参考として加筆、一部修正。

第６図　調査地周辺の地質図

以下、調査地周辺の地理環境や、既往の調査成果について触れておく。

茄子作遺跡が立地する枚方市は、大阪府の北東部、いわゆる北河内地域の東部に位置している。北に淀川、東に生駒山を控えているため、市域の南東部は起伏に富んだ山地、北西部は山地から派生した丘陵（枚方丘陵）と台地（交野台地・交野ヶ原とも呼称される）から成る。台地の大部分は、海退と海進の繰り返しによる浸食作用と、六甲変動など地盤の隆起によって形成された段丘で占められており、茄子作遺跡周辺は、この中位段丘にあたる。

生駒山地から派生した河川は、段丘面を細かく刻みながら北西方向へと流走している。妙見川、傍示川、天野川（天の川）などの河川はいずれも高低差のわりに短く、急峻な岩肌を滑りながら淀川へと注ぎ込む。このため、大雨の際には風化した土砂が大量に流出し、流路はしばしばその方向を違えてきた。

今回の調査地は、天野川に近く、その後背湿地を一部に含んでいる。近世以降、堤防の整備によって川の流れが定まるまで、周辺地形は、河川氾濫の影響をうけつづけたと考えられており、茄子作地区もその例に違わなかったと推測される。

河川の作用と丘陵の傾斜が影響して、調査地周辺はやや複雑な地形を呈している。舌状にはりだした小規模な丘陵が、天野川のある東方向にむかって伸びており、天野川支流の小河川に対し、急峻な崖面を剥き出しにしている。この景観は、大規模な崩落や、近代の大きな地形の改変の痕跡として捉えることができよう。

調査地一帯は耕作地であり、階段状に水田が整備されているが、丘陵地上の水田はなだらかに整えられており、近世・近代の圃場整備に伴う削平が著しいと考えられる。一方、小河川に沿って設けられた田畑は、不定形な階段状を呈しており、この周囲をめぐるように用水路が導かれている。

平成15年度におこなわれた確認調査では、平坦に整形された現代耕作土の下に、埋没した谷地が多く報告された。包括的にはなだらかな段丘面として捉えられがちであるが、周辺の原風景は、細かい谷地が入り組む、起伏の多い地形であったと考えられる。

2．現地周辺の旧集落

旧集落は、谷筋に沿った台地上に点在する。調査地の北東には茄子作村、北西には高田（こうだ）村、南には星田村、南東には私市（きさいち）村があり、星田村から茄子作村へは東高野街道（現府道枚方泉佐野富田林線付近）が通じていた。この街道は、私部（きさいべ）村・森村を経て淀川を渡り、京都へと続く古代の主要交通路である。街道沿いには今も道標が残されており、往時を偲ぶことができる。

集落が営まれた台地上は水の利が悪く、谷地に比べて耕地としての開発は遅かったと考えられている。現在、調査地周辺には青々とした稲田がひろがっているが、農業用水のほとんどは井戸からの電力ポンプアップに頼っている。古くは上部の星田新池より延々と引いた水路からの取水を主としたが、この水路も枯れることが多かったという。星田山中の小松寺に残る『小松寺縁起』によると、平安時代後期頃、小松寺は「三宅山荒山寺」と称したが、これは付近が険しい荒山であり、白い岩石が剥き出しであったことに由来すると説明されている。大雨があれば大水と土砂を排出するが、普段は川に一滴の水もない有様であり、このことから「ほしだ（乾田・干田）」の名がおこったという。

『小松寺縁起』の記述は、比較的信憑性が高いものである。交野台地の地質を概観すると、基盤岩石である花崗岩の上に灰白色の礫まじり粘土層があり、この上に水酸化鉄のために黄褐色化をおこした砂礫層が広がる層序を基本として捉えることができる。『小松寺縁起』にいう白い岩石とは、前者の灰白

色の礫まじり粘土が剥き出しになった状態を指すのであろう。現在の星田地区一帯が荒地であったことも事実であろうと思われる。なお、平安時代末期の文書である『平清盛書状』によると、星田庄には水田および星田牧と称される馬の放牧地があったことがわかる。谷地を水田とし、台地を放牧地として利用していた当地の景観を想起させる史料である。

第２節　調査地周辺の遺跡と調査成果

１．調査地周辺の遺跡

次に、調査地周辺の遺跡について概観したい。

調査地周辺では、早くから枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会・交野市教育委員会による資料採取や発掘調査がおこなわれてきた。また、近年では、大阪府教育委員会、当センターによる調査も進んでおり、その結果、旧石器時代末期から中世に至るまでの遺跡が確認、周知されている。以下、時代ごとに記す。

旧石器時代　調査地より東へ３㎞程度隔てた丘陵斜面には、尖頭器およびサヌカイト製翼状剥片を用いたナイフ形石器が出土した、神宮寺遺跡が立地する。また、調査地の南西方向に位置する交野市布懸遺跡では、昭和 53 年の調査において、サヌカイト製ナイフ形石器・縦長剥片・石核等が多数出土した。直径数mの範囲内に集中して確認されたことから、石器製作における一連の工程を復元することが可能な資料であると考えられている。

茄子作遺跡内においても、翼状剥片が採取されている。

縄文時代　広大な山林を抱える当地では、狩猟採集生活が基本であった縄文時代の著名な遺跡が確認されている。昭和 29 年、前掲の神宮寺遺跡から縄文時代早期に分類される押型文土器を伴う石組遺構・炉跡の検出が報告された。石鏃や石材片も採集されたことから、縄文時代早期の集落跡として位置づけられ、出土土器は「神宮寺式土器」として、近畿の縄文時代早期を代表する形式となった。

また、交野市星田地区の西側を流れる傍示川の谷口台地上に位置する星田旭遺跡では、縄文時代中期から後期初頭の土器（醍醐Ⅱ～Ⅲ式・船元式・北白川上層式）を伴う住居跡が確認されている。

弥生時代　調査地の南東に位置する坊領遺跡（星田ぼうりょう遺跡）では、弥生時代中期に所産時期をもつ土器片とサヌカイト製石鏃が出土している。

茄子作遺跡では、昭和 49 年に財団法人枚方市文化財研究調査会によっておこなわれた調査において、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡が確認された。検出された遺構は隅丸方形プランをもつ竪穴住居跡 14 棟、方形周溝墓１基等であり、つづく昭和 52 年の調査でも同時期の竪穴住居跡 19 棟および方形周溝墓１基が確認された。この遺構検出地点は、今回の調査区（茄子作地区）北側の丘陵地上にあたる。

なお、平成 13 年度に当センターがおこなった確認調査では、調査地東側の小川を挟んで対面する丘陵地斜面上で弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物包含層を確認しており、広範囲にわたる集落が当該地に存在した可能性が示されている。また、今回の調査地に東接する上の山遺跡では、弥生時代中期初頭の大型独立棟持柱付建物が検出された。

古墳時代　調査地の東方を流れる天の川の右岸に位置する森古墳群には、全長 110 ｍを測る前方後円

墳である雷塚古墳をはじめ、向山古墳・山神古墳など数基の古墳が点在している。雷塚古墳は標高150mの丘陵最高所に築かれており、撥形にひらく前方部を備える。この立地および墳丘の形状は、畿内における前方後円墳のうち、最古級として認識されている一例に合致する。

また、森古墳群より東南方向の山中に位置する南山遺跡内には、前方後円墳である鍋塚古墳が築かれており、前期古墳として知られている。

さらに、森古墳群と天野川を挟んで対面する丘陵尾根上には、妙見山古墳がある。現在は消滅してしまった古墳であるが、昭和43年には、竪穴式石室と長さ7mを測る刳抜型木棺および粘土槨の残存が確認された。いまだ全容は明らかではないが、この地に一大古墳群が築かれていたと考えられる。

古墳時代中期の古墳では、交野東車塚古墳が著名である。調査区とは天の川を隔てた東側に位置するこの古墳は、昭和63年に発掘調査が実施され、3基の埋葬施設をもつ前方後円墳であることが明らかとなった。埋葬施設からは、鉄製武具や銅鏡、石製装身具など多彩な副葬品が出土している。

また、これら古墳群に近接する森遺跡では、平成3年におこなわれた第5次発掘調査において、古墳時代中期の竪穴住居が検出されている。これに先立つ平成元年の第3次調査では、古墳時代後期の鍛冶炉や掘立柱建物が確認されており、古墳造営集団との関係が注目されるところである。

また、調査地の南方から東方にのびる生駒山麓では、倉治古墳群や寺古墳群など、古墳時代後期の群集墳が数多く認められており、寺古墳群の北側山裾では、大谷窯、大谷北窯などの須恵器焼成窯が発見されている。古墳時代中期から後期にかけて、この地域でも須恵器生産がおこなわれていたことの証左である。

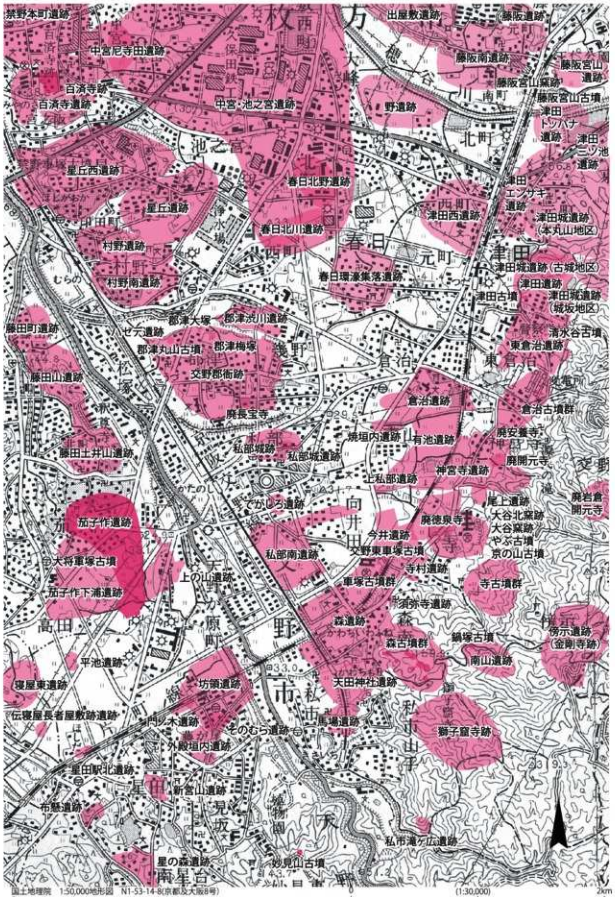
なお、現在、調査が進められつつあるが、調査地東側に位置する私部南遺跡および上私部遺跡は、古墳時代末期から飛鳥時代の大集落であることが徐々に明らかとなっている。当地の古墳時代を語る上では見逃すことができない遺跡であるといえよう。

古代（奈良時代・平安時代）　文献史料により、当地は交野郡三宅郷に比定されること、また交野郡衙跡が伝承地として存在すること、郡の交通玄関である郡津や皇后直轄領である私部などの地名が、いまだ残ること等を考え合わせると、周辺に古代官衙が存在したであろうことは想像に難くない。調査地の北東には、具体的な調査報告は欠くが、交野郡衙跡が遺跡名として周知されている。周辺には、廃開眼寺、廃長宝寺、廃小松寺など、古代寺院の存在も知られており、瓦片などの採集も報告されている。

また、近年の開発によって次第に不明確となりつつあるが、周辺では、水田や畑地に伴う里道や水路などに、条里制の面影を求めることができる。

中世（鎌倉時代・室町時代）　調査地の北東方向には、私部城跡（伝承地）・でがしろ遺跡が位置している。ともに鎌倉時代初期、河内守護代であった安見氏に関する遺跡として周知されている。安見氏は、若狭国安見庄より当地へ来住し、でがしろ（古くはどいがしろ（土居ガ城））に城を築いたという。室町時代には、でがしろの北に私部城を築いたが、天正年間には衰退したと伝えられている。私部城の存続期間は明らかではないが、城跡周辺では、城築造時の整地土とみられる置土や段、堀跡などが確認されている。

在地の集落遺跡としては、調査地東方の有池遺跡が著名である。当センターが平成13年度より着手した有池遺跡（その1）～（その4）の調査では、免除川南側一帯に、濠で囲まれた大型建物を中心とした掘立柱建物群が縦に並ぶ状況が確認された。当時の一大集落として、存続したものと考えられている。



国土地理院　1:50,000地形図　N1-53-14-8(京都及大阪8号)
「大阪東北部」平成10年12月1日発行の一部を拡大して加筆

第７図　調査地周辺の遺跡分布図

2．茄子作遺跡周辺の既往の調査

茄子作遺跡では、これまでにも枚方市教育委員会（以下市教委）や、財団法人枚方市文化財研究調査会（以下調査会）による調査成果が報告されてきた。

昭和 49 年におこなわれた調査会による、民間宅地造成に伴う第 1 次調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居 14 棟、方形周溝墓 1 基、土坑群、大溝、井戸状遺構が発見された。

続く、昭和 52・53 年の民間宅地造成に伴う第 2 次調査では、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居 19 棟と方形周溝墓 1 基が確認された。

さらに、昭和 61 年の同第 3 次調査において、弥生時代後期の竪穴住居 1 棟、掘立柱建物 1 棟、焼土坑が検出された。このときの調査では、韓式土器の破片がまとまって出土している。

これらの調査は、すべて今回の調査地の北側に位置する丘陵地上（現枚方市茄子作 4 丁目付近）において実施されたものである。細かい谷地が入り組んだ南向きの丘陵斜面上にあたり、集落の造営には、恵まれた地形にあるといってよい。

合計すると、この 3 度にわたる調査において、総計 48,000㎡の範囲に、合計 34 棟の竪穴住居と 1 棟の掘立柱建物が確認されていることになる。住居の延床面積や、立地の疎密に差があるものの、弥生時代後期から古墳時代中期までのほぼ 400 年の間、幾度もの建替を経ながら、一定規模の集落が存続したことがわかる。この成果により、少なくとも近年まで、茄子作遺跡の集落は、この北側丘陵を中心として展開されたと推測されてきた。

平成 15・16 年度、茄子作北側丘陵地とは谷を隔てた東側段丘斜面に立地する上の山遺跡の調査において、当該時期の竪穴住居が 7 棟検出された。

また、今回の調査では、5 棟の竪穴住居が確認された。検出地点は、上の山遺跡と同じく、茄子作北側丘陵とは谷地をはさんだ南側丘陵の斜面上にあたる。丘陵を隔てる谷地には、弥生時代後期～古墳時代中期に所産時期をもつ遺物が大量に包蔵されていた。

これらのことから、茄子作集落は、谷地を境とした丘陵地上にまとまって形成されていたものが、谷地を越えて相対する斜面に居住地を求め、発展を続けた可能性が高い。後述するとおり、住居の造営には地点によって時期差があり、徐々に集落が拡大した様子をうかがうことができる。

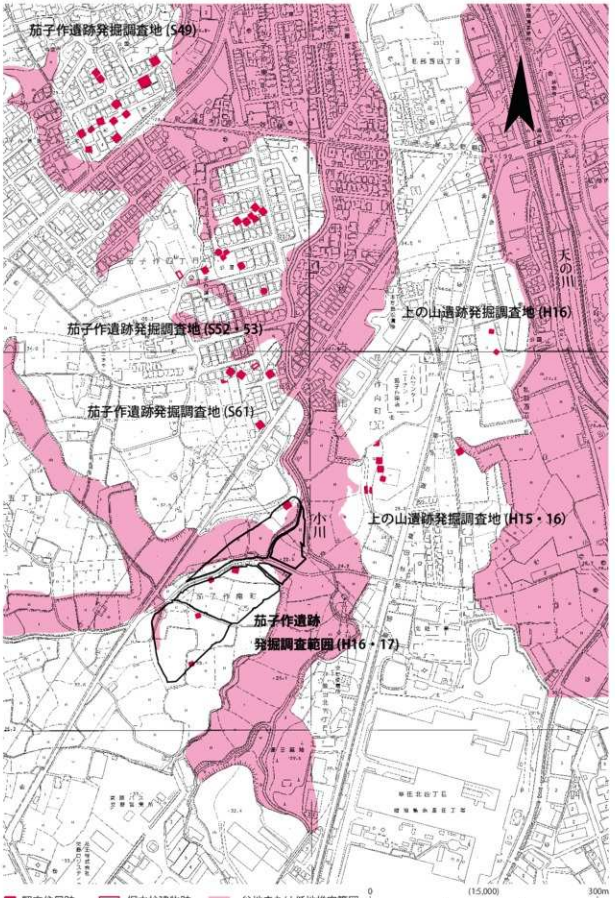
一方、茄子作遺跡に西接する茄子作下浦遺跡を含む周辺一帯は、中世（13 ～ 15 世紀）の遺物が多量に出土する地域としても知られている。昭和 49 年の茄子作遺跡第 1 次調査では、13 世紀の遺物がまとまって出土した溜め池状の掘り込みが検出されている。

また、昭和 59 年におこなわれた、民間宅地造成に伴う茄子作下浦遺跡第 1 次調査では、14 ～ 15 世紀の掘立柱建物 1 棟と柱穴群、土坑、溝が確認された。

さらに、平成 3 年の共同住宅建設に伴う茄子作下浦遺跡第 7 次調査では、15 世紀の溝状遺構と土坑群の検出が報告されている。このほか、遺構の検出にはいたらないものの、輸入陶磁器や漆器など、一定程度以上の集落において出土する遺物が随所で確認されており、当該時期の集落の発見が期待されている。

3．調査区内からの出土遺物

平成 15 年度におこなった確認調査では、今回の調査区に設定したトレンチにおいて、遺構面の確認および遺物の出土が報告されている。



第８図　調査成果遺構概念図

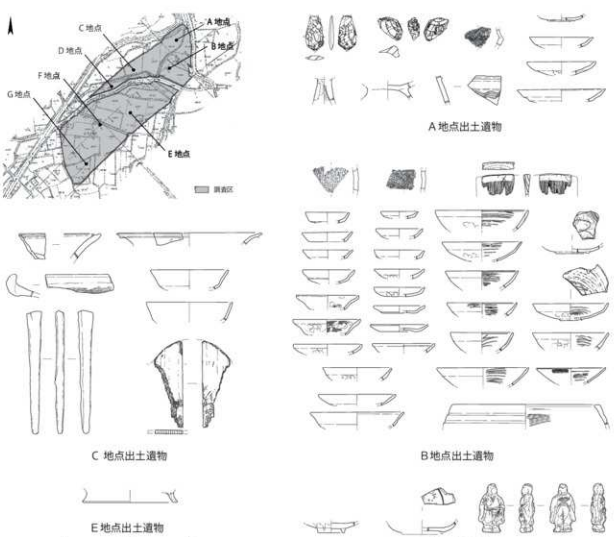
丘陵裾部から低地へ移行する地形の変化点に設けたトレンチ（A地点）では、約1mの厚さを測る中世耕作土のひろがりを確認している。この中世耕作土を除去した面において、土石流堆積とみられる砂礫層を検出しており、この中から13～15世紀の瓦器椀や土師器皿の遺物が出土した。

また、砂礫層除去面において、黒色粘土質シルトから成る中世包含層を確認しており、この層からは、中世期の瓦器や古墳時代の土師器・須恵器とともに、サヌカイト製有舌尖頭器（縄文時代草創期）が1点出土した。さらに、中世包含層の直下には緑灰色砂質シルト層の堆積があり、この上面から縄文土器片が数点出土した。このことから、地山上面が、縄文時代の遺構面である可能性が考察された。

水田地帯に設けたトレンチ（B地点）では、A地点同様、約1mの厚さをもつ中世包含層の存在が確認されている。限られた面積の調査ながら、小畦畔や足跡を伴うを耕作面が複数面検出されており、包含層からは、瓦器椀・土師器皿・瓦器羽釜・木製櫛等が出土した。包含層の形成時期は、13～14世紀とみられる。

中世包含層の下には、炭化した植物遺体を多く含む粗砂層があり、その下面において、緑灰色の砂質シルト層を確認している。また、その上面において、北西ー南東方向に走る流路を検出した。また、緑灰色の砂質シルト層上面に貼り付いた状態で、縄文土器片が出土した。

B地点より上流に設けたトレンチ（C地点）では、B地点より層厚が薄いものの、同様の堆積層序と



第9図　調査地内における確認調査成果

遺構面の残存を確認している。近世包含層の直下には中世の耕作面があり、中世包含層除去面では、流路と見られる砂礫の堆積が認められる。この砂礫層からは、５世紀後半頃の須恵器片と、鉄製馬鍬の歯が出土した。このことにより、古墳時代の遺構面が残存する可能性が考えられた。また、出土した須恵器の一群の中には、初期須恵器に類されるものや、溶着した痕跡を残すもの、焼け歪みのあるもの等が含まれていた。

谷地から南側丘陵の斜面に設けられたトレンチ（Ｄ地点）では、古代末期から中世初頭に形成されたとみられる水田と整地跡が確認されている。中世包含層からは、瓦器羽釜や須恵器鉢、土師器皿等の出土があり、周辺に当該時期の集落が存在した可能性をうかがわせた。なお、この地点では、緑灰色粘土を主体とする地山面が確認されており、その上面において古墳時代初頭の土師器片が採取されている。

調査区南側の丘陵地上に設けたトレンチ（Ｅ地点）では、表土を除去した面において、ピット（古代）が検出されている。平面形状が隅丸方形を呈すること、複数のピットが直線状に並ぶことから、掘立柱建物などの柱列であることが想定されるものである。また、同一面上において、炭化物と焼土が密集する浅い小土坑や、弧状に曲がる小溝が検出された。これらの成果により、古代以前に営まれた集落の痕跡である可能性が示されている。

Ｅ地点よりもさらに丘陵頂上部へと移動した段上に設置したトレンチ（Ｆ地点）では、埋土に古墳時代前期の遺物を含む竪穴住居の一角が確認されている。

また、丘陵尾根筋の東側斜面に設定したトレンチ（Ｇ地点）では、中近世包含層の直下において、炭化物や焼土を含む土坑を検出した。この土坑からは、６世紀所産の須恵器坏蓋・甕片が出土した。

以上、確認調査の実施により、当該調査区における複数の遺構面の残存とその深度について、情報が得られた。調査地周辺の環境や茄子作遺跡の既往の調査報告に加え、より具体的な遺跡像が示されたといえる。

このため、今回の調査では、既往の調査により報告されている弥生時代後期～古墳時代初頭および、中世期遺構面のさらなる広がりの確認に加え、古墳時代中期～後期、古代といった新たな時代の遺構面が発見されることに、期待が寄せられた。〔黒須亜希子〕

【参考文献】

交野市教育委員会編	1986	『交野市史　自然編Ⅰ』
交野市教育委員会編	1990	『交野市史　交野町略史復刻編』
交野市教育委員会編	1992	『交野市史　考古編』
日本歴史体系第28巻	1986	『大阪府の地名』 平凡社
（財）大阪府文化財センター	2002	『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、禰宜大亀谷遺跡、長尾窯跡群・長尾東地区　一般国道１号バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』
（財）大阪府文化財センター	2004	『津田遺跡、東倉治遺跡、茄子作遺跡他　一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』
（財）大阪府文化財センター	2005	『上の山遺跡Ⅰ　一般国道168号（都市計画道路枚方大和高田線、天の川磐船線）道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
（財）大阪府文化財センター	2007	『上の山遺跡Ⅱ　一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

第３章　基本層序

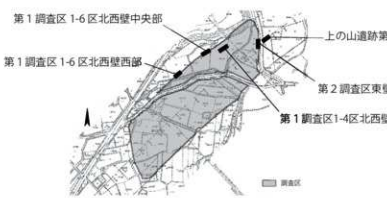
今回の調査地は、既述のとおり、丘陵に連なる中位段丘と、これを浸食する谷地で構成されている。このため、堆積層序は、各調査区において大きく異なっており、現地調査では、調査全体を見通した付番ができていない。例えば、隣り合った調査区ではあっても、第１調査区の第３層と第２調査区の第３層は、かならずしも連続する土層ではない。また、第１調査区と第５調査区において検出した第１遺構面に、時期差が認められるという具合である。

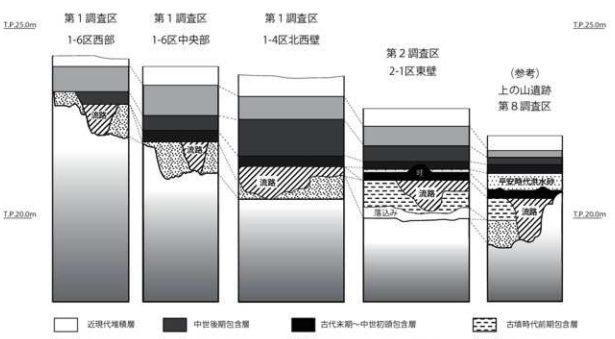
このため、この章において、各調査区において確認された堆積土層のまとまりを時代ごとに分割して示し、その特徴について記述する。

まず、堆積層を時代ごとに大別して以下に示す（第 10 図・第 11 図参照）。

１．近現代堆積層

重機によって除去した調査不要土層である。近現代の耕作土と用水路内堆積泥土、整地土、丘陵地斜面に堆積した表土（腐葉土）、電柱や鉄塔設置の工事用掘削坑埋め戻し土（撹乱）、確認調査の際のトレ





第 10 図　基本層序模式図（１）

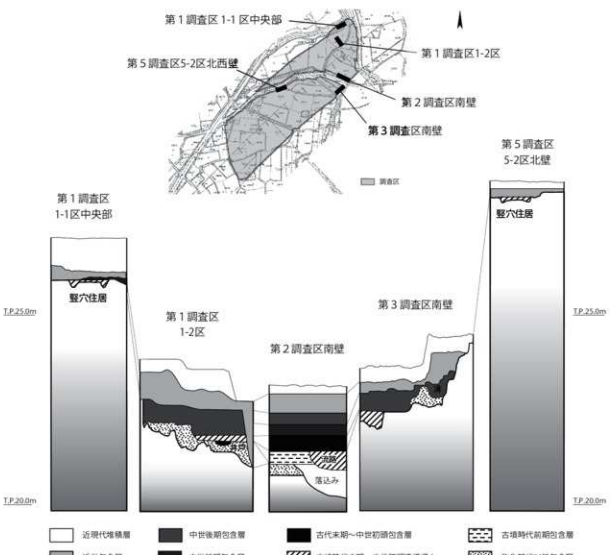
ンチ埋め戻し土がこれにあたる。第４調査区では、農作業小屋の建物基礎とこの設営に伴う撹乱盛土が、加わる。また、第６調査区では、里道設置のための盛土が含まれる。

２．近世包含層

主として耕作土であるため、上層と同じく重機で除去した層である。丘陵地にあたる第５・第６・第７調査区では薄く、谷地である第１・第２・第３調査区では、厚く堆積する。

第１調査区　1-1 区では、第１層が近世包含層に相当する（調査区間の対応層序は第 12 図参照）。第１層の土質は、灰色微砂まじりシルトおよび灰オリーブ色砂質シルトである。厚さ 0.1 m前後の薄層であるが、西半部は一段低くなっているため東半部に比べ、やや厚く堆積する。所々、撹拌痕跡と見られる粘土ブロックの巻上げや、鉄斑の沈着、マンガン粒の混じりこみが看取される。この層からは、18 世紀までの遺物が出土した。

1-2 区では、灰色粘土質シルトと緑灰色粘土ブロックの混合層である整地土、耕作土である黒色～灰色砂まじりシルトから成る第１層が、近世包含層に相当する。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。



第 11 図　基本層序模式図（２）

1-3 区では、第 1 層および第 2 層が、近世包含層に相当する。第 1 層は、径 2cm未満の礫がまじる灰色～灰オリーブ色砂質シルトを主体とする。間隙が多く、しまりが悪い。部分的に鉄斑の沈着が認められる。層厚は、調査区全体を通じてほぼ一定であり、0.5 ～ 0.6 m程度を測る。層内からは、18 世紀までの遺物が出土した。

第 2 層は、黄色灰色～暗灰黄色を呈する粘土質シルトを主体とする。第 1 層より粘性が強く、しまりが良い。南東側にむかって徐々にその厚さを増すため、層厚は 0.2 m～ 0.5 mと幅がある。層内からは、17 世紀までの土器が出土した。

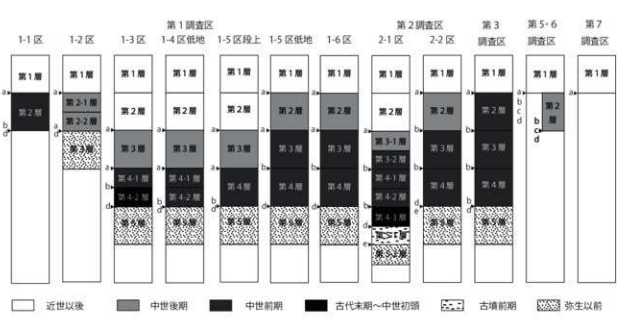
1-4 区および 1-5 区では、調査区南部～西部辺の段上と、これ以外の低地部とでは、堆積層序の様相が異なる。1-4 区の南側段上では第 1 層が近世包含層に相当する。径 2 cm未満の礫を含む褐色粗砂～細砂であり、層厚は 0.15 ～ 0.5 mを測る。

1-4 区の低地部では、第 1 層および第 2 層が近世包含層に相当する。第 1 層は、灰色微砂まじりシルト～細砂まじりシルトを主体とする。層厚は、0.4 ～ 0.5 mを測る。以下の層に比べて砂の含有率が高く、ややしまりが悪い。土層観察では、所々に足跡や小畦畔の起伏を認めることができる。この層からは、18 世紀までの遺物が出土した。

第 2 層は、灰色砂まじりシルトまたは、シルトまじり細砂を主体とする。基本的に耕作土であるが、粗砂や細砂の流入があることから、頻繁に洪水等にみまわれていた状況が推測される。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。

1-5 区の段上では、第 2 層が近世包含層に相当する（第 1 層は近代耕作土）。第 2 層は、灰色粗砂まじりシルトを主体とする耕作土であり、層厚は 0.15 ～ 0.5 mを測る。層内からは、17 世紀までの遺物が出土した。

1-5 区低地部では、第 1 層が近世包含層に相当する。土質は、灰色～暗灰黄色粗砂まじり微砂を主体とする。層厚は、0.2 m程度を測るが、後世の撹乱（主に小川水路の氾濫）をうけ、欠損する箇所が多い。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。



第 12 図　調査区層序対応図

1-6 区では、第 1 層が近世包含層に相当する。層厚は、0.7 ～ 0.9 mを測る。灰色～灰白色細砂まじりシルトを主体とするが、部分的に鉄分の沈着により、黄色化が著しい。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。

第 2 調査区　2-1 区では、第 1 層および第 2 層が近世包含層に相当する。第 1 層は、暗灰黄色～灰黄褐色を呈する砂まじりシルトを主体とする。層内には、直径 1 ㎝未満の礫やマンガン粒がまんべんなく含まれている。層の下位には、下層ブロックの巻き上げが見られるなど、随所に撹拌痕跡が認められる。鉄斑の沈着も顕著である。層厚は、0.3 ～ 0.4 mを測る。北側丘陵の裾部に近い調査区北西端付近がもっとも薄く、谷の下流にあたる調査区北東部が厚い。この層からは、18 世紀までの遺物が出土した。

2-1 区の第 2 層は、調査区北半部東辺一帯においてのみ確認した砂層の広がりである。暗灰黄色粗砂～細砂とシルト層が折り重なって互層となる。部分的に、直径 2 ㎝未満の円礫が、まとまって流入する箇所が認められる。下位には、水平方向のラミナが形成されている。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。

2-2 区では、第 1 層が近世包含層に相当する。2-2 区は既述のとおり、鉄塔跡地であるため、撹乱をうけた範囲が広く、層の残存は僅かである。

第 3 調査区　第 3 調査区では、第 1 層が近世包含層に相当する。層厚は、0.8 ～ 0.2 mを測る。灰色～灰オリーブ色微砂～シルトを主体とする耕作土である。随所に鉄斑の沈着が認められる。直径 1 ㎝未満の礫やマンガン粒を多分に含む。また、下層ブロックの巻上げなどの撹拌痕跡が顕著に認められる。総じてしまりが悪く、他の調査区において確認した同時期の耕作土に比べると、砂を含む割合が高い。この層からは、17 世紀までの遺物が出土した。

第 5 調査区　第 5 調査区では、第 1 層が近世包含層に相当する。層厚は薄く、0.05 ～ 0.1 m程度である。しかし、5-1 区北東部では、地盤が下がるため、層厚は 0.2 ～ 0.3 mを測る。土質は、にぶい黄褐色粘土質シルト～シルトを主体とする。この層からは、18 世紀までの遺物が出土した。

第 6 調査区・第 7 調査区　第 6 調査区および第 7 調査区では、第 1 層が近世包含層に相当する。にぶい黄灰色砂質シルトを主体とする耕作土層である。しまりが悪く、直径 1 ㎝未満の礫が少量入る。この層からは、18 世紀までの遺物が出土した。

3．中世包含層

中世包含層は、谷地および丘陵地の一部で確認した。層厚は、谷地の調査区で 0.5 ～ 1.2 m程度、丘陵地の調査区で 0.1 ～ 0.15 m程度を測る。近世包含層と同じく、第 1 調査区および第 2 調査区にもっとも厚く堆積する。このため、第 1 調査区・第 2 調査区では、2 ～ 3 分割して掘削し、それぞれ遺構面を検出した。概ね、耕作土であると考えられる。

第 1 調査区　1-1 区では、第 2 層が中世包含層に相当する。調査区東半部に残存しており、層厚は 0.1 ～ 0.2 m程度である。径 1㎝未満の礫を含む黄灰色細砂まじりシルトを主体とするが、部分的に灰オリーブ色～オリーブ黄色の微砂～細砂が混じる。この層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

1-2 区では、第 2 層が、中世包含層に相当する。層厚は、0.2 ～ 0.8 mを測る。土質によって、上層と下層（第 2-1 層・第 2-2 層）に細分することができる。

第 2-1 層は、粗砂まじり黒褐色粘土質シルト層を主体とする。ややしまりが悪く、部分的に砂礫の流入が認められる。第 2-2 層は、黄灰色～オリーブ灰色を呈するシルト～細砂を主体とする。この両層か

らは、15 世紀までの遺物が出土した。

1-3 区では、第３層と第４層のうち上位層が、中世包含層に相当する。第３層は、暗黄褐色～暗オリーブ色砂まじりシルトを主体とする耕作土層であり、上層に比べ、やや粘性がある。上位よりも下位の方が、砂の含有率が高い。層厚は、0.3 ～ 0.5 mを測る。この層からは、16 世紀までの土器が出土した。

1-3 区第４層は 0.1 ～ 0.2 mを測る薄層であるが、細かく上下に分層することができる（4-1 層・4-2 層）。このうち、上層である 4-1 層が、中世包含層に相当する。4-1 層は、暗オリーブ褐色、オリーブ黒色、黒褐色を呈する砂まじりシルトを主体とする。砂を多く含んでおり、径２㎝未満の礫や細砂ブロックをほぼ均等に含む。鉄斑の沈着が顕著である。層内からは、14 世紀までの遺物が出土した。

1-4 区の低地部では、第３層および第４層が中世包含層に相当する。第３層は、黄灰色～暗灰黄色細砂まじりシルトを主体とする耕作土であり、径３㎝未満の礫が少量混じる。層厚は、0.2 ～ 0.6 m程度である。この層からは、15 世紀までの遺物が出土した。

第４層は、上下層に分層できる（4-1 層・4-2 層）。4-1 層は、暗灰黄色細砂まじりシルト、4-2 層は黒褐色細砂まじりシルトを主体とする。層厚は、ともに 0.1 ～ 0.2 m程度である。4-1 層からは、14 世紀までの遺物が出土した。また、4-2 層からは、11・12 世紀の製品を主体とする 13 世紀初頭までの遺物が出土した。

1-5 区の段上では、第３層・第４層が中世包含層に相当する。第３層は、黄灰色細砂まじりシルトを主体としており、層厚は 0.2 ～ 0.3 mを測る。基本的に耕作土であると考えられる。層内からは 16 世紀までの遺物が出土した。

第４層は、黒褐色細砂まじりシルトおよび灰色粗砂まじりシルトを主体としており、一部がわずかに土壌化する。層厚は 0.1 m程度、段の崖際３～４m程度の範囲に堆積する。層内からは、14 世紀までの遺物が出土した。

1-5 区低地部では、第２層・第３層・第４層が中世包含層に相当する。第２層は、灰オリーブ色からオリーブ灰色砂まじりシルトを主体とする耕作土である。この層からは、16 世紀までの遺物が出土した。

第３層は、灰色砂まじりシルトと黄灰色砂から成る。黄灰色砂には、ラミナが認められることから、洪水砂の流入があったことをうかがわせる。層厚は、0.2 ～ 0.3 mを測る。この層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

第４層は、オリーブ黒色～黒色砂まじりシルトを主体とする。丘陵斜面に近い範囲では、礫の混じる割合が高い。丘陵斜面の近辺では後世の削平をうけたようであり、谷本筋の限られた範囲にのみ堆積が認められる。層内からは、14 世紀までの遺物が出土した。

1-6 区では、第２層・第３層・第４層が中世包含層に相当する。第２層は、黄褐色～灰黄褐色砂まじりシルトを主体とする耕作土であり、調査区の南西および北東部において確認することができた。調査区北西部端では、近世の耕作による削平を受けており、ほとんど残存していない。この層からは、16 世紀までの遺物が出土した。

第３層および第４層は、1-6 区が丘陵地と谷地を横断するように設定したトレンチであるため、その土質は、地形の作用を受けて変化に富む。調査区北西部端では、近世の耕作による削平のため、第３層はほとんど残存しない。調査区中央部より北西寄りの小川水路付近では、氾濫堆積およびその土壌化層で黒褐色シルト～細砂と浅黄色砂層の混合層として認められる。中央部では、灰黄褐色砂まじりシルトを主体とする耕作土、調査区北東端では、暗灰黄色を呈する細砂～粗砂である。北側丘陵斜面地付近で

は、中央部に比べて砂の含有率が高い。層厚は、0.2 ～ 0.55 mを測る。第３層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

第４層は、大きく、暗オリーブ褐色砂まじりシルト・黒褐色細砂～粗砂・黒褐色粘土と微砂の互層・暗灰黄色～褐灰色礫まじり細砂～粗砂に分けることができる。このうち、撹拌痕跡が認められるのは、暗オリーブ褐色粗砂まじりシルトのみである。調査区西半部の方が、撹拌痕跡が顕著に残る。第４層からは、13 世紀までの遺物が出土した。

第２調査区　2-1 区では、第３層と第４層のうち上位にあたる層が、中世包含層に相当する。

第３層の層厚は 0.4 ～ 1.0 m程度、調査区北西部の壁際がもっとも浅く、南東隅部の東壁がもっとも深い。この層は、土質によって大きく上下２層にわけることができる（3-1 層・3-2 層）。

上層である 3-1 層は、暗灰黄色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする耕作土層である。鉄斑の沈着が顕著であり、下層の巻上げなど撹拌をうけた痕跡も多く認められる。近世耕作土に比べると、ややしまりが良く、粘性が強い。調査区北西辺の丘陵裾部を除く、範囲において堆積を確認した。層内からは、15 世紀までの遺物が出土した。

下層である 3-2 層は、調査区全体に堆積する耕作土である。暗灰黄色～黒褐色砂まじり粘土質シルトを主体とする。総じて含水率が高く軟質である、ただし、調査区北西部では砂質化が進んでおり、やや乾燥する。シルトブロックや細砂ブロックの混じりこみが多く、鉄斑の沈着も顕著である。この層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

第４層として付番した層のうち、上半にあたる 4-1 層と 4-2 層は、中世前期包含層に相当する。4-1 層は、黒褐色粘土質シルトを主体とする耕作土層であり、砂の混じりこみが顕著に認められる。層厚は、0.2 m程度である。2-1 区全域において確認した。4-2 層は、灰黄色細砂～粗砂を主体とする洪水砂層である。2-1 区東半部に堆積が認められる。2-1 区東壁では、0.1 m程度の層厚が認められる。4-1 層および 4-2 層から出土した遺物は、13 世紀までの遺物が出土した。

2-2 区では、第２層・第３層・第４層が中世包含層に相当する。

2-2 区第２層は、2-1 区第 3-1 層と対応する層である。層厚は、0.2 ～ 0.3 mを測る。暗灰黄色砂まじりシルトを主体とするが、2-1 区 3-1 層に比べて砂の含有量が多く、やや硬質である。2-2 区では、2-1 区の 3-2 層に対応する軟質な粘土質シルト層である耕作土は、周辺部分に若干認められる程度であり、顕著な堆積層としては確認できなかった。この層からは、15 世紀までの遺物が出土した。

第３層は、2-1 区において確認した 4-1 層と 4-2 層が撹拌された状態に近似する。黒褐色～オリーブ黒色砂まじりシルトを主体としており、部分的に下層ブロックの混入が目立つ。この層からは、13 世紀後葉までの遺物が出土した。

第４層は、第３層の直下に堆積する黒褐色細砂まじり粘土質シルトである。層厚 0.05 ～ 0.1 mを測る薄層である。層内からは、13 世紀前葉までの遺物が出土した。

第３調査区　第３調査区では、第２層・第３層・第４層（第３面掘り下げ層）が中世包含層に相当する。第２層は、灰色粗砂～細砂まじりシルトを主体とする耕作土である。層厚 0.2 ～ 0.3 m程度をもって、調査区全面に堆積する。第３層は、調査区南東半部部に堆積する包含層で、灰色微砂～細砂に黄褐色微砂ブロックが 10%程度入る。第４層は、調査区段下の北西辺より３～４mの範囲に堆積する包含層である。層内から出土した遺物に時期差は認められない。第２～４層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

第５調査区・第６調査区　第５調査区では、近世包含層の直下に古墳時代から中近世までの遺構面を検出した範囲が広く、調査区全域に堆積する中世包含層は確認できていない。ただし、5-1 区北東部では、地山面が下がることにより、層厚 0.2 ～ 0.3 m を測るにぶい黄褐色粘土質シルト～シルト層の堆積を確認した。この層からは、16 世紀までの遺物が出土したことにより、第２層として付番した。

第６調査区では、調査区東辺の一部において確認した第２層が中世包含層に相当する。マンガン粒を多く含む黄褐色粘土質シルトを主体とする層であり、下位には地山の巻上げが顕著に認められる。この層からは、14 世紀までの遺物が出土した。

第７調査区　第７調査区では、中世以前の包含層に相当する堆積は確認できなかった。

４．古代末期～中世初頭包含層

谷地に設定した調査区のうち、第１調査区と、第２調査区の一部において確認した包含層である。ただし第１調査区では上層とともに掘削をおこなったため、明確な包含層としては、峻別できていない。

第１調査区　1-3 区では、第４層のうち、下層にあたる 4-2 層が、古代末期～中世初頭包含層に相当すると考えられる。遺構面が下がる部分など、限られた箇所においてのみ堆積する。黒色からオリーブ黒色を呈する軟質粘土と暗オリーブ褐色微砂との互層から成る。層厚は 0.1 m に満たない。。水平方向に薄く微砂が入るため、部分的に弱いラミナが認められる。このラミナは上層からの踏み込みによって、凹凸に波打つ箇所が多い。ただし、層自体には撹拌痕跡が認められないことから、湿地状堆積であった可能性が考えられる。

第２調査区　2-1 区では、第４層のうち最下層にあたる 4-3 層が古代末期～中世初頭の包含層に相当する。4-3 層は、2-1 区東辺のみで確認した黒褐色粘土層である。この層の上面では、ヒトの足跡などを確認した。この層からは、寡少ながら、11 ～ 12 世紀までの遺物が出土した。

５．弥生時代以前包含層

古代遺構面の基盤となる堆積層である。1-2 区の第３層、1-4 区・1-5 区・1-6 区・2-2 区・第３調査区の第５層と、2-2 区の第 5-2 層が相当する。

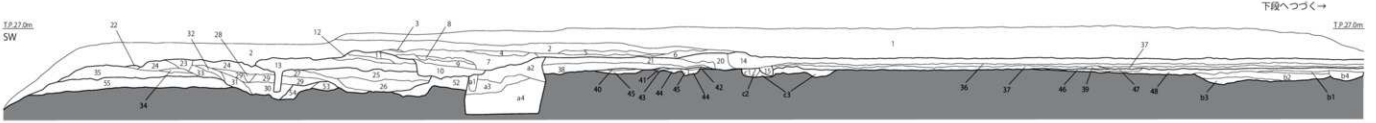
2-2 区の第５層は、上層（5-1 層）が古墳時代前期の包含層、下層（5-2 層）がそれ以前の堆積層である。層厚は、約 1.0m 前後を測る。緑灰色を呈する砂質シルトと植物遺体を多量に含む黒色シルト、その下に厚く堆積する砂礫層を主体とする。緑灰色シルト層は、しまりの良い安定した土壌であるが、点在する黒色シルトと混じりあうように堆積する。

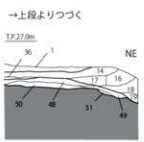
平成 15 年度におこなわれた確認調査では、この層の上面から縄文土器や石器片が出土した。このため、当該土層は縄文時代相当層として報告されたが、今回の調査において、層内より弥生時代後期に属する遺物が出土した。これにより、現在ではその認識を改めている。

丘陵地の調査区では、これに対応する明確な包含層を確認できていない。遺構内に残る、黄褐色を呈する砂まじり粘土質シルトが相当するものと考えられる。出土遺物は寡少であり、サヌカイト切片が数点出土したのみに留まっている。

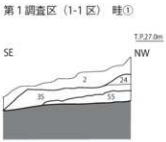
今回の調査では、弥生時代以前包含層の下面を地山上面とした。谷地では、緑灰色を呈する粘土～粘土質シルトおよび粗い礫層、丘陵地では硬く締まった灰黄色粘土である。自然科学分析結果では、この層の直下において検出した埋没樹木から、縄文時代以前の数値を得た。　〔黒須亜希子〕

第１調査区（1-1 区）北壁断面





第１調査区（1-1 区） 畦①



近世代堆積層
1）黄褐色 2.5YS/3 微砂～細砂 径 5cm 未満の礫少量入る
2）暗灰黄色 2.5YS/2 粗砂まじりシルト 径 2cm 未満の礫少量入る
3）灰黄色 2.5Y6/2 微砂～細砂
4）灰色 7.5YS/1 粗砂まじりシルトに 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 10% 程度入る
径 1cm 未満の礫少量入る
5）灰色 5YS/1 粗砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
6）灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂まじりシルトに 明黄褐色 10YR6/6 微砂ブロック 30% 程度入る
7）灰色 5YS/1 粗砂まじりシルト～微砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 40% 程度入る
8）オリーブ黄色 5Y6/3 粗砂まじりシルト～微砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 20% 程度入る
径 0.5cm 未満の礫少量入る
9）灰オリーブ色 7.5Y6/2 粘土質シルト～微砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 30% 程度入る
10）浜白色 5Y7/1 粘土質シルトに にぶい黄褐色 10YR6/4 粘土質シルトブロック 10% 程度入る
11）黄褐色 2.5YS/3 粗砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
12）にぶい黄色 2.5Y6/4 粗砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
13）明緑灰色 5GY7/1 粘土まじり細砂～粗砂に
黄褐色 2.5YS/4 粗砂～微砂ブロック 20% 程度入る 径 1cm 未満の礫少量入る

近世包含層（第１層）
14）灰色 5Y4/1 粗砂～微砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
15）灰色 5YS/1 粗砂～微砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 30% 程度入る
径 0.5cm 未満の礫少量入る
16）にぶい黄色 2.5Y6/4 粗砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
17）灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂～微砂に
明黄褐色 10YR6/6 微砂ブロック 20% 程度入る 径 1cm 未満の礫少量入る
18）黄褐色 2.5YS/4 粗砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
19）にぶい黄橙色 10YR6/4 粗砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
20）灰オリーブ色 5YS/2 粗砂～細砂に 明黄褐色 10YR6/6
微砂ブロック 20% 程度入る
21）灰黄色 2.5Y6/2 粗砂まじりシルトに
にぶい黄褐色 10YR4/3 シルトブロック 30% 程度入る 径 0.5cm 未満の礫少量入る
22）にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
23）にぶい黄橙色 10YR6/4 粗砂～細砂 径 2cm 未満の礫少量入る
24）にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂～微砂 径 1cm 未満の礫少量入る 径 4cm 未満の礫痕量入る
25）明緑灰色 5GY7/1 シルトまじり微砂に 明黄褐色 10YR6/6 微砂ブロック 10% 程度入る
26）明緑灰色 5GY7/1 シルトまじり微砂に 明黄褐色 10YR6/6 微砂ブロック 20% 程度入る
27）にぶい黄色 2.5Y6/3 砂質シルトに にぶい黄色 2.5Y6/4 砂質シルトブロック 10% 程度入る
28）灰オリーブ色 5Y6/2 砂質シルトに にぶい黄色 2.5Y6/3 砂質シルトブロック 20% 程度入る
29）灰オリーブ色 5Y6/2 砂質シルトに 明黄褐色 2.5Y6/6 砂質シルトブロック 30% 程度入る
30）灰オリーブ色 5YS/2 粘土質シルトまじり細砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 20% 程度入る
31）灰黄色 2.5Y6/2 砂質シルト 径 1cm 未満の礫少量入る
32）にぶい黄色 2.5Y6/3 砂質シルト 径 1cm 未満の礫少量入る
33）にぶい黄色 2.5Y6/4 粗砂～細砂 径 2cm 未満の礫少量入る
34）灰色 2.5Y5/1 細砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
35）黄褐色 2.5YS/3 粗砂～微砂 径 2cm 未満の礫少量入る
36）灰色 5YS/1 細砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
37）黄褐色 2.5YS/3 粗砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る 微砂ブロック 30% 程度入る
38）オリーブ色 5YS/2 粗砂～細砂に 明黄褐色 10YR6/6 微砂ブロック 30% 程度入る
39）灰オリーブ色 5YS/2 微砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る

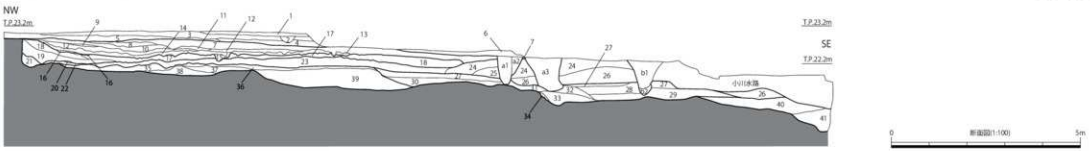
中世包含層（第２層）
40）灰オリーブ色 5YS/2 細砂～微砂
41）灰黄色 2.5Y6/2 粗砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
42）にぶい黄色 2.5Y6/4 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る
43）灰オリーブ色 5YS/2 粗砂～微砂に にぶい黄褐色 10YR5/3 微砂ブロック 30% 程度入る
44）オリーブ黄色 5Y6/3 微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
45）オリーブ黄色 5Y6/3 粗砂～微砂 径 1cm 未満の礫少量入る
46）黄灰色 2.5YS/1 微砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
47）黄灰色 2.5YS/1 細砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
48）灰オリーブ色 5Y6/3 細砂～粗砂 径 1cm 未満の礫少量入る
49）灰オリーブ色 5YS/3 微砂に 黄褐色 10YR5/6 シルトブロック 30% 程度入る
50）灰オリーブ色 5YS/2 細砂まじりシルトに 黄褐色 10YR5/6 シルトブロック 30% 程度入る
51）黄褐色 10YR5/6 細砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
52）にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂まじりシルトに 灰黄色 2.5Y6/2 微砂ブロック 20% 程度入る
53）灰オリーブ色 5YS/2 粘土質シルトまじり細砂に 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 20% 程度入る
54）灰黄色 2.5Y6/2 粗砂まじりシルトに 黄褐色 10YR5/6 微砂ブロック 20% 程度入る
55）オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る 炭化物少量入る

近世井戸埋土
a-1）黄褐色 2.5YS/3 粗砂～細砂に 浜白色 5Y7/1 粘土ブロック 20% 程度入る
径 1cm 未満の礫少量入る
a-2）黄灰色 2.5YS/1 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る
a-3）黄褐色 2.5YS/3 細砂～粗砂 径 1cm 未満の礫少量入る
a-4）灰色 7.5YS/1 粘土まじり細砂に オリーブ褐色 2.5Y4/3 微砂ブロック 10% 程度入る
径 2cm 未満の礫少量入る

土坑２埋土
b-1）灰オリーブ色 5YS/2 微砂～細砂に にぶい黄橙色 10YR6/4 微砂の染込みあり
径 1cm 未満の礫少量入る
b-2）黄灰色 2.5YS/1 粗砂～細砂に にぶい黄橙色 10YR6/4 微砂の染込みあり
径 0.5cm 未満の礫少量入る
b-3）黄褐色 2.5YS/3 細砂～粗砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
b-4）黄褐色 2.5YS/3 細砂～粗砂 径 1cm 未満の礫少量入る

屋内住居３埋土
c-1）灰オリーブ色 5YS/2-5/3 微砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る 炭化物微量入る
c-2）浜色 7.5YS/1 微砂～細砂まじりシルトに 黄褐色 10YR5/6 シルトブロック 30% 程度入る
c-3）黄褐色 2.5YS/4 粗砂まじりシルトに
灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る 径 0.5cm 未満の礫少量入る

第１調査区（1-2 区）畦②



近世代堆積層
1）浜色 5Y6/1 粗砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る 酸化跡流着 ややしまり悪い
2）浜色 5Y6/1 粗砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
3）浜色 5YS/1 粗砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る 酸化跡流着
4）浜色 5Y6/1 粗砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
5）浜色 5Y4/1 粗砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
6）黒色 10Y2/1 微砂まじり粘土 径 1cm 未満の礫少量入る

近世包含層（第１層）
7）黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
8）黒褐色 10YR2/2 細砂まじりシルト
9）オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじりシルト 径 2cm 未満の礫痕量入る ややしまり悪い
10）暗灰黄色 2.5YS/2 微砂～細砂に オリーブ黒色 5Y3/1 微砂まじりシルト筋状に入る
にぶい黄褐色 10YR5/4 微砂下位に筋状に入る
11）黒褐色 10YR3/2 細砂まじりシルト
12）黒褐色 10YR3/1 シルトまじり微砂 ややしまり悪い
13）オリーブ黒色 5Y3/1 粘土質シルト～シルト 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
14）黄灰色 2.5Y4/1 粘土質シルト しまり良い
15）褐灰色 10YR4/1 シルトまじり微砂 径 1cm 未満の礫痕量入る 地肌に径 3cm 未満の礫混入あり
16）黄灰色 2.5Y6/1 シルト

中世包含層（第２-1 層）
17）灰オリーブ色 7.5Y5/2 微砂 ややしまり悪い
18）黄灰色 2.5Y6/1 シルト 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
19）黄灰色 2.5YS/1 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い

中世包含層（第２-2 層）
20）灰色 5Y4/1 微砂～細砂
21）暗灰黄色 2.5Y5/2 微砂 径 1cm 未満の礫多量入る ややしまり悪い
22）灰黄褐色 10YR4/2 細砂～微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る 下位に下層のまじりこみあり
23）オリーブ灰色 2.5GY6/1 シルト
24）灰オリーブ色 7.5Y5/2 粗砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
25）オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
26）暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る 径 2cm 未満の礫下位に流入あり

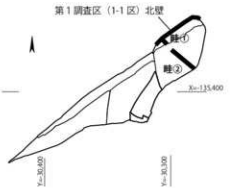
落込み９埋土
27）暗灰黄色 2.5YS/3 細砂まじりシルトに 明黄褐色 10YR6/7 細砂ブロック 10% 程度入る 径 1cm 未満の礫多量入る
28）灰色 5YS/1 細砂に 黄褐色 2.5Y5/6 粗砂筋状に入る 径 0.5cm 未満の礫少量入る
29）黄灰色 2.5YS/1 細砂～粗砂 下位に地山ブロック 10% 程度入る 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
30）黄褐色 2.5YS/4 粗砂まじりシルト 径 2cm 未満の礫少量入る
31）黄灰色 2.5YS/1 細砂まじりシルトに
オリーブ灰色 10Y6/2 細砂ブロック下位に流入 径 0.5cm 未満の礫少量入る

32）灰色 10YR6/1 細砂に 浅黄色 2.5Y7/3 細砂筋状に入る 径 0.5cm 未満の礫少量入る
33）灰色 7.5Y6/1 細砂まじり粘土に オリーブ黒色 5Y3/1 シルトの染込みあり
34）浜オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルトに 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂～粗砂ブロック 30%程度入る

弥生時代以前包含層（第３層）
35）明緑灰色 7.5GY7/1 微砂～シルトに 浜白色 10Y7/2 細砂ブロック 20% 程度入る
ややしまり悪い
36）明緑灰色 10GY7/1 シルトに 10Y7/2 細砂ブロック 20% 程度入る
37）浜白色 7.5Y7/2 細砂 ややしまり悪い
38）浜白色 10Y7/2 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い
39）灰オリーブ色 7.5Y4/2 砂礫 径 3cm 未満の礫多量入る 径 0.5cm 未満の礫筋状に入る
40）暗灰黄色 2.5Y4/2-5/2 細砂～粗砂に灰オリーブ色 7.5Y6/2 細砂筋状に入る 径 0.5cm 未満の礫少量入る
41）灰色 7.5Y6/1 細砂～粗砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る ややしまり悪い

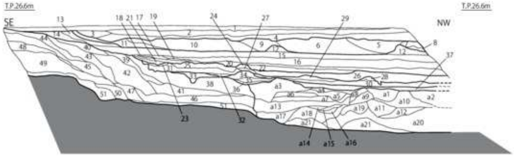
近世以降遺構埋土
a-1）浜オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
a-2）浜オリーブ色 7.5Y5/2 粗砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る
a-3）浜オリーブ色 5Y5/2 粗砂～細砂 径 1cm 未満の礫少量入る
b-1）暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂 径 2cm 未満の礫少量入る
b-2）黄灰色 2.5Y4/1 粗砂～細砂

第１調査区（1-1 区）北壁



第 13 図　調査区断面図（１）

第1調査区（1-5区段上）畦③



現代耕作土
1）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり微砂
2）にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト　径0.5cm未満の礫少量入る
3）黄灰色　2.5Y5/1　粘土質シルト
4）黄灰色　2.5Y6/1　シルトに
黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトブロック10%程度入る

近代包含層（第1層）
5）にぶい黄褐色　10YR4/3　粗砂まじり微砂
径3cm未満の礫少量入る
6）褐色　10YR4/6　細砂〜粗砂　径2cm未満の礫入る
7）褐色　10YR4/4　細砂〜粗砂に
黄灰色　2.5Y6/1　シルトブロック20%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
8）灰色　5Y6/1　シルトに
黄褐色　10YR5/6　シルトブロック20%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
9）暗灰黄色　2.5Y5/2　シルトに
黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトブロック20%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
10）灰色　5Y6/1　シルトに
黄褐色　10YR5/6　シルトブロック20%程度入る
11）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土質シルト〜微砂
径1〜2cmの礫少量入る

近世包含層（第2層）
12）褐灰色　10YR5/1　微砂まじり粘土質シルトに
にぶい黄褐色　10YR5/4　粗砂まじりシルトブロック少量入る（畦埋土）
13）灰色　7.5Y5/1　シルト
14）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂まじり微砂　微砂の流入あり
15）灰色　5Y5/1　細砂〜中砂まじりシルト　径3cm未満の礫少量入る
16）灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト　やや粘性あり
17）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト　径2cm未満の礫少量入る
18）灰白色　5Y7/2　細砂まじりシルト
19）灰色　5Y6/1　細砂まじりシルト　中砂少量入る
20）灰色　5Y4/1-5/1　シルト　径1cm未満の礫微量入る
21）灰色　5Y6/1　細砂〜中砂に　同色シルトブロック入る
22）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルト　やや粘性あり

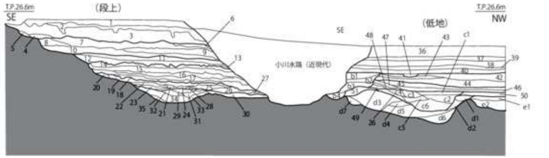
中世包含層（第3層）
23）灰色　N5/0　粘土質シルト　細砂少量入る
24）灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト　やや粘性あり
25）灰色　5Y4/1　細砂まじりシルト〜粘土質シルト
26）灰色　5Y4/1　粘土質シルト　細砂少量入る　径2cm未満の礫微量入る
27）灰色　5Y5/1　シルトに　灰白色　7.5Y7/1　細砂まじりシルトブロック入る
28）灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト〜粘土質シルト　細砂〜中砂少量入る
29）灰色　5Y6/1　粗砂〜細砂に　明青灰色　5BG7/1　粘土質シルトブロック
10%程度入る
30）灰色　5Y4/1　細砂まじりシルト　やや粘性あり　粗砂微量入る
31）灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト　粗砂少量入る
32）灰白色　2.5Y7/1　粗砂　径2cm未満の礫少量入る

中世包含層（第4層）
33）灰白色　5Y7/2　粗砂〜細砂まじりシルト
34）灰色　5Y5/1　シルトに　明緑灰色　7.5GY8/1　粗砂まじりシルトブロック入る
35）黄灰色　2.5Y5/1　粗砂
36）黒褐色　2.5Y3/1　細砂シルト　やや粘性あり
37）灰色　5Y5/1　粗砂まじりシルト　径3cm未満の礫少量入る

弥生時代以前包含層（第5層）
38）灰色　7.5Y5/1　粘土〜細砂まじりシルト　径4cm未満の礫少量入る
39）にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土質シルト　中砂少量入る
40）灰黄色　2.5Y6/2　中砂まじりシルト　径4cm未満の礫多量入る
41）灰色　5Y6/1　細砂まじりシルト　粗砂少量入る
42）明オリーブ灰色　5GY7/1　シルト　径2cm未満の礫少量入る
43）浅黄色　2.5Y7/4　粗砂　径3cm未満の礫微量入る
44）灰色　N7/0　細砂まじりシルト
45）灰白色　2.5GY7/1　粗砂　上位酸化のため黄色化
46）明青灰色　10BG7/1　粘土質細砂シルト
47）灰白色　7.5Y7/1　粗砂　上位酸化のため黄色化
48）灰色　N7/0　粗砂
49）明青灰色　5BG7/1　細砂
50）黄灰色　2.5Y6/1　中砂〜粗砂
51）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルト

流路23埋土
a1）灰色　5Y5/1　細砂シルト　粗砂中量入る
a2）灰色　5Y5/1　細砂シルト　粗砂多量入る
a3）灰白色　5Y7/1　粗砂礫　径3cm未満の礫多量入る
a4）灰色　7.5Y5/1　細砂シルト
a5）灰白色　5Y7/1　粗砂
a6）黄灰色　2.5Y6/1　中砂〜粗砂
a7）灰色　N4/0　細砂シルトに
黒褐色　2.5Y2/1　粘土質シルト筋状に入る　植物遺体多量入る
a8）黒褐色　2.5Y3/1　細砂まじり粘土質シルト
a9）黒色　2.5Y2/1　細砂まじり粘土質シルト　粗砂少量入る
a10）灰色　5Y6/1　粗砂　径2cm未満の礫少量入る
a11）灰白色　7.5Y7/2　細砂〜中砂　一部シルト質化
a12）灰色　5Y6/1　細砂〜中砂　一部シルト質化
a13）灰色　7.5Y5/1　粗砂〜細砂　一部シルト質化
a14）黒色　2.5Y2/1　細砂まじりシルト
a15）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじりシルト
a16）灰白色　5Y7/2　細砂まじりシルト
a17）灰色　5Y6/1　粗砂　径3cm未満の礫少量入る
a18）灰色　5Y5/1　細砂〜粗砂　径4cm未満の礫多量入る
a19）灰色　7.5Y6/1　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫微量入る
a20）灰色　5Y6/1　粗砂　径1cm未満の礫多量入る
a21）灰色　7.5Y6/1　粗砂　径2cm未満の礫多量入る

第1調査区（1-5区）畦④



現代耕作土
1）黄褐色　2.5Y5/4　粘土まじり微砂　径2cm未満の礫少量入る
2）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土まじり微砂　径2cm未満の礫少量入る
3）明黄褐色　2.5Y7/6　粘土まじり粗砂　径3cm未満の礫入る
4）黄灰色　2.5Y6/1　シルトまじり細砂　径3cm未満の礫少量入る
5）灰白色　7.5Y7/2　シルトまじり微砂　酸化鉄斑沈着

近代包含層（段上第1層）
6）黄灰色　2.5Y6/1　シルトに　明黄褐色　2.5Y7/6　シルト入る
径1cm未満の礫少量入る
7）灰色　10Y6/1　微砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る
8）灰オリーブ色　5Y6/2　シルトに
灰色　5Y6/1　シルトまじり細砂　径1cm未満の礫少量入る
9）灰白色　7.5Y7/1　粘土まじり細砂　径1cm未満の礫少量入る
10）黄灰色　2.5Y6/1　微砂まじりシルト　径1cm未満の礫微量入る

近世包含層（段上第2層）
11）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫微量入る
12）灰色　5Y5/1　粘土　酸化鉄斑沈着

中世包含層（段上第3層）
13）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂〜粗砂
14）灰色　5Y5/1　粗砂まじりシルト
15）灰色　5Y5/1　粗砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫微量入る
16）灰色　5Y5/1　細砂まじり粘土　径0.5cm未満の礫微量入る
17）灰色　5Y5/1　粘土　下位に18）層ブロック少量入る
18）灰色　5Y6/1　粗砂まじり細砂

中世包含層（段上第4層）
19）黄灰色　2.5Y6/1　細砂〜粗砂　径0.5cm未満の礫微量入る
20）黄灰色　2.5Y6/1　細砂に
明緑灰色　10GY7/1　粘土（地山）ブロック入る
21）暗灰黄色　2.5Y5/2　シルトまじり細砂
22）灰色　10Y6/1　細砂に
明緑灰色　10GY7/1　粘土（地山）ブロック入る
23）黄灰色　2.5Y6/1　細砂〜粗砂
24）黄灰色　2.5Y4/1　粘土
25）灰色　5Y6/1　粗砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫微量入る
26）灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
27）灰色　5Y4/1　微砂〜細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
28）灰色　5Y5/1　シルトまじり細砂

縄文時代以前堆積層
29）灰色　5Y6/1　粗砂まじりシルトに
明緑灰色　10GY7/1　粘土（地山）ブロック少量入る
30）黄灰色　2.5Y5/1　シルトまじり細砂
31）黄灰色　2.5Y6/1　微砂まじり粗砂
32）灰色　5Y4/1　粘土　埋没樹木の繁茂あり
33）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり微砂に
暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂の流入あり　径2cm未満の礫入る
34）黄灰色　2.5Y6/1　砂礫　径3cm未満の礫多量入る
35）黄灰色　2.5Y4/1　粘土

近現代耕作土
36）褐灰色　7.5YR4/1　微砂まじり粘土質シルト
37）暗灰黄色　10YR5/2　微砂まじり粘土質シルト
38）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト
39）暗灰黄色　2.5Y4/2　微砂まじり粘土質シルト
40）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト
径2cm未満の礫微量入る
41）暗灰黄色　2.5Y5/2　微砂まじり粘土質シルト

近世包含層（低地第1層）
42）灰オリーブ色　7.5Y4/2　微砂まじり粘土質シルト
43）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト
44）灰オリーブ色　5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト

中世包含層（低地第2層）
45）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト
46）黄灰色　2.5Y5/1　細砂に
浅黄色　2.5Y7/3　細砂ラミナを伴って流入（洪水砂）
47）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルト
48）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト　粗砂多量入る
49）黄灰色　2.5Y5/1　シルトまじり細砂に
浅黄色　2.5Y7/4　中砂入る（畦畔埋土？）

中世包含層（低地第3層）
50）灰色　7.5Y4/1　微砂まじりシルト　粗砂多量入る
51）浅黄色　2.5Y7/3　中砂に
黄灰色　2.5Y5/1　シルトまじり微砂入る（畦畔埋土？）

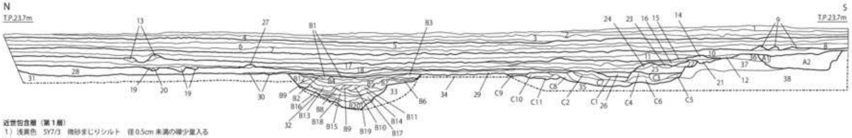
水路2埋土
b1）浅黄色　5Y7/3　粗砂
b2）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂に　b3）層ブロック微量入る
b3）暗灰黄色　2.5Y5/2　中砂に
粘土質シルトブロック微量入る
b4）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂

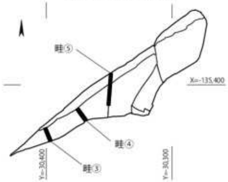
溝3埋土
c1）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂に　c3）層ブロック少量入る
c2）灰黄色　2.5Y7/2　粗砂に　c3）層ブロック少量入る
c3）オリーブ黒色　5Y3/2　微砂まじりシルト
粗砂の流入あり
c4）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂に　c3）層ブロック微量入る
c5）灰オリーブ色　5Y6/2　粗砂に　c3）層ブロック入る
下位に　灰色　5Y5/1　シルトまじり微砂の流入あり
c6）灰色　5Y8/1　粗砂　径2cm未満の礫多量入る

溝10埋土
d1）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルト
d2）灰色　5Y5/1　シルトまじり微砂
d3）黄灰色　2.5Y5/1　粗砂
下位に径3cm未満の礫多量入る
d4）灰色　5Y5/1　微砂〜粗砂
d5）灰色　5Y6/1　細砂　同色シルトブロック微量入る
d6）灰色　5Y7/2　粗砂　下位に径3cm未満の礫多量入る
d7）灰色　5Y7/2　粗砂に
緑灰色　10GY6/1　粘土（地山）ブロック少量入る

流路20埋土
e1）灰色　5Y4/1　粗砂〜微砂まじりシルト
e2）灰白色　5Y7/2　粗砂と
オリーブ黒色　5Y3/1　シルトの互層

第1調査区（1-5区・1-6区）畦⑤





近世包含層（第1層）
1）浅黄色　5Y7/3　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
2）灰色　7.5Y4/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
3）灰色　7.5Y5/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
4）灰色　10Y5/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る

中世包含層（第2層）
5）灰色　7.5Y4/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
6）灰色　10Y4/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
7）灰色　5Y4/1　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
8）浅黄色　2.5Y7/3　粗砂

中世包含層（第3層）
9）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト
10）灰オリーブ色　7.5Y4/2　細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
11）オリーブ灰色　10Y4/2　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
12）黄褐色　2.5Y5/3　シルトまじり細砂
13）オリーブ灰色　10Y4/2　細砂まじりシルト
14）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト
15）浅黄色　2.5Y7/3　粗砂
16）灰オリーブ色　5Y6/2　粗砂　径0.5cm未満の礫少量入る
17）灰色　7.5Y4/2　微砂まじりシルト
18）灰色　7.5Y4/3　微砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫少量入る
19）オリーブ黒色　5Y3/1　シルトまじり細砂
20）灰色　7.5Y5/1　中砂に　19）層筋状に入る
21）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂　径2cm未満の礫少量入る
22）黄褐色　2.5Y5/3　細砂に　暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト筋状に入る
23）浅黄色　7.5Y7/3　粗砂
24）黄灰色　2.5Y4/1　微砂
25）黄灰色　2.5Y4/1　中砂と　灰黄色　2.5Y7/2　粗砂の互層

溝10埋土
A1）黄灰色　2.5Y5/1　微砂〜細砂
A2）灰黄色　2.5Y7/2　粗砂　径3cm未満の礫少量入る

中世包含層（第4層）
26）黒褐色　2.5Y3/1　細砂まじりシルト
27）オリーブ黒色　7.5Y3/1　粗砂まじりシルト
28）黒色　2.5Y3/1　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫少量入る
29）黒褐色　2.5Y3/1　シルトまじり細砂　径2cm未満の礫少量入る
30）オリーブ黒色　5Y3/1　シルトまじり細砂

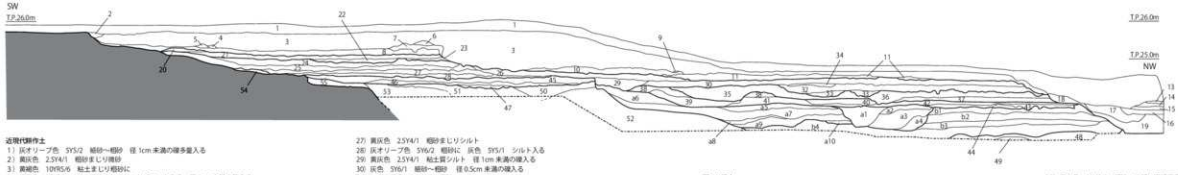
弥生時代以前包含層（第5層）
31）灰オリーブ色　5Y5/3　粗砂
32）灰オリーブ色　5Y5/2　粗砂　径1cm未満の礫多量入る
33）灰白色　5Y7/2　砂礫　径3cm未満の礫多量入る
34）灰オリーブ色　5Y6/2　シルトまじり細砂
35）灰黄色　2.5Y7/2　粗砂　径2cm未満の礫少量入る
36）オリーブ黄色　5Y6/3　微砂まじりシルト
37）灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂まじりシルト
38）灰白色　5Y7/1　粗砂　径2cm未満の礫少量入る

流路17埋土
B1）黒褐色　2.5Y3/1　シルトまじり細砂に　灰黄色　2.5Y6/2　中砂筋状に入る
B2）にぶい黄色　2.5Y6/3　中砂と　黒褐色　2.5Y5/2　微砂の互層
B3）灰白色　5Y7/1　細砂
B4）黒色　7.5Y2/1　微砂まじりシルト　植物遺体多量入る
B5）オリーブ黒色　5Y3/1　シルトまじり微砂　植物遺体多量入る
B6）灰白色　7.5Y7/1　細砂　径3cm未満の礫少量入る
B7）黒褐色　2.5Y3/1　微砂
B8）黒褐色　2.5Y3/2　シルトまじり細砂
B9）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじりシルト
B10）黒色　2.5Y2/1　微砂まじりシルト
B11）黒褐色　2.5Y3/1　シルトと　灰黄色　2.5Y6/2　粗砂の互層
B12）灰オリーブ色　5Y5/2　中砂
B13）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトまじり中砂
B14）黄灰色　2.5Y4/1　微砂に　灰白色　2.5Y7/1　細砂筋状に入る
B15）オリーブ黒色　5Y3/1　シルトまじり細砂
B16）黄灰色　5Y4/2　微砂まじりシルト
B17）灰色　5Y4/1　中砂〜細砂
B18）灰色　5Y4/1　粗砂〜細砂
B19）オリーブ黄色　5Y6/3　粗砂
B20）オリーブ黒色　5Y3/1　微砂〜細砂　植物遺体多量入る

流路15・16埋土
C1）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂
C2）オリーブ黒色　5Y3/2　細砂と　灰白色　2.5Y7/1　細砂筋状に入る
C3）灰黄色　7.5Y7/2　粗砂　径5cm未満の礫少量入る
C4）灰黄色　7.5Y6/2　細砂〜粗砂
C5）にぶい黄色　2.5Y6/3　微砂まじりシルト
C6）黒褐色　2.5Y3/1　シルトまじり微砂
C7）灰黄色　2.5Y7/2　微砂まじりシルト　径3cm未満の礫少量入る
C8）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂
C9）黒色　5Y2/1　微砂まじりシルト　植物遺体多量入る
C10）灰黄色　2.5Y7/2　微砂まじりシルト　径3cm未満の礫少量入る
C11）黒褐色　2.5Y4/1　微砂まじりシルト

第14図　調査区断面図（2）

第 1 調査区（1-5 区）北西壁



近現代耕作土
1）灰オリーブ色 5Y5/2 細砂～粗砂 径 1cm 未満の礫多量入る
2）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり細砂
3）黒褐色 10YR5/6 粘土まじり細砂に
細灰色 10YR5/1-6/1 粗砂まじりシルトブロック入る 径 2cm 未満の礫入る
4）細灰色 10YR5/1 細砂～細砂に
褐色 7.5YR4/4 細砂まじり細砂ブロック入る 径 1cm 未満の礫少量入る
5）黄灰色 2.5Y5/1 シルトに
黒褐色 10YR5/6 細砂まじりシルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
6）灰色 5Y5/1 細砂まじり粘土質シルト 径 3cm 未満の礫入る
7）黄灰色 2.5Y5/1 細砂まじりシルト 径 2cm 未満の礫入る
8）灰色 5Y5/1 細砂まじり細砂 径 4cm 未満の礫入る
9）灰色 10YR4/1 粘土質シルト 径 0.5cm 未満の礫少量入る
10）灰色 5Y4/1 粗砂まじりシルト 径 3cm 未満の礫入る
11）灰色 10Y5/1 粘土～粘土質シルト 粗砂少量入る
12）灰白色 5Y7/1 細砂に 炭オリーブ 5Y6/2 細砂混入あり
13）黒褐色 2.5Y3/1 微砂まじり粘土質シルト 炭色 5Y5/1 粗砂 径 1cm 未満の礫入る
14）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり細砂 径 0.5cm 未満の礫入る
15）オリーブ黒色 5Y3/1 灰色 5Y4/1 細砂まじり細砂 径 2cm 未満の礫微量入る
16）灰色 5Y5/1-6/1 細砂～細砂 部分的に 黒褐色 2.5Y3/1 粗砂まじり粘土質
シルトの混入あり 径 4cm の礫 径 0.5cm 未満の礫入る
17）灰オリーブ色 5Y6/2 細砂まじり細砂に 黒褐色 2.5Y3/2 微砂ブロック 15%程度入る
18）灰色 10YR5/1 シルトまじり粘土
19）灰オリーブ色 5Y6/2 細砂まじり細砂 径 1cm 未満の礫微量入る

近世包含層（第 1 層）
20）灰色 5Y4/1 粘土質シルト 径 cm 未満の礫少量入る
21）暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂まじり微砂 径 3cm 未満の礫少量入る
22）灰色 5Y5/1 径 1cm 未満の礫入る
23）暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂 径 1cm 未満の礫入る
24）灰色 10Y5/1 微砂
25）灰黄褐色 10YR4/2 細砂まじり粗砂 径 1cm 未満の礫多量入る
26）黄灰色 7.5Y5/1 細砂まじり粘土質シルト
27）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
28）灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂に 灰色 5Y5/1 シルト入る
29）黄灰色 2.5Y4/1 粘土質シルト 径 1cm 未満の礫入る
30）灰色 5Y6/1 細砂～粗砂 径 0.5cm 未満の礫入る
31）にぶい黄色 2.5Y6/3 細砂
32）灰色 5Y4/1-5/1 粘土質シルト～微砂
灰白色 5Y7/2 細砂～微砂 30%程度入る
33）灰色 5Y6/1 砂礫に 橙色 7.5YR6/4 砂礫 30%程度入る
径 2cm 未満の礫多量入る
34）黒褐色 2.5Y3/2 細砂

中世包含層（第 2 層）
35）灰色 5Y5/1 細砂まじり粘土質シルト 径 1cm 未満の礫微量入る
36）暗灰黄色 2.5Y5/2 シルト
下位に 灰白色 2.5Y7/2 粗砂 径 0.5cm 未満の礫入る
37）灰白色 5Y7/2 細砂 ほぼ均質

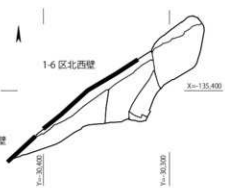
中世包含層（第 3 層）
38）黒褐色 2.5Y3/2 細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
39）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり粘土質シルト～微砂 径 2cm 未満の礫入る
40）暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂に
灰色 5Y5/1 細砂ブロック入る 径 2cm 未満の礫多量入る
41）灰白色 5Y7/2 細砂まじり細砂
下位に 灰色 10YR4/1 微砂の混入あり 径 1cm 未満の礫入る 弱いラミナあり
42）灰色 5Y4/1-5/1 粘土に 灰色 5Y5/1-6/1 細砂～細砂 部分的に入る
43）灰色 5Y6/1 微砂
44）灰色 10Y4/1-5/1 シルト～微砂
45）灰オリーブ色 5Y5/1-4/1 シルト～微砂に
暗灰黄色 2.5Y4/1 粗砂が 10%程度入る
46）灰オリーブ色 10Y6/2 粗砂まじり微砂に
灰オリーブ色 5Y5/2 細砂まじり微砂 15%程度入る 径 1cm 未満の礫少量入る
47）橙色 7.5YR6/6 粗砂に 灰色 2.5Y5/1 細砂 20%程度入る
径 2cm 未満の礫多量入る

黒 11 埋土
a1）灰オリーブ色 5Y6/2 粗砂に 灰色 5Y5/1 細砂まじりシルトブロック入る
a2）灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト
a3）灰色 5Y5/1 シルト
a4）灰オリーブ色 7.5Y6/2 細砂まじり細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
a5）灰色 5Y5/1 細砂まじり細砂 径 1cm 未満の礫少量入る
a6）黄灰色 2.5Y5/1 微砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
a7）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり粘土質シルト
a8）灰白色 5Y7/2 細砂まじり細砂 下位に 灰色 10Y9/4/1
微砂の混入あり 径 1cm 未満の礫入る 弱いラミナあり
a9）暗灰黄色 2.5Y5/2 細砂まじり細砂 一部に粘土質シルトの混入あり
径 0.5cm 未満の礫少量入る 植物遺体少量入る
a10）オリーブ黒色 5Y3/2 粗砂まじりシルト 植物遺体多量入る

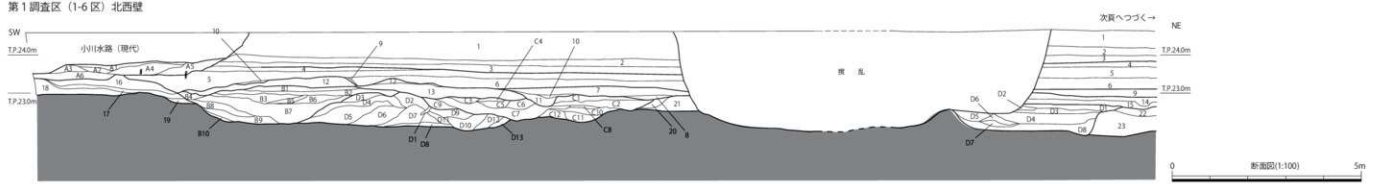
流路 23 埋土
b1）灰オリーブ色 7.5Y6/2 細砂まじり細砂
b2）灰白色 5Y7/1 細砂に 灰色 10Y4/1 微砂混入あり 弱いラミナあり
b3）灰色 5Y5/1-6/1 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫微量入る
b4）灰色 10Y4/1-5/1 シルト

弥生時代以前相当層（第 5 層）
48）灰色 5Y6/1 粗砂 同色粘土質シルトの混入あり 径 2cm 未満の礫多量入る
49）灰色 10Y5/1 微砂～細砂 径 0.5cm 未満の礫少量入る
50）灰色 5Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト
51）灰色 7.5Y6/1 細砂まじり微砂

52）灰白色 10Y7/2 細砂 微細に明緑灰色 7.5GY7/1 シルトの混入あり
53）灰色 5Y5/1 粘土質シルト 径 3cm 未満の礫少量入る
54）オリーブ黒色 2.5Y4/3 細砂まじり細砂 径 1cm 未満の礫多量入る
灰白色 10Y7/2 微砂上位に混入あり
55）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじり粘土質シルト



第 1 調査区（1-6 区）北西壁



近現代耕作土
1）黒褐色 10YR3/2 細砂まじりシルト
2）灰色 5Y6/1 粗砂～砂礫 径 5cm 未満の礫多量入る
3）灰色 5Y5/1 シルトまじり粗砂

近世包含層（第 1 層）
4）黄灰色 2.5Y4/1 シルトまじり粗砂 径 2cm 未満の礫少量入る
5）黄灰色 2.5Y5/1 細砂まじり粘土質シルト
6）灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト 炭分注着

中世包含層（第 2 層）
7）黄灰色 2.5Y5/1 細砂まじりシルト
8）灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト
9）灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
10）灰色 N6/0 細砂まじり粘土質シルト
11）黄灰色 2.5Y5/1 粘土質シルト

中世包含層（第 3 層）
12）灰色 7.5Y6/1 シルトまじり細砂
13）黒褐色 10YR3/2 細砂 径 1cm未満の礫入る
14）暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂～粗砂 径4cm未満の礫入る
15）黄灰色 2.5Y6/1 細砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る

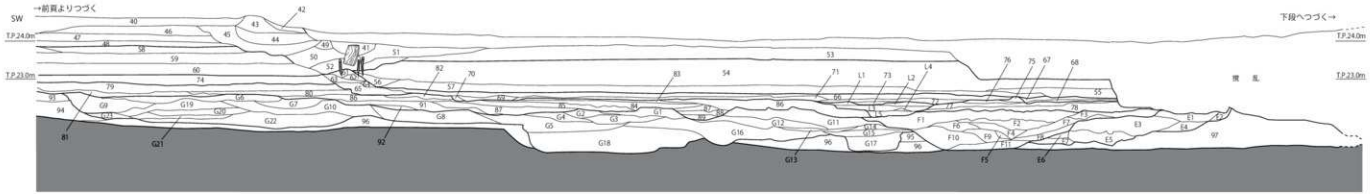
弥生時代以前包含層（第 5 層）
16）灰白色 10Y7/2 細砂 微部に明緑灰色 7.5GY7/1 シルト の混入あり
17）灰色 5Y5/1 シルト 径 3cm 未満の礫少量入る
18）オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじり細砂 径 1cm 未満の礫多量入る
灰白色 10Y7/2 微砂上位に混入あり
19）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
20）灰オリーブ色 7.5Y6/2 シルト～細砂
21）明緑灰色 7.5GY7/1 微砂まじりシルト 炭化物少量入る
22）緑灰色 10GY6/1 粘土質シルト 炭化物入る
23）にぶい黄色 2.5Y6/3 細砂～細砂 径7cm未満の礫入る

水路 2 下層埋土
A1）黄灰色 2.5Y5/1 シルトまじり細砂
A2）灰白色 2.5Y7/1 微砂～細砂 径 5cm 未満の礫多量入る
A3）灰白色 2.5Y7/2 微砂～細砂 径 5cm 未満の礫少量入る
A4）灰白色 2.5Y7/1 微砂～細砂 径 4cm 未満の礫多量入る
A5）黄灰色 2.5Y5/1 中砂～細砂
A6）黄灰色 2.5Y5/2 中砂～細砂 径 5cm 未満の礫少量入る

流路 23 埋土
B1）灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト
B2）灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト
B3）黄灰色 2.5Y5/1 細砂まじりシルトに
黒色 2.5Y5/1 細砂まじりシルトブロック入る
B4）灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト 径 4cm 未満の礫少量入る
B5）黄灰色 2.5Y6/1 粗砂
B6）灰色 10Y6/1 細砂まじりシルト
B7）灰色 7.5Y5/1 中砂～細砂
B8）灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト
B9）灰色 5Y6/1 シルトまじり細砂
B10）灰色 5Y4/1 シルトまじり細砂～微砂
C1）灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト
C2）黄灰色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト 径 3cm 未満の礫少量入る
C3）灰色 5Y5/1 微砂～細砂 径 1cm 未満の礫多量入る
C4）灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 径 2cm 未満の礫多量入る
C5）灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る
C6）オリーブ黒色 5Y3/1 細砂まじりシルト
径 1cm 未満の礫多量入る
C7）灰白色 5Y7/1 細砂まじりシルト 径 5cm 未満の礫多量入る
C8）灰色 5Y5/1 粗砂～細砂
C9）灰色 7.5Y6/1 細砂～中砂 径 2cm 未満の礫少量入る
C10）灰色 7.5Y4/1 細砂まじりシルト
C11）灰色 5Y5/1 細砂～細砂
C12）黄灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト
D1）灰色 5Y4/1 微砂～細砂 径 4cm 未満の礫少量入る
D2）灰色 5Y4/1 細砂まじりシルト 径 4cm 未満の礫少量入る
D3）灰白色 7.5Y7/1 灰白色 細砂
D4）灰色 5Y5/1 微砂～細砂
D5）灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト
D6）灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト
D7）灰色 5Y5/1 微砂～細砂まじりシルト
D8）灰色 2.5Y6/1 微砂～細砂まじりシルト
D9）黒色 5Y2/1 微砂～細砂まじりシルト
D10）灰色 5Y5/1 中砂～シルト
D11）灰色 10Y5/1 細砂まじりシルト
D12）灰色 5Y5/1 細砂まじりシルト 下位粗粒化
D13）灰色 5Y6/1 細砂まじりシルト 径 1cm 未満の礫少量入る

流路 19 埋土
D1）オリーブ黒色 5Y3/2 微砂 径0.5cm未満の礫微量入る
D2）黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじり微砂 水平方向の細いラミナあり
D3）黒褐色 2.5Y3/2 微砂
D4）黄灰色 2.5Y4/1 砂礫 径3cm未満の礫多量入る
D5）黒褐色 2.5Y3/1 微砂
D6）黄灰色 2.5Y4/1 微砂～細砂まじりシルト
D7）浅黄色 5Y 7/3 砂礫 径3cm未満の礫多量入る
D8）黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり微砂

第 15 図　調査区断面図（3）



近世代耕作土・撹乱
40　黒褐色　10YR3/2　細砂まじりシルト
41　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径4cm未満の礫入る
42　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径1cm未満の礫入る
43　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　細砂　径1cm未満の礫入る
44　オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂～細砂　径2cm未満の礫入る
45　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径2cm未満の礫入る
46　黒褐色　10YR3/1　細砂　径4cm未満の礫入る
47　灰黄褐色　10YR4/2　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
48　灰黄褐色　10YR4/2　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
49　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂　径 1cm 未満の礫入る
50　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂に　灰色　7.5Y6/1　細砂入る
　径3cm未満の礫入る
51　黒褐色　2.5Y3/1　細砂～細砂　径3cm未満の礫入る
52　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂に　灰オリーブ色　5Y6/2　細砂入る
　径3cm未満の礫入る
53　暗灰黄色　10YR4/1　細砂～細砂　径2cm未満の礫入る

近世包含層（第1層）
54　暗灰色　10YR4/1　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
55　黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじりシルト
56　灰オリーブ色　7.5Y6/2　細砂
57　灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
58　灰黄褐色　10YR4/2　微砂まじりシルト

59　黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじりシルトに
　にぶい黄色　2.5Y6/3　微砂まじりシルト入る
60　浅黄色　2.5Y7/3　細砂～細砂　径4cm未満の礫入る

中世包含層（第2層）
61　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト～細砂
62　灰黄色　2.5Y6/2　細砂
63　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径4cm未満の礫入る
64　灰オリーブ色　7.5Y6/2　粘土質シルト～微砂
65　黒褐色　10YR3/1　細砂に　粘土ブロック入る
66　灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
67　暗灰黄色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
68　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
69　灰色　5Y5/1～4/1　細砂～粗砂に　粘土ブロック入る
70　黄灰色　2.5Y5/1　細砂に　灰黄色　2.5Y7/2　微砂～細砂入る
71　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂
72　灰白色　5Y7/2　細砂まじりシルト
73　灰黄色　2.5Y7/2　微砂まじりシルト
74　黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじりシルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂入る

中世包含層（第3層）
75　青灰色　5BG6/1　シルトに　粘土質細砂入る　径1cm未満の礫入る
76　黄灰色　2.5Y6/1　細砂まじりシルト
77　白色色　2.5Y7/1　細砂～細砂　径5cm未満の礫多量入る

78　灰白色　5Y7/2　細砂に　明黄褐色　10YR6/6　細砂入る
79　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　微砂～細砂まじりシルト
80　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径2cm未満の礫入る
81　黒褐色　2.5Y3/2　微砂～細砂シルト
82　暗灰黄色　2.5Y4/2　微砂まじりシルト
83　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～細砂まじりシルトに
　灰黄色　2.5Y7/2　微砂～細砂入る
84　緑灰色　7.5GY6/1　粘土に
　灰オリーブ色　7.5Y6/2　粘土質シルトブロック入る
85　黒褐色　2.5Y5/3　細砂　径1cm未満の礫入る
86　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　微砂～細砂シルト
87　灰オリーブ色　5Y6/2　細砂～細砂　径2cm未満の礫入る
88　黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト
89　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径4cm未満の礫入る
90　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径1cm未満の礫入る
91　黄灰色　2.5Y5/1　細砂　径1cm未満の礫入る
92　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径1cm未満の礫入る

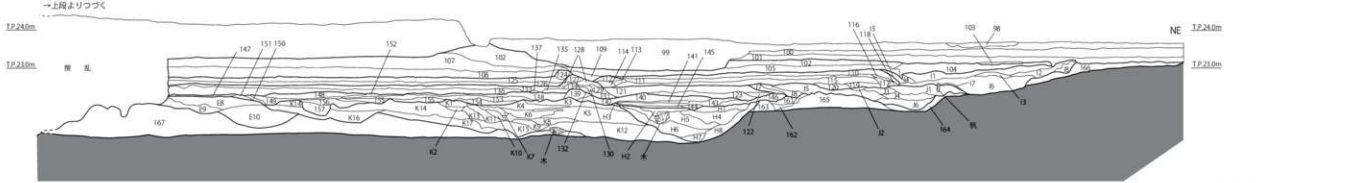
弥生時代以前包含層（第5層）
93　灰色　5Y6/1　微砂まじりシルト
94　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂　径7cm未満の礫入る
95　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径3cm未満の礫入る
96　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂　径4cm未満の礫入る
97　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂

溝7埋土
L1）灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじりシルト
L2）オリーブ灰色　2.5GY6/1　微砂まじりシルト
L3）灰白色　5Y7/1　細砂～細砂
L4）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト
L5）灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじりシルト

溝8 22 埋土
E1）黒色　10YR2/1　微砂まじりシルト
E2）黒褐色　2.5Y3/2　微砂シルト
E3）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径5cm未満の礫入る
E4）褐灰色　10YR4/1　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
E5）緑灰色　10GY6/1　粘土～粘土質シルト　植物遺体入る
E6）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂　径1cm未満の礫入る
E7）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径2cm未満の礫入る

溝8 19 埋土
F1）灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじり粘土質シルト
F2）黒灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土質シルト
F3）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂まじりシルト　径1cm未満の礫入る
F4）黄褐色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト　径2cm未満の礫入る　ラミナあり
F5）黄褐色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト径1cm未満の礫入る　ラミナあり
F6）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルト
F7）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径0.5cm未満の礫入る　斜め方向のラミナあり
F8）黒褐色　2.5Y3/2　細砂　2cm未満の礫入る　斜め方向のラミナあり
F9）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～細砂　ラミナあり
F10）黒褐色　2.5Y3/2　細砂　2cm未満の礫入る　斜め方向のラミナあり
F11）黒褐色　2.5Y3/2　細砂と　灰黄色　2.5Y6/2　細砂の互層

溝8 17・18 埋土
G1）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂に
　灰黄色　2.5Y6/2　シルトブロック入る
G2）暗灰黄色　2.5Y4/1　細砂　径1cm未満の礫入る
G3）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径1cm未満の礫入る
G4）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径1cm未満の礫入る
G5）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径1cm未満の礫入る
G6）灰黄色　2.5Y7/2　細砂～細砂シルト
G7）オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
G8）オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂～細砂と
　灰黄色　2.5Y7/2　細砂～細砂シルトの互層
G9）灰色　5Y5/1　細砂まじり粘土質シルト
G10）黄灰色　2.5Y4/1　礫砂
G11）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト
G12）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径1cm未満の礫入る　ラミナあり
G13）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
G14）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト　径2cmの礫入る
G15）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土質シルトに
　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂の流入あり
G16）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径0.5cm未満の礫入る
G17）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
G18）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　ラミナあり
G19）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂
G20）黒褐色　2.5Y3/3　微砂まじりシルト
G21）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂　径4cm未満の礫入る
G22）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじりシルト
G23）黄灰色　2.5Y4/1　微砂シルトと　灰黄色　2.5Y7/2　細砂～粗砂の互層



現代耕作土・撹乱
98　黒褐色　10YR3/2　細砂まじりシルト
99　灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト　径 1cm の礫入る
100　灰黄色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト　径 1cm の礫入る
101　黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト

近世包含層（第1層）
102　灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト
103　黄灰色　2.5Y6/1　細砂まじりシルト
104　灰白色　5Y7/2　細砂まじりシルト
105　灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじりシルト
106　灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト
107　黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト
108　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径 4cm 未満の礫入る
109　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る

中世包含層（第2層）
110　灰色　5Y5/1　細砂まじりシルト
111　暗灰褐色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト
112　黒褐色　2.5Y5/3　細砂　径 1cm 未満の礫入る
113　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る
114　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る
115　黒褐色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト　径2cm 未満の礫入る
116　灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじり粘土質シルト
117　灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土質シルト

118　黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルト
119　黒褐色　2.5Y5/3　細砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫入る
120　灰色　5Y5/1　微砂まじりシルト

中世包含層（第3層）
121　暗灰黄色　2.5Y4/1　細砂　径 1cm 未満の礫入る
122　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る
123　オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂～細砂　径2cm 未満の礫入る
124　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂　径 1cm 未満の礫入る
125　緑灰色　10GY6/1　粘土まじりシルト
126　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径2cm の礫入る
127　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る
128　黄灰色　2.5Y5/1　細砂　径 1cm 未満の礫入る
129　オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂～細砂　径 1cm 未満の礫入る
130　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂
131　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫入る
132　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径 1cm 未満の礫入る
133　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径2cm 未満の礫入る
134　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　細砂　径 1cm 未満の礫入る
135　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径 4cm 未満の礫入る
136　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径 4cm 未満の礫入る
137　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径 4cm 未満の礫入る

中世包含層（第4層）
138　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～粗砂　径 3cm 未満の礫入る

139　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂に
　灰色　7.5Y6/1　微砂混じりによる　径 1～3cm の礫入る
140　黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径2cm 未満の礫入る
141　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂
142　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂　径 3cm 未満の礫入る
143　黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂　径 4cm 未満の礫入る
144　黒褐色　10YR3/1　細砂と粘土の互層
145　黒褐色　2.5Y3/1　細砂～細砂　1cm 未満の礫入る
146　灰オリーブ色　7.5Y6/2　細砂
147　褐灰色　10YR4/1　細砂～細砂　径2cm 未満の礫入る
148　灰黄色　2.5Y6/2　細砂　径1cm未満の礫入る
149　黒褐色　10YR3/1　粘土質シルト～微砂
150　灰黄褐色　10YR4/2　細砂
151　黒褐色　2.5Y3/2　細砂
152　黒褐色　10YR3/1　細砂　径 4cm 未満の礫入る
153　灰黄褐色　10YR4/2　細砂～細砂　1cm 未満の礫入る
154　灰黄褐色　10YR4/2　微砂まじりシルト
155　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　微砂～細砂シルト
156　褐灰色　10YR4/1　細砂～細砂　径1cm未満の礫入る
157　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂シルトに
　黄灰色　2.5Y5/1　細砂シルト筋状に入る

弥生時代以前包含層（第5層）
161　暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト
162　灰黄色　2.5Y6/2　細砂

163）灰オリーブ色　7.5Y6/2　粘土質シルト～微砂
164）明緑灰色　7.5GY7/1　微砂まじりシルト
165）緑灰色　10GY6/1　粘土～粘土質シルト　植物遺体入る
166）青灰色　5BG6/1　粘土質シルト　径 1cm 未満の礫入る
167）浅黄色　2.5Y7/3　細砂～細砂に
　明黄褐色　10YR6/6　細砂～粗砂筋状に入る　8cm未満の礫入る

溝8 22 埋土
E8）暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルトに　細砂～粗砂の流入あり
　径3cm未満の礫入る
E9）灰オリーブ色　5Y5/2　微砂まじりシルト
E10）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～中砂

溝9 埋土
H1）黒褐色　2.5Y3/2　細砂　径2cm 未満の礫入る
H2）黒褐色　10YR3/1　微砂まじりシルト
H3）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト
H4）灰オリーブ色　7.5Y6/2　細砂～粗砂の互層
H5）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫入る
H6）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～細砂まじりシルトに
　灰黄色　2.5Y7/2　微砂～細砂筋状に入る
H7）緑灰色　7.5GY6/1　粘土と
　灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂～シルトの互層
H8）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂～細砂　径 3cm 未満の礫入る

溝2 埋土
I1）灰黄色　2.5Y7/2　微砂まじりシルト
I2）灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじりシルト
I3）灰白色　5Y7/1　細砂～細砂
I4）灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじりシルト
I5）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト
I6）灰白色　2.5Y7/1　細砂～細砂　径 5cm 未満の礫多量入る
I7）灰黄色　2.5Y7/2　細砂～細砂
I8）オリーブ灰色　2.5GY6/1　微砂まじりシルト

溝4 埋土
J1）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂に
　灰黄色　2.5Y6/2　細砂～細砂の流入あり
J2）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト
　径2cm 未満の礫入る
J3）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～細砂　径1cm 未満の礫入る
J4）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土と
　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂まじりシルトの互層
J5）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～細砂　径 1cm 未満の礫入る
J6）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径 4cm 未満の礫入る
J7）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径0.5cm 未満の礫入る
J8）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト

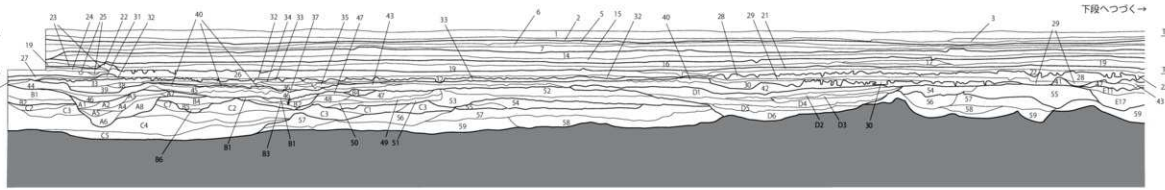
溝8 13 埋土
K1）黒褐色　2.5Y3/2　微砂～細砂まじりシルト
K2）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂
K3）灰黄褐色　10YR4/2　細砂～細砂
　径 1cm 未満の礫入る
K4）黒褐色　2.5Y3/2　微砂シルトに
　にぶい黄色　2.5Y6/3　微砂シルトブロック入る
K5）浅黄色　2.5Y7/3　細砂～細砂
　径 4cm 未満の礫入る
K6）黒褐色　2.5Y3/2　微砂シルトに
　灰黄色　2.5Y7/2　細砂混じりによる
K7）暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　微砂～細砂シルト
K8）灰黄色　2.5Y7/2　微砂～細砂シルト
K9）黒褐色　2.5Y3/1　微砂シルト
K10）黒色　2.5Y4/1　微砂シルトと
　灰黄色　2.5Y7/2　細砂～粗砂の互層
　径 5cm 未満の礫入る
K11）灰色　5Y6/1　微砂シルト
K12）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂
　径 4.5cm 未満の礫入る
K13）黒灰色　2.5Y4/1　微砂まじりシルト
K14）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～細砂
　径4cm未満の礫入る
K15）灰黄色　2.5Y6/2　細砂　径1cm未満の礫入る

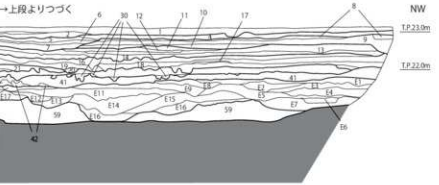
地山）明緑灰色　7.5GY7/1　微砂まじりシルト

0　　5m
断面図(1:100)

第16図　調査区断面図（4）

第２調査区（2-1 区）南壁





近現代耕作土
1）黒褐色　10YR3/1　表土　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫中量入る　やや軟質　しまり悪い
2）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルト　上位に鉄分沈着　しまり悪い
3）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト　鉄斑沈着　径 2cm 未満の礫入る　しまり悪い

近世包含層（第１層）
4）黄灰色　2.5Y4/1　粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 10% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
5）にぶい黄褐色　10YR4/3　細砂まじりシルト　鉄斑沈着　径 2cm 未満の礫少量入る　やや しまる
6）にぶい黄褐色　10YR4/2　細砂まじりシルト　上面に細砂の流入あり
7）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト　鉄斑沈着　径 2cm 未満の礫　少量入る　やや しまる
8）灰黄色　2.5Y7/2　細砂～細砂に　黄灰色　2.5Y5/2　砂質シルトブロック 40% 程度入る
　径 1cm 未満の礫多量入る　個ん状ラミナあり
9）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじり砂質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 30% 程度入る
　径 1cm 未満の礫中量入る
10）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじり砂質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 20% 程度入る
　径 1cm 未満の礫中量入る

近世包含層（第２層）
11）灰白色　2.5Y8/1 ～ 7/2　細砂～細砂に　黄灰色　2.5Y4/1　シルトブロック 20% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　波状ラミナあり
12）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや しまる
13）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 40% 程度入る
　径 2cm 未満の礫多量入る
14）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト　鉄斑沈着　径 2cm 未満の礫少量入る　やや しまる
15）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト　鉄斑沈着　径 2cm 未満の礫少量入る　やや しまる
　上層よりも粘土質強い
16）黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじり粘土質シルト　炭化物入る　径 1 ㎝未満の礫少量入る　やや しまる
17）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～微砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
　炭化物少量入る　やや しまる
18）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂 20% 程度入る
　径 3cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや しまる
19）黄灰色　10YR3/2　細砂まじり粘土質シルト　炭化物少量入る　鉄斑沈着　上層よりも粘土質強い
20）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂 20% 程度入る　径 3cm 未満の礫少量入る
　鉄斑沈着　やや しまる

中世包含層（第３層）
21）灰オリーブ色　5Y4/2　微砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　炭化物中量入る　やや しまる
22）黒褐色　2.5Y3/2　粘土に　灰黄褐色　10YR6/2　微砂ブロック上位に 20% 程度入る
23）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土質シルト　炭化物少量入る　鉄斑沈着　上層よりも粘土質強い
24）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルト　炭化物入る　鉄斑沈着　径 1 ㎝未満の礫少量入る　やや しまる
25）灰黄色　2.5Y6/3　中砂～細砂に　26）層粘土ブロック 50% 程度入る
26）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに　浅黄色　2.5Y7/3　細砂ブロック 30% 程度入る
27）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト　径 0.2cm 程度の礫少量入る　鉄斑沈着　やや軟質　しまり悪い
28）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂 20% 程度入る
　径 3cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや しまる
29）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに　灰白色　2.5Y7/1　細砂 20% 程度入る　波状ラミナあり
30）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～細砂に　31）層ブロック 30% 程度入る　径 2cm 未満の礫多量入る
　マーブル状ラミナあり
31）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじりシルト　径 0.5cm 未満の礫少量入る　しまり悪い
32）にぶい黄色　2.5Y6/3-6/4　細砂に　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルトブロック 30% 程度上位に集中してみる
　径 2cm 未満の礫下位に多量入る
33）黒褐色　10YR3/2　細砂まじり粘土質シルトに　細砂ブロック 20% 程度入る　炭化物・植物遺体少量入る
　やや軟質　やや しまる
34）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに　灰白色　2.5Y7/1　細砂ブロック 10% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　植物遺体入る　炭化物少量入る
35）黒褐色　10YR2/2　粘土に　同色細砂まじり粘土質ブロック 20% 程度入る
　にぶい黄色　10YR7/2　シルトブロック下位に 10% 程度入る
36）オリーブ黒色　5Y3/2　微砂まじり砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
　炭化物中量入る　やや しまる
37）灰黄褐色　10YR5/2-5/4　細砂～細砂　ラミナあり
38）黒色　10YR2/1　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫入る　炭化物多量入る
39）にぶい黄色　2.5Y6/3-6/4　細砂に　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルトブロック上位に集中してみる

古代末期～中世前期包含層（第４層）
40）黒褐色　2.5Y3/2　粘土　軟質
41）黒褐色　10YR3/2　細砂まじり粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂 20% 程度入る
　径 3cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや しまる
42）黒褐色　10YR3/2　砂質シルトに　微砂　マーブル状に入る
　径 2cm 未満の礫少量入る　植物遺体少量入る
43）オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘土質シルトと　黒色　2.5Y2/1　粘土の互層
44）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 10% 程度入る
　径 2cm 未満の礫少量入る　植物遺体入る　炭化物少量入る
45）黒褐色　10YR3/2　細砂まじり粘土質シルト
46）黒色　10YR2/1　粗砂まじり粘土に　灰黄褐色　10YR6/2　微砂ブロック 20% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　炭化物・植物遺体少量入る

古墳時代初頭包含層（第５-１層）
47）灰黄褐色　10YR5/2　細砂まじり砂質シルト　炭化物入る　径 2cm 未満の礫中量入る
　やや軟質　よくしまる
48）灰黄褐色　10YR6/2　細砂まじり砂質シルト　径 2cm 未満の礫多量入る　炭化物入る
　鉄斑沈着
49）暗灰色　10YR4/1　細砂まじり粘土に　細砂ブロック 10% 程度入る　径 2cm 未満の礫多量入る
　よくしまる
50）明褐灰色　7.5Y7/1　微砂～シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
51）黒褐色　10YR3/1　細砂まじり粘土質シルト　細砂ブロック 10% 程度入る　炭化物入る
　径 1cm 未満の礫微量入る
52）灰色　5Y5/1　粘土質シルトに　灰白色　5Y7/2　細砂斑状に入る
　径 2cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや軟質
53）灰色　5Y6/1　細砂まじり粘土質シルト　径 2cm 未満の礫少量入る

弥生時代以前包含層（第５-２層）
54）黄灰色　2.5Y6/1　細砂～シルトに　灰色　5Y5/1　粘土ブロック 40% 程度入る　波状ラミナあり
55）暗灰黄色　2.5Y5/2　微砂～細砂　上位やや土壌化　しまり良い　炭化物入る

谷埋積層
56）黒褐色　2.5Y3/2　細砂～細砂　径 3cm 未満の礫多量入る
57）灰黄色　2.5Y6/2　細砂　径 1cm 未満の礫多量入る
58）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじりシルト　径 3cm 未満の礫多量入る
59）黒灰色　2.5Y5/1　細砂～細砂　径 3cm 未満の礫多量入る

流路埋土
A1）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂と　黒色　10YR2/1　粘土の互層　斜め方向のラミナあり
A2）黒色　10YR2/1　細砂まじり粘土質シルトに　にぶい黄褐色　10YR7/2　細砂ブロック入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　軟質
A3）灰黄褐色　10YR6/2　細砂～中砂と　黒色粘土の互層　ラミナあり
A4）灰黄褐色　10YR6/2　細砂～中砂と　黒色粘土の互層　ラミナあり
A5）灰黄褐色　10YR6/2　細砂～中砂に　黒色　10YR2/1　粘土質シルトの流入あり
A6）灰白色　10YR7/1　粘土～細砂まじり細砂　軟質
A7）褐色　10YR4/4　細砂～中砂　径 1cm 未満の礫多量入る

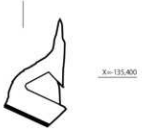
落込み埋土
B1）灰黄褐色　10YR4/2　シルト質細砂～微砂に
　灰オリーブ色　7.5Y6/2　シルトブロック 10% 程度入る
　黒色　10YR2/1　シルトブロック上位に 10% 程度入る
B2）褐灰色　10YR4/1　細砂まじり粘土と　細砂の互層　炭化物少量入る
B3）灰黄褐色　10YR5/2-6/2　細砂と　シルトの互層　径 1cm 未満の礫入る
B4）灰黄褐色　10YR4/2　シルト質細砂～微砂に
　灰オリーブ色　7.5Y6/2　シルトブロック 10% 程度入る
B5）褐灰色　10YR4/1-4/2　シルト質細砂～細砂　炭化物微量入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る
B6）褐灰色　10YR4/1　粗砂まじり粘土と　細砂の互層　炭化物少量入る

落込み５埋土
C1）明褐灰色　10YR1.7/1　細砂まじり粘土に　灰白色　10YR7/1　微砂ブロック 10% 程度入る
　径 3cm 未満の礫少量入る　植物遺体入る　炭化物多量入る
C2）褐灰色　10YR5/1　シルトまじり細砂　しまり悪い
C3）灰褐色　10YR4/2　シルト質細砂　地山ブロック 10% 程度入る　植物遺体入る　炭化物入る
C4）褐灰色　10YR4/1　暗まじり砂質シルト　しまり悪い
C5）黒褐色　10YR3/1　粗砂まじり粘土質シルト　炭化物多量入る
　径 1cm 未満の礫微量入る

落込み３埋土
D1）黒色　10YR2/1　細砂まじり粘土質シルトに　微砂ブロック入る 10% 程度入る
　径 1cm 未満の礫中量入る　植物遺体・炭化物多量入る　軟質
D2）黒色　10YR1.7/1　微砂まじり粘土に　黒色　10YR2/1　粘土質ブロック 20% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　炭化物・植物遺体多量入る
D3）黒褐色　10YR3/1　細砂まじり粘土　植物遺体・炭化物多量入る　軟質
D4）灰黄色　2.5Y7/2-6/2　細砂に　砂質シルト筋状に入る　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄分沈着
D5）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土に　黒褐色　10YR3/1　粘土質シルト筋状に入る
D6）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土に　灰白色　2.5Y7/1　細砂ブロック 10% 程度入る
　植物遺体・炭化物多量入る

落込み 10 埋土
E1）灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじり粘土質シルト　径 3cm 未満の礫少量入る　よくしまる
E2）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～シルト　径 3cm 未満の礫少量入る
E3）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂まじりシルトに　細砂ブロック 20% 程度入る　3cm 未満の礫少量入る
E4）暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質細砂　明黄褐色　2.5Y6/6　細砂ブロック入る　径 5cm 未満の礫多量入る
E5）黄灰色　2.5Y5/2　シルト質細砂～微砂　植物遺体少量入る　よくしまる
E6）灰黄色　2.5Y6/1　細砂　径 3cm 未満の礫多量入る　ラミナあり　炭化物・植物遺体少量入る
E7）灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質細砂～微砂　下位砂質化　植物遺体・炭化物少量入る
　下位にラミナあり　径 1cm 未満の礫少量入る
E8）にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～シルト　径 3cm 未満の礫少量入る
E9）黒褐色　2.5Y3/4　シルト質細砂～微砂に　黄灰色　2.5Y4/1　細砂筋状に入る
E10）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルトに
　オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂まじり粘土質ブロック 30% 程度入る　植物遺体少量入る
E11）黄褐色　2.5Y5/3　シルト質微砂　根跡の流入あり　植物遺体多量入る　下位に鉄分沈着
E12）灰黄色　2.5Y6/2　細砂　上位土壌化　上層ブロック 30% 程度入る　植物遺体少量入る
　鉄分沈着のため部分的に黄色化
E13）黄灰色　2.5Y5/1　シルト質細砂～微砂　下位シルト化　植物遺体少量入る　よくしまる
E14）黄褐色　2.5Y5/3　細砂　径 3cm 未満の礫少量入る
E15）灰白色　2.5Y8/1　微砂～細砂　ラミナあり
E16）黄褐色　2.5Y5/3　細砂　径 3cm 未満の礫多量入る
E17）暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト　径 3cm 未満の礫多量入る　しまる

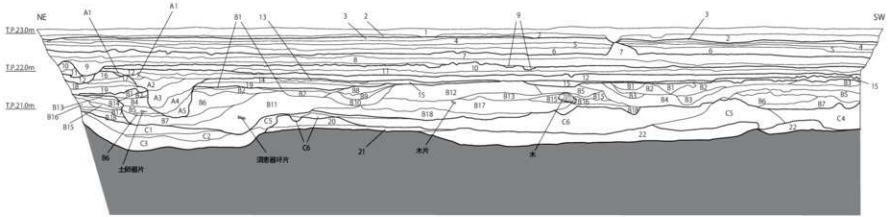
0　断面図(1:100)　5m



2-1 区南壁

第 17 図　調査区断面図（５）

第２調査区（2-1 区）東南壁



近世代耕作土
1）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る　しまり悪い　軟質
2）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　しまりよい　鉄斑多量に沈着

近世包含層（第１層）
3）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　しまり悪い　鉄斑沈着
4）暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫少量入る　しまり悪い　鉄斑沈着
5）暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　しまりよい　下位に鉄分沈着
6）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 礫少入る　やや密　やや硬くしまる　鉄斑

近世包含層（第２層）
7）暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 礫少入る　やや密　鉄斑
8）暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 礫少入る　しまり悪い　鉄斑
9）灰黄褐色　10YR4/2　粗砂まじり粘土　径 3cm 礫少量入る　下位に粗砂礫層流入あり　鉄斑沈着　やや密

中世包含層（第３層）
10）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじり粘土　径0.5cm 礫少入る　しまり悪い　軟質　鉄斑　炭化物少量入る
11）灰黄褐色　10YR4/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 礫少量入る　やや密　鉄斑　炭化物少量入る
12）灰黄褐色　10YR5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 礫少量入る　密　やや軟質

古代末期～中世前期包含層（第４層）
13）浜白色　2.5Y7/1　粗砂に　浅黄色　2.5Y7/3　粘土ブロック 20% 程度入る　径 1cm 未満の礫多量入る
14）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトまじり粗砂に　浜白色　2.5Y7/1　粗砂ブロック 20%程度入る　径 1cm 未満の礫多量入る
15）黒褐色　10YR2/2　砂質シルト　植物遺体少量入る　上面からの踏み込みあり
16）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　炭化物少量入る　軟質
17）褐灰色　10YR4/2　粗砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る
18）黒褐色　10YR3/2　粗砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る
19）黒褐色　2.5Y3/2　粗砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫少量入る　やや土壌化　ややしまり悪い

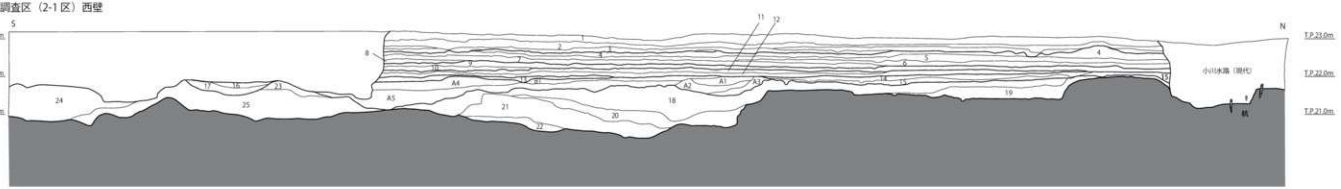
弥生時代以前包含層（第５２層）
20）浜色　7.5Y6/1　微砂～細砂に　浅黄色　2.5Y7/3　微砂筋状に入る　径 0.5%以下の礫少量入る
21）浜オリーブ色　7.5Y6/2　細砂～細砂に　緑浜色　7.5GY6/1　微砂まじり細砂ブロック 10%程度入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る
22）浜オリーブ色　5Y4/2　細砂～細砂　径 3cm 未満の礫多量入る

流路埋土
A1）にぶい黄褐色　10YR4/3　シルトまじり粗砂　径 1cm 礫少量入る
A2）褐灰色　10YR5/1　粘土に　にぶい黄褐色　10YR5/3　粗砂まじりシルトの流入あり
A3）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトまじり粗砂に　粗砂ブロック 20%程度入る　径 1cm 未満の礫多量入る
A4）灰黄褐色　10YR6/2　粗砂まじりシルト　径 4cm 未満の礫多量入る
A5）浜白色　10YR7/1-7/2　砂質シルト　粗砂の流入あり　植物遺体少量入る　径 2cm 未満の礫中量入る

落込み１埋土
B1）褐灰色　10YR4/1　粗砂まじりシルトに　浜白色　10YR7/1　微砂ブロック 5%程度入る　ややしまり悪い　径 1cm 未満の礫少量入る
B2）にぶい黄褐色　10YR4/3　シルトまじり粗砂に　褐灰色　10YR4/1　粗砂まじりシルトブロック 10% 程度入る　植物遺体入る
B3）褐灰色　10YR4/1　粗砂まじりシルト　やや軟質　植物遺体少量入る
B4）灰黄褐色　10YR5/2　粗砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫多量入る
B5）灰黄褐色　10YR6/2　細砂～細砂　径 2cm 未満の礫或いに入る　ラミナあり
B6）褐灰色　10YR6/1　シルトに　灰黄褐色　10YR6/2　細砂～微砂波状に入る　径 2cm 礫少量入る　ラミナあり
B7）黒褐色　10YR3/1　粘土に　黒色　10YR2/1　細砂まじり粘土　上位に粗砂マーブル状に入る　植物遺体多量入る
B8）黒褐色　2.5Y4/1　粗砂まじり砂質シルトに　浜白色　2.5Y7/1　細砂ブロック 10%程度入る　径 1cm 未満の礫中量入る
B9）黒色　2.5Y2/1　細砂まじり粘土　非常に軟質　下位に植物遺体多量入る
B10）黒褐色　2.5Y3/1　細砂まじり粘土　径 3cm 未満の礫多量入る　植物遺体少量入る
B11）黒褐色　2.5Y3/1　細砂まじり粘土と　褐灰色　10YR4/1　粗砂の互層　径 1cm 未満の礫多量入る　植物遺体少量入る
B12）浜白色　10YR8/1　粗砂に　にぶい黄褐色　10YR6/3　粗砂筋状に入る　径 3cm 未満の礫或いに入る　ラミナあり
B13）褐灰色　10YR5/1　微砂　径 0.2cm 未満の礫少量入る　炭化物少量入る　鉄斑沈着
B14）灰黄褐色　10YR5/2　微砂　炭化物少量入る　鉄斑沈着
B15）黒褐色　10YR3/1　シルトに　浜白色　10YR7/2　細砂筋状に入る
B16）黒褐色　10YR2/2　粘土に　暗褐色　10YR3/3　微砂ブロック 10%程度入る　植物遺体入る　径 2cm 未満の礫微量入る　軟質
B17）浜白色　10YR8/1　微砂に　褐灰色　10YR4/1　シルト筋状に入る　ラミナあり
B18）黒褐色　10YR3/1　粗砂まじり粘土と　浜白色　10YR7/2　粗砂の互層

落込み５埋土
C1）浜白色　10YR8/1　細砂と　浜白色　10YR7/1　細砂～粗砂の互層　ラミナあり
C2）褐灰色　10YR4/1　黒褐色　10YR3/1　粗砂まじりシルトと　浜白色　10YR7/1　粘土の互層　植物遺体少量入る
C3）浜白色　10YR8/1　粘土と　褐灰色　10YR4/1　粘土の互層　植物遺体多量入る　径 3cm 礫少量入る　軟質　しまりよい
C4）褐灰色　10YR3/1　粘土と　浜白色　10YR7/2　細砂の互層　植物遺体多量入る
C5）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり砂質シルトと　暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂の互層　ややしまる
C6）褐灰色　10YR4/1　砂質シルトと　褐浜色　10YR6/1　粗砂の混在層

第２調査区（2-1 区）西壁



近現代耕作土
1）黄灰色　2.5Y6/1　砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　上層より踏み込みあり　柱状鉄斑沈着
2）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂まじり砂質シルト　径 2cm 未満の礫多量入る　柱状鉄斑沈着
3）黄灰色　2.5Y6/1　砂質シルト　径 1cm 未満の礫多量入る　柱状鉄斑沈着

近世包含層（第１層）
4）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土質シルト　径 1cm 未満の礫多量入る　植物遺体少量入る　鉄斑沈着
5）暗灰黄色　2.5Y5/3　粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　下位に粗砂の流入あり　鉄斑沈着
6）暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
7）暗灰黄色　2.5Y4/2　粗砂まじり砂質シルトに
　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 20% 程度入る　径 3cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　ややしまる
8）暗灰黄色　2.5Y4/2　粗砂まじりシルトに　灰黄色　2.5Y7/2　細砂筋状に入る
　径 3cm 未満の礫多量入る　鉄斑沈着　やや しまる

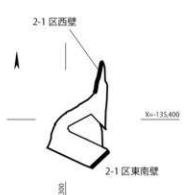
近世包含層（第２層）
9）浜色　5Y4/1　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
10）浜オリーブ色　5Y4/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　ややしまる　鉄斑沈着

中世包含層（第３層）
11）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり粘土質シルト　下位に粗砂の流入あり
12）黄灰色　2.5Y4/2　粗砂まじり粘土質シルト　下位に粗砂の流入あり　炭化物少量入る

古代末期～中世前期包含層（第４層）
13）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
14）黒色　10YR2/1　粗砂まじり粘土質シルトに　粗砂ブロック 10% 程度入る　径 1cm 未満の礫少量入る
15）黒色　10YR2/1　粗砂まじり粘土質シルトに　緑浜色　5G6/1　粗砂まじり粘土ブロック 20% 程度入る
16）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫少量入る　波状ラミナあり
17）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂　径 3cm 未満の礫多量入る　波状ラミナあり

古墳時代前期包含層（第５1層）
18）緑浜色　5G6/1　粗砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄分沈着　しまりよい
19）浜色　7.5Y6/1　粗砂～細砂　径 2cm 未満の礫多量入る　鉄分沈着　しまりよい
20）浜白色　7.5Y7/1　細砂～細砂　径 1cm 未満の礫少量入る　しまりよい
21）浜白色　7.5Y7/2　粗砂～細砂　径 1cm 未満の礫少量入る　しまりよい
22）浜白色　7.5Y7/2　細砂～細砂に　浅黄色　7.5Y7/3　粘土ブロック 20% 程度入る
23）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂～細砂に　黄灰色　2.5Y4/1　粘土質シルトブロック 40% 程度入る　しまりよい
24）黄灰色　2.5Y6/1　砂質シルトに　粗砂筋状に入る　径 5cm 未満の礫少量入る
25）浜白色　5Y7/1　粗砂～細砂　径 1cm 未満の礫少量入る　斜め方向の筋いラミナあり　しまりよい

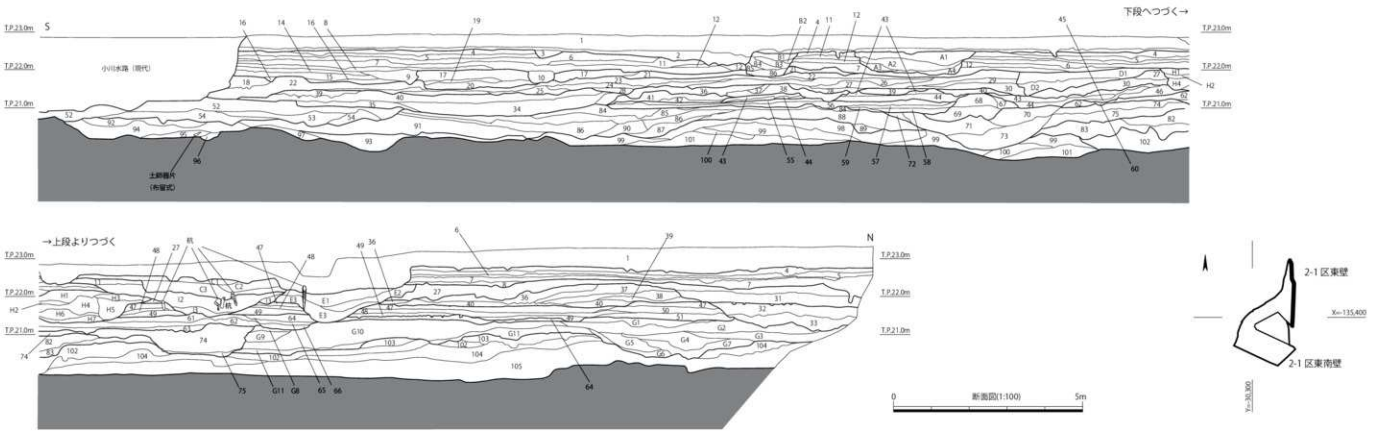
第 18 埋土
A 1）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂に　黒褐色　2.5Y3/1　粘土ブロック 30% 程度入る　径 1cm 未満の礫少量入る
A 2）黄灰色　2.5Y6/1　細砂に　緑浜色　5G6/1　細砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る　炭化物少量入る
A 3）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂と　黒褐色　2.5Y3/1　シルトの互層　細いラミナあり
A 4）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂に　黄灰色　2.5Y4/1　粘土ブロック 40% 程度入る
A 5）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂に　明オリーブ灰色　5GY6/1　粘土（地山）ブロック 10% 程度入る　径 2cm 未満の礫少量入る



0　断面図(1:100)　5m

第 18 図　調査区断面図（6）

第２調査区（2-1 区）東壁



近世耕作土

1）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
2）オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質シルト　細かい鉄斑沈着
　径 1cm 未満の礫少量入る　植物葉根入る
3）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト
　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着　硬質

近世包含層（第 1 層）

4）褐色　10YR4/4　細砂まじり砂質シルト　径 2cm 未満の礫多量入る
　鉄分沈着のため著しく褐色化
5）オリーブ褐色　2.5Y4/4　細砂まじり砂質シルト　径 2cm 未満の礫多量入る
　鉄斑沈着
6）黄褐色　2.5Y3/3　細砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫少量入る　柱状鉄斑沈着
7）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
　植物葉根入る　軟質　しまり悪い
8）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫微量入る
　下位に細砂の流入あり　やや硬質
9）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルト　微砂ブロック 10% 程度入る
10）灰黄色　2.5Y6/1　微砂と　黄灰色　2.5Y4/1　粘土ブロックの混合層
　細砂の流入あり　斜め方向のラミナあり
11）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
　鉄斑沈着
12）灰黄色　2.5Y6/2　砂質シルト～細砂　一部土壌化　やや硬質
13）黄灰色　2.5Y6/1　砂質シルト　径 1cm 未満の礫多量入る
14）オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
15）灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじり粘土質シルト
　径 0.5cm 未満の礫筋状に入る　鉄分沈着
16）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルト
　径 0.5cm 未満の礫少量入る　鉄分沈着　炭化物微量入る

近世包含層（第 2 層）

17）暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質シルトに　暗灰黄色　2.5Y4/1　粘土ブロック 30% 程度入る
　径 3cm 未満の礫多量入る
18）黒灰色　5Y5/1　細砂まじり粘土質シルトと
　暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトまじり細砂の互層　波状ラミナあり
19）暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質シルト　径 2cm 未満の礫多量入る
20）暗灰黄色　2.5Y7/1-7/2　径 2cm 未満の礫多量入る　水平方向のラミナあり
21）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～シルト　炭化物入る　鉄斑沈着

中世包含層（第 3 層）

22）黒灰色　2.5Y5/1　微砂まじり粘土質シルト　上位砂質化
23）灰色　5Y6/1-6/2　微砂～微砂まじり粘土　鉄分沈着　弱いラミナあり
24）灰色　5Y5/1　粘土　炭化物入る　植物遺体少量入る
25）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土　径 0.5cm 未満の礫少量入る
　鉄斑沈着　やや硬質　植物遺体多り
26）灰色　5Y6/1-6/2　微砂まじり粘土　上位に微砂の流入あり　鉄斑沈着
　水平方向の弱いラミナあり
27）黄灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫微量入る　鉄斑沈着
28）黒灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土
29）灰黄褐色　10YR5/2　シルト～細砂　径 2cm 未満の礫微量入る
　下位に向かって粗粒化
30）灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫少量入る　鉄斑沈着
　腐植痕跡あり
31）灰色　2.5Y5/1　細砂まじり粘土　径 0.5cm 未満の礫上位に少量入る
　柱状鉄斑沈着　腐植痕跡あり
32）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルトに
　黒褐色　2.5Y3/1　シルトブロック 20% 程度入る　しまり悪い
33）褐灰色　10YR4/1　細砂まじり粘土質シルト
　径 1cm 未満の礫少量入る　下位に向かって暗色化　しまり悪い
34）灰白色　2.5Y7/1-6/1　細砂～極砂と　黒灰色　2/5Y4/1　粘土の互層
35）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土　径 4cm 未満の礫少量入る
　鉄分沈着　炭化物入る
36）暗灰黄色　2.5Y5/2　微砂～細砂　シルトブロック入る　水平方向のラミナあり
37）黒褐色　2.5Y3/2　細砂～極砂　斜め方向のラミナあり
38）暗灰黄色　2.5Y5/2　シルトまじり細砂　径 2cm 未満の礫少量入る
　斜め方向のラミナあり
39）暗灰黄色　10YR4/2　細砂～細砂まじりシルト
40）灰色　5Y4/1　粗砂と　同色粘土ブロックの混合層
41）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルトに
　同色シルトブロック 30% 程度入る　植物遺体入る
42）灰オリーブ色　2.5Y5/2　細砂に　灰色　2.5Y4/1　微砂ブロック 40% 程度入る
43）黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじり粘土質シルト　炭化物入る
　植物遺体入る　やや軟質
44）灰黄色　2.5Y7/2　細砂～微砂　径 1cm 未満の礫少量入る　植物遺体入る
45）暗灰色　10YR6/1　細砂まじり粘土　炭化物入る　植物遺体入る　やや軟質
46）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト　細砂の流入あり　径 1cm 未満の礫少量入る
47）灰色　5Y5/1　砂質シルト　微砂筋状に入る
48）灰色　5Y5/1　砂質シルト　微砂筋状に入る　径 2cm 未満の礫少量入る
49）黒灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
　鉄斑沈着　腐植痕跡あり
50）灰黄褐色　10YR6/2　細砂まじり粘土質シルト　部分的に土壌化
51）暗灰色　10Y5/1　砂質シルトに
　灰黄色　2.5Y7/2　細砂ブロック 40% 程度入る　しまり悪い
52）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
53）黒色　2.5Y2/1　砂質シルトに　泡山ブロック 20% 程度入る
　径 0.5cm 未満の礫少量入る　しまり良い
54）にぶい黄橙色　2.5Y7/2　細砂まじり粘土に
　灰白色　10YR8/1　微砂ブロック 10% 程度入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る
　波状ラミナあり

古代末期～中世前期包含層（第 4 層）

55）黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじり粘土に　微砂ブロック 40% 程度入る
56）オリーブ黒色　5Y2/2　微砂まじり粘土質シルトに
　微砂ブロック 10% 程度入る　しまり良い
57）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土質シルトに　微砂ブロック 20% 程度入る
　しまり悪い　やや軟質　植物遺体入る
58）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土　植物遺体入る　しまり良い　やや軟質
59）オリーブ黒色　5Y3/1　粗砂まじり粘土　植物遺体入る
　径 1cm 未満の礫少量入る　やや軟質
60）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土質シルト　炭化物入る　植物遺体入る
61）黒灰色　2.5Y4/1　微砂まじり粘土質シルトに　微砂 20% 程度筋状に入る
　下位に粗砂の流入あり
62）黒灰色　2.5Y5/1　砂質シルト　植物遺体多量入る　湿地状堆積
63）灰色　5Y4/1　粗砂まじり粘土に
　細砂色　10GY6/1　微砂と泡山ブロック 30% 程度入る　植物遺体多量入る
64）黒灰色　2.5Y4/1　微砂まじり粘土質シルトに
　灰白色　2.5Y7/1　微砂ブロック 10% 程度入る　径 1cm 未満の礫微量入る　軟質
65）黒灰色～灰黒色　2.5Y5/1-7/2　微砂～細砂　互層　水平方向のラミナあり
66）黒灰色　2.5Y4/1　微砂まじり粘土質シルトに　微砂ブロック 30% 程度入る
　植物遺体入る　弱いラミナあり
67）黒褐色　2.5Y3/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
　腐植痕跡あり　粗粒堆土
68）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土質シルト　上位に粗砂をかける
　植物遺体多量入る　炭化物少量入る　粗粒堆土
69）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土質シルトに　微砂ブロック 30% 程度入る
　炭化物入る　植物遺体入る　軟質　しまり悪い　粗粒堆土

洗踏 33 埋土

70）灰白色　2.5Y7/1　粗砂～細砂　炭化物入る　激しい波状ラミナあり
71）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土に　微砂ブロック 10% 程度入る　植物遺体入る
　しまり悪い　弱いラミナあり
72）黒色　2.5Y2/1　粗砂まじり粘土質シルト　径 0.5cm 未満の礫少量入る
73）にぶい黄色　2.5Y6/3　シルトまじり粗砂　径 5cm 未満の円礫多量入る
　斜め方向のラミナあり
74）黒灰色～灰白色　2.5Y4/1-7/1　細砂～微砂と
　黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルトの互層　激しい波状ラミナあり
75）黒褐色　2.5Y3/1　シルト～微砂　炭化物多量に入る　腐葉土状堆積

古墳時代前期包含層（第 5 1 層）

82）黒灰色～灰黄色　2.5Y5/1-6/2　微砂～砂質シルト　植物遺体入る　激しい波状ラミナあり
83）灰黄色　2.5Y7/2　細砂～極砂　径 0.5cm 未満の礫少量入る　激しい波状ラミナあり
84）黒灰色　2.5Y5/1　細砂～極砂と　黒褐色　2.5Y3/1　シルトの互層　径 cm 未満の礫多量入る
　波状ラミナあり
85）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土に　灰黄色　2.5Y7/1　微砂ブロック 30% 程度入る
　炭化物入る
86）黒褐色　2.5Y3/1　微砂～細砂と　灰黄色　2.5Y6/2　砂質シルトの互層　波状ラミナあり
87）黒褐色　2.5Y3/1　微砂～細砂と　灰黄色　2.5Y7/2　砂質シルトの互層　波状ラミナあり
　径 3cm 未満の礫多量入る
88）黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルトに　灰白色　2.5Y7/1　細砂 50% 程度筋状に入る
　波状ラミナあり　植物遺体多量入る
89）オリーブ灰色　5GY6/1　細砂まじり粘土に　灰白色　2.5Y7/1-6/1　細砂の流入あり
　植物遺体多量入る
90）灰黄色～にぶい黄色　2.5Y6/2-6/3　細砂に　灰黄色　2.5Y6/1　粘土ブロック 30% 程度入る
91）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土に　灰白色　2.5Y7/1　微砂ブロック 10% 程度入る
　径 0.5cm 未満の礫少量入る

落込み 4 埋土

92）黒褐色　10YR2/1　粗砂　径 2cm 未満の礫多量入る　植物遺体多量入る
93）黄灰色　2.5Y5/1-6/1　細砂～極砂に　黒色　2.5Y2/1　粘土筋状に入る　斜め方向のラミナあり
94）黒褐色　10YR2/1　粗砂まじり粘土　しまり良い　やや軟質
95）オリーブ灰色　5GY6/1　細砂に　黒色　2.5Y2/1　粘土筋状に入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る
　やや硬質　布留式土器片入る
96）黒褐色　2.5Y3/1　微砂～シルトに
　オリーブ灰色　5GY6/1　細砂まじり粘土　泡山　ブロック 10% 程度入る
97）黒褐色　2.5Y3/1　微砂～シルトに　灰白色　2.5Y7/1　細砂筋状に入る　植物遺体多量入る
98）黒灰色　2.5Y6/1　細砂に　径 2cm 未満の礫多量入る
99）オリーブ黒色　5Y3/1　細砂と　黒色　5Y2/1　粘土の互層　下位粘土質化
100）黒色　2.5Y2/1　粘土　軟質　植物遺体多量入る　腐葉土状堆積
101）灰色　5Y5/1-6/1　細砂　植物遺体少量入る
102）灰白色　2.5Y7/1　細砂まじりシルト　径 0.5cm 未満の礫少量入る
103）灰白色～灰黄色　2.5Y7/1-7/2　細砂に　黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルト筋状に入る
　水平ラミナあり
104）黒灰色　2.5Y5/1　細砂～シルト　径 1cm 未満の礫多量入る
105）黒灰色　2.5Y5/1　細砂～シルトに　黒色　2.5Y2/1　粘土ブロック 30% 程度入る

近現代土坑

A1）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
A2）黒色　2.5Y2/1　砂質シルトに　オリーブ灰色　5GY6/1　細砂まじり粘土ブロック 20% 程度入る
A3）にぶい黄橙色　2.5Y7/2　細砂まじり粘土に　灰白色　10YR8/1　微砂ブロック 10% 程度入る

B1）黒褐色　2.5Y3/2　微砂まじりシルト　植物遺体少量入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る
B2）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土シルト　径 2cm 未満の礫多量入る
B3）オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
B4）オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
B5）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
B6）オリーブ黒色　5Y3/1　細砂　径 2cm 未満の礫少量入る

C1）黄灰色　2.5Y6/1　シルト～砂質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
C2）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルトに　黄灰色　2.5Y4/1
　シルトブロック 20% 程度入る　下位に細いラミナあり
C3）黄灰色　2.5Y6/1　細砂～シルトに　灰色　5Y5/1　粘土ブロック 40% 程度入る
　径 5cm 未満の礫少量入る　波状ラミナあり

第 19 図　調査区断面図（7）

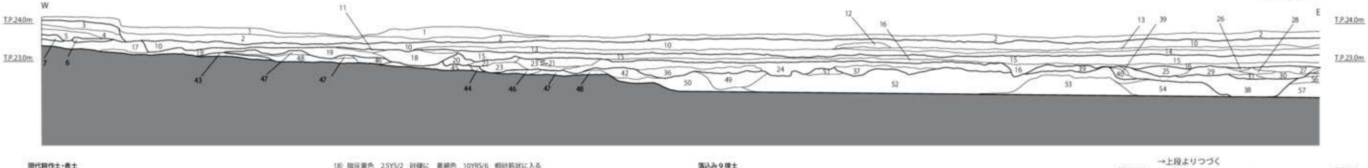
近世土坑埋土
D1）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い
D2）暗灰黄色　2.5Y5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る
D3）オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質シルト　径1cm未満の礫少量入る　鉄斑沈着　硬質

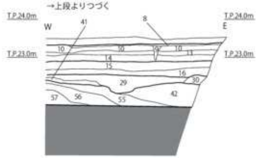
旧小川水路埋土
E1）灰色　5Y5/1　粘土質シルトに　灰白色　5Y7/2　粗砂筋状に入る
径2cm未満の礫少量入る　鉄斑沈着　やや軟質
E2）灰色　5Y6/1　粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫少量入る
E3）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂～シルトに　灰色　5Y5/1　粘土ブロック40%程度入る　波状ラミナあり

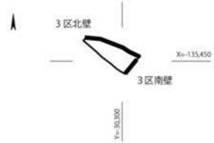
落込み2埋土
G1）暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質シルト　径0.5cm未満の礫少量入る　やや軟質　植物遺体少量入る
G2）暗灰黄色　2.5Y5/3　細砂～粗砂　径2cm未満の礫多量入る　波状ラミナあり
G3）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～粗砂　径3cm未満の礫多量入る　波状ラミナあり
G4）黒褐色　10YR3/1　粗砂まじりシルトに　灰白色　10YR7/1　粗砂ブロック20%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
G5）灰白色　2.5Y7/1　粗砂～細砂に　黄灰色　2.5Y5/1　粘土質シルト筋状に入る
G6）褐灰色　10YR4/1　砂質シルトに　黒色　10YR2/1　シルトブロック10%程度入る
植物遺体多量入る　炭化物入る　径0.5cm未満の礫少量入る
G7）黒褐色　10YR3/1　細砂まじり粘土質シルトに　灰白色　2.5Y7/1　粗砂～細砂筋状に入る　鉄斑沈着
G8）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじりシルト　炭化物入る　やや軟質
G9）灰黄色　2.5Y7/2　細砂と　黄灰色　2.5Y4/1　粘土質シルトの互層
植物遺体入る　水平方向のラミナあり
G10）灰黄色　2.5Y7/2　粗砂　径5cm未満の円礫多量入る　激しい波状ラミナあり
G11）黄灰色　2.5Y5/1　粗砂～細砂　径5cm未満の円礫多量入る
激しい波状ラミナあり
G12）灰黄色　2.5Y4/2　粘土に微砂30%程度筋状に入る　植物遺体入る
G13）黒褐色～黒色　2.5Y3/1-2/1　微砂まじり粘土質シルトに
微砂ブロック30%程度上位に入る　植物遺体多量入る　下位暗色化

近世土坑埋土
H1）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトに　粗砂の流入あり　径2cm未満の礫多量入る
H2）黄灰色　2.5Y6/1　粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る
H3）黄灰色　2.5Y6/1　シルトに　灰色　2.5Y5/1　粘土ブロック30%程度入る径3cm未満の礫多量入る
H4）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂　径1cm未満の礫多量入る
H5）黄灰色　2.5Y5/1　シルトに　同色粘土ブロック30%程度入る　径3cm未満の礫多量入る
H6）黄灰色　2.5Y5/1　粗砂～細砂　径3cm未満の礫多量入る
H7）灰色　5Y6/1　粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る

第3調査区　北壁断面







現代耕作土・表土
1）黒褐色　2.5YR3/1　細砂まじり微砂に　粗砂ブロック10%程度入る
径1.5cm未満の礫入る　やや軟質
2）黒褐色　2.5YR3/1　細砂まじり微砂　径1.5cm未満の礫入る　やや軟質

近世包含層（第1層）
3）灰色　7.5Y6/1　シルトに　黄褐色　10YR5/6　シルトブロック20%程度入る
径0.5cm未満の礫入る　酸化鉄斑沈着　しまり良い
4）灰色　7.5Y5/1　シルトに　黄褐色　10YR5/6　シルトブロック30%程度入る
径1cm未満の礫入る　酸化鉄斑沈着　しまり良い
5）灰色　5Y4/1　細砂まじりシルトに　黄褐色　10Y5/6　シルトブロック20%入る
径1cm未満の礫入る　酸化鉄斑沈着　しまり良い
6）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂まじり微砂　径2cm未満の礫少量入る
7）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂まじりシルトに
黄褐色　10Y5/6　シルトブロック10%程度入る
径3cm未満の礫少量入る　酸化鉄斑沈着　しまり良い
8）灰色　7.5Y6/1　微砂に　黄褐色　10YR5/6　微砂ブロック10%程度入る　しまり良い
径0.5cm未満の礫少量入る
9）灰色　7.5Y5/1　微砂に　黄褐色　10YR5/6　微砂ブロック5%程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
10）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり微砂　径2cm未満の礫少量入る
11）灰色　7.5Y6/1　細砂～粗砂　直径1cm未満の礫少量入る　やや軟質
12）灰黄色　2.5Y6/2　細砂に　黄褐色　10YR5/6　微砂15%程度入る
径1cm未満の礫入る
13）灰色　5Y4/1　微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
14）灰色　5Y5/1　粘土質シルトまじり微砂　直径0.5cm未満の礫微量入る
しまりやや悪い

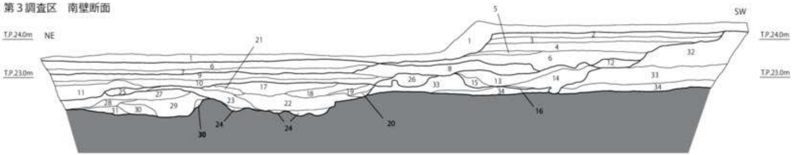
中世包含層（第2層）
15）灰色　5Y5/1　微砂～細砂に　黄褐色　2.5Y5/4　微砂10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る　酸化鉄斑沈着
16）灰色　5Y4/1　微砂　上位に粗砂の流入あり
17）灰色　5Y6/1　細砂～粗砂　下位にむかって粗粒化　径2cm未満の礫多量入る
やや軟質
18）暗灰黄色　2.5Y5/2　砂礫に　黄褐色　10YR5/6　粗砂筋状に入る
径3cm未満の礫多量入る　酸化鉄斑沈着　軟質
19）灰色　5Y4/1　細砂～粗砂に　緑灰色　10G6/1　細砂～粗砂ブロック30%程度入る
黄褐色　10YR5/6　細砂ブロック下位に10%程度入る
緑灰色　10G6/1　粘土ブロック入る　径3cm未満の礫多量入る　軟質

中世包含層（第3層・第4層）
20）灰色　7.5Y5/1　粗砂まじり細砂　灰オリーブ色　5Y6/2　砂礫の流入あり
径1cm未満の礫微量入る　やや軟質
21）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじりシルト　しまりやや強い
22）灰オリーブ色　5Y6/2　砂礫　直径3cm未満の礫多量入る　しまり悪い
23）オリーブ灰色　2.5GY5/1　粗砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫少量入る　やや軟質
24）暗灰黄色　2.5Y5/1　粗砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
25）灰色　5Y4/1　微砂に　灰色　7.5Y5/1　粗砂の流入あり
26）黄灰色　2.5Y4/1　微砂に　灰色　7.5Y5/1　粗砂上位に流入
27）灰色　7.5Y4/1　微砂～細砂に　にぶい黄橙色　10YR6/4　砂礫筋状に入る
径0.5cm以下の礫多量入る　やや軟質
28）灰色　7.5Y6/1-5/1　細砂に　浅黄色　5Y7/3　粗砂まじり細砂15%程度入る
やや軟質
29）灰色　7.5Y5/1　細砂～粗砂に　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂10%程度筋状に入る
径0.5cm未満の礫入る　やや軟質
30）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂～粗砂に　青灰色　5BG6/1　細砂筋状に入る
径2cm未満の礫多量に入る　しまり悪い
31）灰オリーブ色　5Y6/2　細砂～粗砂に
オリーブ灰色　2.5GY6/1　微砂～細砂10%程度入る
灰色　5Y4/1　シルト下位に流入　径0.3cm未満の礫少量入る　やや軟質
32）灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂に　明黄褐色　10YR6/6　微砂ブロック20%程度入る
しまり良い
33）灰色　5Y4/1　微砂と　灰色　5Y6/1　細砂の互層
34）オリーブ黄色　5Y6/3　微砂
35）黄灰色　2.5Y5/1　シルトまじり粘土　炭化物入る　しまり良い
36）黄灰色　2.5Y5/1-6/1　粗砂まじり細砂　直径1cm未満の礫微量入る　しまり悪い
37）灰色　5Y6/1　微砂～細砂　浅黄色　5Y7/3　細砂15%程度筋状に入る　しまり悪い
にぶい黄色　2.5Y6/4　微砂5%程度筋状に入る　弱い波状ラミナあり

落込み9埋土
38）灰オリーブ色　7.5Y5/2　細砂～粗砂　径1cm未満の礫入る　しまり悪い
39）灰オリーブ色　5Y6/1　粗砂まじり微砂～細砂　径1cm未満の礫微量入る
40）黄灰色　2.5Y5/1　細砂に　浅黄色　5Y7/3　粗砂まじり細砂筋状に入る　径3cm未満の礫微量入る　しまり悪い
41）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり微砂

弥生時代以前包含層（第5層）
42）黄灰色　2.5Y4/1-5/1　細砂～微砂　径1cm未満の礫微量入る　しまりやや悪い
端部に径0.3cm未満の礫の流入あり
43）オリーブ灰色　2.5GY6/1　細砂まじり粘土に　橙色　7.5Y6/6　粘土ブロック10%程度入る
44）緑灰色　7.5GY6/1　微砂と　灰色　7.5Y4/1　粗砂まじり微砂の互層
45）灰色　7.5Y5/1-4/1　粗砂　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
46）灰色　5Y4/1　微砂と　灰色　5Y6/1　細砂の互層
47）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり微砂に　オリーブ灰色　2.5GY6/1　粘土ブロック入る
48）オリーブ灰色　2.5GY6/1　微砂～細砂と　黄灰色　2.5Y4/1　細砂～粗砂の互層　径0.5cm未満の礫入る
49）灰色　7.5Y4/1　粗砂　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
50）青灰色　5BG6/1　粗砂まじり粘土に　黄褐色　2.5Y5/4　微砂ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫微量入る　黄灰色2.5Y6/1細砂がブロック状に入る
51）灰色　5Y4/1　微砂　径0.5cm未満の礫微量入る
52）黄灰色　2.5Y5/1-4/1　細砂～粗砂に　青灰色　5BG6/1　微砂ブロック15%程度入る
径3cm未満の礫入る　しまりやや悪い
53）灰色　5Y6/1-5/1　粗砂　径0.3cm未満の礫入る　しまりやや悪い
54）青灰色　5BG6/1　細砂～粗砂　径1cm未満の礫入る　しまり良い
55）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり微砂に
にぶい黄色　2.5Y6/4　細砂ブロック15%程度入る　径0.3cm未満の礫微量入る　しまりやや悪い
56）オリーブ黒色　5Y3/1　微砂　しまりやや悪い
57）緑灰色　10GY6/1　粘土に　にぶい黄色　2.5Y6/4　微砂ブロック10%程度入る　しまり良い
58）緑灰色　10GY6/1　粗砂に　黄灰色　2.5Y5/1　細砂筋状に入る　下位にむかって粗粒化
59）暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　しまりやや悪い

第3調査区　南壁断面



第20図　調査区断面図（8）

現代耕作土・表土
1）黄灰色　2.5Y4/1　微砂～細砂　径1cm未満の礫少量入る

近世包含層（第1層）
2）灰色　5Y6/1　微砂まじり細砂に　黄褐色　2.5Y5/6　微砂ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
3）灰色　5Y5/1　微砂～細砂　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
4）灰オリーブ色　5Y6/2　微砂～細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
径3cm未満の礫微量入る　しまりやや悪い
5）灰色　5Y4/1　細砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い
6）灰オリーブ色　5Y6/4　微砂～細砂に　黄褐色　10YR5/6　微砂ブロック10%程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る
7）灰色　5Y4/1　微砂　径0.5cm未満の礫少量入る

近世包含層（第2層・第3層）
8）灰色　2.5Y5/1　細砂～粗砂　径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
9）灰色　5Y5/1　粗砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫微量入る　しまりやや悪い
10）灰色　5Y5/1　微砂～細砂に　黄褐色　2.5Y5/4　微砂ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る　酸化鉄斑沈着
11）灰色　7.5Y5/1　粗砂まじり細砂に　にぶい黄色　2.5Y6/4　細砂ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い

溝26埋土
12）灰色　5Y6/1　微砂～細砂に　灰オリーブ色　5Y5/2　砂礫筋状に入る
径2cm未満の礫多量入る　しまりやや悪い

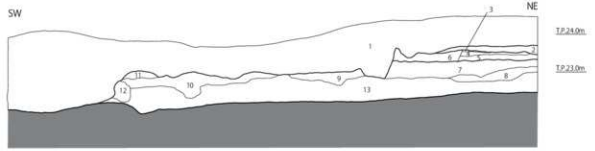
溝27埋土
13）暗灰黄色　2.5Y4/2-5/2　粗砂～微砂　下位に24）層ブロックのまじりこみあり
しまりやや悪い
14）灰色　5Y6/1-5/1　微砂～細砂　径1cm未満の礫少量入る
15）灰色　7.5Y6/1　細砂～粗砂に　浅黄色　2.5Y7/3　細砂ブロック10%程度入る
16）緑灰色　10GY6/1　微砂～粗砂に　黄褐色　2.5Y5/6　粗砂僅かに入る
径0.5cm未満の礫入る　しまりやや悪い

中世包含層（第4層）
17）灰色　5Y5/1　細砂　径2cm未満の礫入る　しまりやや悪い
18）黄灰色　2.5Y6/1　細砂～粗砂と　灰色　7.5Y6/1　細砂～粗砂の互層
径2cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い
19）緑灰色　10G6/1　粘土に　浅黄色　5Y7/3細砂ブロック10%程度入る　しまり良い
20）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり微砂　径1cm未満の礫少量入る
21）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂～粗砂に
青灰色　5BG6/1　微砂～細砂ブロック15%程度入る
径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い
22）オリーブ黒色　5Y3/1　細砂　直径1cm未満の礫微量入る
23）緑灰色　7.5GY7/1　細砂に　黄灰色　2.5Y6/1　細砂～粗砂筋状に入る
しまりやや悪い
24）オリーブ灰色　2.5GY7/1　粘土に
明黄褐色　10YR6/6　シルトブロック30%程度入る
25）灰オリーブ色　5Y4/2　砂礫　径4cm未満の礫少量入る　しまり悪い
径1cm未満の礫多量入る
26）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじり細砂　径1.5cm未満の礫少量入る

落込み9埋土
27）灰色　5Y4/1　粘土質シルトまじり微砂　径0.3cm未満の礫少量入る　しまり悪い
28）黄灰色　2.5Y4/1　微砂～細砂　径0.3cm未満の礫入る　植物遺体少量入る
しまりやや悪い
29）灰オリーブ色　5Y4/2　砂礫　径4cm未満の礫少量入る　径1cm未満の礫多量入る
30）オリーブ黒色　5Y3/1　細砂　直径1cm未満の礫微量入る
31）青灰色　5BG6/1　粘土に
にぶい黄色　2.5Y6/4　微砂～細砂ブロック30%程度入る
径0.3cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い

縄文時代以前堆積層
32）オリーブ灰色　2.5GY7/1　粘土に
明黄褐色　10YR6/6　シルトブロック30%程度入る　しまり良い
33）青灰色　5BG6/1　粘土に　にぶい黄色　2.5Y6/4　微砂～細砂筋状に入る
オリーブ灰色　2.5GY6/1　細砂ブロック入る　径0.3cm未満の礫少量入る
34）オリーブ黒色　5Y3/1　粘土　しまり良い

第４調査区　南壁断面



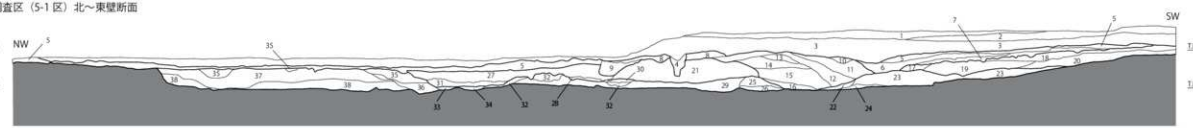
現代盛土
1）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト～粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る

近世包含層（第１面）
2）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫少量入る

中世包含層（第２面）
3）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
4）黄褐色　2.5Y5/3　細砂まじり細砂　径1.0cm未満の礫少量入る
5）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
6）オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂まじり細砂と　灰色　7.5Y5/1　微砂の互層
径3cm未満の礫微量入る

溝10埋土
7）灰黄色　2.5Y6/2　微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
8）灰色　10Y5/1　細砂～細砂　粘土質シルトに　同色粘土ブロック入る
径0.5cm未満の礫入る
9）灰色　7.5Y4/1～5/1　細砂まじり微砂に　同色粘土質シルトブロック入る
径0.5cm未満の礫入る
10）明褐灰色　10G7/1　シルトに　灰色　7.5Y4/1　細砂まじり微砂20%程度入る
11）黄褐色　2.5Y5/3　細砂～細砂
12）灰色　7.5Y4/1～5/1　砂質シルト～微砂
13）黄灰色　2.5Y5/1　微砂～細砂に　にぶい黄色　2.5Y6/3　砂微少量入る

第５調査区（5-1 区）北～東壁断面

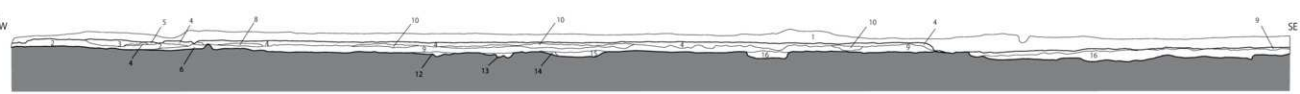


現代耕作土・整地土
1）にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト　径2cm未満の礫中量入る　しまり悪い
2）明褐色　7.5YR5/6　細砂まじり粘土質シルト　直径5cm未満の礫少量入る
3）明褐色　7.5YR5/6　細砂まじりシルトに　浅黄色　10YR8/3　粘土ブロック30%程度入る
明赤褐色　5YR5/8　粘土ブロック10%程度入る　径2cm未満の礫入る　しまり悪い　樹根入る
4）にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト～シルトまじり細砂　径1cm未満の礫少量入る

中近世包含層（第１面）
5）にぶい黄色　2.5YR6/4　細砂まじり砂質シルト　樹根入る　径1cmの礫少量入る　しまり悪い
6）黄褐色　10YR5/8　細砂まじり粘土質シルトに　明褐色　7.5YR5/6　粘土ブロック20%程度入る
径2cm未満の礫少量入る　樹根入る　しまり悪い
7）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルト　直径1cm未満の礫少量入る　樹根入る　鉄質沈着
8）にぶい橙色　10YR6/4　細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫多量入る
9）灰黄褐色　10YR6/2　細砂ブロックシルト　径2cm未満の礫多量入る
10）明褐色　7.5YR6/8　粘土質シルトに　11）層ブロック20%程度入る　径3cm未満の礫少量入る
11）褐色　10YR4/6　粘土質シルトに　明褐色　7.5YR5/6　粘土ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
12）明黄褐色　10YR6/6　細砂～細砂まじりシルトに　橙色 7.5YR6/8 粘土ブロック10%程度入る
灰白色　10YR7/1　粘土ブロック20%程度入る　褐灰色 10YR5/1　細砂ブロック10%程度入る
径3cm未満の礫入る
13）明黄褐色　10YR7/6　粘土質シルト　径1cm未満の礫多量入る
浅黄橙色　10YR8/3　細砂ブロック20%程度入る
14）にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質シルトに　灰白色　10YR7/1　細砂の混入あり
15）層ブロック10%程度入る　浅黄色　2.5YR8/3　粘土ブロック20%程度入る　径1cm未満の礫入る
15）明黄褐色　10YR6/6　細砂に　灰白色　粘土ブロック20%程度入る
明黄褐色　10YR6/6　粘土ブロック20%程度入る　径1.5cm未満の礫少量入る
16）明黄褐色　10YR6/8　細砂まじり粘土質シルトに　にぶい黄橙色　10YR6/3　粘土ブロック10%程度入る
灰褐色　7.5YR6/2　細砂ブロック10%程度入る
17）明黄褐色　10YR6/6　粘土～粘土質シルト
18）明黄褐色　10YR6/6　細砂まじり粘土質シルト　径5cm未満の礫少量入る　やや軟質
19）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
20）明黄褐色　10YR6/6　細砂まじり粘土質シルトに　下層ブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る
21）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂まじりシルト　径5cm未満の礫少量入る　しまり悪い

中世包含層（第２面）
22）黄褐色　2.5Y5/4　細砂まじりシルトに　地山ブロック10%程度入る　炭化物入る
23）明黄褐色　10YR6/8　細砂まじり粘土質シルト　白色粒多量入る　下位にむかって淡色化　しまり良い
24）明褐色　7.5YR5/6　細砂まじり粘土に　灰白色　5Y7/2　粘土ブロック20%程度入る　しまり良い
25）黄褐色　10YR5/8　細砂まじり粘土質シルト　しまり悪い
26）黄褐色　10YR5/8　粘土に　明褐色　7.5YR5/6　粘土ブロック10%程度入る
27）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂まじりシルトに　下層ブロック20%程度入る
径2cm未満の礫少量入る　白色粒少量入る　しまり悪い
28）にぶい黄橙色　10YR6/4　シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　粘土ブロック10%程度入る
径0.5cm未満の礫多量入る　しまり悪い
29）明黄褐色　10YR6/6　粘土質シルトに　下層ブロック20%程度入る　径3cm未満の礫少量入る
30）にぶい黄橙色　10YR6/4　粘土質シルト　白色粒少量入る　しまり良い　樹根入る
31）明黄褐色　10YR6/6　粘土質シルトに　下層ブロック20%程度入る　しまり悪い
32）明黄褐色　10YR6/4　シルト　径0.5cm未満の礫多量入る　しまり悪い
33）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂まじり粘土質シルト
径4cm未満の礫少量入る　にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土ブロック20%程度入る　樹根入る
34）明黄褐色　10YR6/6　細砂まじり粘土質シルト　白色粒少量入る　直径1cm未満の礫少量入る
35）浅黄色　2.5Y7/4　細砂まじりシルトに　灰黄色　2.5Y7/2　シルトブロック10%程度入る
径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
36）黄褐色　10YR5/8　細砂まじり粘土質シルト　しまり悪い
37）黄褐色　10YR5/8　粘土に　明褐色　7.5YR5/6　粘土ブロック10%程度入る
38）にぶい黄褐色　10YR5/3　細砂まじりシルト　径1cm未満の礫多量入る

第５調査区（5-3 区）北壁断面

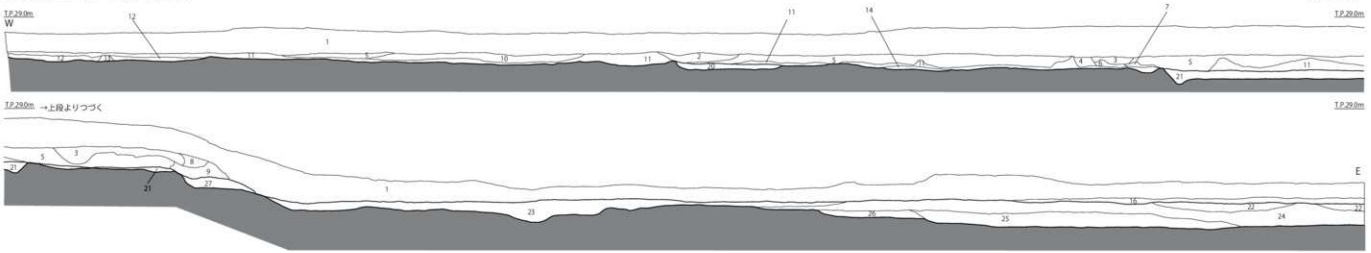


現代耕作土
1）黄褐色　10YR5/1　粘土まじり細砂　径1cm未満の礫少量入る

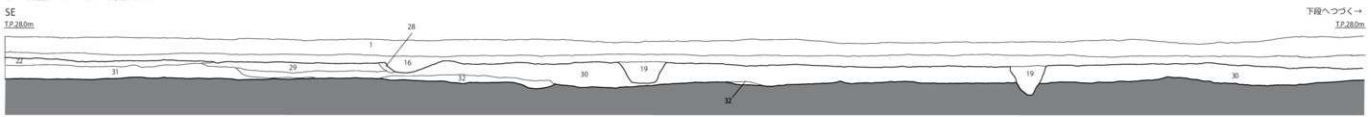
近世包含層（第１面）
2）明黄褐色　10YR6/8　粘土まじり細砂　径1cm未満の礫少量入る
3）明黄褐色　10YR6/6　粘土　径0.5cm未満の礫少量入る
4）にぶい黄褐色　10YR5/4　粘土まじり細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
5）褐灰色　10YR4/1　細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
6）オリーブ褐色　2.5Y4/4　微砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫入る
7）オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂まじり細砂に　褐色　10YR4/4　細砂入る
径3.0cm未満の礫多量入る
8）黄褐色　2.5Y5/4　微砂まじり細砂　径1cm未満の礫少量入る
9）黄褐色　2.5Y5/3　微砂まじり細砂　径1cm未満の礫少量入る
10）褐色　10YR4/4　微砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
11）明黄褐色　10YR6/6　微砂と　オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂まじりシルトの混合層
径3cm未満の礫多量入る
12）明黄褐色　7.5YR5/6　粘土まじり細砂
13）黄褐色　10YR5/6　微砂～細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
14）褐色　10YR4/4　微砂まじり細砂　径2cm未満の礫多量入る
15）にぶい黄褐色　10YR5/4　粘土まじり細砂　径2cm未満の礫少量入る
16）明黄褐色　10YR6/6　粘土まじり微砂

第 21 図　調査区断面図（９）

第 5 調査区（5-2 区・5-3 区）北壁断面



第 5 調査区（5-3 区）南壁断面



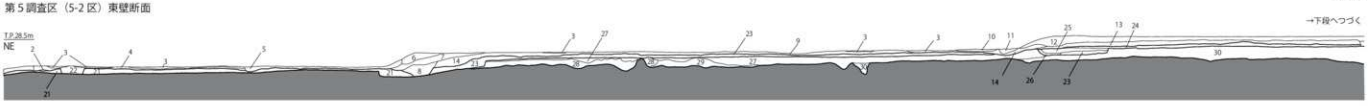
近現代耕作土・整地土
1）黄褐色　10YR5/8　細砂に　橙色　7.5YR6/8　微砂ブロック入る
2）黄橙色　10YR7/8　砂礫　径2cm未満の礫多量入る
3）橙色　7.5YR6/8　細砂まじり細砂
4）黄橙色　7.5Y7/6　粗砂まじり細砂
5）橙色　7.5YR6/8　細砂
6）黄橙色　7.5YR6/8　微砂
7）にぶい黄橙色　10YR6/4　粗砂まじり細砂　径1cm未満の礫微量入る
8）にぶい黄橙色　10YR6/4　粗砂まじり微砂に
　にぶい黄橙色　10YR7/3　粘土ブロック入る　径3cm未満の礫少量入る
9）にぶい黄色　2.5Y6/3　粗砂まじり細砂　露径1cm未満の礫少量入る
10）明黄褐色　10YR7/6　微砂
11）黄褐色　2.5Y5/3　細砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫微量入る　鉄斑沈着
12）明褐色　7.5YR5/8　粗砂まじり細砂　径0.5cm未満の礫少量入る
13）明黄褐色　10YR7/6　細砂
14）橙色　7.5YR6/8　細砂
15）にぶい黄橙色　10YR6/4　微砂
16）明黄褐色　10YR6/8　細砂
17）黄褐色　10YR5/8　微砂
18）黄褐色　10YR5/8　微砂
19）黄褐色　10YR5/6　細砂

古墳時代後期～古代包含層
20）にぶい橙色　7.5YR6/4　細砂まじりシルト～シルト

竪穴住居 6 埋土
21）にぶい橙色　7.5YR6/4　細砂

古墳時代以前堆積層（地山）
22）明褐色　7.5YR5/8　シルトまじり微砂
23）明黄褐色　10YR6/6　砂礫　露径1.5cm未満の礫多量入る
24）黄橙色　10YR8/6　砂礫　径1cm未満の礫多量入る　鉄分沈着
25）明褐色　7.5YR5/6　粗砂まじり細砂　径2cm未満の礫多量入る
26）にぶい黄橙色　10YR7/4　細砂　径0.5cm未満の礫入る
27）明黄褐色　2.5Y7/6　微砂　径3cm未満の礫少量入る
28）明黄褐色　2.5Y7/6　細砂～粗砂　径15cm未満の礫少量入る
29）黄褐色　10YR5/6　微砂
30）黄褐色　10YR5/6　細砂
31）橙色　7.5YR6/6　粗砂まじり細砂
32）黄褐色　10YR5/8　微砂　径1cm未満の礫微量入る

第 5 調査区（5-2 区）東壁断面



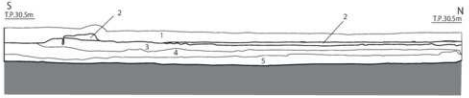
近現代耕作土・整地土
1）黄褐色　10YR5/8　細砂に　橙色　7.5YR6/8　微砂ブロック入る
2）明黄褐色　10YR6/8　細砂
3）オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂まじり細砂
4）にぶい黄色　2.5Y6/4　微砂まじり細砂
5）暗灰黄色　2.5Y4/2　微砂まじり細砂　径1cm未満の礫入る
6）明褐色　7.5YR5/6　粗砂まじり細砂
7）黄褐色　10YR5/6　細砂　径1cm未満の礫少量入る
8）黄褐色　10YR5/6　微砂まじり細砂
9）橙色　7.5Y6/8　細砂　径1cm未満の礫入る
10）オリーブ黒色　5Y3/2　細砂まじり微砂
11）黄褐色　2.5Y5/2　細砂　径1cm未満の礫入る
12）灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじりシルト
13）明褐色　7.5YR5/6　細砂まじりシルト
14）黄褐色　10YR5/6　シルトまじり細砂に　明褐色　7.5YR5/8　微砂ブロック入る
15）明褐色　7.5YR5/8　細砂に　円色粘土質シルトブロック少量入る
16）灰黄色　2.5YR7/2　微砂まじり粘土質シルト
17）褐色　2.5YR4/6　シルトまじり細砂に　灰赤色　2.5YR5/2　微砂ブロック入る
18）明黄褐色　10YR6/8　シルトまじり細砂に　明赤褐色　5YR5/8　微砂ブロック入る
19）黄褐色　10YR5/6　シルトまじり細砂に　褐色　2.5YR4/6　シルトまじり細砂ブロック入る
20）橙色　2.5YR7/6　粘土質シルトまじり細砂

近世包含層（第 1 層）
21）明褐色　7.5YR5/8　微砂まじり細砂　径1cm未満の礫入る
22）黄褐色　10YR5/6　細砂
23）明褐色　7.5YR5/6　微砂まじり細砂
24）黄橙色　10YR7/6　細砂まじりシルト
25）明黄褐色　10YR7/6　細砂まじりシルト
26）黄褐色　10YR5/6　細砂まじり微砂

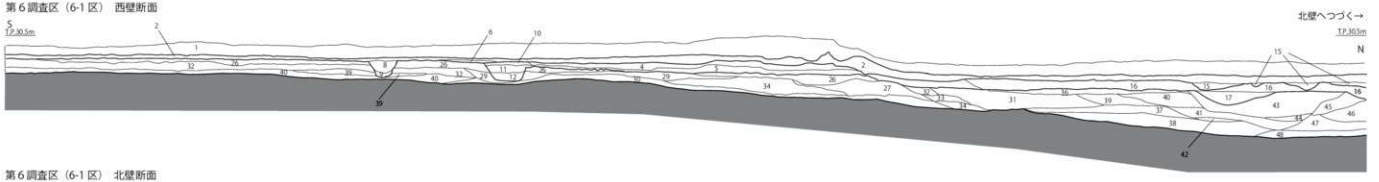
古墳時代以前堆積層（地山）
27）明褐色　7.5YR5/8　シルトまじり微砂
28）黄色　7.5Y7/8　微砂に　明褐色　7.5YR5/8　シルトブロック入る
29）黄橙色　10YR5/8　細砂　0.5cm未満の礫多量入る
30）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト　植物葉根痕跡あり

第 22 図　調査区断面図（10）

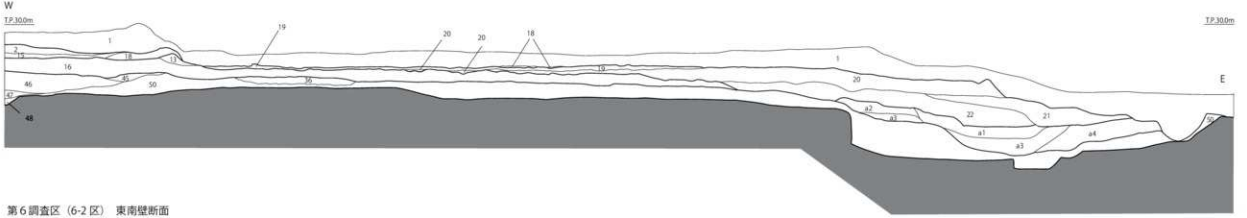
第６調査区（6-2 区） 西壁断面



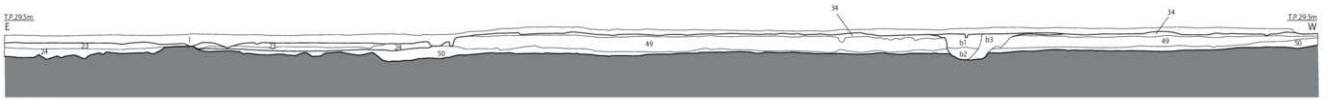
第６調査区（6-1 区） 西壁断面



第６調査区（6-1 区） 北壁断面



第６調査区（6-2 区） 東南壁断面



機械掘削層
1）暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　直径 1cm 未満の礫少量入る　しまり悪い（現代耕作土）

近世包含層（第１層）
2）明黄褐色　10YR6/6　シルトに　灰白色　10YR7/1　シルトブロック入る
　径 0.5cm 未満の礫少量入る
3）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト　マンガン粒入る
4）にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土まじりシルトに明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック入る
5）灰白色　5Y7/1　粗砂まじりシルト
6）明黄褐色　10YR6/8　細砂まじりシルト
7）明黄褐色　10YR7/6　粗砂まじりシルト
8）にぶい黄橙色　10YR7/4　細砂まじりシルト
9）黄色　2.5Y8/6　細砂まじりシルト
10）灰白色　10YR8/2　細砂まじりシルト
11）黄橙色 10YR7/8　細砂まじりシルトに　明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック入る
12）明黄褐色　10YR7/6　砂質シルト
13）にぶい黄橙色　10YR6/4　細砂まじりシルト
14）にぶい黄橙色　10YR6/4　細砂まじりシルト
15）明黄褐色 10YR6/8　細砂まじりシルト
16）にぶい黄色　2.5Y6/4　細砂まじりシルト
17）明黄褐色　10YR7/6　粗砂まじりシルト
18）にぶい黄橙色　10YR6/4　細砂まじりシルト
19）明黄褐色　10YR7/6　細砂まじりシルト　径 3cm 未満の礫入る
20）明黄褐色　10YR6/6　粗砂シルト
21）明黄褐色　10YR6/6　粗砂まじりシルト　径 3cm 未満の礫少量入る
22）明黄褐色　10YR6/8　粗砂

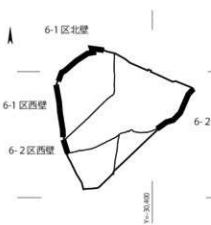
中世包含層（第２層）
23）にぶい黄橙色　10YR6/4　細砂まじりシルト
24）黄橙色　10YR7/8　細砂まじりシルト

古墳時代以前堆積層（地山）
25）にぶい黄橙色　10YR7/3　細砂まじりシルト　径 3cm 未満の礫少量入る
26）黄褐色　10YR5/8　細砂まじりシルト
27）明黄褐色　10YR6/6　粗砂まじりシルト　径 3cm 未満の礫多量入る
28）にぶい黄橙色　10YR7/3 細砂まじりシルト　3cm 未満の礫入る
29）明黄褐色　10YR7/6　シルトまじり粗砂　3cm 未満の礫多量入る
30）褐色　10YR4/6　粗砂まじりシルト
31）黄褐色　10YR5/6　シルトまじり粗砂　礫少量入る
32）明黄褐色　10YR6/6　シルトまじり粗砂　礫多量入る
33）にぶい黄橙色　10YR7/3　細砂まじりシルト
34）明黄褐色　10YR7/6　粗砂～シルト　礫多量入る
35）黄褐色　10YR5/8　シルト
36）褐色　10YR4/6　粗砂まじりシルト
37）明黄褐色　10YR6/8 シルト
38）明黄褐色　10YR6/6　シルトまじり粗砂
39）明黄褐色　10YR6/6　シルト
40）黄褐色　10YR5/8　シルト
41）明黄褐色　10YR6/6　粗砂～シルト　礫少量入る
42）黄褐色　10YR5/8　粗砂まじりシルト
43）にぶい黄褐色　10YR5/4　シルトまじり粗砂　5cm 未満の礫多量入る
44）黄褐色　10YR5/6　シルトまじり粗砂　5cm 未満の礫多量入る

45）明黄褐色　10YR7/6　粗砂まじりシルト
46）黄褐色　10YR5/8　シルトまじり粗砂　5cm 未満の礫多量入る
47）明黄褐色　10YR6/8　シルトまじり粗砂
48）褐色　10YR4/6　シルトまじり粗砂
49）明黄褐色　10YR6/6　シルトまじり粗砂　礫やや少量入る
50）黄橙色　10TR7/8　シルトまじり粗砂

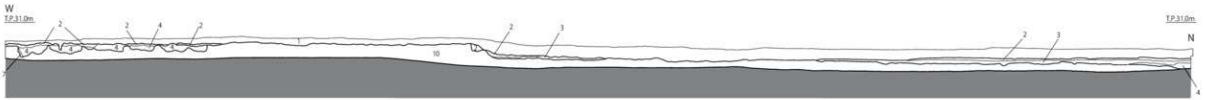
谷埋土
a1）褐色　10YR4/6　粗砂まじりシルト　径 1 cm 未満の礫少量入る
a2）褐色　10YR4/6　シルトまじり粗砂　径 0.5cm 未満の礫少量入る
a3）黄褐色　10YR6/8　シルトまじり粗砂　上位に粗砂の流入あり
a4）にぶい黄橙色　10YR7/3　細砂まじりシルト　径 0.5cm 未満の礫少量入る

近世遺構埋土
b1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト
b2）にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土まじりシルトに明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック入る
b3）にぶい黄色　2.5Y6/4　粘土まじりシルトに灰白色　5Y7/1　粗砂まじりシルトブロック入る



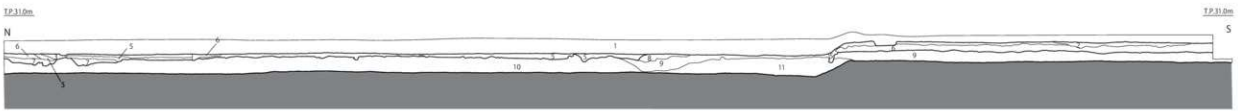
第 23 図　調査区断面図（11）

第 7 調査区（7-1 区）北壁断面

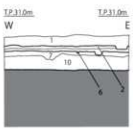


第 7 調査区（7-1 区）西壁断面

第 7 調査区 中央トレンチ断面①



第 7 調査区 中央トレンチ断面②



近現代耕作土・表土

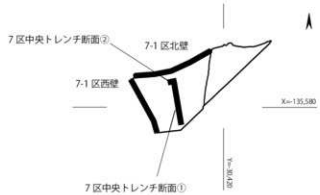
1）褐灰色　10YR4/1　砂質シルト　径2cm未満の礫入る

近世包含層（第 1 層）

2）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに　褐灰色　10YR6/1　粗砂ブロック10%程度入る　しまり良い
3）黄褐色　10YR5/8　粗砂まじり粘土質シルトに　褐灰色　10YR6/1　細砂20%程度鳴の目状に入る
　径0.5cm未満の礫少量入る　上面に乾痕あり
4）にぶい黄色　2.5Y6/4　粗砂まじり粘土質シルト～粘土　灰色　細砂鳴の目状に入る
5）灰白色　2.5Y7/1　粗砂まじり粘土に　明赤褐色　5YR5/8　粘土ブロック入る　細かい乾痕あり　直径0.5cm未満の礫僅かに入る
6）明黄褐色　2.5Y7/6　色細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫微量入る　5）層ブロック10%程度入る
7）10）層と8）層の混合層　しまり悪い

古墳時代以前堆積層（地山）

8）灰白色　5Y7/2　粗砂まじり粘土質シルト　径2cm未満の礫　濁状に多量入る
9）灰黄色　2.5Y6/2-6/4　粘土に　粗砂ブロック20%程度入る　径2cm未満の礫少量入る
10）灰白色　5Y7/2　シルト～粘土質シルトに　赤褐色　5Y4/6　粘土ブロック少量入る　乾痕あり
11）明黄褐色　10YR6/6　粗砂まじり粘土質シルトに　灰白色砂礫ブロック30%程度入る　しまり悪い



第 24 図　調査区断面図（12）

第４章　調査成果（遺構）

第１節　第１調査区の調査成果

１．調査の概要

第１調査区は、調査区北側の丘陵斜面から谷地の北半部において設定した。東半部の調査では、既往の調査において発見されている弥生時代後期～古墳時代中期の集落が、どの程度の広がりを見せるかが注目された。

一方、西半部では、当地の水田開発の原初とその変遷をつかむことに主眼を据えた。当該地の水田開発は、第１調査区の南辺付近を流れる小川水路の変遷と、密接な関係にある。この水路は、本来、小川へ流れ込む小河川のひとつを農業用水路として整備したものであり、周辺田畑への給水源として重要な役割を果たしている。今回の調査では、この流れが灌漑用水路として整えられる過程をたどることができた。

第１調査区では、小地区によって多寡があるものの、概ね３～４面の遺構面を検出することができた。確認できた遺構面は、古墳時代初頭から近世までであり、調査区東半部では古墳時代中期～古代、中世、中世末期～近世初頭の計３面、調査区西半部では、古代初頭、中世前期、中世後期、中世末期～近世初頭の計４面である。

また、第１調査区からは、遺構および包含層より、縄文時代早期の土器片を最古として、さまざまな遺物が出土した。これらのうち、実測図の作成が可能なものや特徴的なものについては、、次章に実測図を掲げ、解説した。

２．第１調査区東半部　中世末期～近世初頭遺構面

1-1 区・1-2 区双方において検出した遺構面のうち、中近世に相当する遺構図をあわせ、第 25 図に示した。

1-1 区は、既述のとおり、丘陵地斜面に設けた調査区である。削平により丘陵地斜面が切り崩されたため、なだらかな斜面地がテラス状に南へ突き出た景観を呈している。この斜面地は地山土が露出した状態である。重機によって地表面に堆積した腐葉土を除去したところ、近世～近代を通じて形成された水田耕作土壌が確認された。この堆積を除去すると、近世包含層とみられるシルト層を確認した。

近世包含層を除去した面において、中世末期～近世初頭の遺構面を検出した。この遺構面は基本的に水田耕作面であり、北西－南東方向に鋤溝が並ぶ状況が認められる。このほか 1-1 区では、井戸、土坑、溝、落込み等の遺構を検出した。

1-2 区は、第１調査区東半部のうち、1-1 区を除いた部分である。崖面の下端から小川水路までの範囲にあたる。今回の調査ではこの小川水路を含めた範囲を調査区とした。

調査は、重機によって現代耕作土および用水路内に溜まった泥土の除去から開始した。現代耕作土を除去したところ、崖下端より８～ 12 mの範囲では、0.3 m程度の掘削において緑灰色粘土質シルトを主体とする地山土が顔を出した。また、それより南東では、近世包含層以下の残存が確認できた。

1-2 区では、第１層を除去して検出した面において、中世末期～近世初頭の遺構面を検出した。掘削

を進めると、崖下端より 8 ～ 12 mの地点に南東方向へ下がる段があらわれた。また、段の南東側に、段とほぼ平行してのびる畦畔、直交する小畦畔、耕作痕跡である鋤溝群を確認した。

しかし、段より北西側には顕著な遺構が認められず、地山土が平坦に続く状況がみられた。この範囲は、丘陵斜面の切り崩しとともに、表土および包含層が削平された部分と考えられる。すなわち、原地形では、斜面の裾がこの段付近まで延びていた可能性を示している。

溝 1　溝 1 は、1-1 区南側縁辺を直線に延びる溝である。残存長 22 m、最大幅 0.4m、最大深度 0.4m を測る。断面形状は隅丸方形ないし U 字形を呈する。埋土は、明緑灰色粘土まじり細砂～粗砂と黄褐色粗砂～微砂の混合層である。

調査区北辺より崖面付近まで続き、遺構面の断絶とともに消失していることから、少なくとも崖面の切り崩しがおこなわれる以前に掘削され、稼動していた施設であると考えられる。耕作面に伴うことから、水田の用水路として機能した可能性が高い。埋土からは、青磁碗破片（14 世紀）、染付片 1 点（18 世紀）が出土した。

土坑 1　土坑 1 は、1-1 区西半部において検出した土坑である。長径 2.4m、短径 1.5 mの楕円形を呈しており、南西－北東方向に長径軸をもつ。深度は 0.25m、断面形状は浅い皿形である。埋土は、上下に分層できる。上層は、第 1 層である灰オリーブ色砂質シルト、下層は黄褐色微砂および炭化物が細かくブロック状に入る灰オリーブ色粘土質シルト～シルトまじり細砂である。埋土からは、土師器の細片が出土した。

現地調査では、下面において検出した竪穴住居（古墳時代中期）との関連を検証するため、遺構内より採取した炭化物について、放射性炭素年代測定（AMS 法）をおこなった。その結果、calA.D.1730-1810 の年代を得ており、竪穴住居との関連性は否定されている。遺構の用途および性格は不明である。

井戸 1　井戸 1 は、調査区東半部において検出した井戸である。素掘りの井戸で、掘り方と水溜部（ます）の形状が明確に残る。水溜部は直径 1.2 ～ 1.4 mのいびつな円形を呈している。掘り方は長径 2.5m、短径 1.65 mの楕円形で、水溜部は、掘り方の西側に寄って設けられている。断面形状は筒型、深度は 1.5 m以上を測る。水溜部の埋土は、および灰色粘土まじり細砂とオリーブ褐色微砂ブロックの混合層、掘り方埋土は、白色礫を多量に含む黄褐色粘土質シルトを主体とする。

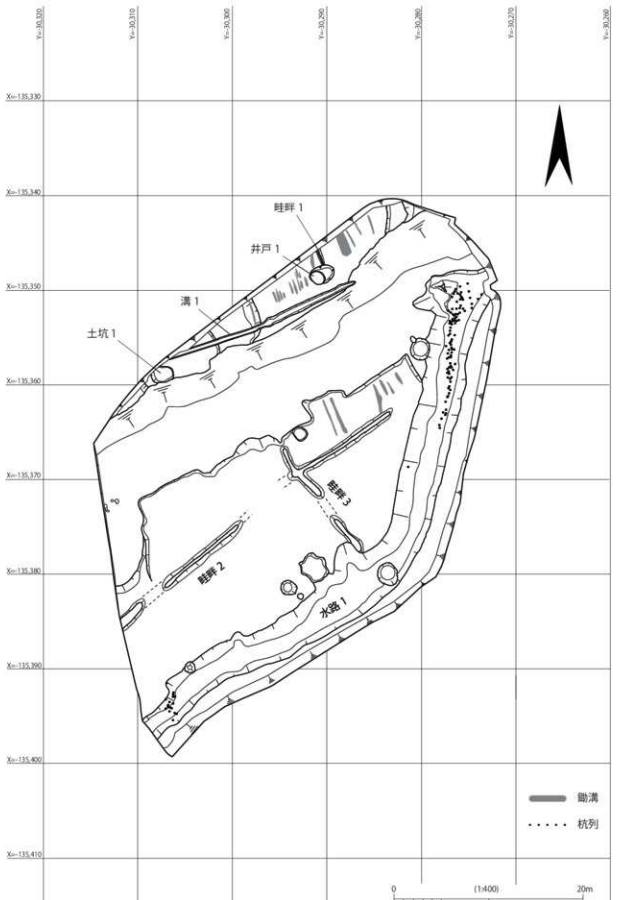
この井戸は、下面において発見された竪穴住居（古墳時代）を掘り込んで作られている。このため、掘り方埋土からは、古墳時代中期に遡る土師器の細片が多数出土した。

畦畔 1　畦畔 1 は、井戸 1 付近において検出した小畦である。検出残存長 1.8 m、最大幅 0.3m、調査区北壁断面において確認できた最頂部の残存高は 0.2 mである。方向は、周辺の鋤溝と同じである。埋土は、灰オリーブ色微砂まじりシルトに、にぶい黄褐色細砂ブロックが入る。遺物の出土は、認められなかった。

畦畔 2・3　畦畔 2 は、調査区のほぼ中央を南西から北東方向へ横断してのびる水田畦畔である。畦畔 3 は、調査区中央部を北西－南東方向にのびる小畦畔であり、畦畔 2 と直交する。周辺の鋤溝群は、畦畔 3 と並行する方向性をもつ。畦畔 2 の残存長は断続的に 37.0m、基部の幅は 0.4 m程度を測る。

畦畔 3 はやや細く、残存長は断続して 14.0 m、基部の幅は 0.25 ～ 0.3 mを測る。北東側の段とは、角度を若干違えるが、地形に即して設けられた、水田に伴う畦畔であると考えられる。

水路 1　水路 1 は、既述の小川水路と重なって流れる、近世期の水路である。部分的に近世期の堆積が認められるため、便宜上、水路 1 と付番した。埋土は礫まじり灰色粘土で、この水路に切られた井戸が



第 25 図　第 1 調査区東半部　中世末期～近世初頭遺構面　全体図

2基存在する。堆積状況を見る限り、東南隅の屈曲部から下流は近世以降に付け替えがおこなわれたと考えられる。本来は、屈曲せず、第2調査区へと続き、調査区東側を流れる小川へと続いていたことが、第2調査区の調査成果から明らかとなった（第2節参照）。

周辺の水流が一手に集まることから、古来より、水量は多かったものと推測される。この埋土からは、須恵器（5～7世紀）、土師器（7世紀・13～14世紀）、瓦器（13世紀）、陶器（信楽焼＝中世）、磁器（18世紀）が出土した。

3．第1調査区東半部　中世の遺構

1-1区では、部分的に残存する中世包含層を除去した面において、古墳時代～中世までの遺構面を検出した。ここでは、このうち中世期に属する遺構について記述する。

また、1-2区では、中世包含層を除去した面において、中世遺構面を検出した。この面では、細かく区画された水田跡と土器だまりを検出した。畦畔を確認することはできなかったが、地形に沿って南東方向へ降りる階段状に整形された水田を検出することができた。遺構面全体図は、第26図に掲げた。

土坑2　土坑2は、1-1区西半部において検出した土坑である。北西－南東方向に長い楕円形を呈するが、北西端は調査区外へと続く。残存する規模は、長径2.2 m、最大幅は2.0 m、最大深度0.35 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰オリーブ色粘土質シルトまじり細砂と灰黄色粗砂まじりシルトを主体とし、ともに微砂ブロックを20％程度含んでいる。性格および用途は不明である。埋土からは、古墳時代の須恵器・土師器および瓦器椀（13世紀）の破片が出土した。

土坑3　土坑3は、1-1区東半部において検出した土坑である（第27図）。調査区外へと続くため、平面形状は不確定であるが、長径4.0 m、短径2.0 m程度の楕円形に復元できる。深度は0.2～0.3 m、西南隅が落ち込むため、断面形状は不定形である。埋土は、ほぼ均質で、径1㎝未満の礫を多量に含む黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。性格、用途は不明。遺物の出土は認められなかった。

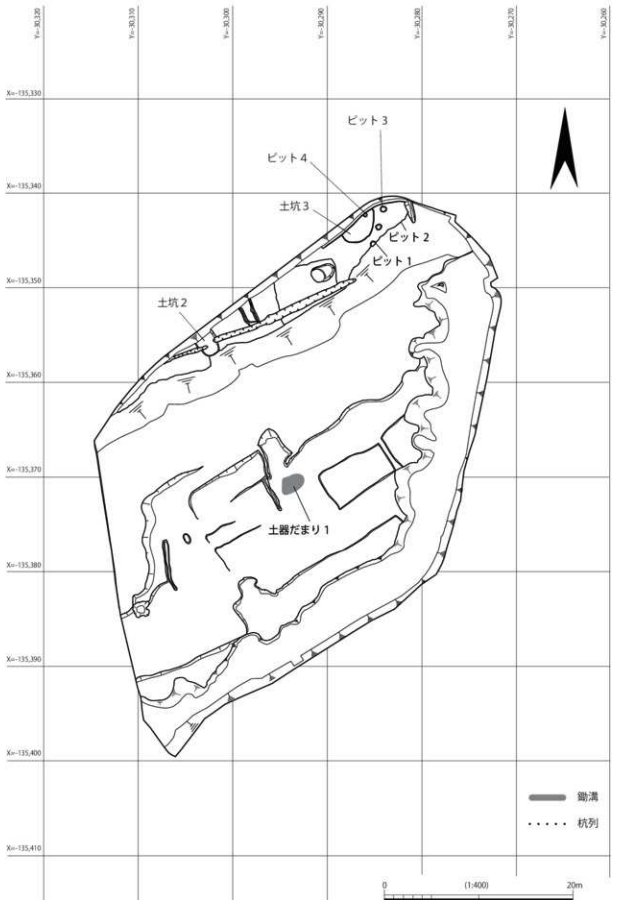
ピット1　ピット1は、土坑2の南東側に位置する柱穴である（第27図）。崖面に接しており、約3分の1を削損する。平面形状は直径0.66 m、最大深度は0.21 mを測る。掘り方中央よりも北寄りに、柱痕跡を確認することができた。柱痕跡の直径は、0.18 mである。埋土は、径1㎝未満の礫を少量含む、にぶい黄褐色細砂～微砂を主体とする。柱痕跡には褐色微砂が堆積していた。

このピットは、後述するピット2・3とともに一列に並ぶと考えられる。この場合、方向軸は方位北より20度東へ振る。掘り方埋土より、土師器皿の破片（12～13世紀？）が1点出土した。

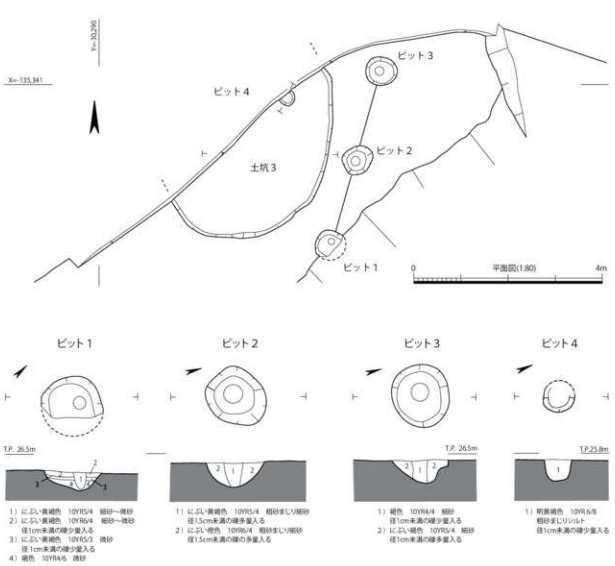
ピット2　ピット2は、ピット1の北側に並ぶ柱穴である（第27図）。直径0.6～0.65 mの歪んだ円形を呈する。掘り方断面は椀形、最大深度は0.26 mを測る。掘り方のほぼ中央に柱跡痕があり、直径0.2mを測る。埋土は、掘り方部分がにぶい橙色を呈する粗砂～細砂、柱痕跡部分がにぶい黄褐色を呈する粗砂～細砂である。ともに径1.5㎝未満の礫を多量に含む。出土遺物は認められなかった。

ピット3　ピット3は、ピット2の北側に位置する柱穴である（第27図）。長径0.66 m、短径0.6 mの楕円形を呈しており、東西方向に若干長い。断面形状は不定形、最大深度は0.24 mを測る。柱痕跡は、掘り方中央よりも西側に寄っており、直径0.16 mを測る。埋土は、掘り方部分が径1㎝未満の礫を多量に含むにぶい褐色細砂、柱穴部分が少量の礫を含む褐色細砂である。遺物の出土はなかった。

ピット4　ピット4は、土坑3上において検出した遺構である（第27図）。切り合い関係から、土坑3が埋没した後に掘削されたものであることがわかる。北西隅が壁断面にかかるが、平面形状は、直径



第 26 図　第 1 調査区東半部　中世遺構面　全体図

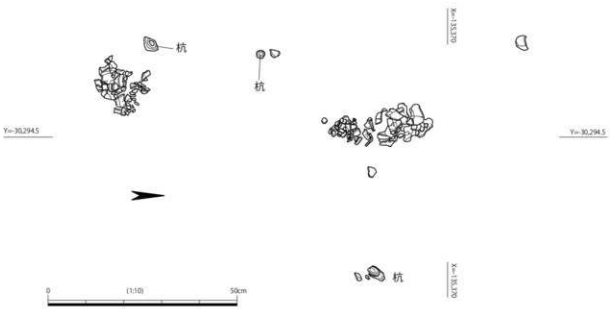


第 27 図　第 1 調査区（1-1 区）　遺構平面断面図

0.32 mの円形であると推定される。断面形状は湯呑形、最大深度は 0.22 mを測る。埋土は明黄褐色粗砂まじりシルトで、径 1 ㎝未満の礫を少量含む。連続するピットが見当たらないため、柱列となるかどうかは不明である。遺物の出土はなかった。

土器だまり 1　調査区中央の段下において出土した、土器だまりである（第 28 図）。長さ 2.5 m、幅 1.5 m程度の範囲内に、土器片が折り重なるようにまとまって出土した。そのほとんどが、土師器甕（庄内式）の細片であり、布留式高杯の脚部が 1 点混じる。庄内甕はすくなくとも 4 個体分が確認できるが、欠損箇所が多く、全体を復元するまでの残存量はない。また、表面に摩滅を受けたものが多い。図化が可能なもの 1 点について、次章第 90 図に掲げた。

遺物は、包含層である第 2-2 層内に埋没するかたちで出土した。遺構面からは明らかに浮きあがった



第 28 図　土器だまり 1　遺物出土状況　実測図

状態である。周辺は、中世前期に営まれた水田が広がるのみであり、関連するような遺構は認められない。第 2-2 層は、中世後期の堆積と考えられることから、少なくとも、土器だまり出土の遺物は、古墳時代前期に使用された原位置を保つとは考えにくい。また、他所からの混入品であるとの解釈は、周辺に同様の土器だまりが確認できていないことから難しい。おそらく、中世水田を開墾するにあたり、地中から掘り出されたものが、まとめて廃棄、残置された痕跡ではないかと考えている。

4．第 1 調査区東半部　古墳時代中期～古代の遺構

第 1 調査区東半部の調査では、古墳時代中期～古代にかけて営まれた居住域の一端を、確認することができた（第 29 図参照）。1-1 区では、古墳時代中期の住居跡を検出した。1-2 区では、井戸、ピット、土坑、落込み、流路を検出した。

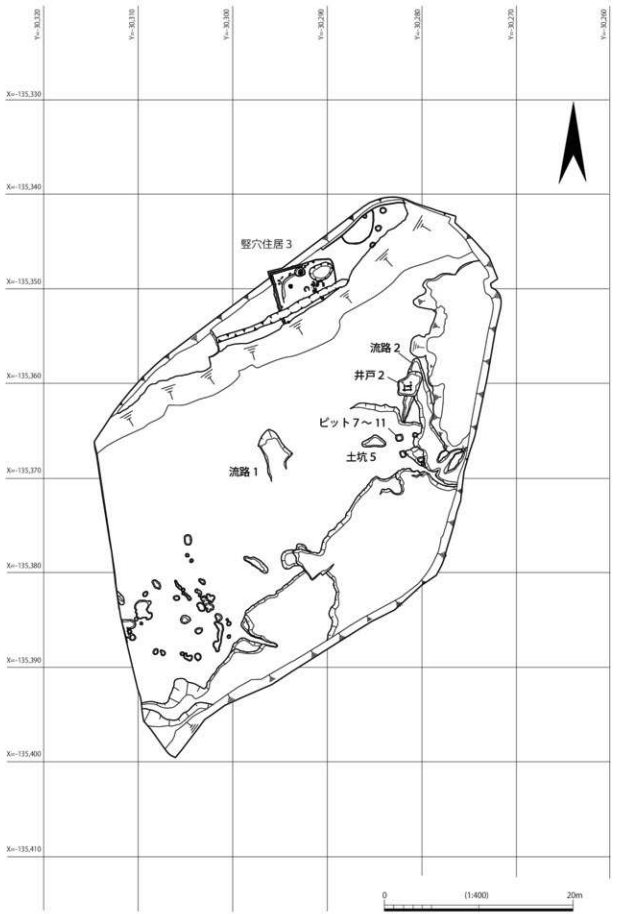
竪穴住居 3　竪穴住居 3 は、1-1 区中央より東部の、遺構面がもっとも幅広く残存する地点において検出した。南側約 3 分の 1 は、崖面の切り崩しによって破壊されている。また、第 1 面から掘り込まれた溝 1 と井戸 1 によっても、大きな撹乱を受けている。しかし、それ以外の残存は良好であり、部分的に貼床やベッド状遺構が認められた。また、床面直上には、完形復元が可能な土器類が残されていた（第 30 図）。

住居の平面形状は方形、北壁の周溝の最大長は 6.65 m を測る。西壁周溝は 5.5 m まで残存する。方位北よりも西に 15 度振るが、この方向は、丘陵の等高線と垂直に交差するものである。丘陵地の南斜面のうち、もっとも張り出した部分に設営された住居であると考えられる。

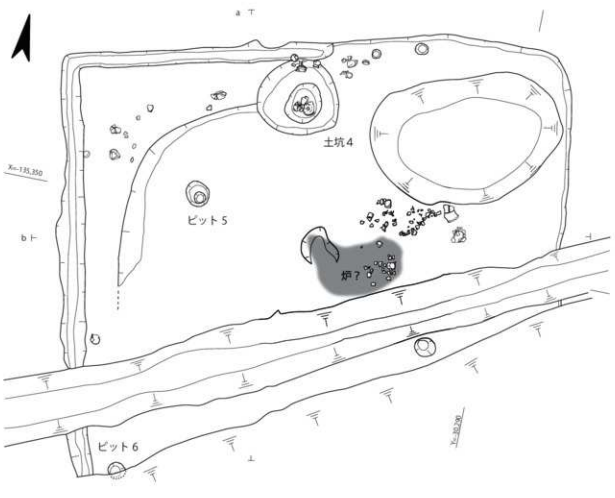
北西隅部の残りがもっとも良好であり、この部分には、床面よりも 5 ㎝程度盛り上げたベッド状遺構や貼床を確認することができた。

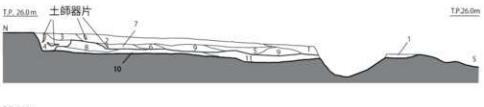
住居内において検出できた柱穴は 2 基、うち梁や桁を支えたと考えられる柱穴は 1 基のみである（ピット 5）。北壁には貯蔵穴と考えられる土坑が、良好な状態で残っていた（土坑 4）。

住居北西隅で確認された貼床とベッド状遺構には、灰白色シルトまじり粘土と明黄褐色～橙色シルト



第 29 図　第 1 調査区東半部　古墳時代～古代遺構面　全体図





1）灰色　2.5Y6/1　微砂に
　にぶい黄褐色　10YR 5/4　細砂まじり微砂ブロック30%程度入る
　径0.5cm未満の礫少量入る
2）灰オリーブ色　5Y5/2　微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
3）オリーブ褐色　2.5Y4/3　細砂まじりシルトに
　灰オリーブ色　5Y5/2　微砂ブロック15%程度入る
　径0.5cm未満の礫少量入る
4）にぶい黄褐色　10YR5/4　細砂まじり微砂　径0.5cm未満の礫微量入る
5）暗褐色　10YR3/4　細砂まじりシルト　径0.5cm未満の礫微量入る
6）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり微砂　径1cm未満の礫微量入る
7）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり微砂に
　明黄褐色　2.5Y7/6　微砂ブロック5%程度入る
　2）層ブロック30%程度入る
8）灰オリーブ色　5Y5/2　微砂と
　黄褐色　2.5Y5/4　細砂まじり微砂の混合層
　径0.5cm未満の礫少量入る
9）灰白色　5Y7/2　微砂に
　にぶい黄橙色　10YR6/4　微砂ブロック20%程度入る
10）灰白色　10Y7/1　シルトまじり粘土に
　明黄褐色　10YR 6/6　粘土質シルトブロック20%程度入る
11）灰白色　5Y7/2　微砂に
　橙色　7.5YR6/8　細砂まじり微砂ブロック10%程度入る
12）暗灰色　2.5YR 4/2　シルトまじり微砂　径0.5cm未満の礫微量入る
13）黄褐色　2.5Y5/4　微砂　径0.5cm未満の礫少量入る
14）オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂に
　黄灰色　2.5Y6/1　微砂ブロック5%程度入る　径1cm未満の礫少量入る
15）黄褐色　2.5Y5/3　微砂
16）黒褐色　10YR3/2　細砂まじり微砂に
　灰白色　5Y7/2　微砂ブロック5%程度入る
17）黄褐色　2.5Y 5/3　微砂
　灰白色　5Y 7/2　微砂ブロック10%程度入る
　にぶい黄橙色　10YR6/4　微砂ブロック20%程度入る
18）にぶい黄色　2.5Y6/4　細砂まじり微砂　やや粘性あり
　径0.5cm未満の礫少量入る　一部に灰色　5Y 5/1　粘土ブロック入る
19）にぶい黄色　2.5Y6/4　細砂まじり微砂
20）黄褐色　2.5Y5/3　細砂まじり微砂
21）灰白色　2.5Y7/2　粘土に
　浅黄色　5Y7/4　粘土シルトブロック5%程度入る
22）オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂
23）にぶい黄褐色　10YR5/3　微砂
24）オリーブ褐色　2.5Y4/3　微砂に
　灰白色　5Y5/2　微砂ブロック10%程度入る　焼土塊・炭化物少量入る
25）黄褐色　2.5Y　5/3　微砂と
　黄灰色　2.5Y 4/1　細砂まじり微砂の混合層　径0.5cm未満の礫少量入る
　焼土塊・炭化物少量入る
26）赤褐色　5YR 4/6　微砂

0　(1:50)　2m

第 30 図　竪穴住居 3　平面断面図

ブロックの混合土が用いられている。遺構面である地山上面は、黄褐色粗砂まじりシルト～粘土を主体とするため、貼床の存在は明瞭に判別できた。灰白色の粘土は、周辺土壌にみられないため、他所から持ち込まれた可能性がある。

周溝は、にぶい黄色もしくは黄褐色の細砂～粗砂で埋まっており、土器片を多く含む。炭化物の混じりこみや被熱痕跡は認められない。竪穴自体の埋土は、オリーブ褐色細砂まじりシルトや、暗褐色細砂まじりシルトである。

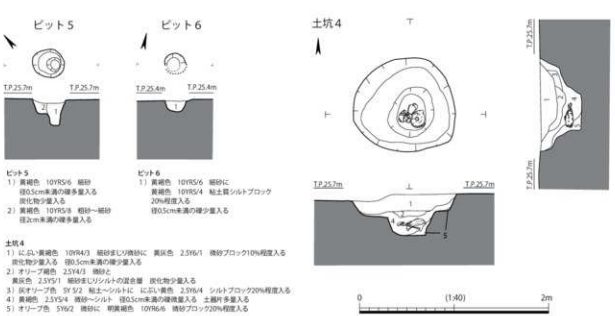
明確な炉跡は残存していなかったが、住居中央付近の僅かな窪みに赤褐色を呈する焼土や炭化物が溜まっていること、また、この窪み付近から住居北東隅に向かって、散らばった土器片（土師器甕）が被熱することなどから、この付近に設けられていた可能性が高い。

残存状態が良好な遺物は、周溝付近から出土した。すべて、布留式の土師器で、小型丸底壺、高杯、鉢の器形がある。

出土遺物および、埋土の状況を見る限り、この住居は、生活用具を配置したまま放棄されたと考えられる。明確な焼失痕跡や倒壊、破砕の痕跡がないことから、突然の災害によって住居を損失したとは考えにくい。生活用具のうち、使用に耐えうるもののみ持ち出して、他所へ移住したと考えることもできる。ただし、不用品をまとめて廃棄するという行為はおこなわれていない。なお、今回の調査では、同様に土器類を置き捨てたまま埋没した竪穴住居が、他にも１棟確認されている（第６節　第６調査区の調査成果に詳述）。

ピット５　竪穴住居３の北西部において検出した柱穴である（第 31 図）。竪穴住居３は、４本の柱によって桁と梁を支えていたものと推測されるが、ピット５は、このうちのひとつにあたる。平面形状は、東西方向にやや長い楕円形で、長径 0.4 m、短径 0.3 mを測る。直径 0.17 mの柱跡が、南隅に認められる。断面形状は柱穴が突出する逆凸型で、柱穴部の最大深度は 0.27 mを測る。

埋土は、掘り方部分が径２㎝未満の礫を含む黄褐色細砂～粗砂、柱穴部分が 0.5㎝未満の礫を多量に含む黄褐色細砂である。柱穴の埋土には、炭化物が少量混じる。掘り方埋土からは、土師器二重口縁鉢



第 31 図　竪穴住居３　遺構平面断面図

の一部（庄内式）が出土した。

ピット6　竪穴住居３の西側周溝南側に接して検出されたピットである（第 31 図）。南半部を崖面の切り崩しによって欠損する。平面形状は、直径 0.23 mを測る円形に復元できる。断面形状は湯呑形、最大深度は 0.11 mを測る。

埋土は黄褐色粘土質シルトブロックを 20％程度含む黄褐色細砂である。竪穴住居との関連性は不明であるが、住居内において検出されたため列記した。埋土からは、土師器甕（古墳時代～古代）の破片が出土した。

土坑4　竪穴住居３北側壁溝に接して検出された土坑である（第 31 図）。平面形状は、ほぼ円形で、1.0 ～ 1.08 mを測る。内面は中央部に深い２段構造をもつため、断面形状は逆凸形を呈する。床面から中央最深部までは、0.43 mを測る。

埋土は、上下層に大きく分層できる。中央の最深部に溜まった下層は、径 0.5㎝未満の礫を微量に含む黄褐色微砂～シルトを主体とする。これを覆う上層は、黄灰色微砂ブロックと、径 0.5㎝未満の礫を少量含む黄褐色細砂まじり微砂を主体とする。ともに、炭化物の細片が少量入る。

土坑中央の最深部からは、土器片がまとまって出土した。このうち底面より 10㎝ほど浮いた状態で、土師器高杯（布留式）の杯部が逆位置で出土した。また、同時期の土師器甕の破片が、複数個体分、出土した。

この土坑は、竪穴住居に伴う貯蔵穴であったと考えられる。埋土から植物遺体等を採取できなかったため、判断する材料に乏しいが、種子や種籾などの食料等を保管する施設であった可能性がある。竪穴住居３では、他にも原位置を保ったまま埋没したと考えられる遺物が多いため、土坑内から出土した土器類も、この土坑に関連する道具であったと推測される。出土した高杯の杯部は、貯蔵した食料などの容器または容器蓋、あるいは種子などを掏う道具としての転用が想定される。なお、混入品ではあるが、土坑の底部付近から、弥生土器壺底部（Ⅱ様式）が１点出土した。

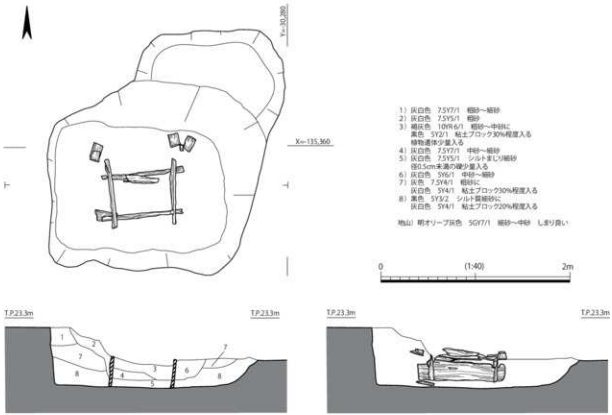
竪穴住居３は、出土遺物の所属時期から、古墳時代末頃までには完全に埋没したと考えられる。設営された時期は、住居内に残されていた土師器類が、布留式土器の後葉段階に属することから、埋土に須恵器類は含まれていないものの、初期須恵器の波及時期と前後する頃と推測される。

井戸2　井戸２は、調査区東半部中央において検出した井戸である（第 32 図）。半割したところ、井形に組んだ木組みが出土したことから、井戸であることを確認した。

掘り方の平面形状は、隅丸方形である。ただし、北東側約２分の１が、砂層堆積である流路上面からの掘り込みであるため、その形状が大きく崩れ、広がった状態で検出された。

掘り方は、一辺 2.0 ～ 2.3 mを測る。残存深度は 0.6 m、上部を大きく削平されていると考えらる。断面形状は、ほぼ方形を呈する。井桁である木組みは、掘り方の中央に据えられている。コウヤマキの板目材を４枚用い、東西に長い方形に組み上げている。木組みの底面には、小さくカットした板材が差し込まれている箇所がある。

掘り方の埋土は、粘土ブロックを含む黒色～灰色シルト、またはシルト質細砂を主体とする。井桁内部には、黒色粘土ブロックを含む褐灰色粗砂や、灰白色シルトまじり細砂があり、少量ではあるが、植物遺体の残存が認められた。また、両者とも上層には、灰白色～灰色を呈する洪水砂が厚く堆積していた。この洪水砂には、削平されたと考えられる木組みの破片が含まれていた。井桁の内部からは、須恵器甕片（５世紀）、土師器杯片（７世紀）が出土した。このことから、井戸の存続時期は、古墳時代中



第 32 図　井戸 2　平面断面図

期～古代初頭までであり、掘削時期はさらに遡るものと考えられる。

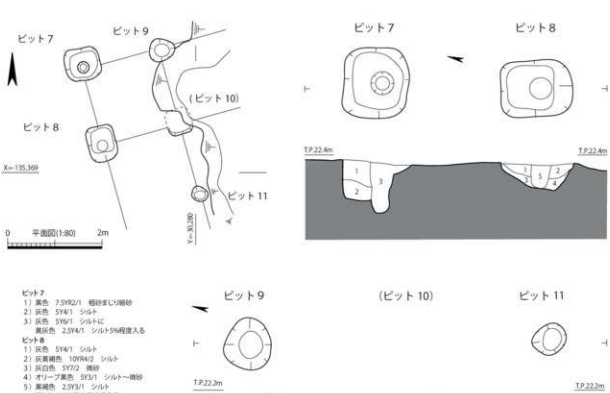
土坑 5　土坑 5 は、井戸 2 の南西において検出された土坑である。平面三角形を呈しており、東西方向にのびる。最大長 2.4 m、最大幅 1.2 m、最大深度 0.6 m を測る。断面形状は、V 字形を呈する。埋土は粗砂を含む黒色砂質シルトを主体である。性格、用途は不明である。埋土からは、土師器甕の破片（古墳時代）が 1 点出土した。

ピット 7　ピット 7 は、井戸 2 の南側において検出した柱穴である（第 33 図）。他に 3 基のピットを検出しており、掘立柱建物の柱列として復元できる。この場合は、総柱建物となる可能性がある。

ピット 7 は、建物の北西角の隅柱にあたる。平面形状は隅丸方形を呈しており、一辺 0.7 ～ 0.75 m を測る。柱の痕跡は、掘り方中央より南東に寄った位置にあり、直径 0.22 m を測る。断面形状は柱痕跡が突出する凸形、最大深度は 0.52 m を測る。掘り方の埋土は大きく上下層に分層できる。上位が黒色粗砂～細砂、下位が灰色シルトである。柱痕跡の埋土は、黄灰色シルトブロックを微量に含む灰色シルトである。遺物の出土は認められなかった。

ピット 8　ピット 8 は、ピット 7 の南側において検出した柱穴である（第 33 図）。掘り方は、長辺 0.74 m、短辺 0.6 m の隅丸方形を呈する。断面形状は歪んだ椀形であり、最大深度は 0.3 m を測る。柱痕跡は、掘り方中央よりも南東寄りにあり、直径 0.2 m を測る。掘り方埋土は、灰色～灰白色シルト～微砂で、底面付近にオリーブ黒色シルト～微砂の流入がある。柱痕跡の埋土は、径 0.5㎝未満の礫を多量に含む黒褐色シルトである。この埋土からは、土師器甕の破片（古墳時代前期～中期）が出土した。

ピット 9　ピット 9 は、ピット 7 の北西側において検出した柱穴である（第 33 図参照）。削平が著しく、検出時の平面形状は、歪んだ円形を呈する。直径は、0.5 ～ 0.52 m、最大深度は 0.24 m を測る。断面



第 33 図　第 1 調査区（1-2 区）　遺構平面断面図

形状は逆台形、明確な柱痕跡は確認できなかった。埋土は、黄灰色粗砂を主体とする。出土遺物は特に認められなかった。

ピット 10　ピット 10 は、ピット 9 の南東側に並ぶピットの痕跡である（第 33 図）。埋土が完全に削平されており、地山面の僅かな窪みとして確認できる程度である。

ピット 11　ピット 11 は、ピット 9・ピット 10 の延長線上に並ぶ柱穴である（第 33 図）。同様に削平が著しく、平面形状は、歪んだ円形を呈する。検出時の直径は 0.34 m、残存する断面形状は浅い皿形であり、その最大深度は 0.11m を測る。遺物の出土は認められなかった。

ピット 7 ～ 11 の柱穴から掘立柱建物を復元した場合、後述する流路の流走によって西半部を削平されたと考えられる。遺構の存続時期を示す出土遺物が乏しく判断しがたいが、古墳時代後期には埋没したことが、遺構の切り合い関係から推察できる。建物の設営はそれ以前にさかのぼることが考えられる。

なお、建物の長軸は、方位北より西に 15 度程度振っており、1-1 区で検出した竪穴住居とほぼ同様の方向を示す。同時期の遺構である可能性も考えられる。

流路 1　流路 1 は、調査区中央北よりの地点において検出した流路である。埋土が確認できたのは、長さ 4.5 m、最大幅 1.8 m程度の範囲においてであるが、北側河岸が段として残っており、本来は東南方向へ流走していたことが推測される。断面形状は、地山への潜り込みがあるため、不定形である。埋土は、粗砂を多く含む黒色～黒褐色粘土質シルトである。埋土からは、須恵器甕口縁部の破片（6 世紀）と土師器片（時期不明）が出土した。

5．第１調査区西半部　中世末期～近世初頭遺構面

次に、第１調査区西半部にあたる 1-3 区、1-4 区、1-5 区、1-6 区について、調査成果を記す。

調査は重機によって、現代耕作土および近世耕作土、整地土、盛土、小川水路内堆積泥土を除去する作業から開始した。1-4 区段上部と 1-5 区西端（調査区南西端）では、この時点で地山（硬くしまった緑灰色粘土質シルト）が露出した。このほかの範囲では、包含層の堆積を確認した。

近世包含層を除去した面において、中世末期～近世初頭の遺構面を検出した。この遺構面では、西から東へむかって階段状に下がる水田と、畦畔・井戸・土坑・溝を検出した。

溝２　溝２は、1-6 区北東部において検出した溝である（第 35 図）。幅を広げながら 1-4 区へと続き、丘陵裾部をめぐるように東方向へ延びる。確認できた残存長は 25 m程度、最大幅は 7.8 mを測る。隣接する 1-2 区では、これに対応する溝は検出できておらず、わずかに段として北側の岸が残る。断面形状は、1-6 区北西壁では浅い椀形、1-4 区北西壁では逆台形を呈する。

埋土は大きく上下に分割することができる。溝の埋土は灰色～灰黄褐色砂まじりシルトを主体とする。一部には径４㎝未満の礫を含む砂礫層がラミナを形成して堆積しており、激しい水流の痕跡を残す。

なお、この溝は、東岸に杭列を伴っており、土留め工事をおこなった痕跡を認めることができる。周辺の水田化に伴い、北側丘陵をめぐる灌漑用水路として整備された遺構であると考えられる。埋土からは、須恵器（５世紀）、瓦器（13 世紀）、陶器（唐津焼＝ 17 世紀）、丸瓦（中世？）が出土した。

溝３　溝３は、1-3 区南半部において検出した遺構である。近世包含層を除去した面において確認した。ほぼ南北方向に走っており、水は北から南方向へ流れていたと推測される。残存長は 15.4 m、最大幅は２m、最大深度は 0.3 mを測る。断面形状は浅い皿形に似る。

埋土は、灰オリーブ色を呈する粘土質シルトである。灰白色微砂が流入し、底面付近に弱いラミナを形成する。比較的、ゆるやかな水流があったことを示している。水田に伴うことから、用水を目的として設けられたものと考えられる。その方向性から、水路２からの取水のために掘削された可能性が高い。下面において検出した水田畦畔とは方向性を違えることから、近世を通じて水田の区画に変化があったことを窺わせる。

溝内からは、須恵器片（古墳時代～古代）、土師器片（中世）、磁器片（近世）が出土した。

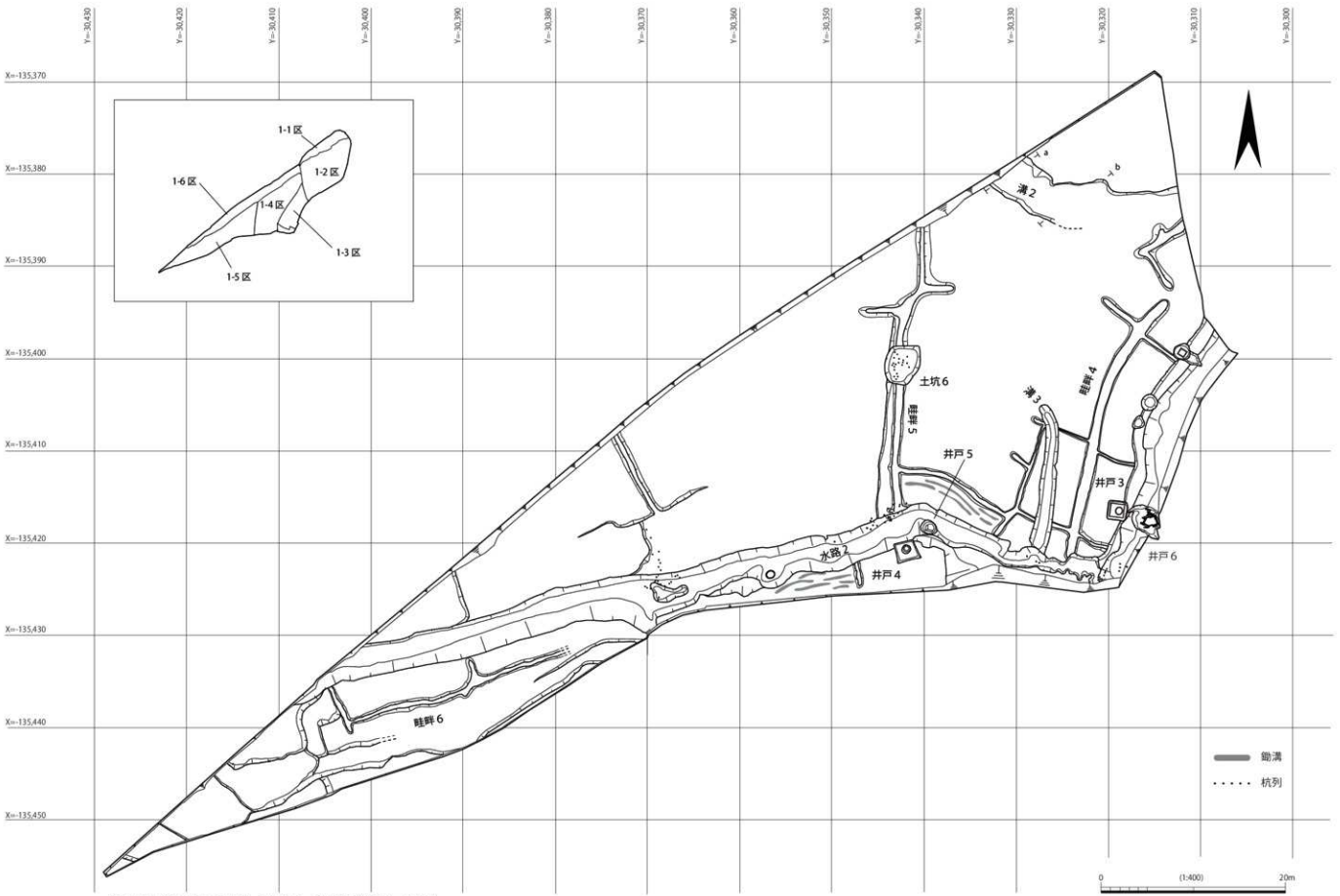
井戸３　井戸３は、1-3 区東南部において検出した井戸である。小川水路の西肩に位置している。近世包含層掘削途中において確認した。掘り方の平面形状は、一辺 2.0 mの方形、井桁は、長さ 1.4mの板材を方形に組む。井筒は、井桁中心より東に寄ったところにあり、井戸瓦を円形にまわして作られている。すぐ東側には、井戸６が並んで掘られている。こちらの方が古い遺構である。

今のところ、小川水路の付け替えにより、井戸６が水没したため、かわりに井戸３が設けられたものと考えている。ともに近世後半～近代の遺構である（井戸６は第２調査区の調査成果にて記述）。井戸３の埋土からは、井戸瓦以外の出土はなかった。

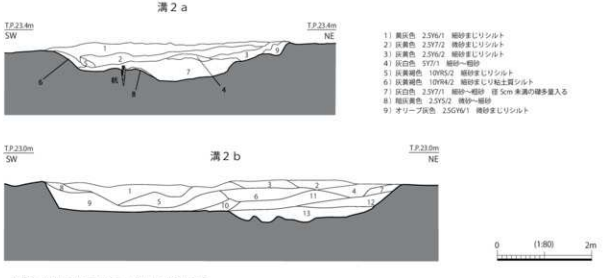
畦畔４　畦畔４は、1-3 区のほぼ中央を縦方向に延びる畦畔である。調査区の南から北東方向へと、弧を描いて延びており、調査区北東部において北西方向へと屈曲する。この畦畔を基幹として、数条の小畦畔が枝を東西へと延びている。

基底部の残存幅は 0.5 ～ 0.8 m、高まりはほとんど残存していない。平面では、土色の変質によってのみ確認することができた。

畦畔５　調査区西部では、近世包含層の除去面において、東へ落ちる段を確認した。また、第２層除去



第 34 図　第 1 調査区西半部　中世末期～近世初頭遺構面　全体図



第 35 図　溝２　断面図

面では、段の東側に畦畔５を一条検出した。両者はともに縦方向へ伸びるが、やや角度が異なる。

畦畔５は、基底部の幅が 0.4 ～ 0.5 m程度、残存高は 0.1 ～ 0.2 mを測る。1-4 区内では、約 24 m の長さにわたって確認することができた。この畦は、南端を水路によって切られている。北端は北東方向へ曲がり、1-6 区へと延びる。部分的に木杭による補強が認められた。

畦畔６　畦畔６は、1-5 区南側段上において検出した遺構である。最大長 31.0 m、基底部の最大幅は 0.5 mを測る。断面観察では、0.2 m程度の高まりをもつ。主軸を北東－南西方向に持っており、ここからほぼ垂直に枝を延ばす。

埋土は、灰色シルトに明緑灰色粗砂まじりシルト（地山）ブロックがまじる。主軸の角度は、整形された丘陵斜面の段とほぼ一致することから、耕作地の区画とともに築かれた畦畔であると考えられる。埋土から遺物の出土は認められなかった。

土坑６　土坑６は、1-4 区北西部において検出した土坑である。不定形な平面形状を呈するが、最大長、最大幅ともに 4.0 mを測る。断面形状は逆台形、最大深度は 0.3 mを測る。埋土は灰白色粗砂～細砂に耕作土である灰色シルトが筋状に入る。部分的に弱いラミナが観察できる。

土坑内部には多数の杭の打設が認められる。遺構の性格は定かではない。流水堆積が認められることから、水溜め状の施設であった可能性もある。遺物の出土はなかった。

水路２　小川水路のうち、1-5 区から 1-4 区南段下を通り、第４調査区にいたるまでの区間を水路２と付番した。埋土は下流部分である水路１と大差ない。ただし、近代の恣意的な水流の操作によって北上するルートをとる水路１よりも、その開削が遡ることは確かである。

調査区の東南部には、多くの木杭の打ち込み痕や、土留板の埋没が確認された。また、所々に木杭が集中する箇所があり、水田への給排水施設が作られていた可能性が高い。

埋土からは、サヌカイト切片、須恵器（５世紀～７世紀）、瓦（近世）が出土した。

6．第１調査区西半部　中世後期遺構面

第１調査区西半部では、中世後期包含層の除去面において、中世後期遺構面を検出した（第 37 図）。この面では、溝と小畦畔を伴う水田跡を検出した。

溝４　溝４は、調査区北東部に位置する溝である（第 36 図）。調査当時は、上面において検出した溝２と同時に掘削したが、断面観察および出土遺物に時期差が認められることから、別遺構として報告する。

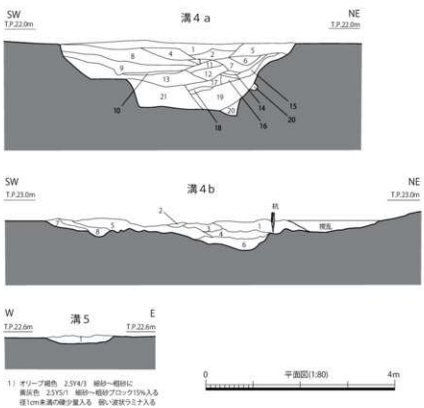
溝４は、1-6 区北側から丘陵の裾をめぐるように延び、1-4 区へと続く。溝埋土は、1-4 区北西壁では確認できるものの、それ以降は薄くなり、続く 1-2 区では認めることができない。確認できた長さは８ｍ程度、最大幅は 3.5 ｍを測る。最大深度は、もっともよく残る 1-4 区北西壁で 1.4 ｍを測る。断面形状は逆台形で、側面には段が認められる。

埋土は、上下２層に大別することができる。上層は、暗灰黄色～黄褐色を呈する砂まじりシルトを主体とする。径３㎝未満の礫を随所に含む。下層は、にぶい黄色～黄灰色を呈する砂まじりシルトで、礫の含有は顕著ではない。上層に比べて、若干粘性が強い。

埋土からは、須恵器（５～７世紀）、青磁（13 世紀）が出土した。

溝５　溝５は、1-3 区中央部において検出した溝である（第 36 図参照）。残存長は、12.0m、最大幅は 2.0 ｍを測る。断面形状は浅い逆台形、埋土はオリーブ黒色微砂まじりシルトである。底部付近には、径１㎝未満の礫の流入が認められる。ほぼ南北方向に延びており、北から南へ向かって流れていたと考えられる。畦畔と同じ方向性をもつことから、水田跡に伴う遺構であると考えている。

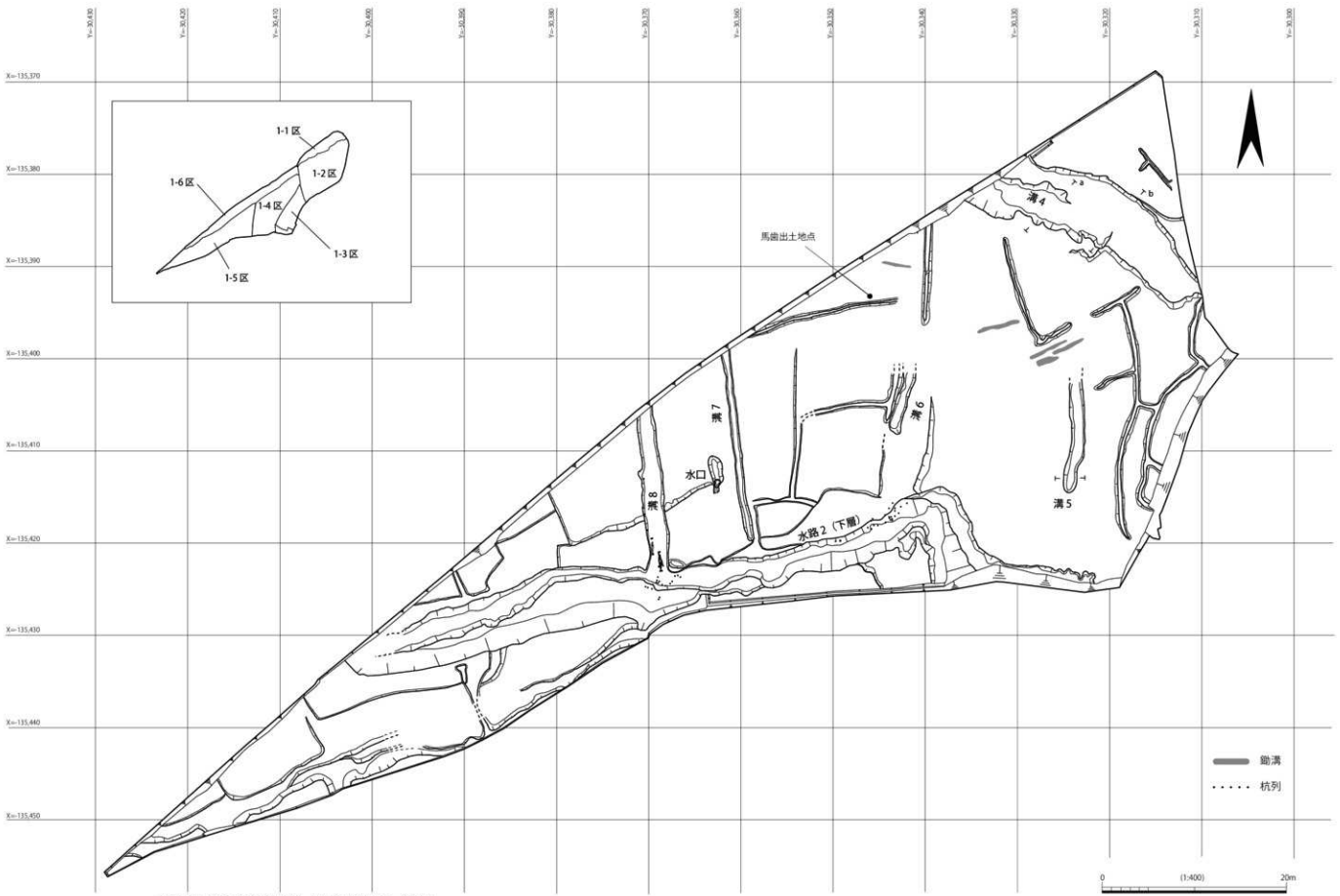
埋土からは、土師器（古墳時代）、須恵器（６世紀）、瓦器椀（14 世紀）が出土した。



溝４ａ埋土
1）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルトに
灰白色　2.5Y8/2　粗砂の流入あり
2）灰色　5Y5/1　シルト
3）暗灰黄色　2.5Y4/2　粗砂まじりシルト
4）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂まじりシルト
径 1cm 未満の礫少量入る
5）灰色　5Y4/1　中砂まじりシルト
6）黄灰色　2.5Y5/1　中砂まじりシルト
7）灰色　5Y7/1　細砂まじりシルト
8）暗灰黄色　2.5Y4/2　粗砂まじりシルト
径 3cm 未満の礫多量入る
9）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～粗砂まじりシルト
径 2cm 未満の礫少量入る
10）灰黄色　2.5Y7/2　細砂
11）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトまじり中砂
12）黄褐色　2.5Y5/3　シルトまじり中砂
13）にぶい黄色　2.5Y6/3　粗砂
黄褐色　2.5Y5/4　細砂まじりシルト上位に流入あり
酸化痕跡あり　径 2cm 未満の礫多量入る
14）黄灰色　2.5Y4/1
15）灰黄色　2.5Y6/2　中砂まじりシルト
16）にぶい黄色　10YR6/3　粗砂
17）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじりシルト
18）浅黄色　2.5Y7/3　粗砂
19）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂まじりシルト
20）にぶい黄色　2.5Y6/4　粗砂
21）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト
径 1cm 未満の礫少量入る

溝４ｂ埋土
1）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂に
灰黄色　2.5Y6/2　細砂～粗砂の流入あり
2）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじり粘土質シルト
径 2cm 未満の礫入る
3）灰黄色　2.5Y6/2　細砂～粗砂　径 1cm 未満の礫入る
4）暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土と
にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂～粗砂まじりシルトの互層
5）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～粗砂　径 1cm 未満の礫入る
6）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂～粗砂　径 4cm 未満の礫入る
7）暗灰黄色　2.5Y4/2　細砂　径 0.5cm 未満の礫入る
8）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルト

第 36 図　溝４・５　断面図



第 37 図　第 1 調査区西半部　中世後期遺構面　全体図

溝6　溝6は、1-4区において検出した遺構である。南から北へ向かって延びており、1-6区との調査区境付近まで続く。左右岸には、この溝を挟むように小畦畔が築かれている。最大長は7.0 m、最大幅は1.2 mを測る。断面形状は浅い皿形、埋土は灰白色粗砂～細砂を主体とする。上位はやや土壌化のためシルト質であるが、底面付近に弱いラミナが認められることから、基本的に流水堆積である。水田の給排水を目的として設けられたものと考えられる。

埋土からは、須恵器（5世紀）と青磁（15世紀）が出土した。

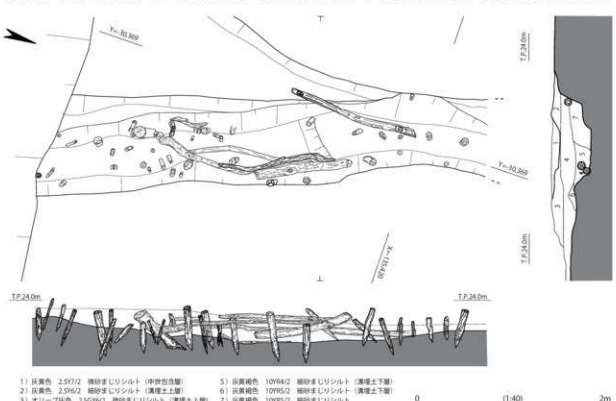
溝7　溝7は、1-5区低地部東半部において検出した溝である。南東から北西方向にのびており、1-6区へと連続する。残存長は19.5 m、最大幅0.5 mを測る。断面形状は浅い皿型、最大深度は0.2 m程度を測る。この溝の東側には、0.2～0.3 mを測る畦状の高まりが認められる。ともに水田に関わる遺構である。

埋土は、灰黄褐色細砂まじりシルトの上位に灰白色細砂～粗砂が堆積する。埋土からは、弥生土器片が1点出土した。

溝8　溝8は、溝7の西側において検出した溝である（第38図）。南から北へ延び、調査区の北西へと進路を変えている。南端は水路2に切られており、それより南へは続かない。遺構の残存長は16.0 m、最大幅は2.5 mを測る。断面形状は、段をもつ浅い逆台形、最大深度は0.4 m程度である。底面の標高差から、南から北へ向かってゆるやかに流れていたと考えられる。

埋土は、灰黄褐色砂まじりシルトが主体で、上位には粗砂～細砂の流入が認められる。埋土からは、弥生土器、須恵器（5～7世紀）、土師器（中世）、瓦質土器が出土した。

掘削を進めたところ、この付近において、土留めと見られる杭列および横木の埋設を確認した。使用されている杭の直径は、4～8㎝であり、横木にはこれよりやや太い材を使う。ともに加工は簡素で、



第38図　溝8　平面断面図

樹皮を残すものも多い。ただし、横木のうち1点に、穿孔加工をもつものが認められた。

この横木は、最大長1m45cm、直径10cmを測る芯持ち材である。樹皮および枝葉は取り除かれている。左右両端に、8～10cmの方形貫通孔が1箇所ずつ設けられており、それぞれに杭を打ち込むことによって、溝底面に横木を固定する。これ以外の横木に同様な加工が認められないことから、転用品の可能性もある（第130図13）。

7．第1調査区西半部　中世前期遺構面

中世前期包含層の除去面において、中世前期遺構面を検出した（第39図）。

中世前期包含層は、攪拌痕跡が顕著な耕作土層である。遺構面では、溝および畦畔を伴う水田跡、ピット群、土坑を検出した。水田内には、ヒトおよび偶蹄類の足跡の残存が、顕著に観察できた。

溝9　溝9は、1-3区・1-4区・1-6区の北東部において検出した遺構である（第40図）。北側丘陵の段丘裾を北西－東南方向に走っており、検出長は24.0m、最大幅3.0m、最大深度0.8mを測る。断面形状は椀形、西側面に段をもつ。埋土、黒褐色もしくはオリーブ黒色微砂～細砂を主体とする。中央部は砂質が強いものの、端部は土壌化が進み、粘土質となる。斜め方向に大きくうねるラミナが形成されていることから、激しい水流によって埋没したことがわかる。

底面の標高は、1-6区北辺でT.P.21.9m、1-4区北西辺T.P.20.5m、1-3区東辺で20.0mを測る。底面の傾斜角度は28～30度と算出することができ、強い勾配をもつ。丘陵地斜面をめぐるように掘削されていることから、谷地の開発に伴う遺構であると考えられる。

埋土から、弥生土器（壺＝Ⅳ様式・甕・＝Ⅴ様式）、須恵器（5～7世紀）、土師器（庄内～布留式・11～14世紀）、黒色土器（11世紀）、瓦器（12～13世紀）・陶器（常滑焼＝14世紀）、瓦質土器が出土した。

溝10　溝10は、1-5区を中央において検出した遺構である（第40図）。南側段丘の裾部をめぐるように1-4区へと続き、そのまま第4調査区から調査地外へと続く。調査区西半部にあたる上流部分は、水路2と重なる部分が多いため、攪乱をうける箇所も多い。

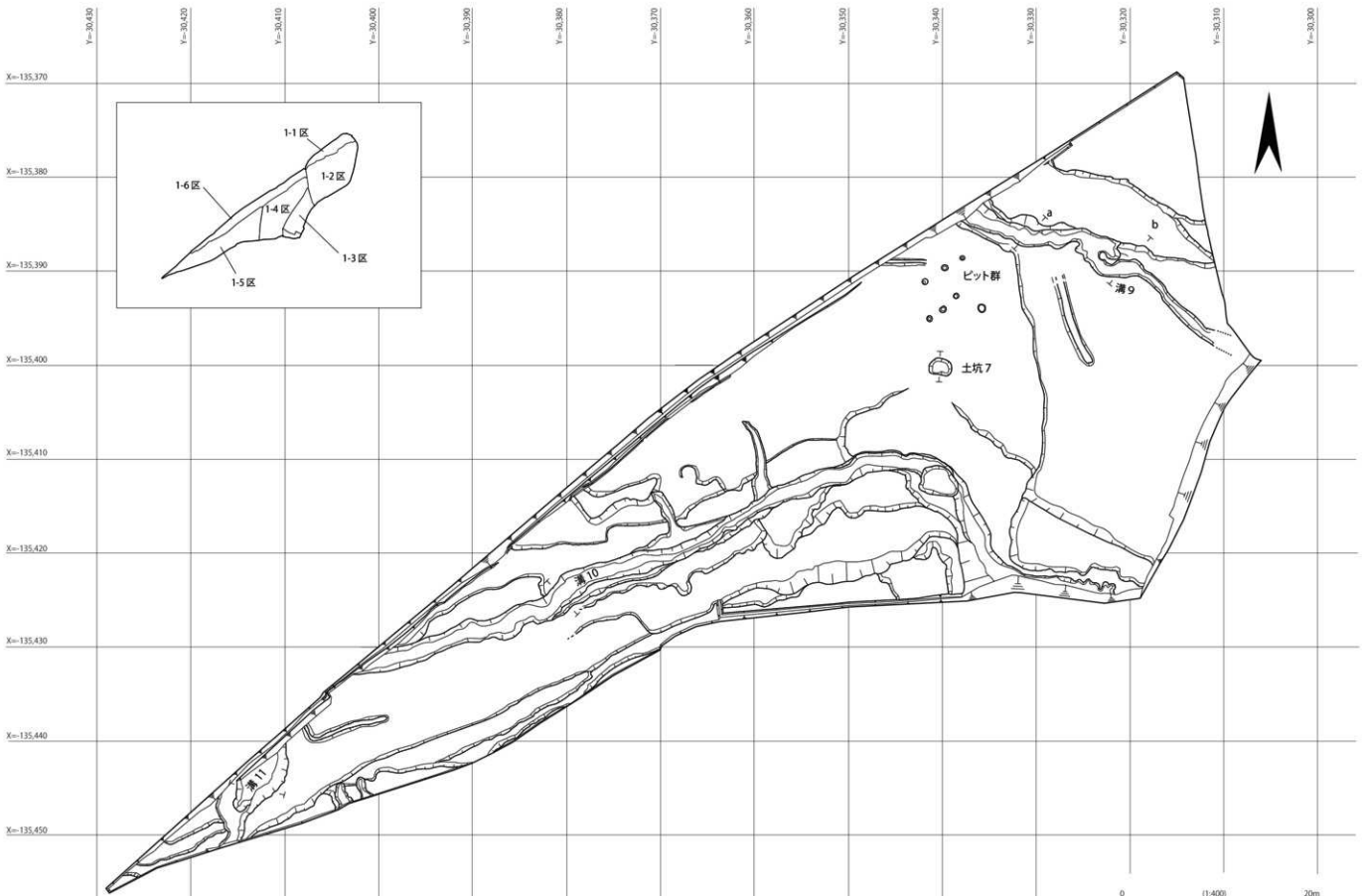
溝10の検出最大長は、約97.0m、最大幅は3.5m、深度は、0.5～0.8mを測る。断面形状は椀形もしくは逆台形を呈する。埋土は、黒褐色シルト～細砂と灰黄色粗砂～細砂を主体としており、両者が交差するように堆積する。

水の流れは、南西から北東へと進み、南側丘陵斜面がもっとも張り出したあたりで南東に屈曲する。その後、調査区南辺で、東に方向を変えた後、第4調査区の南端をかすめて調査区外へと流出する。

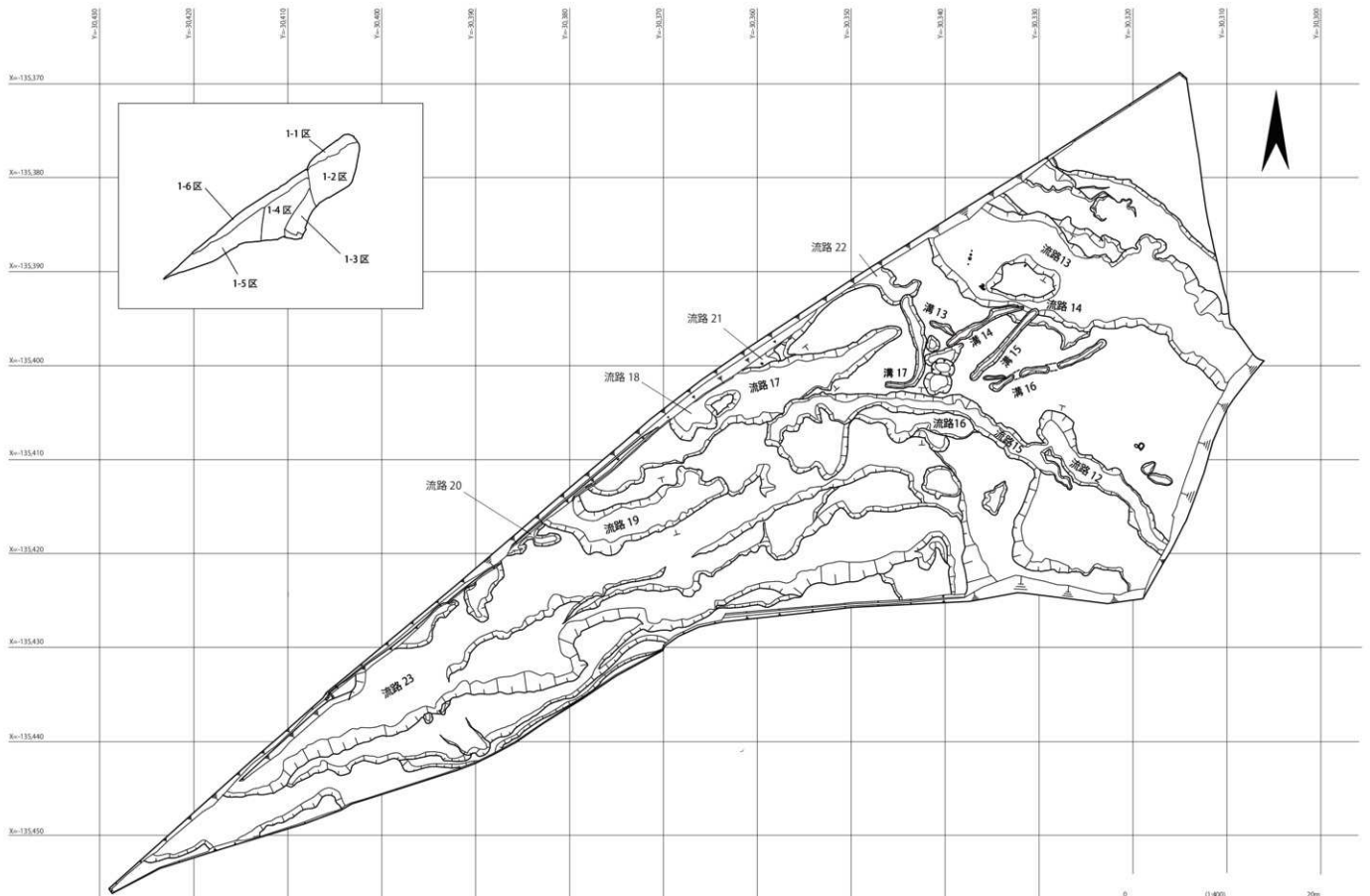
段丘斜面の比較的高い地点に掘削された溝であるという点では、対岸の溝9と近似する。丘陵地の張り出しにあわせ、その裾部をめぐるように湾曲して延びるという点も同様である。また、埋土の堆積状況もよく似ることから、両溝は同様の性格をもつ施設であったと考えられる。谷地底部に営まれた水田両脇のやや高い地点を流れることから、主に給水を目的とした灌漑用水路として開削された可能性が高い。

また、溝10は、近現代まで存続する水路2とほぼ平行して流れることや、より地形変化に即したルートを通ることなどから、その前身として捉えることができる。埋土からは、弥生土器（Ⅳ様式）、須恵器（5～7世紀）、瓦器（13世紀）が出土した。

溝11　溝11は、調査区西端付近において検出した遺構である（第40図）。



第 39 図　第 1 調査区西半部　中世前期遺構面　全体図



第 42 図　第 1 調査区西半部　古代初頭遺構面　全体図

なってラミナを形成する。

この流路の埋没には、古代初頭と中世前期の２時期がある。このことを明らかとするためには、現地調査において次の経緯があった。現地調査では、まず、1-3 区において検出した流路 13 を掘削したが、流路その上面には、中世前期の遺構である溝９が、同じ方向性をもって存在したことから同一の遺構と解釈し、同時に掘削をおこなった。その結果、出土遺物の年代に大きなばらつきが生じることとなった。続く 1-4 区の調査では、精査を重ねた結果、流路 13 の上面に流路９が存在することが明らかとなり、古墳時代～古代初頭の流路（５世紀～７世紀）と中世前期（13 ～ 14 世紀）の溝を、別遺構として認識するに至った。さらに、このとき設定したセクションにより、古墳時代の流路の中にも新旧の時期差が存在することを確認した。この成果を踏まえて臨んだ 1-6 区の調査では、流路 13 において、古墳時代の流路の切り合いを確認し、古墳時代の流路は、時期が下がるにつれて丘陵側へと移動する過程をとらえることができた。

流路 13 からは、遺物が多量に出土した。その大半が、５世紀～７世紀に生産時期をもつ須恵器である。中でも溶着、火ぶくれをおこした初期須恵器の破片が、数多く含まれている点は注目される（次節詳述）。ほかに、縄文土器、弥生土器（Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内式・布留式・７世紀）、墨書土器（須恵器坏＝奈良時代）、サヌカイト切片が出土した。流路 13 の底面付近からは、ほぼ完形の土師器壺（庄内式）が２点出土した。

なお、この流路から出土した須恵器器台の一片が、調査地東側の小川を隔てた上の山遺跡において出土した遺物との接合した。遺構の連続性を知る上で、重要な資料である。

流路 14　流路 14 は、流路 13 の支流として確認した（第 44 図参照）。流路の幅は 2.0 ～ 3.5 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.5 mである。

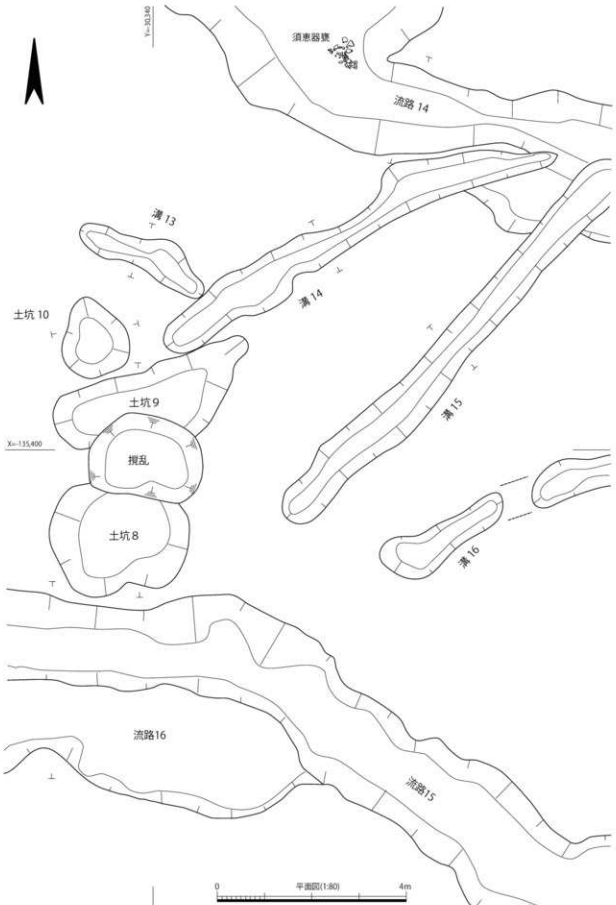
埋土には礫と植物遺体の混じりこみが多く、灰オリーブ色砂礫層とオリーブ黒色シルト～細砂が重なってラミナを形成する。底面付近には黒色微砂の堆積が認められる。埋土からは、縄文土器、弥生土器、土師器（布留式）、須恵器（５世紀）が出土した。出土遺物は、流路 13 よりも古い様相にある。

流路 15　流路 15 は、1-5 区の北東部より、1-4 区を斜めに走る流路である（第 44 図参照）。1-3 区南半部において削平のため、消失する。確認できた最大長は、35.8 m、最大幅は 2.0 m、最大深度は 0.5 mを測る。断面形状は鉢形ないし皿形である。埋土は、灰色シルト～細砂と黒褐色シルト～細砂から成り、径３㎝未満の礫や植物遺体が多く入る。底部付近には、砂の重なりによる波状ラミナが認められる。

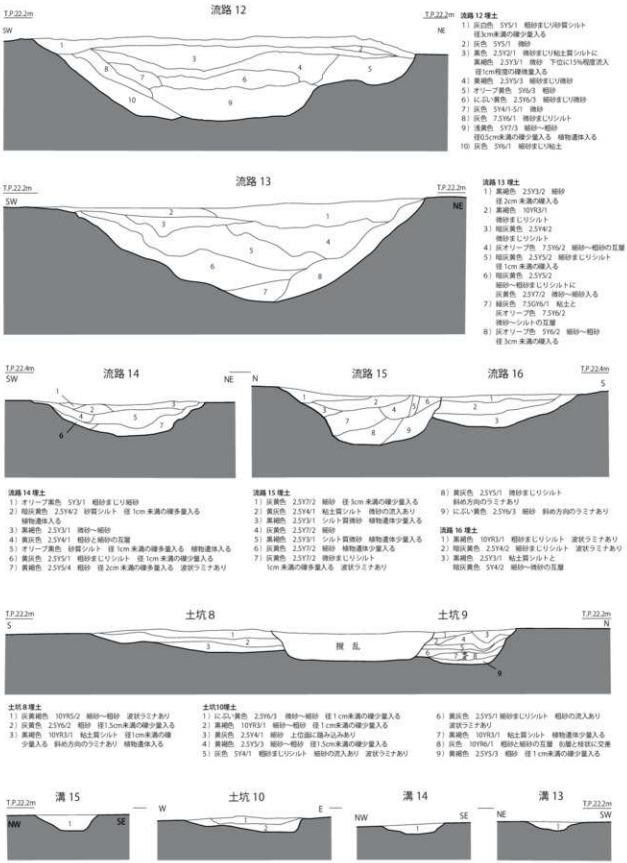
この流路は、調査区南側丘陵の段丘崖をめぐるように、西から南東方向へ弧を描いて続いている。上面では、中世前半期の溝 10 が検出されており、その方向性を同じくする。埋土からは、須恵器（５～７世紀）が出土した。

流路 16　流路 16 は、流路 15 に近接した位置において検出した流路である（第 44 図参照）。断面観察では切り合い関係が認められたため、別に付番した。確認できた最大長は 13.0 m、最大幅 3.0 mを測る。断面形状は皿形を呈しており、最大深度は 0.35 mを測る。埋土は、黒褐色粗砂まじりシルトと暗灰黄色細砂～粗砂の互層を主体とする。ラミナの形成が著しく、相当の水流があったことを裏付けている。遺物の出土はなかった。

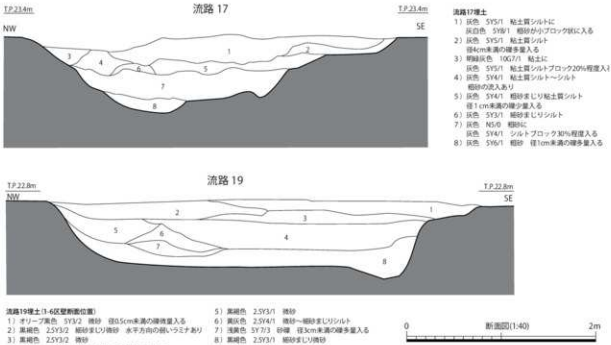
流路 17　流路 17 は、1-6 区の中央部において検出した流路である（第 45 図参照）。谷の本筋である西方向から東方向へ流れる。断面形状は、大きく開いたＶ字形を呈する。最大幅は 6.0 m、最大深度は 0.8 mを測る。埋土は、灰色～灰白色細砂～粗砂である。



第 43 図　第 1 調査区西半部　遺構平面図



第 44 図　第 1 調査区西半部　遺構断面図（2）



第 45 図　第 1 調査区西半部　遺構断面図（3）

埋土からは、縄文土器、弥生土器（Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内・布留）、須恵器（5～8 世紀）が出土した。このほか、底面付近に堆積するオリーブ黒色微砂～細砂には、樹木の枝葉や種実など、多量の植物遺体が含まれていた。

流路 19　流路 19 は、1-6 区西半部において検出した遺構である（第 45 図参照）。調査区北西側から流入し、湾曲して北西へ進む進路をとる。延長上には、流路 15 が位置している。検出した最大長は、湾曲部分も含めて 20.0 m程度、最大幅は 4.6 mを測る。断面形状は深みのある皿形を呈するが、南側壁面には水流の削りこみによる凹凸が認められる。埋土は、オリーブ黒色～黒褐色を呈する細砂～微砂を主体とし、直径 3 ㎝未満の礫を多量に含む粗砂層が、随所に流入する。埋土からは、土師器（布留式）、須恵器（5～7 世紀）が出土した。

流路 21　1-6 区北西壁断面において確認した流水堆積である。南西から北東へ向かって流れていたと考えられる。確認した最大深度は 0.8 mを測る。埋土は、黒褐色微砂まじりシルトと灰黄色細砂～粗砂の互層を主体とする。底面付近には、植物遺体を多量に含む粘土と砂礫層を確認した。埋土からは、弥生土器（Ⅱ様式）、土師器（庄内）、須恵器（5～7 世紀）が出土した。

流路 22　1-6 区東半部において検出した流路である。調査区北側から南へ延びており、先端部が北東方向へ屈曲する。屈曲部分を含めた残存長は 6.0 m程度、最大幅は 2.0 mを測る。西側に位置する流路 21 と連続または切り合う可能性が高い。埋土は、黒色～黒褐色微砂まじりシルトと暗灰黄色細砂～粗砂を主体とする。底面付近には、巻き上げられた地山ブロックが認められる。埋土からは、弥生土器、須恵器（5 世紀）、土師器（5 世紀）が出土した。

土坑 8　土坑 8 は、1-4 区北半部において検出した土坑である（第 43 図・第 44 図参照）。北辺を、土坑 7（中世前期）によって損失する。平面形状は不定形、最大幅は 2.8 m、最大深度は 0.22 mを測る。断面形状は浅い皿形を呈する。埋土は、上位に灰黄褐色粗砂、下位に黒褐色粘土質シルトが認められる。

黒褐色粘土質シルトには、植物遺体が多く含まれていた。遺構の性格および用途は不明である。遺物の出土はなかった。

土坑9　土坑9は、1-4区北半部のうち、土坑7に接して検出した土坑である（第43図・第44図）。南側を土坑7によって損なう。平面形状は不定形、最大幅は南西－北東方向にあり、4.5 mを測る。断面形状は、先端部が屈折して開く逆台形を呈する。最大深度は0.34 mである。

埋土は、黄灰色細砂～粗砂と黒褐色細砂および粘土質シルトを主体とする。上位には礫の混じりこみが多く、下位にはラミナが認められる。確実な掘り方を有するが、遺構の用途は不明である。遺物の出土はなかった。

土坑10　土坑10は、土坑9の北側に位置する遺構である（第43図・第44図）。平面形状は隅丸三角形、断面形状は一辺が崩れた逆台形である。最大幅は1.25 m、最大深度は0.14 mを測る。埋土は灰黄褐色～灰黄色を呈する粗砂～細砂であり、底面近くに直径1.5㎝未満の礫が流入する。遺構の性格は不明である。遺物の出土はなかった。

溝13　溝13は、土坑10の北側において検出した遺構である（第43図・第44図）。北西－南東方向に伸びており、南東端を溝14と接する。最大長2.9 m、最大幅0.8 m、最大深度0.1 mを測る。断面形状は皿形を呈しており、中央部分が深い。埋土は、にぶい黄色細砂～粗砂に黒褐色細砂ブロックがまじる。埋土からは、縄文土器1点と、土師器（7世紀）が出土した。

溝14　溝14は、溝13の北側において検出した遺構である（第43図・第44図参照）。溝13とは方向軸を違えるものの、南西－北東方向に延びている。確認した最大長は、9.4 m、最大幅は、1.0 m、最大深度は0.2 mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は、溝13と近似するが、礫の混入はやや少ない。埋土から、弥生土器（時期不明）、須恵器（5～7世紀）が出土した。

溝15　溝15は、1-4区北半部において検出した遺構である（第43図・第44図参照）。南西－北東に方向軸をもつ、直線的に延びる溝である。最大長10.5 m、最大幅0.9 m、最大深度は0.16 mを測る。断面形状は逆台形を呈する。北東端の一部は流路14にかかっており、新旧関係が明らかである。

埋土は、灰オリーブ色粗砂であり、直径2㎝未満の礫を多量に含む。遺構の形状から、明らかに人為的な掘削によるものであると考えられるが、その用途は不明である。埋土からは、土師器（布留式）、須恵器（7世紀）が出土した。

溝17　溝17は、1-4区北西部において検出した遺構である。平面形状は鉤形を呈しており、残存長は13.0 m、最大幅は2.0 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.05 mである。北西から南へ向かって延び、西方向へと甘く湾曲する。谷筋の流れには反した方向性を示すことから、人為的な関与が想定される。埋土は、にぶい黄色細砂～粗砂に黒褐色細砂ブロックがまじる。埋土から、須恵器（5世紀）、土師器（古墳時代）が出土した。

9．第1調査区西半部　古墳時代以前の様相

第1調査区西半部では、中世前期までの包含層を除去した面において、緑灰色シルトを主体とする土層を確認した。今回の調査にさきがけておこなわれた確認調査では、この緑灰色シルト層を地山層と認識し、これ以下の掘削をおこなっていない。しかし、確認調査終了後、調査地の東側に隣接して調査をおこなった上の山遺跡では、この緑灰色シルト層に対応する土層から、縄文土器が出土した。このため、大阪府教育委員会は、当該層の調査が必要であると認識を改め、今回の調査においても、対応層を掘削

調査するよう指導がなされた。

今回の調査では、当該層を第５層包含層として扱い、掘削を進めた。結果、第５層からは、縄文時代・弥生時代（Ⅳ様式）の遺物が出土した。

第５層を除去したところ、原地形のもっとも低い部分（谷地の本筋部）において、灰白色～灰オリーブ色砂層と、植物遺体を多量に含む黒色粘土質シルト層の堆積を確認した。両層の重なりは、そのまま落ち込んで、谷地の埋土となる。この層を除去すると、径３㎝未満の礫を多量に含むシルト～砂層が現れた。第５層除去面以下では、出土遺物を確認することができなかったことから、この調査区では、谷埋土上層の掘削を終えた時点で、調査終了とした。

埋没樹木　調査区南側壇上から斜面にかけての範囲では、第５層除去面において、樹木の根株や幹が出土した。また、その周辺部分は、炭化した植物遺体を多量に含む腐植土の堆積が認められた。

この樹木の根株が張った面について、調査当時は、谷地に連続する原地形の地表面であると考え、年代を探るため、土壌サンプルを採取して放射性炭素年代測定を実施した。その結果、縄文時代をはるかに遡る較正年代範囲外の数値が示された。

第２節　第２調査区の調査成果

１．調査の概要

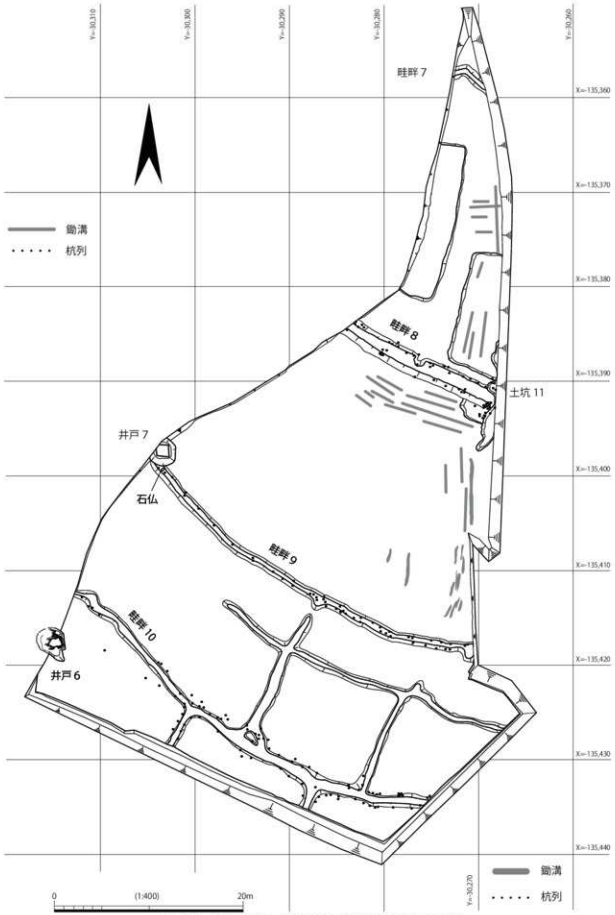
第２調査区は谷地に設定した調査区のうち、もっとも東側（下流）に位置するトレンチである。確認調査の成果では、13 ～ 15 世紀の遺物を含む中世包含層が、厚く堆積することが報告されている。また、一定量の割合で、初期須恵器の破片が含まれていたことから、今回の調査では、当該時期に相当する遺構面の検出に期待が寄せられた。

今回の調査では、第２調査区において、中世末期～近世初頭、中世前期、古代末期～中世前期、古代初頭、古墳時代初頭の合計５面の遺構面を検出することができた。また、縄文時代から近世にいたるまでの遺物が多数出土した。このことは、包含層が厚く、残存状態が良好であること、また谷の下流にあたるため、上流から運ばれた遺物が集積したことに起因する。出土遺物のなかには、初期須恵器の一群や、木器など、希少な製品が含まれていた。

２．中世末期～近世初頭の遺構面

調査は重機による表土、現代耕作土、近世耕作土の除去から開始した。2-1 区では、第１層および第２層の除去面において、2-2 区では、第１層を除去した面において、中世末期から近世初頭の遺構面を検出した（第 46 図）。この遺構面は水田耕作面であり、畦畔、井戸、水田区画、鋤溝、土坑等の遺構を確認した。

畦畔７　畦畔７は、調査区北端において検出した小畦畔である。確認できた最大長は 4.0 m、基底部の最大幅は 0.9 m を測る。調査区西辺～東へ向かって延び、東南方向へ屈曲する。この屈曲は、調査区北側丘陵が北西から迫るためと考えられる。断面観察では、0.3 m程度の高まりを確認した。埋土は、暗灰黄色粗砂まじり粘土質シルトである。



第 46 図　第 2 調査区　中世末期～近世初頭遺構面　全体図

畦畔 8　畦畔 8 は、調査区中央部において検出した大畦畔である。検出した長さは 18.0 m、基底部の最大幅は 2.2 mを測る。断面観察では、0.3 m程度の高まりを認めることができる。畦畔の主軸は、北西－南東方向を指しており、直線を描いて調査区外へ続く。調査区東辺では土坑 11 と接する。中央付近には一部幅を減じる箇所があり、水口がこの部分にあったと考えられる。南北両肩には、直径 3 ～ 5 ㎝程度の杭の打設が、多数認められた。畦の埋土からは、遺物は確認されていない。

なお、調査区東西の両壁には、この畦畔の北側部分において大きな撹乱痕跡が残されている。この撹乱の東西をつなぐと、畦畔 8 の北側を併走するかたちとなる。埋土は、人頭大のブロック土の集積であることから、故意的に埋め立てられたものと推測される。下層に堆積する泥土には、ラミナが刻まれている。

この撹乱は、かつての小川水路の一部であると考えられる。現在の小川水路は、第 2 調査区の北西端において小川と合流するが、近代以前には、第 2 調査区の中央部にあたる畦畔 8 の北側で東へ屈曲し、そのまま調査区を東西に横断して、小川へ注いでいた。このルートは、もっとも標高の低い地点を通るものであり、地形の理には適っている。ただし、水田の拡幅には障害となること、また洪水時には、大量の土砂を周囲に運び込むことにより、農作物に被害をもたらしたこと等が想像できる。このため、現在のルートに付け替えられたのであろう。土坑 11 付近には、近世洪水砂の堆積が認められたが、旧水路の決壊によるものである可能性がある。

畦畔 9　畦畔 9 は、調査区南半部において検出した畦畔である。検出した長さは約 40 m、基底部の最大幅は、0.6 mを測る。断面観察では、0.3 m程度の高まりが認められる。両肩には、打設された杭が並ぶ。

この畦畔は、北西から南東方向へ湾曲して延びている。調査区西辺では、井戸 7 と接しており、東端は調査区外へと続いている。畦畔の描く湾曲ラインは、調査地南川丘陵の張り出しに呼応したものであろう。埋土から遺物の出土は認められなかった。

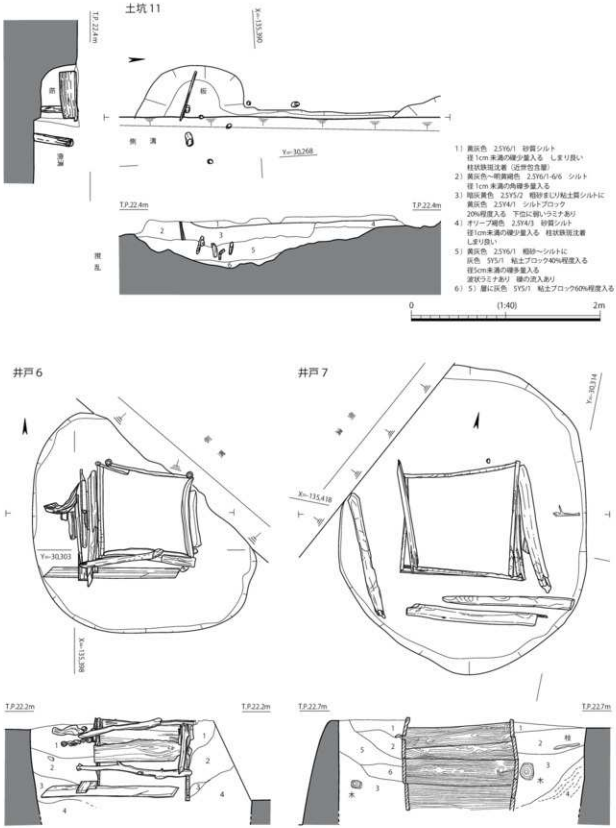
畦畔 10　畦畔 10 は、調査区南辺付近において検出した畦畔である。畦畔 9 とほぼ平行して延びており、北西－南東方向に湾曲しながら調査区外へと続く。確認した長さは 42 m程度、基底部の最大幅は 1.5 mを測る。断面観察では、0.3 mの高まりを確認した。

この畦畔もまた、両肩に杭列を備えている。調査区南半部では、大畦畔を起点として北東－南西方向へ延びる小畦畔が、よく残っていた。畦に囲まれた水田区画は、四角形を呈している。畦畔の埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑 11　土坑 11 は、調査区中央東辺において検出した土坑である（第 47 図）。平面形状および断面形状は不定形である。壁断面において対応する埋土が認められるため、このまま調査区東側へと続くものと考えられる。残存する最大長は 2.75 m、確認した最大幅は 1.2 mである。最大深度は、0.32 mを測る。

埋土は、2-1 区第 2 層を基調とする黄灰色粗砂～シルトに、灰色粘土ブロックが 40％程度入る。部分的に、直径 5 ㎝未満の礫の流入が認められる。全体的に洪水砂で覆われており、このうちの一部が、土坑内へも流入している。底面近くには、波状ラミナが形成されていた。

土坑内では、複数本の杭と、杭間に差し渡された板の出土を確認した。杭の直径は、3 ～ 5 ㎝程度、板の方法量は、長さ 50㎝、幅 15㎝、厚さ 1 ㎝を測る。板は、側面を上にし、打設する杭に支えられるようにして直立していた。底面は土坑底面に達しておらず、埋土内に浮いた状態で静止している。板の指し示す方向は、北西－南東方向であり、大畔の方向軸とほぼ一致する。



第 47 図　第 2 調査区　土坑・井戸　平面断面図

この施設は、水田脇に設けられた取水口（水口）装置であると考えられる。立てかけられた板は、水田用排水を差し止める働きをするものであろう。土坑埋土からは、陶器片（17世紀）が1点出土した。

井戸6　井戸6は、調査区南西隅において検出した井戸である（第47図）。掘り方は、第2調査区および第1調査区にかかって検出された。

掘り方の平面形状は、一部を欠損するものの、隅丸方形に復元することができる。最大幅2.5m程度である。掘り方のほぼ中央に、井桁が組まれており、こちらは歪んだ方形を呈する。ただし、いびつながら、掘り方および井桁の軸は正方位を示している。

井桁は、四方に断面円形の隅柱を打ち込んだ後、その柱間に板を差し込むように板材を配している。井桁の一辺は0.85～1.0mである。

井戸掘り方の埋土は、緑灰色粘土ブロックが入る灰色粗砂～細砂まじり粘土質シルトである。緑灰色粘土ブロックは、地山構成土の一部である。井桁内の埋土は、暗灰黄色～灰色を呈する粗砂まじり粘土である。軟質で、砂の混じりこみが著しい。井戸の断ち割りをおこなったところ、井戸枠の外側に並べられた丸太材や板材、割り材が出土した。井戸掘り方を埋め戻す際に使用した足場板や、井戸井桁の支え材であったと考えられる。

この井戸は、第1調査区の成果において触れたとおり、井戸3の前身として利用されていた施設であると考えられる。小川水路の付け替えにより、井戸6は、水路底に沈むこととなった。このため、代替施設として、井戸6の北側に、井戸3が掘削されたと考えられる。井戸6の掘削時期は、近代におこなわれた小川水路の第2次付け替え時以前であり、小川水路をふくめた遺物の出土状況から、その時期は近世に遡るものと考えられる（小川水路の付け替えについては、第7章　総括を参照）。井戸6の掘り方埋土からは、下駄が1点出土した（写真図版50－1右上）。

井戸7　井戸7は、第2調査区中央部西辺において検出した遺構である（第47図）。大畦の北側に掘削されており、西側は小川水路に接する。一部を欠損するものの、掘り方の平面形状は楕円形を呈する。長径3.2m、短径2.6mを測る。掘り方のほぼ中央には、板を組み合わせた井桁が存在する。井桁の平面形状は、歪んだ方形であり、一辺1.0～1.2mを測る。

井戸掘り方の埋土は、灰黄褐色～暗灰黄色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。直径20cm未満の円礫や樹木の枝葉が、所々に混じる。また、部分的には、崩落による細砂～シルトの筋が認められる。井戸6同様、掘り方埋土の中からは、足場板や、井戸井桁の支え材とみられる板材が出土した。

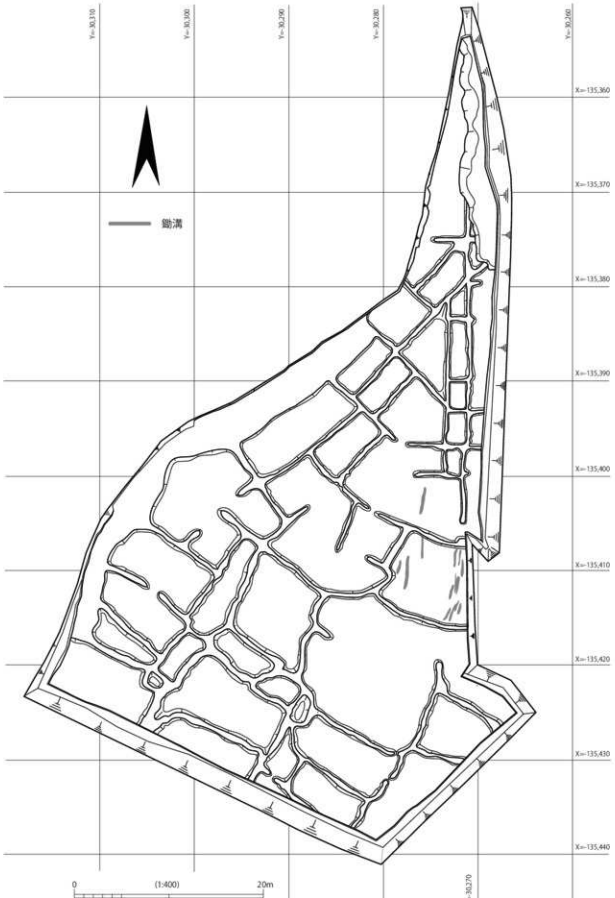
井桁は、隅柱をもたないタイプである。切り欠きをもつ板材を順に組み上げている。井桁内の埋土は、暗灰黄色～灰色粘土質シルトである。

この井戸は、小川水路の右岸に盛られた土手を除去した時点で確認された。井戸6と同じく、小川水路の付け替えによって廃棄された施設であると考えられる。

なお、井戸南西の畦上では、石仏が1体倒れた状態で出土した。かつては井戸の片隅に立てられていたもののようである。井戸の井桁内からは、瓦器、土師器（中世）が出土した。

3．中世前期の遺構面

2-1区では、第3層を、2-2区では第2層を除去した遺構面において、中世前期遺構面を検出した。第3層内には、数枚の水田耕作面が介在しており、粘土質堆積の上面に細砂～微砂の流入が認められる箇所では、ヒトや偶蹄類の足跡を多数検出した。今回の調査では、このうちもっとも顕著に畦畔状の盛



第 48 図　第 2 調査区　中世前期遺構面　全体図

り上がりや足跡の潜り込みが認められる面を、検出面とした。なお、小畦畔には、高まりを検出することが困難なものが多かったが、耕作土の変質部分を追う事によって確認することができた。

2-1 区北東辺部では、南北方向を主軸として延びる畦畔から、小畦畔が垂直に延びている。このため区画された水田は、方形を呈する。しかし 2-1 区中央では、畦畔の主軸が北東－南西方向を指すため、北東部の畦畔とは、40 ～ 45 度の角度で接続する。したがって、この部分の水田は、三角形ないし五角形となる。

一方、2-1 区南半部では、北北東－南南西方向に主軸を取りながらも、蛇行する小畦畔が多く、北半部のような企画性をもった水田区画を認めることできない。

調査当時、この異なる方向性をもつ畦畔の検出の是非をめぐり、調査担当者の中でも意見が分かれた。複数時期にわたる遺構面の重複検出や畦畔の新旧差、擬似畦畔の検出を疑う声が上がったが、掘削を進めるにつれて、この畦畔角度が、前時代の水田畦畔を誠実に踏襲するものであることがわかった。

4．古代末期～中世初頭の遺構面

2-1 区では、第 4 層を掘削する段階において検出した面が、古代末期～中世初頭の遺構面に相当する（第 49 図）。

第 4 層の掘削は、調査区の西側より着手し、徐々に東へ向かって掘り進めた。掘削当初、第 4 層は、黒褐色粘土質シルトを主体とする上層（4-1 層）と、灰黄色細砂～粗砂を主体とする洪水砂である下層（4-2 層）から成ると考えていたが、掘削作業が調査区東半部におよぶと、4-2 層の下に、黒褐色粘土層の堆積が見え隠れするようになった（4-3 層＝古代末期～中世初頭包含層）。この層の上面には、ヒトの足跡が刻まれるなど、明らかな人的関与が認められた。このため、掘削深度を浅く控え、4-3 層上面の精査をおこなったところ、巨大な畦畔をもつ水田跡を検出した。

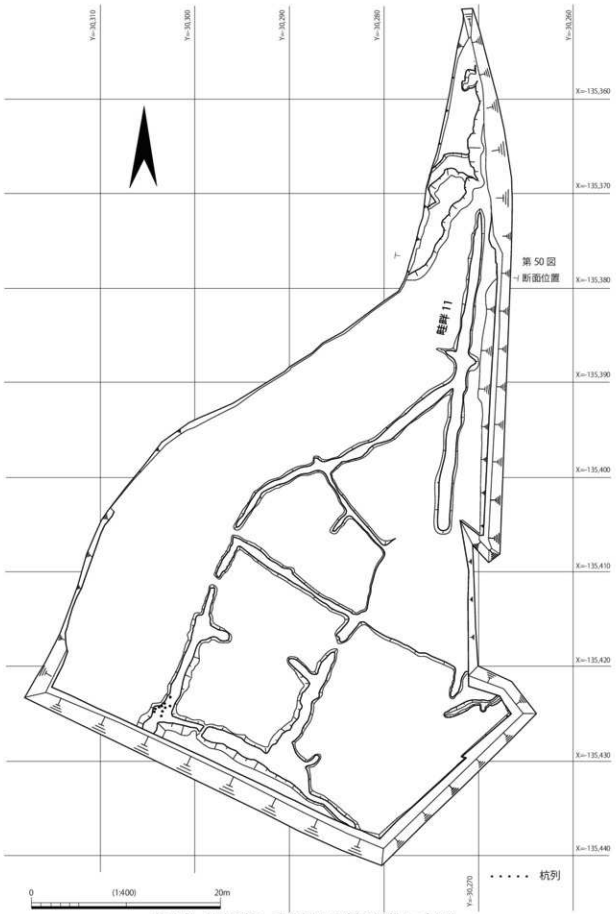
なお、4-3 層が介在しない調査区西半部では、4-2 層の直下において緑灰色シルト～砂質シルトを呈する弥生時代～古墳時代初頭堆積層の広がりを確認した。

2-2 区では、第 3 層および第 4 層を除去した面が、古代末期～中世初頭遺構面に相当する。2-1 区同様、水田跡を検出した。ただし、畦畔の高まりを確認することはできなかった。

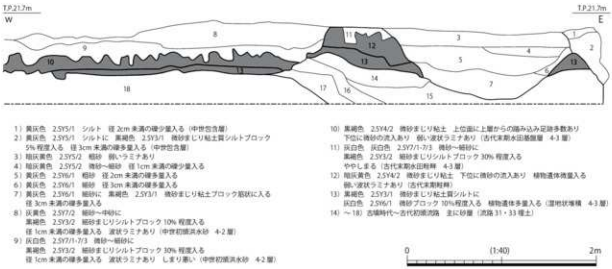
畦畔 11　畦畔 11 は、2-1 区北東部において検出した大畦畔である。正方位より、2～3 度西へ振った方向軸をもって南北へ延び、その途中で、南西方向へと分枝する。確認した長さは約 30.0 m、基底部の最大幅は 1.4 mを測る。セクションにおいて確認した残存高は 0.6 mである。2-2 区では、北辺の一部においてのみ残存を確認した。

畦畔の埋土は、灰白色～灰黄色砂、暗灰黄色微砂まじり粘土、黒褐色微砂まじり粘土を主体とする（第 50 図参照）。畦畔の裾には、水田耕作土である黒褐色微砂まじり粘土が堆積しており、この上面において、足跡の沈み込みが多数検出された。また、この耕作土の下には、植物遺体を含む黒褐色微砂まじり粘土質シルトが認められた。これは、耕作土の基盤層である湿地状堆積であると考えられる。

耕作土および畦畔は、洪水砂である 4-2 層で覆われている。断面観察では、畦畔 11 の東側において、洪水砂層が深く堆積する様相がみられた。調査区縁辺であることから、平面検出は難しかったが、大溝が大畦に平行して掘削されていた可能性がある。2-1 区の東側に位置する上の山遺跡では、大畦畔を伴う平安時代の水田跡が確認されていることから、畦畔 11 もこれに連続する可能性がある。なお、2-1 区南半部でも同様の幅をもつ畦畔状の土質変化を確認した。



第 49 図　第 2 調査区　古代末期～中世初頭遺構面　全体図



第 50 図　第 2 調査区　古代末期～中世前期水田畦畔　断面図

畦畔および水田耕作土の基盤層である第 4-3 層（第 50 図アミカケ層）からは、弥生土器、土師器（布留式）、須恵器（5～7 世紀）、黒色土器（11 世紀）、瓦器（12 世紀）が出土した。

5．古墳時代中期～古代初頭の遺構面

第 2 調査区では、第 4 層（4-3 層）を除去した時点において、古墳時代～古代初頭の遺構面を検出した。これは、弥生時代～古墳時代初頭の包含層である第 5 層の上面にあたる。この遺構面では、落込み、流路群と溝、土坑を検出した（第 51 図参照）。

落込み 1　落込み 1 は、2-1 区南半部において検出した落込みである。北西から南東方向へ向かって幅を広げながら、緩やかに落ち込む様相をみせる。ただし、底面に凹凸が多いことから、本来は流路の集積であったものが停水し、平面では落込み状を呈する可能性が高い。最大幅は 16.0 m、最大深度は 1.3 mを測る（第 53 図）。

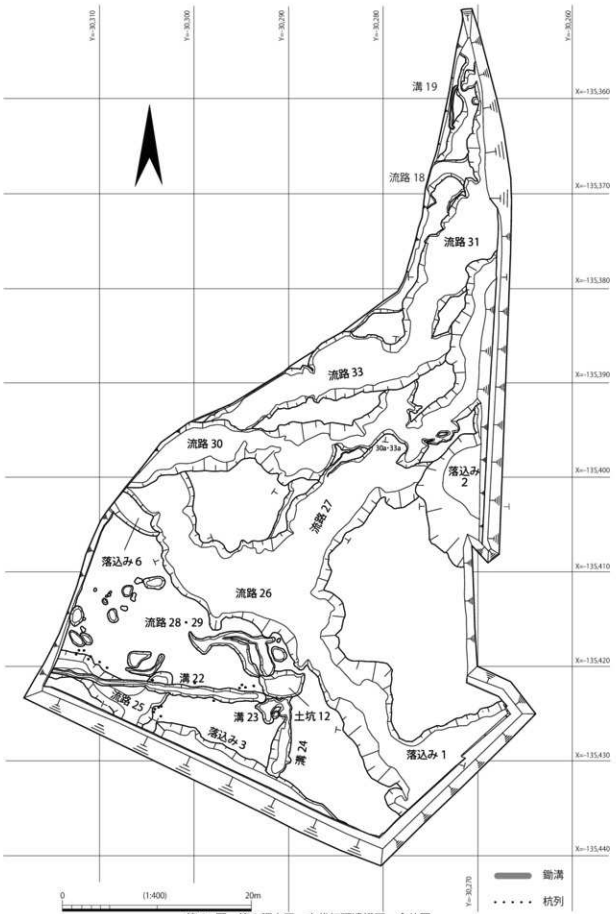
埋土は灰黄褐色粗砂～細砂と黒褐色細砂を主体とする。両者がマーブル状に交じり合い、あるいは互層となって堆積する。上位層はやや土壌化し、褐灰色粗砂まじりシルトを呈する。

この落込みは、谷から流れ出た水流が旧小川と合流する地点にあたるため、水流が停滞して形成されたものと考えられる。埋土からは、弥生土器、土師器（庄内式・布留式）、須恵器（7～8 世紀）、ほぞ孔をもつ板状木製品が出土した。

落込み 2　落込み 2 は、調査区中央東部において検出した落込みである（第 55 図参照）。西から東へ開くように落ち込んでおり、確認した長さは 7 m、最大幅は 11 m以上を測る。断面形状は不定形、最大深度は 0.4 mを測る。埋土は、軟質なオリーブ黒色粗砂まじり粘土を主体とする。上位に古代末～中世初頭の耕作土の沈み込みが厚く堆積するため、落込みの埋土自体は、底面より 10cm程度の厚さで残るのみである。堆積状況からは、はげしい流水の痕跡は認められない。むしろ湿潤な環境において、静かに土壌が沈積したことをうかがわせる。

埋土からは、縄文土器、弥生土器（Ⅱ様式）、須恵器（5～7 世紀）、土師器（布留式）が出土した。

落込み 3　落込み 3 は、調査区南端において検出した落込みである。調査区南辺に沿って、北西－南東



第 51 図　第 2 調査区　古代初頭遺構面　全体図

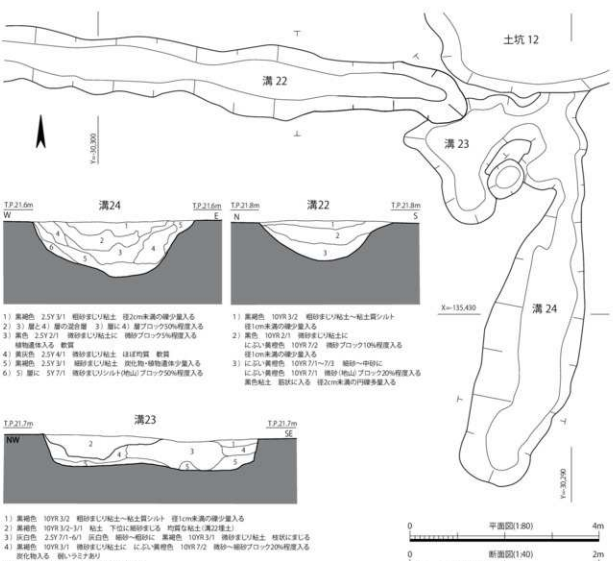
方向に延びる。確認できた長さは 22.0 m、最大幅は 2.2 mを測る。最大深度は、0.7 mを測る。

埋土は、黒色細砂まじり粘土～粘土質シルトを主体とする。下位には灰黄色細砂が筋状に入るため、水平方向の弱いラミナが認められる。黒色粘土には、樹木の枝葉や種実などの植物遺体が多量に含まれている。埋土からは、弥生土器（壺＝Ⅳ様式・甕＝Ⅴ様式）、土師器（庄内式・布留式）須恵器（５世紀）が出土した。

溝 22　溝 22は、2-1区南半部において検出した溝である（第52図）。調査区西辺から南南東方向へむかって直線的に延びる。中央付近まで続き、溝 23 や土坑 12 と接する地点で終息する。最大長は 23.0 m、最大幅 1.4 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.4 mである。

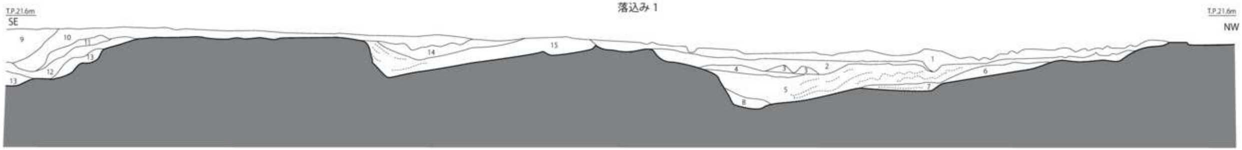
埋土は、にぶい黄橙色細砂～粗砂に黒色粘土が筋状に入る砂層を主体とする。上位には第４層である古代末期の耕作土層の沈み込みが認められる。底部付近には、直径２cm未満の円礫が多量に含まれている。

溝 22 は、溝 24 とほぼ垂直に接しており、ともに区画溝として掘削された可能性がある。埋土からは、弥生土器（Ⅴ様式）、須恵器（７世紀）、土師器（７世紀）が出土した。



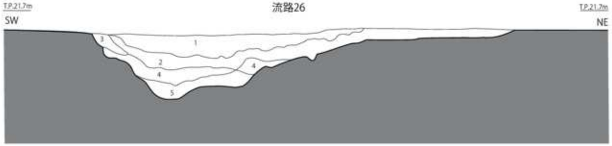
第 52 図　第２調査区　遺構平面断面図（１）

落込み 1



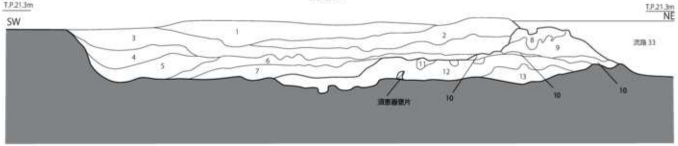
1）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土　植物遺体・炭化物多数入る　軟質
2）黄灰色　2.5Y4/1　細砂に　灰オリーブ色　7.5Y7/2　砂質シルトブロック 20% 程度入る　径 1cm 未満の礫少量入る　炭化物少量入る　上位に上層からの踏み込みあり
3）灰オリーブ色 7.5Y7/2　砂質シルトに　灰色　7.5Y6/1　粘土質シルトブロック 30% 程度入る　鉄斑沈着　ややしまる
4）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂　径 2cm 未満の礫多量入る　炭化物少量入る　ややしまる
5）黄灰色　2.5Y6/1　微砂と　黄灰色　2.5Y4/1　粘土　黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルトの混合層　細かい波状ラミナを形成　植物遺体・炭化物多量入る
6）黄灰色　2.5Y4/1　微砂　径 1cm 未満の礫少量入る　炭化物少量入る
7）黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルトと　黄灰色　2.5Y6/1　細砂の互層　炭化物多量入る
8）黒褐色　2.5Y3/1　粘土　径 1cm 未満の礫少量入る　炭化物多量入る　軟質
9）黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルトに　灰白色　2.5Y7/1　粗砂ブロック 30% 程度入る　植物遺体多量入る
10）黒色　2.5Y2/1　粗砂まじり粘土質シルトに　灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじりシルトブロック　10% 程度入る
　黒褐色　2.5Y3/1　粘土ブロック 10% 程度入る　径 1cm 未満の礫上位に少量入る
11）黒褐色　2.5Y3/1　粘土質シルト　植物遺体・炭化物多量入る
12）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土　下位に粗砂の流入あり　径 2cm 未満の礫少量入る
13）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土と　灰白色　2.5Y7/1　粗砂～細砂の互層　植物遺体・炭化物多量入る
14）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土　下位に粗砂の流入あり　径 2cm 未満の礫少量入る　やや軟質
15）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土と　灰白色　2.5Y7/1　粗砂～細砂の互層　植物遺体・炭化物少量入る

流路26



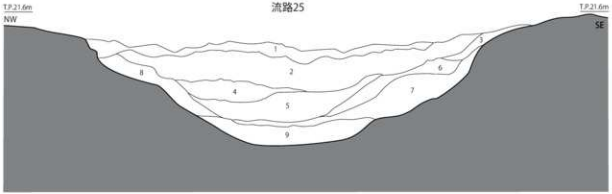
1）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土に　灰黄色　2.5Y7/2　微砂～細砂　波状に入る
　径 0.5cm 未満の礫上位に少量入る　植物遺体下位に少量入る　上位に上層からの攪拌痕跡あり
2）黒色　2.5Y2/1　微砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫微量入る　植物遺体（枝幹）多量入る
　炭化物少量入る　軟質
3）黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土　細砂微量入る　植物遺体（枝葉）少量入る　軟質
4）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂～微砂　径 2cm 未満の礫少量入る　植物遺体少量入る
5）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土　径 3cm 未満の礫多量入る　下位に砂の流入あり

流路30

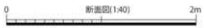


1）黒褐色　10YR3/1　粘土質シルトと　灰黄褐色　10YR6/2　細砂の互層　細かい炭化物少量入る　網の目状のラミナあり（上層）
2）にぶい黄褐色　10YR4/3　シルトまじり細砂～粗砂　径 1cm 未満の礫少量入る（上層）
3）黒褐色　10YR2/2　細砂まじり粘土と　にぶい黄橙色　10YR7/2　細砂の互層　植物遺体少量入る　波状のラミナあり（上層）
4）にぶい黄橙色　10YR7/1-7/3　粗砂～細砂　弱い波状のラミナあり（上層）
5）4）層に近似　径 2cm 未満の礫多量入る（上層）
6）黒褐色　10YR2/2　粘土　細砂波状に入る　植物遺体多量入る（上層）
7）灰黄褐色　10YR5/2　粗砂まじり粘土質シルト　径 3cm 未満の礫多量入る　斜め方向のラミナあり（上層）
8）オリーブ黄色　5Y6/3　シルト　径 2cm 未満の礫少量入る　上層の影響により上位面黒色化（古代末期～中世初頭水田畦畔）
9）オリーブ黄色　5Y6/3　シルトに　同色粘土ブロック 20% 程度入る　径 2cm 未満の礫少量入る（古代末期～中世初頭水田畦畔）
10）オリーブ黒色　5Y4/2-2/2　粘土に　暗灰黄色　2.5Y5/2　礫まじり粘土ブロック 10% 程度入る　径 2cm 未満の礫少量入る　水平方向のラミナあり
11）暗灰黄色　2.5Y5/1　粗砂に　オリーブ黄色　7.5Y6/3 粘土ブロック 10% 程度入る　径 2cm 未満の礫多量入る
12）暗灰黄色　2.5Y5/1　粗砂に　オリーブ黄色　7.5Y6/3 粘土ブロック 30% 程度入る　径 2cm 未満の礫多量入る
13）暗灰黄色　2.5Y5/1　粗砂に　黒色　7.5Y2/1　粗砂ブロック 30% 程度入る　径 2cm 未満の礫多量入る

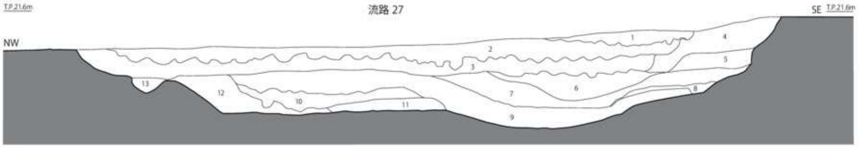
流路25



1）黒色　2.5Y2/1　粘土と　黄灰色　2.5Y4/1　粘土の混合層　植物遺体少量入る　炭化物多量入る
　灰白色　2.5Y7/2　粗砂ブロック 10% 程度入る　やや軟質　（湿地状土壌）
2）黒色　7.5Y2/1　粗砂まじり粘土　黒褐色　2.5Y3/1　粘土と　灰白色　2.5Y7/1　シルトの互層
　微砂の流入あり　波状のラミナあり　下位に植物遺体・炭化物多量入る
3）黒褐色　2.5Y3/1　シルト質細砂に　灰白色　2.5Y7/1　細砂ブロック　10% 程度入る　炭化物少量入る
4）黄灰色～灰白色　2.5Y6/1-7/1　細砂に　2.5Y3/1　黒褐色シルト流入　植物遺体多量入る　網の目状のラミナあり
5）灰白色　2.5Y7/1　細砂と　2.5Y3/1　黒褐色シルトの互層　植物遺体多量入る
6）黄灰色　2.5Y6/1　細砂～粗砂　径 2cm 未満の礫多量入る　隙間に褐色シルトの流入あり　水平方向のラミナあり
7）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂～細砂と　黒褐色　2.5Y3/1　シルトの互層　径 1cm 未満の礫少量入る　植物遺体多量入る
8）黄灰色　2.5Y4/1　砂質シルトに　2.5Y7/1　灰白色　粗砂ブロック 30% 程度入る
　灰黄色　2.5Y6/2　粘土ブロック 20% 程度入る　径 2cm 未満の礫下位に多量入る　植物遺体多量入る
9）黄灰色　2.5Y5/1-6/1　粗砂～細砂　径 2cm 未満の礫流入あり　波状のラミナあり



流路 27



1）暗灰色　2.5Y4/2　粗砂～細砂に　同色粘土ブロック 30% 程度入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る（中世洪水砂）
2）灰オリーブ色　5Y 4/2　粗砂まじり粘土質シルトに　灰白色　5Y 7/1 微砂ブロック10%程度入る　径1cm未満の礫少量入る（中世前期耕作土）
3）オリーブ黒色　5Y 3/1　細砂まじり粘土質シルト　木片少量入る　粗砂の流入あり　径1cm未満の礫少量入る　上面に踏み込み多数あり（中世前期耕作土）
4）灰白色　5Y 7/2　細砂まじり粘土に　灰白色　5Y 7/1　微砂ブロック10%程度入る　炭化物少量入る　しまり良い（中世水田基盤層）
5）浅黄色　5Y 7/3　微砂まじり粘土　径1cm未満の礫少量入る　炭化物少量入る　下位にむかって暗色化　しまり良い（中世水田基盤層）
6）黒色　5Y2/1　シルト質粘土　下位に粗砂の流入あり　植物遺体・炭化物多量入る
7）灰白色　5Y7/1　粗砂～細砂　上層黒色粘土の流れ込みあり　大きくうねるラミナあり（流路埋土）
8）灰色　5Y5/1　粗砂～細砂まじりシルト　上層黒色粘土の流れ込みあり　波状ラミナあり（流路埋土）
9）オリーブ黒色　5Y3/1　粗砂まじり粘土質シルトと　灰白色　5Y7/1　粗砂～細砂の互層　植物遺体・炭化物多量入る　波状ラミナあり（流路埋土）
10）灰白色　5Y 7/1　細砂～粗砂と　オリーブ黒色　5Y 3/1粘土の互層　植物遺体・炭化物多量入る　波状ラミナあり（流路埋土）
11）灰オリーブ色　5Y5/2　粗砂まじり粘土に　灰オリーブ色　5Y4/2　粗砂ブロック20%程度入る　炭化物・植物遺体少量入る　弱いラミナあり（流路埋土）
12）オリーブ黒色　5Y2/2　粘土～粗砂まじり粘土に　灰白色　5Y 7/1　粗砂～微砂の流入あり　径1cm未満の礫少量入る　弱いラミナあり（流路埋土）
13）黒色　5Y2/1　シルト質粘土　灰色　5Y 4/1　粘土質シルト　下位に流入あり　植物遺体・炭化物多量入る（流路埋土）

第 53 図　第 2 調査区　遺構断面図（1）

溝 23　溝 23 は、2-1 区南半部中央において検出した遺構である（第 52 図参照）。平面形状は、鉤型を呈しており、東端を溝 24 と接する。確認した長さは 1.5 m、最大幅は 1.0 mを測る。断面形状は逆台形、最大深度は 0.3 mを測る。埋土は、灰白色粗砂～細砂と黒褐色微砂まじり粘土の互層を主体とする。底面付近には弱いラミナが認められる。

溝 22 とは、切り合い関係があり、溝 23 の方がより古い遺構である。現時点では、溝の用途および掘削目的は明らかではない。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

溝 24　溝 24 は、2-1 区南半部中央南より付近において検出した遺構である（第 52 図参照）。北端は、溝 23・土坑 12 と接している。北北東－南南西に方向軸をもっており、底面の標高差から、南から北へ流れていたことが推測される。最大長は 4.3 m、最大幅は 1.7 mを測る。断面形状は、鉢形、最大深度は 0.6 mを測る。埋土は黒褐色微砂まじり粘土と黄灰色微砂まじり粘土から成る。底面付近には、地山ブロックと植物遺体を多量に含む。

この溝は、後述する溝 22 とほぼ直角に接する。埋土からは、土師器（古墳時代）、須恵器（5 世紀）が出土した。

土坑 12　土坑 12 は、調査区南半部において検出した土坑である。南端を溝 24 と接している（第 54 図）。平面形状は不定形、東西に長く、この方向の最大幅は 4.8 mを測る。断面形状は、左右非対称の浅い鉢形である。最大深度は 0.5 mを測る。

埋土は、上下二層に分けることができる。上層は、古代末期から中世初頭の耕作土とその基盤層である湿地状堆積、下層は、土坑埋土である。このうち、下層は、黒色微砂まじり粘土と灰白色粗砂の互層を主体とする。遺構の用途および性格は不明である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

流路 18　流路 18 は、調査区北半部において検出した流路である。調査区西辺より北東方向へ延びるが、湾曲して南東へむかう。その後、流路 31 と合流して、調査区外へ続くとみられる。

検出した長さは 5 m、最大幅は 2.5 m、最大深度は 0.5 mを測る。埋土は、上下 2 層に分層できる。上層は、他の流路と同じく古代末期～中世前期の耕作土の沈み込みである。下層は、流路の埋土であり、黄灰色粗砂に黒褐色粘土ブロックが 10 ～ 30％程度入る。埋土には、波状ラミナが認められることから、一定の水流があったと考えられる。

この流路は、第 1 調査区において検出した流路 2 より連続する。埋土からは、弥生土器、土師器（庄内式・布留式・7 世紀）、須恵器（5 ～ 7 世紀）が出土した。また、古代末～中世初頭耕作土である上層からは、土師器（11 世紀）、瓦器（12 世紀）が出土した。

流路 25　流路 25 は、調査区南西隅において検出した溝である。調査区西辺から南東へ向かって延びており、北東へ方向を変えたあたりで消滅する。上面には、溝 22（7 世紀）が走る。検出した最大長は 13 m程度、最大幅は 2.7 mを測る。

断面形状は鉢形、最大深度は 1.08 mである（第 53 図参照）。埋土は、黒色～黒褐色粘土と黄灰色粗砂～細砂の混合層である。上位ではブロック状に混じり、下位ではラミナを伴う互層となる。黒色層には植物遺体が多量に含まれている。

この流路は、第 1 調査区 1-4 区において検出した流路 12 と連続するようである。埋土からは、土師器（庄内式）、須恵器（5 ～ 7 世紀）が出土した。

流路 26　流路 26 は、2-1 区南半部において検出した流路である。北西から南東方向へ流れており、東南端では落込み 1 へ流れ込む。検出した長さは 40 m程度、流路の幅は 4 ～ 8 mを測る。断面形状は、

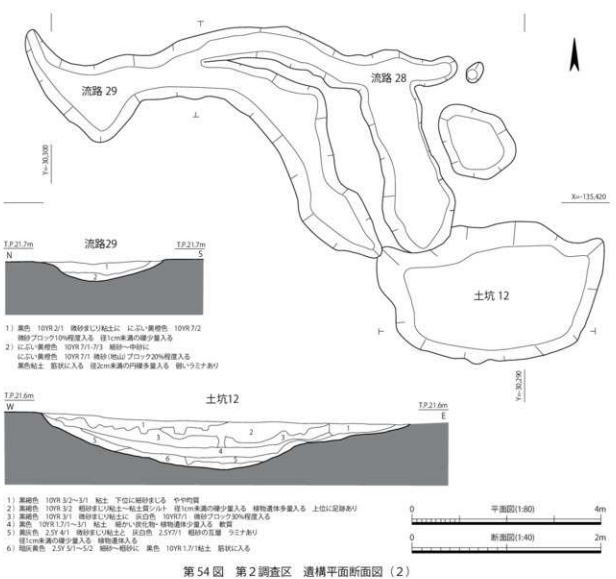
逆三角形に似るが、底面の凹凸が顕著である。最大深度は 0.65 mを測る（第 53 図参照）。

埋土は、黒褐色微砂まじり粘土と灰黄色～暗灰黄色砂層から成る。黒褐色微砂まじり粘土には、樹木枝幹や種実などの植物遺体が多量に含まれている。最下層には、直径 5 ㎝未満の円礫が多量に認められた。埋土からは、弥生土器（壷＝Ⅳ様式）、土師器（庄内式）、須恵器（５～７世紀）が出土した。なお、出土した弥生土器の破片は、落込み 3 から出土した一片と接合した。

流路 27　流路 27 は、調査区中央部において検出した流路である。流路 26 から分流し、南から北へ向かって流れる。調査区北半部の流路 30、落込み 2 と接する地点で消滅する。切り合い関係および出土遺物をみると、流路 30 よりは、古い時期の遺構であると考えられる。残存する長さは 20 m、流路幅は 5 ～ 7 mを測る。断面形状は不定形、最大深度は 0.8 ～ 1.0 m程度である（第 53 図参照）。

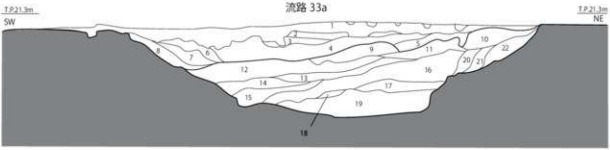
埋土は、上下に分層することができる。上層は、古代末期～中世前期水田耕作土の沈み込みである。灰オリーブ色粗砂まじり粘土と灰白色微砂から成る。足跡の踏み込み痕跡が明確に残る。下層は、流路埋土であり、灰白色粗砂～細砂とオリーブ黒色粘土の互層を主体とする。埋土には、弱いラミナが形成されていることから、緩やかな流水があったことが想定される。

この流路は、流路 26 が下流域の土砂堆積により、南方向への流出がせき止められた結果、北へ方向



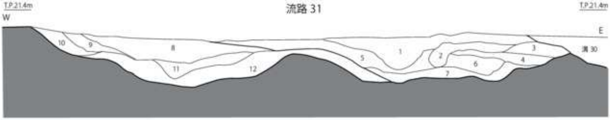
第 54 図　第 2 調査区　遺構平面断面図（2）

流路 33a



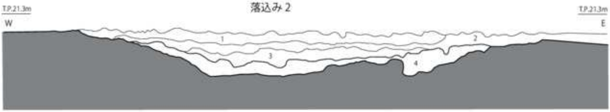
1）黒褐色　10YR3/1　粗砂まじり粘土質シルト　微砂ブロック 20% 程度入る
上位に上層からの踏み込みあり（古代末〜中世前期水田基盤層）
2）黒褐色　10YR2/2　粘土　10YR7/1　灰白色　微砂筋状に入る　やや軟質（上層）
3）黒褐色　10YR2/2　細砂まじり粘土　植物遺体微量入る（上層）
4）黒色　10YR2/1　微砂まじり粘土　径 1cm 未満の礫少量入る
植物遺体・炭化物多量入る　軟質（上層）
5）黒色　10YR1.7/1　微砂まじり粘土　細砂ブロック 10% 程度入る
径 1cm 未満の礫少量入る（上層）
6）黒色　10YR2/1　細砂まじり粘土　微砂ブロック 10% 程度入る　植物遺体少量入る（上層）
7）黒褐色　10YR3/1　微砂まじり粘土質シルト　径 0.5cm 未満の礫少量入る
植物遺体・炭化物少量入る（上層）
8）灰黄褐色　10YR4/2　細砂まじり粘土　微砂筋状に入る　炭化物少量入る（上層）
9）灰白色　10YR7/1-8/1　細砂　黒褐色　10YR3/1　粘土質シルト　筋状に入る（下層）
10）黒色　10YR2/1　細砂まじり粘土　灰白色　10YR7/1　細砂ブロック 10% 程度入る
径 0.5cm 未満の礫少量入る（下層）
11）黒色　10YR2/1　粗砂まじり粘土　灰白色　10YR7/1　微砂ブロック 20% 程度入る
植物遺体多量入る（下層）
12）灰黄褐色　10YR6/2　粗砂　径 2cm 未満の礫多量入る（下層）
13）灰黄褐色　10YR6/2　粗砂　径 1cm 未満の礫少量入る（下層）
14）褐灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粗砂筋状に入る　径 2cm 未満の礫多量入る　波状ラミナあり
15）黒色　10YR2/1　粘土　粗砂筋状に入る　波状ラミナあり（下層）
16）黒褐色〜黒色　10YR3/1-2/1　粘土　細砂〜中砂網の目状に入る　波状ラミナあり（下層）
17）灰黄褐色　10YR6/2　細砂　径 2cm 未満の礫多量入る　下位に鉄分沈着（下層）
18）灰黄褐色　10YR6/2　細砂　オリーブ黄色　7.5Y6/3　粘土ブロック 10% 程度入る　黒褐色
10YR3/1　粘土ブロック 40% 程度上位に入る（下層）
19）灰白色　5Y7/1-7/2　粗砂〜中砂　鉄分雲状に沈着（下層）

流路 31



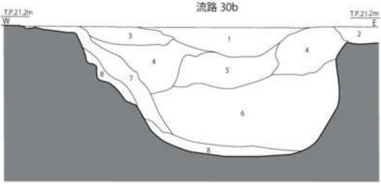
1）黒褐色　2.5Y3/2　細砂まじり粘土質シルト　下位に粗砂筋状に入る　植物遺体多量入る
6）層ブロック 10% 程度入る　波状ラミナあり
2）黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじりシルト　径 1cm 未満の礫下位に少量入る　軟質　しまり悪い
3）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫少量入る　地山ブロック 20% 程度入る
4）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじりシルト　細砂ブロック 40% 程度入る　径 2cm 未満の礫少量入る
5）オリーブ黒色　5Y5/1　細砂まじり粘土　地山砂筋状に入る　細かい植物遺体多量入る
6）黒色　5Y2/1　粗砂まじり粘土質シルト　微砂ブロック 10% 程度入る　径 2cm 未満の礫少量入る
軟質　しまり悪い
7）オリーブ黒色　5Y3/2　粗砂まじりシルト　微砂筋状に入る　径 2cm 未満の礫多量入る
8）黒褐色　2.5Y3/2　粗砂まじりシルトと　黄灰色　2.5Y6/1　細砂の互層
径 2cm 未満の礫少量入る　炭化物少量入る　やや軟質
9）黒褐色　2.5Y3/1　粗砂まじり粘土と　黄灰色　2.5Y4/1　粗砂まじりシルトの混合層
径 1cm 未満の礫少量入る
10）黄灰色　2.5Y4/1　細砂まじり粘土質シルト　下位に径 1cm 未満の礫多量入る
11）灰黄色　2.5Y7/1-6/2　細砂〜粗砂　径 1cm 未満の礫多量入る　波状ラミナあり
12）黒褐色　2.5Y3/1　粘土と　灰白色　2.5Y7/1　微砂の混合層　網の目状にラミナあり

落込み 2



1）暗灰色　2.5Y4/2　粗砂〜細砂に　同色粘土ブロック 30% 程度入る　径 0.5cm 未満の礫少量入る（中世洪水砂）
2）灰オリーブ色　5Y 4/2　粗砂まじり粘土質シルトに　灰白色　5Y 7/1 微砂ブロック10%程度入る　径1cm未満の礫少量入る（中世前期耕作土）
3）オリーブ黒色　5Y 3/1　細砂まじり粘土質シルト　木片少量入る　粗砂の流入あり　径1cm未満の礫少量入る　上面に足跡踏み込み多数あり（中世前期耕作土）
4）オリーブ黒色　5Y 3/1 細砂まじり粘土に　黒色　5Y2/1　粘土の流入あり　植物遺体・炭化物少量入る　やや軟質（落込み埋土）
地山）灰オリーブ色　5Y 5/2　粗砂まじり粘土質シルトに　オリーブ黒色　5Y 3/2　細砂まじり粘土ブロック　30%程度入る　径0.5cm礫少量入る　良くしまる

流路 30b



1）黄灰色　2.5Y6/1　粗砂　径 2cm 未満の礫多量入る（中世初頭堆積土）
2）黄灰色　2.5Y5/1　シルトに
黒褐色　2.5Y3/1　微砂まじり粘土質シルトブロック 5% 程度入る
径 3cm 未満の礫多量入る
3）灰黄色　10YR4/2　微砂まじりシルト
4）層微砂まじりブロック 10% 程度入る　植物遺体少量入る
4）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトと　にぶい黄色　2.5Y6/3　細砂の互層
網の目状のラミナあり
5）灰黄色　2.5Y6/2　粗砂　径 2cm 未満の礫筋状に入る
6）暗灰黄色　2.5Y4/2　シルトと　灰白色　2.5Y6/1　粗砂の互層
7）黄灰色　2.5Y4/1　微砂まじり粘土質シルト
径 1cm 未満の礫下位に多量入る
8）黄灰色　2.5Y4/1　微砂まじりシルト　径 2cm 未満の礫多量入る

0　断面図(1:40)　2m

第 55 図　第 2 調査区　遺構断面図（2）

を変えたものと考えられる。

埋土からは、縄文土器、弥生土器（Ⅱ様式・Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（古墳時代）、須恵器（5世紀）、被熱痕跡のある粘土塊が出土した。また、黒色粘土層には、多量の植物遺体が含まれており、樹木の枝葉および種実が出土した。

流路 28・流路 29　流路 28 および流路 29 は、調査区南半部において検出した遺構である。西から東へ延びた後、二又に分かれて湾曲し、南東方向へ延びる。土坑 12 に接した後、消滅するようである。

残存する最大長は 10 m程度、最大幅は 1.6 mを測る。断面形状は浅い鉢形、埋土は黒褐色粗砂まじり粘土とにぶい黄橙色細砂～中砂である。底部には弱いラミナが認められる（第 53 図）。

埋土からは、須恵器（7世紀）が出土した。

流路 30　流路 30 は、調査区中央部を横断して進む流路である。調査区西辺から東へ向かって延びた後、北東へ向かって湾曲する。調査区東辺に達した後は、縁辺に沿って北上し、やがて進路を東へとって、調査区外へ続く。確認できた長さは 45 m程度、流路幅は 3.0 ～ 5.5 mを測る。断面形状は、底面の凹凸が激しいため不定形である。最大深度は 1.0 m前後である。（第 53・55 図）

埋土は、上層包含層である第 4 層の落込みが上半部を占めており、流路の埋土は下半部に残る。下半部の埋土は、黄灰色～灰黄色粗砂～細砂と黒褐色シルトの互層を主体とする。大きくうねる波状ラミナが認められることから、激しい水流があったことが推察される。

この流路は、第 1 調査区において検出した流路 13 と連続する。このため、調査地北側丘陵地の裾を取り巻くように続くと考えられる。埋土からは、縄文土器（星田式）、弥生土器（Ⅱ様式・Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内式・布留式）、須恵器（5～7世紀）、サヌカイト切片と被熱痕跡をもつ窯体が出土した。また、埋土の上半部からは黒色土器（11 世紀）、瓦器（12 世紀）、木器が出土した。このうち、初期須恵器の数片が、流路 13 上層から出土した各土器片と接合した。

流路 31　流路 31 は、流路 33 から枝分かれした流路である。調査区北半部を北東へ向かって流れる。下流域では、流路 30 と合流し、調査区外へと続く。確認した長さは 17.0 m、最大幅は 6.0 mを測る。断面形状は不定形、最大深度は 0.5 mを測る。埋土は、黒褐色～オリーブ黒色粗砂まじりシルトと灰黄色細砂～粗砂を主体とする。部分的に互層を呈する。底面付近には、波状ラミナが認められる。流路 33 埋土に比べて、砂質である。埋土からは、縄文土器、弥生土器（Ⅴ様式）、土師器（布留式）、須恵器（5～7世紀）が出土した。

流路 33　流路 33 は、調査区北半部において検出した流路である。調査区西辺から流入し、流路 30 の北側をめぐって北東へ進んだ後、調査区外へと続く（第 55 図）。調査区東辺付近では、流路 31 と合流する。確認した長さは 40.0 m、流路幅は 3.0 ～ 7.0 mを測る。

断面形状は不定形、最大深度は 0.5 ～ 1.0 mを測る。埋土は上下に分層することができる。上層は、古代末期～中世初頭耕作土の沈み込みであり、下層は古墳時代中期遺構の流路埋土である。上層は、黒色および黒褐色を呈する粘土～粘土質シルトであり、上位面からの踏み込みが多数残る。一方、下層は灰黄褐色～灰白色細砂～粗砂と黒褐色粘土質シルトの互層を主体とする。大きくうねるラミナが認められることから、激しい水流のあったことがわかる。

この流路は、流路 30 と同様、第 1 調査区において検出した流路 13 と連続する。流路 33 と流路 30 は交錯しており、その新旧は判じがたい。出土遺物もほぼ同時期である。おそらく、度重なる出水により、水は、流路 30、33 の双方にまたがって下流域へと流れ落ちたと想像される。埋土からは、弥生土

器（Ⅱ様式・Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内式・布留式・古代）、須恵器（５～７世紀）、木器（織機部材・机天板）が出土した。また、上層部からは瓦器（12 世紀）が出土した。

６．古墳時代初頭の遺構面

第２調査区のうち、2-1 区では、第５層のうち上層にあたる 5-1 層を除去した面において、古墳時代初頭の遺構面を確認した（第 56 図）。第 5-1 層は、緑灰色シルト、灰色粗砂、オリーブ灰色シルトなどから成る堆積層であり、開析谷埋土の表層部分にあたる。このため、丘陵地縁辺に当たる調査区の南北両辺では、堆積が希薄である一方、谷本筋にあたる調査区中央部では厚く残存する。

第 5-1 層は、基本的に流水堆積であるが、土層の粒子は細かく、静かな土壌の沈積が繰り返されたとみられる。層内からは、縄文土器（後期）、弥生土器、土師器（庄内式）、流木が出土した。また、細かい炭化片が多く認められた。この遺構面では、谷上層にあたる落込みを検出した。

2-2 区では、基本的に第 5-1 層の存在は希薄である。上記の落込みは、2-2 区の南北に存在しており、2-2 区を洲状に残す形となる。このため、2-2 区では、落込みの縁辺を検出したのみであり、そのほかは弥生時代以前の包含層が露出する。

落込み４　調査区北東部において検出した落込みである。西から東へ向かって落ち込み、調査区外へと続く。調査区東壁では 32 m余りの最大幅を測る。埋土は、植物遺体を多量に含む黒褐色砂層とオリーブ灰色～灰白色の粗砂層が相互に入り交じった状態である。

埋土からは、庄内式土器、布留式土器、弥生土器片のほか、流木が多数出土した。流木は、その大半を試料採集し、樹種同定をおこなった。その結果、アカガシ亜属やコナラ亜属などのコナラ属が多く確認された（第６章　自然科学分析成果に詳述）。

落込み５　調査区南東部において検出した落込みである。谷の開析と同様、北西から南東へ向かって開いており、最大幅は 25 m以上となる。西から東へ向かい、緩やかに落ち込む。最大深度は、調査区東壁で 1.0 mを測る。埋土は、落込み７とほぼ同様であるが、より黒色粘土層の堆積が厚い。

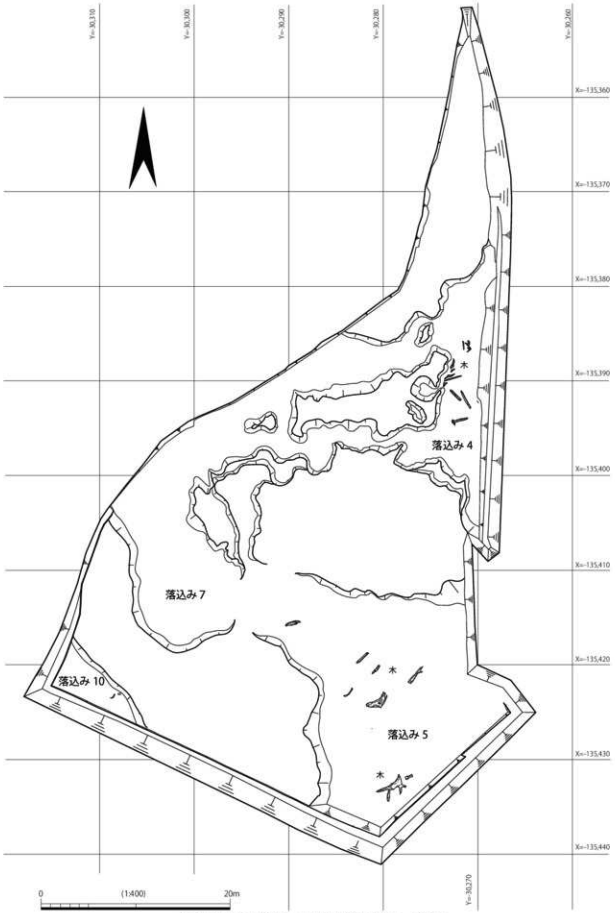
この黒色粘土層は多量に植物遺体を含むことから、谷周辺に堆積した腐葉土が落込みに流れ込んだものと考えられる。落込みの北肩斜面からは、広葉樹を主体とする樹木の根株が出土した。根を張ったままの状態であり、本来は、谷中央に向かって斜めに生えていたものと考えられる。すべて樹径が大きく、生育時には大木であったと考えられる。人為的な伐採痕跡は認められなかった。また、落込み底面付近では、流木が出土した。

この落込みの埋土からは、縄文土器（星田式）、弥生土器（Ⅱ様式・Ⅳ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内式・布留式）、サヌカイト切片が出土した。また、南肩より、庄内式土器片がまとまって出土した。

落込み７　落込み７は、調査区南半部において検出した落込みである。調査区北辺から東南方向へ広がりを見せる。調査区東部において検出した落込み５と連続する可能性が高い。最大幅は 11.8 mを測る。流路の深度は概ね 0.5 m程度である。

落込み７の埋土は、谷埋土下層と細かく交差を繰り返しながら堆積するため、緑灰色～灰色砂質シルトと砂礫の互層を主体とする。底面付近には、植物遺体を多量に含む黒色粘土層があり、コナラ属等の流木が、大きな塊で出土した。

埋土からは、縄文土器、弥生土器（Ⅱ様式・Ⅴ様式）、土師器（庄内式）が出土した。また、底面近くから、弥生土器の壷（Ⅴ様式）と庄内式甕、木製品（直柄鍬身）が出土した。



第 56 図　第 2 調査区　古墳時代初頭遺構面　全体図

第３節　第３調査区の調査成果

１．調査の概要

第３調査区では、確認調査において、中世に遡る水田跡と、溝の発見が報告されている。このため、今回の調査では、この溝の明確な時期および周辺区域の開発過程の解明に、調査の焦点が絞られた。また、弥生土器の出土が確認されており、関連する遺構の発見が期待された。

第３調査区において確認した包含層は、大別すると近世包含層、中世包含層、弥生時代以前包含層の３層である。層内からは、弥生時代から近世にいたるまでの遺物が出土した。

検出した遺構面は、中世末期～近世初頭、中世前期、古代初頭の合計３面である。中世前期遺構面では、第１調査区において検出した溝に連続する遺構を検出した。このことにより、中世前期における水田開拓範囲が明確に示されることとなった。

２．第３調査区　中世末期～近世初頭遺構面

第３調査区の現況面には、調査区の中央を横断する段がある。この段の上下では、約 0.8 mの標高差が認められる。以下、文中では段上、段下の表現を用いて記述をおこなう。

第３調査区では、第１層を除去した面において、中世末期から近世初頭の遺構面を検出した（第57図）。第１層の層厚は、段上と段下とでは、0.6 m前後の差がある。この層厚差は、近年の圃場整備により、段下部分が大きく削平されたことに起因する。

溝 25　溝 25 は、調査区中央段の北東側を、段の下端に沿って延びる溝である。段と同様、北西－南東方向に主軸をもつ。最大長 22.0 m、最大幅 0.5 mを測る。断面形状は、左右非対称の逆台形に似る。最大深度は 0.05 mである（第 58 図）。

溝の南西側に並ぶ杭列は、段の構築（土留め）に要するものと考えられることから、溝 25 との関連は特に認められない。

埋土はにぶい橙色細砂まじり粘土質シルトを主体とする。鉄分の沈着があり、ラミナは認められない。水田耕作に伴う区画溝または用水路であると考えられるが、常時流水があった痕跡は認められない。埋土からは、須恵器（中世）、瓦器、陶器（近世）、磁器（近世）が出土した。

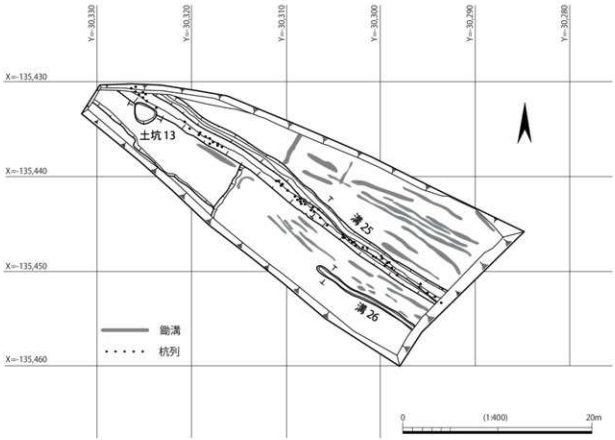
土坑 13　調査区北西端しにおいて検出した土坑である。平面形状は、いびつな楕円形を呈する。長径 2.5 m、短径は 1.8 mを測る。断面形状は、浅い皿形、埋土は黄灰色粗砂混じりシルトに灰色微砂まじりシルトブロックを含む（第 58 図）。

水田に伴う施設であると考えられるが、明確な用途は不明である。埋土からは、瓦（近世）が１点出土した。

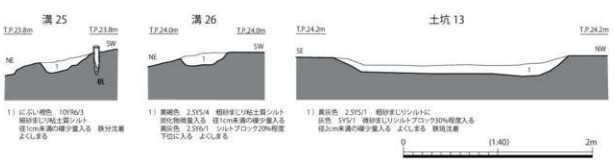
溝 26　溝 26 は、調査区南東部の段上において検出した溝である。中央段、溝 25 と同様、北西－東南に方向軸をもつ。若干蛇行するものの、調査区外へ向かってほぼ直線に延びている。最大長は、12.0 m、最大幅は 0.48 mを測る。断面形状は浅い鉢形、最大深度は 0.05 mである（第 58 図）。

埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。しまりが良く、底面付近には、下層ブロックの巻き上げ痕跡が認められる。

調査区壁断面図をみると、この溝の上手側（南西側）に、段を認めることができる。また、この溝より上段では、鋤溝の痕跡が認められない。これらのことから、溝 26 は、この時期に営まれた水田の南



第 57 図　第 3 調査区　中世末期～近世初頭遺構面　全体図



第 58 図　溝 25・溝 26・土坑 13　断面図

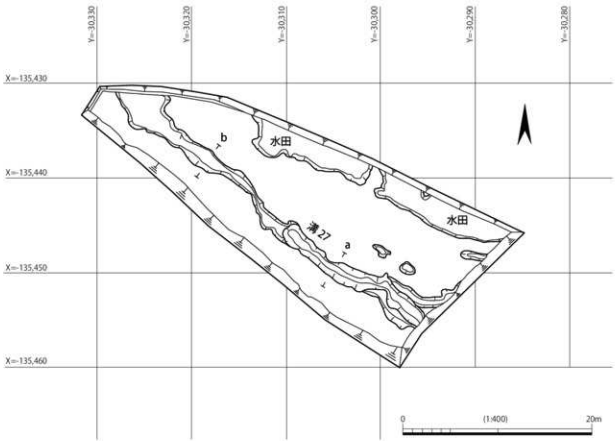
西限を示す区画溝だった可能性が高い。本来は、第 3 調査区を縦断する形で、長く延びていたものと考えられる。埋土からは、土師器（中世）と東播系須恵器（13 世紀）が出土した。

2．第 3 調査区　中世前期遺構面

第 3 調査区では、第 4 層を除去した第 4 面において、溝を伴う水田跡を検出した（第 59 図）。

溝 27　溝 27 は、段上において検出した溝である。調査区北西端から南東辺にかけて、小さく蛇行しながら横断する。最大長は、40.0 m、最大幅は 3.0 m、最大深度は 0.6 mを測る。この溝は、調査区中央付近で、再掘削がおこなわれたようであり、切り合い関係を確認することができた。

この再掘削部分より北西半部（上流）と南西半部（下流）とでは、堆積状況が大いに異なる（第 60 図）。



第 59 図　第 3 調査区　中世前期遺構面　全体図

1）灰黄色　2.5Y6/1　細砂まじり粘土質シルトと
　黄灰色　2.5Y6/1　細砂～微砂の混合層　径3cm未満の礫少量入る
　弱い筋状ラミナあり
2）黄灰色　2.5Y4/1　粘土質シルトと　黄灰色　2.5Y6/1　細砂～微砂の互層
　波状ラミナ あり　しまり悪い
3）灰色　5Y6/1　細砂に　灰色　10Y6/1　細砂まじり粘土質シルトの流入あり
　径1cm未満の礫多量入る　しまり悪い
4）灰色　5Y7/1　細砂に　灰色　10Y6/1　細砂まじり粘土質シルトの流入あり
　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
5）灰色　7.5Y5/1　細砂まじり粘土　炭化物少量入る
　灰色　10Y6/1　シルトブロック40%程度入る　微砂の流入による波状ラミナあり
　細砂～細砂の混合層ブロック20%程度入る　径1cm未満の礫少量入る
6）黄灰色　2.5Y4/1　粘土質シルト　木片～炭化物片少量入る　ほぼ均質
7）黄灰色　2.5Y5/1　粘土ブロック　灰黄色　2.5Y6/1　細砂の混合層
　細砂～細砂の流入あり　しまり悪い
8）黄灰色　2.5Y5/1　粘土質シルトに
　黒褐色　2.5Y3/1　粘土ブロック40%程度入る　しまり悪い

1）灰オリーブ色　5Y5/2　細砂まじりシルトに
　灰色　5Y5/1　微砂まじりシルトブロック20%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　しまりやや悪い　鉄斑沈着（近世耕作土）
2）にぶい黄褐色　10YR6/3　細砂まじり粘土質 シルト　径1cm未満の礫少量入る
　鉄分沈着　下位にS層ブロック10%程度入る　しまり良い（中世耕作土）
3）褐灰色　10YR6/1～6/6　粗砂～シルト　下位にむかって細粒化
　径1cm未満の礫多量入る　鉄分沈着　部分的に粘土質化　しまり良い
　（中世耕作土）
4）にぶい黄褐色　10YR6/4　細砂まじり粘土質シルト　径1cm未満の礫微量入る
　褐灰色　10YR4/1　粘土ブロック10%程度入る　炭化物微量入る　しまり良い
　（中世耕作土基盤層）
5）褐灰色　10YR4/1　細砂まじり粘土と　灰黄色　2.5Y6/2　縞～微砂の互層
　下位にむかってシルト質化　しまり悪い（溝27埋土）

第 60 図　溝 27　断面図

溝の上流では、断面形状はいびつな椀形であり、埋土は灰色粗砂まじり粘土、黄灰色粘土質シルトや黒褐色粘土質シルトなどから成る混合層である。人頭大の粘土やシルトブロックが、投げ込まれたように堆積しており、その間隙に粗砂やシルトが流入している。このため、埋土自体はしまりが悪い。

一方、溝下流の埋土は、粗砂まじり粘土と細砂～微砂の互層を主体とする緻密な堆積である。上位は中世耕作土による撹乱を受けるものの、以下は基本的に流水堆積である。

この溝は、人為的に掘削されたことが断面形状から見て確実であるが、加えて北西半部では、人為的に埋め戻された可能性がある。おそらく、中世水田整形時、耕作面の範囲拡大に伴い、故意に埋め戻されたものと推測する。

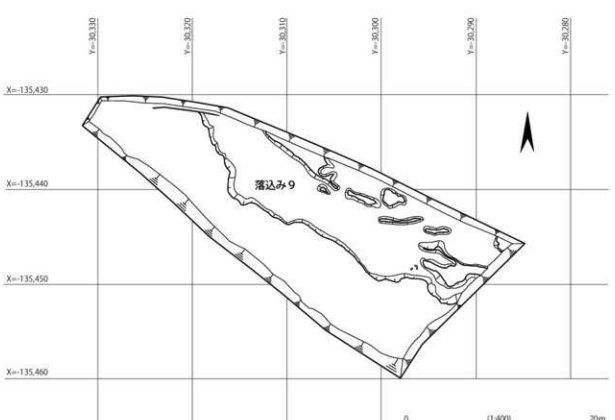
なお、この溝27は、調査地全体をみると、第1調査区において検出した溝10の延長上に位置するまた、段丘斜面上に掘削されているという立地条件も共通する。このため、連続する遺構であった可能性を考えている。埋土からは、木片が出土したのみであり、遺物の出土は認められなかった。

3．第3調査区　古代遺構面

第3調査区では、中世包含層である第4層を除去した面において、古代と推測される遺構面を検出した（第61図）。この遺構面では、調査区の北側において落込みを確認した（落込み9）。

落込みの埋土は、黄灰色細砂～粗砂を主体とする。しまりが悪く、直径3㎝未満の礫の流入が顕著である。この層からは、土師器、須恵器（5世紀）が出土した。

また、上層の土壌化層からは、黒色土器（11世紀）が出土した。



第61図　第3調査区　古代遺構面　全体図

第４節　第５調査区の調査成果

１．調査の概要

第５調査区は、調査地南側丘陵上に設定した調査区である。第５調査区は、丘陵の先端部にあたるため、古墳時代前期～中期の竪穴住居が確認された上の山遺跡東側丘陵斜面と、茄子作遺跡北側丘陵面とは、小川周辺の谷地に向かって、北、南、東の三方から鼻先をつき合わせるように立地する。このため、第５調査区においても、同様の遺構発見が期待された。

丘陵の尾根筋は、調査区の中央を南西－北東方向に通っている。このため、調査区南西辺の中央部がもっとも高く、北西、南東、北東の三方へ緩やかに下がる。包含層の堆積も、調査区の北西、南東、北東の三方に向かって徐々に厚くなっており、調査区南西辺中央部にはほとんど認められない。

第５調査区では、工程上、5-1 区・5-2 区 5-3 区の合計３区画に分割して調査をおこなった。この節では、すべてをあわせて報告する。

２．第５調査区　検出遺構面

調査は、重機による現代耕作土および近世耕作土の除去から開始したが、5-1 区の大半部分および、5-2 区、5-3 区では、近世耕作土層の直下において、早くも地山が露出した。このため、地山上面を遺構面とした。ただし、5-1 区のうち、地盤が東へ下がる斜面にあたる北東部では、僅かではあるが、にぶい黄褐色粘土質シルト～シルトを主体とする中世包含層（14 ～ 16 世紀）の残存を確認した（第２層）。

地山上面で検出した遺構の埋土には差異があり、出土遺物にも時間幅が認められる。第５調査区では、同一遺構面において、古墳時代から近世に至るまでの遺構が並列して確認された。

以上の経緯から、この節では、便宜上、遺構を中近世と古墳時代～古代までのものに大別し、第 63 図と第 64 図にそれぞれ掲げた。

第５調査区において検出した中近世の遺構は、掘立柱建物、柱列、溝、井戸、土坑、ピットである。近世の遺構は、おもに水田跡と、これに伴う土坑、井戸、畦畔、溝に限られている。埋土は、近世耕作土層であるにぶい黄色～黄褐色を呈する粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。

中世に属する遺構は、掘立柱建物、柱列、溝、土坑、ピットである。埋土はにぶい黄褐色を呈するシルトであり、炭化物やマンガン粒を含むものが多い。総じてしまりが悪く、残存状態も良くない。

古墳時代～古代に類される遺構は、竪穴住居と掘立柱建物、土坑、ピット、溝である。このうち、竪穴住居は、古墳時代、掘立柱建物および溝は奈良時代に属するものである。埋土は、褐色粘土質シルトを主体としており、部分的に下層（地山）が巻き上げられ、小ブロックとして混入する。

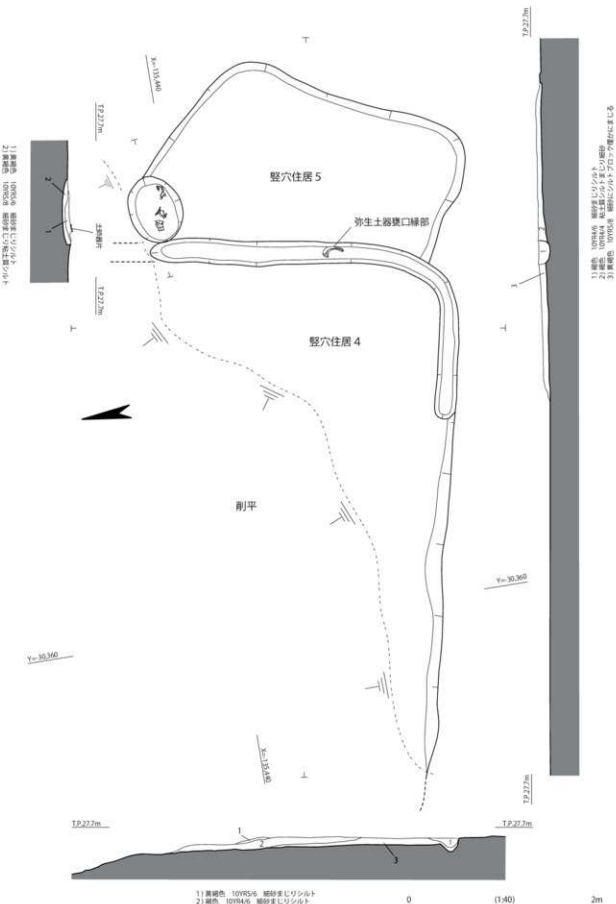
なお、5-1 区北東部では、中世包含層の除去面において、溝状遺構を検出した。

３．第５調査区　検出遺構（竪穴住居）

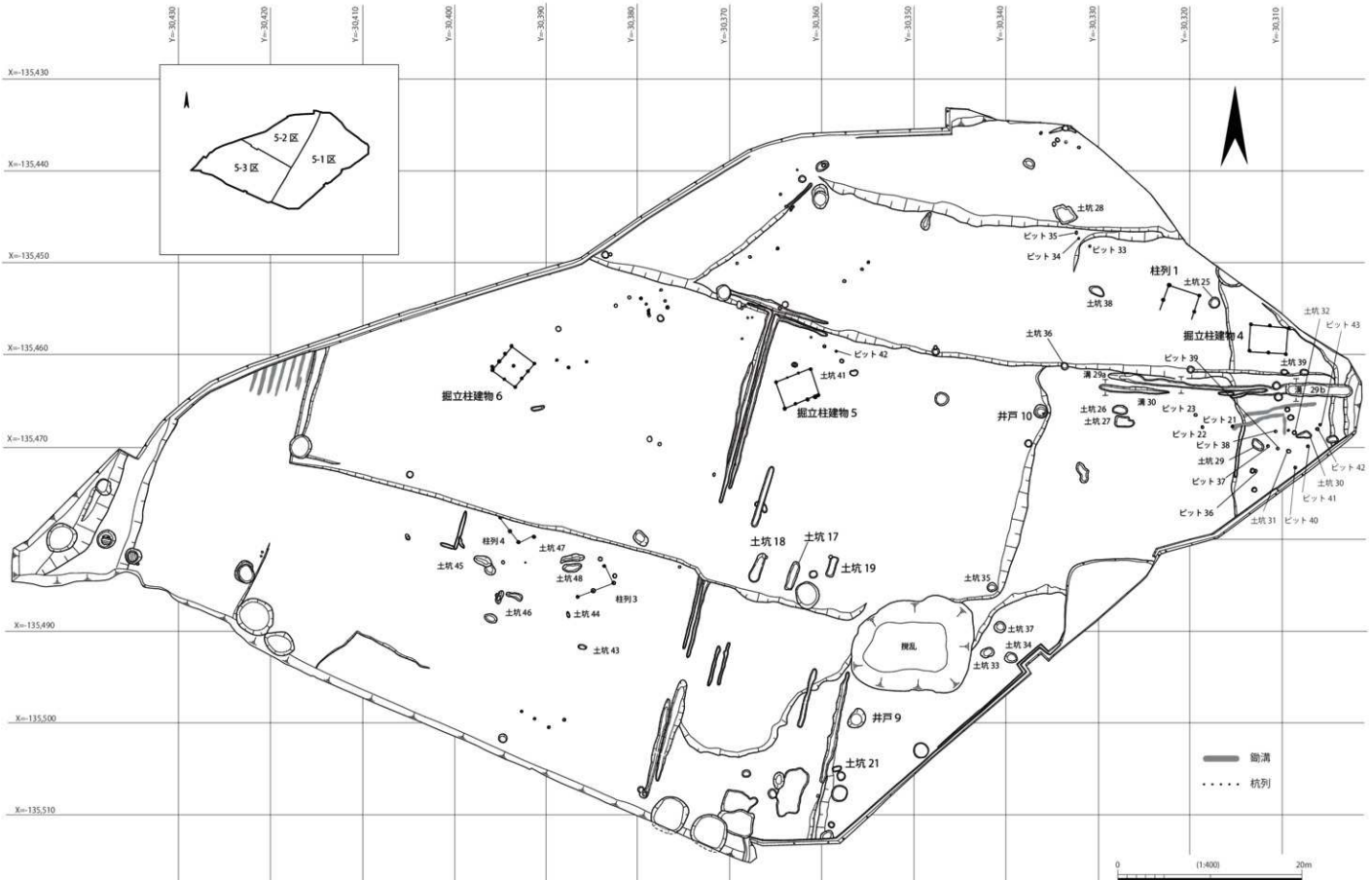
竪穴住居４　竪穴住居４および５は、5-2 区北西部において検出した遺構である（第 62 図・第 64 図）。丘陵斜面が北西へ緩やかに下がる斜面上に立地する。

竪穴住居４および竪穴住居５は、切り合い関係にあり、竪穴住居４の方が竪穴住居５よりも新しい。

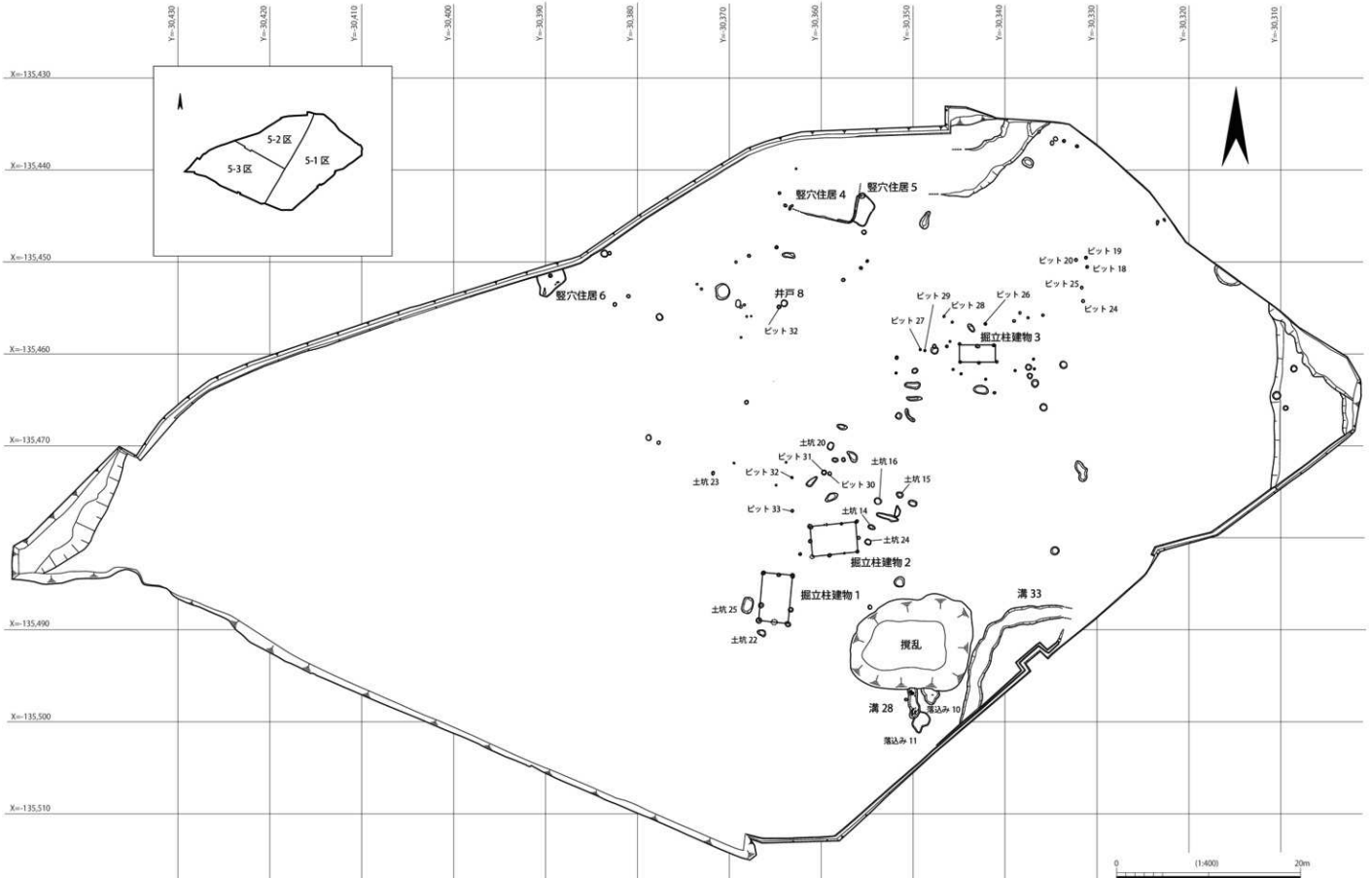
調査時、この周辺から古墳時代の遺物と炭化物の出土が目立ったため、精査を重ねたところ、北から南へ延びる小溝を確認した。



第 62 図　第 5 調査区　竪穴住居 4・5　平面断面図



第 63 図　第 5 調査区　中近世遺構　配置図



第64図　第5調査区　古墳時代～古代遺構　配置図

第 65 図　第 5 調査区　竪穴住居 6　平面断面図

この溝は、やがて西へと屈曲する方向性を示し、竪穴住居の南西隅を画する壁溝であることが明らかとなった。しかし、後世の削平により、住居埋土が残存する範囲は狭く、遺構全体の形状を復元するまでには至らなかった。

また、竪穴住居 4 壁溝の東側においても、炭化物を含む遺構埋土が認められた。精査を重ねた結果、炭化物および土器片を含む遺構埋土の重なりが判明した。このため、この両者を竪穴住居の立替等に伴う重複と位置づけ、下面の遺構を竪穴住居 5 とした。

竪穴住居 4 遺構の埋土は、褐色細砂まじりシルトと黄褐色細砂を主体とする。確認できた壁溝の長さは 4.5 m、最大幅は 0.22 mを測る。壁溝の最大深度は 0.12 mである。壁溝埋土からは、弥生時代後期の甕の口縁部が 1 点出土した。また、床埋土からは、土師器（布留式）の破片が出土した。

竪穴住居 4 は、遺構埋土の広がりから、一辺 5 m以上の床面をもつ住居跡であることが予測される。また、検出した南西隅部分の状況より、平面形状は、隅丸方形を呈すると考えられる。建物の方向軸は、方位北より 14 度東へ振っており、これは、丘陵斜面の等高線と直交する。

この住居は、緩やかに下がる丘陵地の北北西斜面上に設けられていたと考えられる。柱穴および炉跡は確認できなかった。

竪穴住居 5　竪穴住居 5 は、竪穴住居 4 の東側において検出された遺構である（第 62 図）。大部分が削平されており、壁溝等の残存は確認できていない。北西隅に、土坑状の落込みがあり、ここから古墳時代の土師器壺の体部破片がまとまって出土した。

竪穴住居 6　竪穴住居 6 は、5-2 区南西辺において検出した遺構である（第 65 図）。平面形状はやはり

削平をうけており、遺構埋土は、一辺３ｍ程度の範囲に残存するのみである。遺構埋土は、黄褐色細砂まじりシルトを主体とする。残存深度は 0.08 ｍを測る。壁溝の検出にはいたらなかったが、柱穴１基および、炉跡とみられる土坑を１基検出した。床面直上から、土師器（布留式）の破片が出土した。

竪穴住居６ピット１　平面形状は円形、直径は 0.38 ～ 0.40 ｍを測る。最大深度は 0.05 ｍである。このピットでは、掘り方の底面中央において、円形状の窪みを確認した。ここに柱を据えたと考えれれる。窪みの直径は 0.18 ｍを測る。埋土は明黄褐色細砂まじり微砂であり、黒色化した炭まじりシルトブロックと、被熱して赤味を帯びた粘土質シルトブロックを含む。埋土から、遺物の出土はなかった。

竪穴住居６土坑１　竪穴住居６埋土の広がりのうち、南西端において検出した土坑である。平面形状はいびつな菱形を呈する。最大長は東西方向にあり、0.9 ｍを測る。直交する短径は、0.82 ｍである。埋土は薄く、0.02 ～ 0.03㎝が残るのみである。

埋土はピット１と同様、焼土や炭化物を含む。この場所は、北東へ向かって下がる斜面にあたる。このため、住居南西側において検出した土坑１は、もっとも高い場所にあたることから、炉跡としての可能性が考えられる。埋土から、遺物の出土はなかった。

４．第５調査区検出遺構（掘立柱建物・柱列）

掘立柱建物１　掘立柱建物１は、５調査区中央付近において検出した遺構である（第 66 図）。

調査に先立っておこなわれた確認調査では、この建物を構成するピットのうち、２基が検出報告されている。今回の調査において検出した柱穴は、既知のものも含めて８基を数える。３間×２間の建物であるため、本来ならば 10 基の柱穴を要するが、このうちの２基は、近世期の水田整形の際に削平され、消滅したようである。

確認できた建物の規模は、5.28 ｍ× 3.22 ｍを測る。概算すると、約 17㎡の広さとなる。柱間は 1.5 ～ 1.55 ｍ、このうち南西角の間口（ピット３とピット４の間）が 1.75 ｍと若干広いことから、建物の入口がこの箇所に設けられていたと推測される。

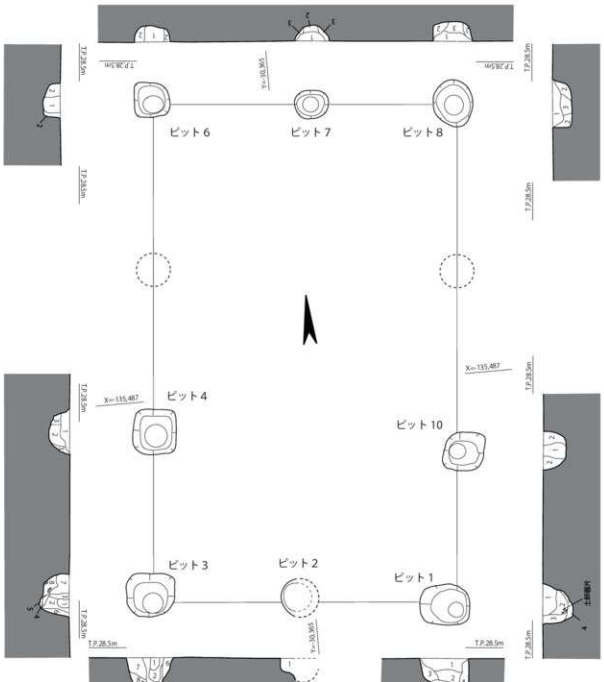
建物の主軸は、方位北に対して６度西へ振った方向を指している。ピットは、西側および東側に４基（うち１基は消滅）、中央に２基が並ぶ。柱穴埋土から出土した遺物から、建物柱穴の最終埋没期は８世紀であると考えられる。

掘立柱建物１ピット１　掘立柱建物１東側柱列のうち、もっとも南に位置するピットである。建物全体では、南東隅柱にあたる。平面形状は、隅丸長方形を呈する。東西に長く、最大長は 0.54 ｍ、最大幅は 0.44 ｍを測る。断面形状は方形または逆凸形である。最大深度は 0.32 ｍを測る。

掘り方の中央より東寄りの地点が一段下がっており、これが柱跡と考えられる。段の直径は 0.22 ｍを測る。ただし、断面では、直立する柱痕跡は確認できていない。柱根の抜き取りが為されたものと考えられる。埋土は、黄褐色～明黄褐色粘土質シルトを主体とし、明黄褐色粘土ブロックや細かい炭化物、直径１㎝未満の礫等が混入する。埋土からは、須恵器坏身の破片（８世紀）と土師器（古墳時代）が出土した。

掘立柱建物１ピット２　掘立柱建物１の南柱列のうち、中央に位置するピットである。このピットは、確認調査時に検出され、掘削がおこなわれたため、その一部を欠損する。平面形状は円形、直径は 0.4 ｍに復元できる。断面形状は柱跡が突出する逆凸形である。残存する最大深度は、0.22 ｍを測る。

掘り方の中央より東寄りの地点に柱跡があったものと考えられる。埋土は、暗灰黄色粘土質シルトで



ピット1
1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに
　10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルトブロック
　10% 程度入る　炭化物少量入る
2）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト
　径 1cm 未満の礫少量入る
　径 1cm 未満の炭化物少量入る　土師器片入る
3）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルトに
　1）層ブロック　20% 程度入る
　細かい炭化物少量入る　軟質
4）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルトに
　明黄褐色　10YR7/6　粘土ブロック 30% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る

ピット2
1）暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　炭化物少量入る
　土師器細片入る

ピット3
1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに
　褐色　10YR4/6　粘土ブロック 40% 程度入る
　細かい炭化物少量入る
2）黄褐色 10YR5/6　粘土　径 0.5cm 未満の礫少量入る
　炭化物少量入る　軟質　しまり悪い
3）2）層に 7）層ブロック　50% 程度入る
4）2）層に近似　さらに軟質
5）4）層に明黄褐色　10YR7/6　粘土ブロック 20% 程度入る
6）2）層に黄褐色　10YR7/8　粘土質シルトブロック
　40% 程度入る
7）明黄褐色 10YR7/8　粘土質シルトに
　黄褐色　10YR5/6　粘土ブロック 20% 程度入る
8）4）層に近似　7）層　10% 程度入る　土師器片入る

ピット4
1）褐色　10YR4/6　粘土質シルト
　径 0.5cm 未満の礫少量入る
　炭化物少量入る　土師器細片入る
2）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルトに
　明黄褐色 10YR5/4　シルト筋状に入る
　炭化物多く入る
3）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルトに
　褐色　10YR5/6　粘土質シルトブロック 20% 程度入る
　炭化物少量入る

ピット6
1）褐色　10YR4/6　粘土質シルトに　径 1cm 未満の礫少量入る
　土師片入る　炭化物少量入る
2）1）層に黄褐色　10YR5/8　粘土質シルトブロック
　10% 程度入る　炭化物入る

ピット7
1）にぶい黄褐色　10YR5/4　粘土質シルト
　径 1cm 未満の礫少量入る　細かい炭化物片少量入る
2）黄褐色　10YR6/8　極砂混じり粘土質シルトに
　1）層ブロック 30% 程度入る　炭化物片少量入る
3）黄褐色　10YR6/8　極砂混じりシルト
　細かい炭化物片僅かに入る　マンガン粒少量入る

ピット8
1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに
　10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルトブロック 10% 程度入る
　炭化物少量入る
2）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
　径 1cm 未満の炭化物少量入る　土師器片入る
3）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルト　細かい炭化物少量入る
4）明黄褐色　10YR6/8　粘土質シルトに
　明黄褐色　10YR7/6　粘土「地山」ブロック 30% 程度入る
　径 1cm 未満の礫少量入る

ピット10
1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに
　明黄褐色　10YR6/8　　粘土質シルトブロック 10% 程度入る
　炭化物少量入る
2）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルト　径 1cm 未満の礫少量入る
　径 1cm 未満の炭化物少量入る　土師器片入る

0　(1:40)　2m

第 66 図　第 5 調査区　掘立柱建物 1　平面断面図

ある。埋土からは、炭化物および土師器（古墳時代）の細片が出土した。

掘立柱建物１ピット３　掘立柱建物１西側柱列のうち、もっとも南に位置するピットである。建物全体では、南西隅柱にあたる。平面形状は、隅丸長方形を呈する。東西に若干長く、最大長は 0.51 m、最大幅は 0.45 mを測る。断面形状は湯呑形に似るが、底面に凹凸がみられる。最大深度は 0.31 mを測る。

断面観察により、掘り方中央より南に寄った地点において、柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.23 mを測る。掘り方の埋土は、黄褐色粘土と黄橙色粘土質シルト、明黄褐色粘土質シルトの混合層である。柱跡の埋土は、黄褐色粘土質シルト～粘土を主体とする。一部が含水し、軟質化が認められる。柱跡埋土には炭化物が少量含まれていた。また、掘り方埋土からは、土師器甕体部（古墳時代）のほか、須恵器杯身（７世紀）が出土した。

掘立柱建物１ピット４　掘立柱建物１西側柱列のうち、南から２番目に位置するピットである。平面形状は、隅丸長方形を呈する。一辺が、0.47 ～ 0.48 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.22 mを測る。

柱跡は、掘り方中央よりやや南寄りの地点において確認した。柱跡の直径は 0.23 mである。掘り方埋土は、明黄褐色粘土質シルトに褐色粘土質シルトブロックが入る。柱跡埋土は、明黄褐色粘土質シルト～シルトを主体とする。多量に炭化物を含むため、埋土全体が黒色味を帯びる。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物１ピット６　掘立柱建物１西側柱列のうち、もっとも北に位置するピットである。建物全体では、北西隅柱にあたる。平面形状は、一角の崩れた隅丸長方形を呈する。一辺は 0.37 ～ 0.38 mを測る。断面形状は、浅い椀形を呈する。最大深度は 0.18 mである。

柱跡は、掘り方中央より南寄りの地点において確認した。柱跡の直径は 0.19 mを測る。掘り方埋土は褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトブロックの混合層、柱跡埋土は、褐色粘土質シルトに炭化物が少量入る。柱跡埋土から、土師器の細片（時期不明）が出土した。

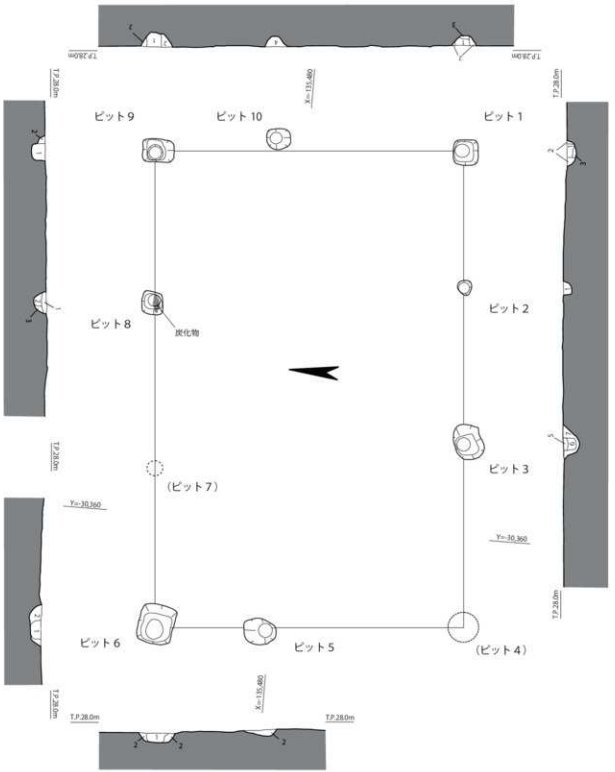
掘立柱建物１ピット７　掘立柱建物１北側柱列のうち、中央に位置するピットである。平面形状は、東西に長い楕円形を呈する。長径 0.37 m、短径 0.3 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.17 mを測る。ピット掘り方のほぼ中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.17 mを測る。掘り方の埋土は、黄褐色粗砂まじりシルト、柱跡の埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに、にぶい黄褐色粘土質シルトブロックが入る。掘り方、柱跡の埋土ともに炭化物が含まれている。掘り方埋土から、土師器（古墳時代？）の破片が１点出土した。

掘立柱建物１ピット８　掘立柱建物１東側柱列のうち、もっとも北に位置するピットである。建物全体では、北東隅柱にあたる。平面形状は、隅丸長方形を呈する。東西に長く、最大長は 0.54 m、最大幅は 0.44 mを測る。断面形状は南北に長い楕円形を呈する。長径 0.5 m、短径 0.42 mを測る。断面形状は方形に近い。最大深度は 0.21 mである。

断面観察では、掘り方中央において柱跡を検出した。柱跡の直径は 0.2 mである。掘り方埋土は黄褐色粘土質シルト、柱跡埋土は、明黄褐色粘土質シルトを主体とする。掘り方埋土から、土師器（古墳時代？）の破片が出土した。

掘立柱建物１ピット 10　掘立柱建物１西側柱列のうち、南より数えて２番目に位置するピットである。平面形状は、いびつな隅丸方形を呈する。一辺の長さは 0.42 ～ 0.44 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.24 mである。

掘り方中央よりやや西寄りの地点において、柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.17 mを測る。掘り方



1）黄褐色　10YR5/6　粗砂まじり粘土質シルトに
　にぶい黄褐色　10YR4/3　粘土ブロック 30% 程度入る
　径 0.5cm 未満の暗中量入る
2）黄褐色　10YR6/8　粗砂まじり粘土質シルトに
　褐色　10YR4/4　粘土　20% 程度形状に入る
3）黄褐色　10YR6/8　粗砂まじり粘土に
　黄褐色　10YR5/6　粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る
4）にぶい黄褐色　10YR5/4　粘土質シルトに
　黄褐色　10YR5/8　粘土質シルトブロック 30% 程度入る
　灰黄褐色　10YR5/2　シルトブロック 30% 程度入る
　径 0.5cm 未満の炭化物少量入る
　径 1cm 未満の礫少量入る
5）黄褐色　10YR5/6　粗砂まじり粘土質シルト
　径 0.5cm 未満の礫多量入る
6）にぶい黄褐色　10YR5/4　粗砂まじり粘土質シルト
　径 2cm 未満の礫少量入る
7）黄褐色　10YR5/4　粗砂まじり粘土質シルトに
　黄褐色　10YR5/8　粘土質シルト　20% 程度形状に入る

第 67 図　第 5 調査区　掘立柱建物 2　平面断面図

埋土は黄褐色粘土質シルト、柱跡の埋土は、明黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む黄褐色粘土質シルトである。掘り方埋土には、大粒の炭化物と土師器（古墳時代）の細片が含まれていた。また、柱跡埋土からは、須恵器高杯（8世紀）が出土した。

掘立柱建物2　掘立柱建物2は、掘立柱建物1の北東側において検出した遺構である（第67図参照）。掘立柱建物1と同様、3間×2間の規模をもつ。しかし、10基を要する柱穴のうち、2基が撹乱によって消滅するため、確認できた柱穴は計8基である。

建物の規模は、5.2 m×3.25 mを測る。概算すると、約16.9㎡の広さとなり、床面積では、建物1と大差ない。柱間は1.45～1.65 mを測り、ややばらつきがある。建物妻側の柱間（ピット4とピット5、ピット1とピット10）が、2.0 m、2.1 mと広いことから、一方へ向かって屋根の傾斜を緩くつくる、方流れ形の屋根構造を持っていた可能性がある。

建物の主軸は、方位西に対して4.5度北へ振った方向を指している。建物1とは、直角に並ばず、「ハ」の字を描くように立地している。

なお、掘立柱建物2の柱穴は、掘立柱建物1の柱穴と比べて、規模が小さく、脆弱な印象を与える。柱跡から想定される柱根も細く、建物1のそれにはおよばない。建物1が主屋であるならば、建物2は副次的な建造物であった可能性が高い。建物の埋没時期は、建物1と同じく奈良時代と推定される。

掘立柱建物2ピット1　掘立柱建物2南側柱列のうち、もっとも東に位置するピットである。建物全体では、南東隅柱にあたる。平面形状は隅丸方形、一辺は0.26～0.27 mを測る。断面形状は浅い鉢形、残存する最大深度は0.1 mを測る。

このピットでは、掘り方のほぼ中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は0.15 mである。掘り方埋土は褐色粘土が筋状に入る黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。柱跡の埋土は、にぶい黄褐色粘土ブロックが入る黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。ピット埋土から、遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物2ピット2　掘立柱建物2南側柱列のうち、東から数えて2番目に位置するピットである。平面形状は円形、直径0.15～0.16 mの埋土が残存する。断面形状は椀形、残存する最大深度は0.09 mを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘土ブロックが混じる、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物2ピット3　掘立柱建物2南側柱列のうち、東から数えて3番目に位置するピットである。平面形状は不定形で北東－南西方向に長く、最大長0.36 m、最大幅0.32 mを測る。断面形状は、口径が大きく開く鉢形を呈する。

柱跡は、掘り方の中央より北寄りの箇所において確認した。柱跡の直径は0.13 mを測る。掘り方埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。柱跡の埋土は、にぶい黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。ピット埋土から、遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物2ピット5　掘立柱建物2西側柱列のうち、中央に位置するピットである。平面形状は、南北に長いいびつな楕円形を呈する。長径0.34 m、短径0.27 mを測る。断面形状は浅い皿形、残存深度は0.06 mである。掘り方の埋土は、褐色粘土が筋状に入る黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。このピットでは、柱跡および遺物の出土は認められなかった。

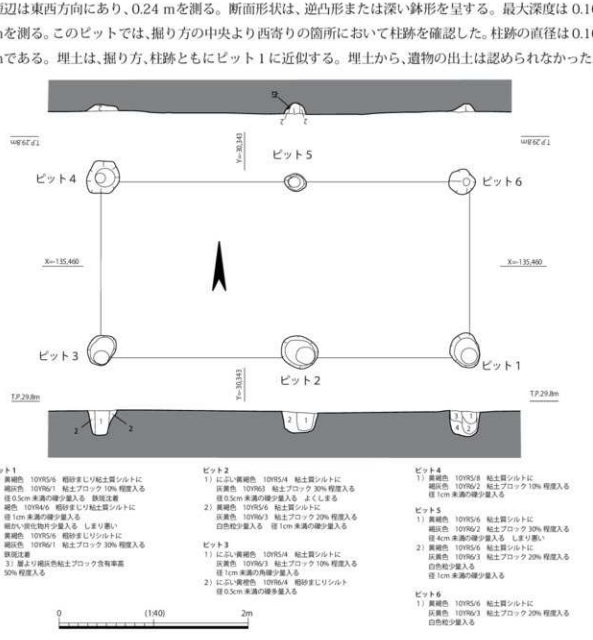
掘立柱建物2ピット6　掘立柱建物2北側柱列のうち、もっとも西に位置するピットである。建物全体では、北西隅柱にあたる。このピットの上面では中近世の土坑が検出されている。

ピットの平面形状は南北を軸に取る隅丸長方形を呈する。長辺は 0.42 m、短辺は 0.38 mを測る。断面形状は浅い鉢形、残存する最大深度は 0.13 mを測る。

このピットの柱跡は、掘り方中央より西よりの地点において確認した。柱跡の直径は 0.2 mを測る。掘り方埋土および柱跡埋土ともに、ピット 1 に近似する。埋土から、遺物の出土はなかった。

掘立柱建物 2 ピット 8　掘立柱建物 2 北側柱列のうち、東から数えて 2 番目に位置するピットである。平面形状は隅丸方形、一辺は 0.22 mを測る。断面形状は楕形、最大深度は、0.12 mである。このピットでは、掘り方の南東隅において、柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.14 mを測る。掘り方埋土および柱跡埋土ともに、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。このピットの土位面には、炭化物の集積が認められた。埋土内からの遺物出土はなかった。

掘立柱建物 2 ピット 9　掘立柱建物 2 北側柱列のうち、もっとも東に位置するピットである。建物全体では、北東隅柱にあたる。平面形状は隅丸長方形を呈する。長辺は南北方向にあり、0.32 mを測る。短辺は東西方向にあり、0.24 mを測る。断面形状は、逆凸形または深い鉢形を呈する。最大深度は 0.16 mを測る。このピットでは、掘り方の中央より西寄りの箇所において柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.16 mである。埋土は、掘り方、柱跡ともにピット 1 に近似する。埋土から、遺物の出土は認められなかった。



第 68 図　第 5 調査区　掘立柱建物 3　平面断面図

掘立柱建物３　掘立柱建物３は、5-1区調査区の北半部において検出した遺構である（第68図）。確認できたピットは６基あり、２間×１間以上の建物として復元できる。確認できた建物の規模は、4.01ｍ×1.86ｍ、柱間は1.86～2.02ｍを測る。床面積は、約7.46㎡である。

建物の主軸は、東西方向を指す。この建物は、南北２列の柱列から成るが、北側柱列は削平が著しく、遺構埋土の残存状態が悪い。

掘立柱建物３ピット１　掘立柱建物３南側の柱列のうち、もっとも東側に位置するピットである。建物全体では、建物南東隅柱にあたる。平面形状は、いびつな楕円形を呈している。長径は、北西－南東方向にあり、0.37ｍを測る。短径は北東－南西方向で、0.30ｍを測る。断面形状は深い湯呑形、最大深度は0.27ｍを測る。

ピット掘り方中央より、南東に寄った地点で柱跡を確認した。柱跡の直径は0.15ｍである。掘り方の埋土は、黄褐色粗砂まじりシルトと褐灰色粘土ブロックの混合層、柱跡埋土は、褐色～黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。埋土から、遺物の出土はなかった。

掘立柱建物３ピット２　掘立柱建物３南側の柱列のうち、中央に位置するピットである。平面形状は、ピット１と同じく、北西－南東方向に長軸をもつ楕円形、長径は0.38ｍ、短径は0.33ｍを測る。断面形状は湯呑形、最大深度は0.22ｍを測る。

ピット掘り方の南東部において柱跡を確認した。柱跡の直径は0.18ｍである。掘り方埋土は、黄褐色粘土質シルトに灰黄色粘土ブロックが20％程度入る。柱跡埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトに灰黄色粘土ブロックが30％程度入る。埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

掘立柱建物３ピット３　掘立柱建物３南側の柱列のうち、もっとも西側に位置するピットである。建物全体では、建物南西隅柱にあたる。平面形状はいびつな楕円形であり、長径0.35ｍ、短径0.28ｍを測る。断面形状は柱跡が下がる逆凸形に近い。最大深度は0.26ｍである。

柱跡は、ピット掘り方中央より南寄りの箇所において確認した。柱跡の直径は0.15ｍを測る。掘り方の埋土はにぶい黄橙色粗砂まじりシルトで、0.5㎝未満の礫が多量に入る。柱跡埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトに灰黄色粘土ブロックが10％程度入る。埋土から遺物の出土はなかった。

掘立柱建物３ピット４　掘立柱建物３北側の柱列のうち、もっとも西側に位置するピットである。建物全体では、建物北西隅柱にあたる。平面形状は、いびつな隅丸六角形に似る。最大径は0.34ｍを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.07ｍである。このピットでは、柱跡および遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物３ピット５　掘立柱建物３北側の柱列のうち、中央に位置するピットである。平面形状は、東西に若干長い楕円形を呈する。長径は0.22ｍ、短径は0.18ｍを測る。断面形状は椀形、残存する最大深度は0.12ｍを測る。ピット掘り方中央において、柱跡を確認した。掘り方および柱跡の埋土はピット２・ピット３と同質である。埋土から遺物の出土は認められなかった。

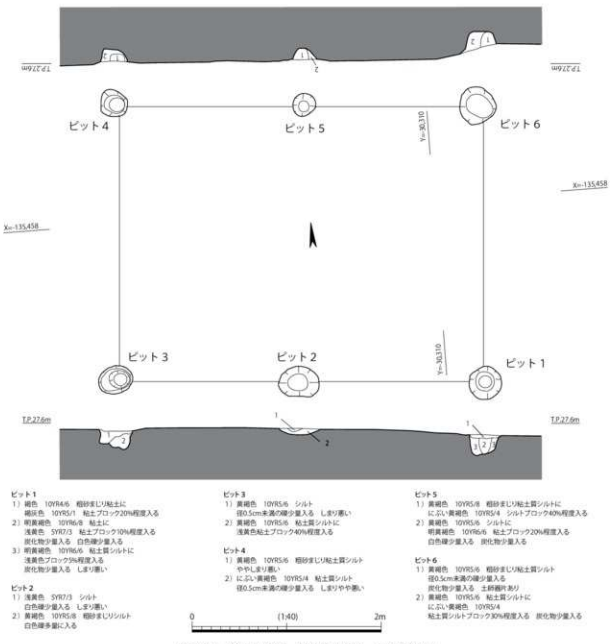
掘立柱建物３ピット６　掘立柱建物３北側の柱列のうち、もっとも東側に位置するピットである。建物全体では、建物北東隅柱にあたる。平面形状は、直径0.27～0.28ｍを測る、歪んだ円形を呈している。断面形状は浅い鉢形、残存する最大深度は0.08ｍを測る。このピットでは、柱跡および遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物４　掘立柱建物４は、5-1区調査区東辺部において検出した遺構である（第69図参照）。確認できたピットは６基であり、２間×１間以上の建物として復元できる。建物の規模は、3.95ｍ×2.9ｍ、

柱間は1.95ｍを測る。建物の主軸は、ほぼ東西方向にあり、方位西より北へ85度東へ振った方向をとる。ピットは、北側および南側に３基が並ぶ。

掘立柱建物６・７と同様、柱穴の規模が小さく、妻側の間口が広いという特徴をもつ。出土遺物未確認のため、時期は不明であるが、埋土の様相から、中近世を遡る可能性は低い。ただし、この建物のピットは、掘り方に炭化物を含むものがあり、柱跡埋土に炭化物を含む建物６・７とは廃絶時期が異なる可能性がある。

掘立柱建物４ピット１　掘立柱建物４南側の柱列のうち、もっとも東側に位置するピットである。平面形状はいびつな円形である。直径は、0.32 ～ 0.33 ｍを測る。断面形状は、隅丸方形に似る。最大深度は0.22 ｍを測る。断面観察では、ピット掘り方のほぼ中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.13 ｍを測る。掘り方の埋土は、明黄褐色粘土質シルトに浅黄色粘土ブロックが僅かに入る。柱跡埋土は、明黄褐色粘土に浅黄色粘土ブロックが少量含まれる。ともに炭化物が少量含まれている。遺物の出土は



第69図　第５調査区　掘立柱建物４　平面断面図

認められなかった。

掘立柱建物４ピット２　掘立柱建物４南側の柱列のうち、東より数えて２番目に位置するピットである。平面形状はソラマメ形に似る。東西方向に長く、南北に短い。長径は 0.45 m、短径は 0.33 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は 0.06 mを測る。埋土は黄褐色粗粗砂まじりシルトを主体とする。ピットの残存状態が悪く、柱跡の確認はできなかった。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物４ピット３　掘立柱建物４南側の柱列のうち、もっとも西側に位置するピットである。平面形状はいびつな楕円形を呈しており、北東－南西方向に長い。長径は 0.38 m、短径 0.25 mを測る。断面形状は、方形に似るが、底面の凹凸が著しい。ピット掘り方より北東に寄った箇所において、柱跡を確認した。柱跡の直径は。0.2 mである。ただし、掘り方および柱跡の埋土が混交しており、建物の廃絶に伴って、柱が抜き取られた可能性がある。埋土は、黄褐色シルトおよび浅黄色粘土ブロックを含む黄褐色粘土質シルトである。遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物４ピット４　掘立柱建物４北側の柱列のうち、もっとも西側に位置するピットである。平面形状はいびつな隅丸四辺形である。長径は北西－南東方向にあり、0.32 mを測る。一角が崩れた湯呑形を呈しており、最大深度は 0.12 mを測る。断面観察により、掘り方の南西隅に柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.15 mである。掘り方埋土はにぶい黄褐色粘土質シルト、柱跡埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。埋土から、遺物の出土はなかった。

掘立柱建物４ピット５　掘立柱建物４北側の柱列のうち、西から数えて２番目に位置するピットである。平面形状はいびつな円形を呈しており、直径 0.24 ～ 0.26 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.12 mを測る。断面観察では、掘り方中央より西寄りに柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.16 mである。掘り方の埋土は、黄褐色シルトに明黄褐色粘土ブロックが混じる。柱跡埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに、にぶい黄褐色シルトブロックが混じる。掘り方埋土には、炭化物が少量含まれていた。その他、遺物の出土はなかった。

掘立柱建物４ピット６　掘立柱建物４北側の柱列のうち、もっとも東側に位置するピットである。平面形状は、ほぼ円形を呈する。直径は、0.4 mを測る。断面形状は逆台形、最大深度は 0.2 mを測る。断面観察により、掘り方の南東隅に柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.18 mである。掘り方埋土は黄褐色粘土質シルトに、にぶい黄褐色粘土質シルトブロックが 30％程度入る。柱跡埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。掘り方埋土には、炭化物が少量含まれていた。また、柱跡埋土からは、土師器皿（中世）の破片が１点出土した。これにより、建物の最終埋没時期が、中世を遡らないことが明らかとなった。

掘立柱建物５　掘立柱建物５は、5-2 区において検出した遺構である（第 70 図参照）。確認した柱穴は８基あり、３間×１間の建物として復元できる。建物の規模は 3.9 m× 3.2 m、床面積は約 12.48㎡を測る。柱間は、1.25 ～ 1.3 m、妻側の柱間は広く、3.2 mを測る。建物の主軸は南西－北東方向にあり、方位北から西へ 68 度振った方向を指す。建物の柱間は狭く、柱根の痕跡も細く、脆弱な印象をうける。小規模な建物であった可能性が高い。ピットからは、時期を示す遺物の出土が確認できていないため、明確な埋没時期は不明である。ただし、ピットの埋土が中近世包含層に近似すること、また、掘立柱建物１など古代以前にさかのぼる建物の柱穴埋土とは、明らかに異質であることから、中世を遡る遺構であるとは考えにくい。

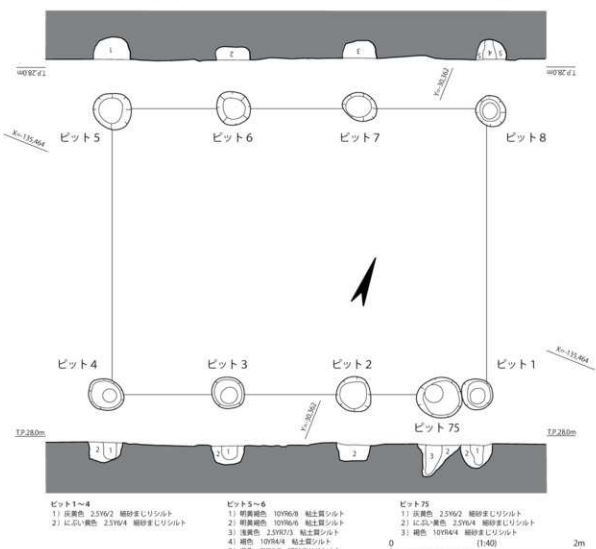
掘立柱建物５ピット１　掘立柱建物５南側柱列のうち、もっとも東にあるピットである。建物全体では、

東隅柱にあたる。平面形状はややゆがんだ円形、断面形状は椀形を呈する。掘り方の直径は 0.32 m、最大深度は 0.3 mを測る。掘り方中央より東よりに、直径 0.13 mを測る柱跡が認められる。掘り方埋土は、にぶい黄色細砂まじりシルト、柱跡埋土は、灰黄色細砂まじりシルトである。

掘立柱建物５ピット２　掘立柱建物５南側柱列のうち、東から数えて２番目に位置するピットである。平面形状は、ほぼ円形、断面形状は、逆台形を呈する。掘り方の直径は 0.26 m、最大深度は 0.3 mを測る。埋土はにぶい黄色を呈する細砂まじりシルトである。このピットでは、柱跡を認めることはできなかった。

掘立柱建物５ピット３　掘立柱建物５南側柱列のうち、東より数えて３番目のピットである。平面形状は隅丸方形に近い円形、断面形状は、逆台形に近い。直径は 0.33 ～ 0.35 m、最大深度は 0.2 mを測る。掘り方中央より南東寄りの箇所において柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.17 mを測る。掘り方埋土はにぶい黄色細砂まじりシルト、柱跡の埋土は灰黄色細砂まじりシルトである。

掘立柱建物５ピット４　掘立柱建物５南側柱列のうち、もっとも西に位置するピットである。建物全体では、南隅柱にあたる。平面形状は、楕円形、断面形状は椀形である。ピット平面の長径は 0.38 m、短径は 0.33 mを測る。最大深度は 0.22 mである。掘り方中央よりやや東寄りの地点に、柱跡が認め



第 70 図　第５調査区　掘立柱建物５　平面断面図

られる。柱跡の直径は、0.14 mである。掘り方の埋土は、にぶい黄色細砂まじりシルト、柱跡の埋土は灰黄色細砂まじりシルトである。

掘立柱建物５ピット５　掘立柱建物５北側柱列のうち、もっとも西に位置するピットである。建物全体では、建物の西隅柱にあたる。平面形状は歪んだ円形、断面形状は椀形を呈する。掘り方の直径は0.39～0.4 m、最大深度は0.23 mを測る。埋土は灰黄色細砂まじりシルトである。このピットでは柱跡を検出することができなかった。

掘立柱建物５ピット６　掘立柱建物５北側柱列のうち、西より２番目のピットである。平面形状はほぼ円形、断面形状は隅丸方形を呈する。掘り方の直径は0.36 m、最大深度は0.14 mを測る。埋土はにぶい黄色細砂まじりシルトである。このピットでは、柱跡を認めることはできなかった。

掘立柱建物５ピット７　掘立柱建物５北側柱列のうち、西から数えて３番目に位置するピットである。平面形状は楕円形、断面形状は椀形である。ピット平面の長径は0.34 m、短径は0.3 mを測る。最大深度は0.19 mである。埋土は、褐色細砂まじりシルトである。このピットでは、柱跡を認めることはできなかった。

掘立柱建物５ピット８　掘立柱建物６北側柱列のうち、もっとも東に位置するピットである。平面形状は直径0.32～0.33 mを測る円形である。断面形状は椀形であり、最大深度0.21 mを測る。掘り方中央に柱跡が認められる。柱跡の直径は、0.13 mである。掘り方埋土は、橙色細砂まじりシルト、柱跡埋土は褐色粘土質シルトである。遺物の出土はなかった。

ピット75　掘立柱建物６ピット１の東側に接して検出したピットである。平面形状は楕円形を呈しており、北東－南西方向に長い。長径は0.48 m、短径は0.43 mを測る。断面形状は、いびつなＶ字形を呈する。掘り方中央より南西寄りの箇所に、柱跡が認められる。柱跡の直径は0.18 m、最大深度は0.33 mを測る。

掘り方の埋土は明黄褐色粘土質シルト、柱跡の埋土は浅黄色粘土質シルトである。明確な掘り方が認められる遺構であるが、掘立柱建物１との関係は明らかではない。また、周辺では連続するような遺構を検出できていない。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

掘立柱建物６　掘立柱建物６は、調査区西半部において検出した遺構である（第71図）。ピットは10基から成り、４間×２間の建物として復元できる。確認できた建物の規模は、3.9 m×3.1 m、柱間は1.1～1.25 mを測る。建物の床面積を概算すると、約12.09㎡である。

建物の主軸は、37度東へ振った方向をとる。ピットは、北西側および南東側に４基、中央に２基が並ぶ。中側柱列北東側のピットは、建物のほぼ中央に位置している。

掘立柱建物６と同様、建物の柱跡および柱間の狭さから、大規模な建物であるとは言いがたい。出土遺物未確認のため、時期は不明であるが、埋土の様相から、中近世を遡る可能性は低い。

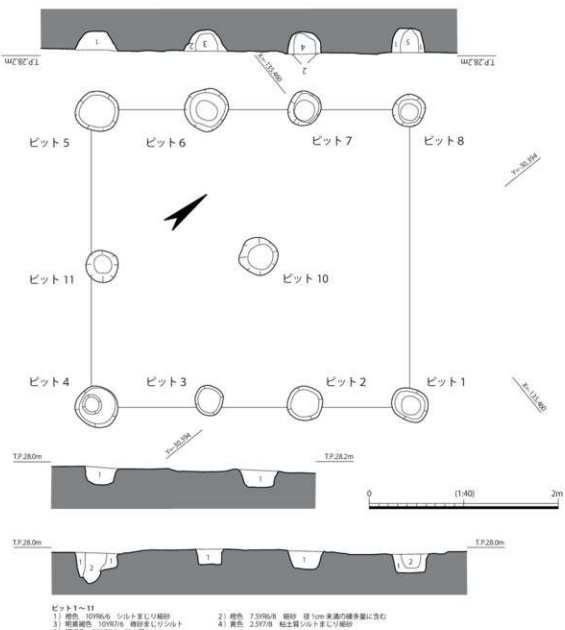
掘立柱建物６ピット１　掘立柱建物６南東側の柱列のうち、北東側に位置するピットである。平面形状はいびつな楕円形である。東西方向に長く、南北に短い。長径は0.4 m、短径0.35 mを測る。断面形状は方形、最大深度は0.2 mを測る。掘り方のほぼ中央に柱跡をもつ。柱跡の直径は0.2 mを測る。掘り方埋土は橙色シルトまじり細砂、柱跡の埋土は、直径１㎝未満の礫を多量に含む橙色細砂である。

掘立柱建物６ピット２　掘立柱建物６南東側の柱列のうち、もっとも北東より２番目に位置するピットである。平面形状は、ほぼ円形を呈する。直径は、0.36～0.38 mを測る。断面形状は逆台形、最大深度は0.18 mを測る。埋土は、直径１㎝未満の礫を多量に含む橙色細砂である。

掘立柱建物６ピット３　掘立柱建物６南東側の柱列のうち、北東より３番目に位置するピットである。平面形状はほぼ円形、直径は 0.3 ～ 0.32 ｍを測る。断面形状は逆台形、最大深度は 0.16 ｍを測る。埋土は、橙色シルトまじり細砂である。このピットでは、柱跡を確認できなかった。

掘立柱建物６ピット４　掘立柱建物６南東側の柱列のうち、もっとも南西側に位置するピットである。建物全体では、南隅柱にあたる。平面形状はほぼ円形、断面形状は逆凸形である。ピットの直径は、0.44 ｍ、最大深度は 0.33 ｍを測る。柱穴は掘り方中央より南西に寄った地点で確認した。その直径は 0.21 ｍを測る。掘り方埋土は橙色シルトまじり細砂、柱跡の埋土は、直径１㎝未満の礫を多量に含む橙色細砂である。

掘立柱建物６ピット５　掘立柱建物６中央の柱列のうち、南西側に位置するピットである。平面形状はほぼ円形で、直径 0.33 ～ 0.34 ｍを測る。断面形状は椀形、中央がもっとも深く、最大深度は 0.19 ｍを測る。このピットでは、柱跡を確認できなかった。埋土は、橙色シルトまじり細砂である。



第 71 図　第５調査区　掘立柱建物６　平面断面図

なお、ピット1～5までの柱穴には、北東側の肩端が外側へ開く傾向がある。

掘立柱建物6ピット6　掘立柱建物7北西側の柱列のうち、もっとも南西側に位置するピットである。平面形状はいびつな円形を呈する。直径は、0.42～0.46 mを測る。断面形状は逆台形、最大深度は0.2 mを測る。このピットでは、柱跡を確認できなかった。埋土は橙色シルトまじり細砂である。

掘立柱建物6ピット7　掘立柱建物6北西側の柱列のうち、南西から2番目に位置するピットである。平面形状はいびつな円形であり、直径0.45～0.46 mを測る。断面形状は鉢形を呈しており、最大深度は0.23 mを測る。

このピットでは、掘り方中央に柱跡を確認した。柱跡は直径0.22 mを測る。掘り方埋土は礫を含む橙色細砂、柱穴埋土は明黄褐色微砂まじりシルトである。

掘立柱建物6ピット8　掘立柱建物6北西側の柱列のうち、南西より3番目に位置するピットである。平面形状はいびつな円形、断面形状は椀形を呈する。ピットのサイズは直径0.34～0.37 m、最大深度は0.23 mを測る。掘り方中央より、やや南寄りの地点において柱跡を確認した。柱跡の直径は0.24 mである。掘り方埋土は橙色細砂、柱跡埋土は黄色粘土質シルトまじり細砂である。

掘立柱建物6ピット9　掘立柱建物6北西側の柱列のうち、もっとも北東側に位置するピットである。平面形状はいびつな円形を呈しており、直径0.34 mを測る。断面形状は湯呑形、最大深度は0.26 mを測る。掘り方のほぼ中央に柱跡をもつ。柱跡の直径は0.19 mを測る。掘り方埋土は橙色シルトまじり細砂、柱跡の埋土は、直径1㎝未満の礫を多量に含む橙色細砂である。

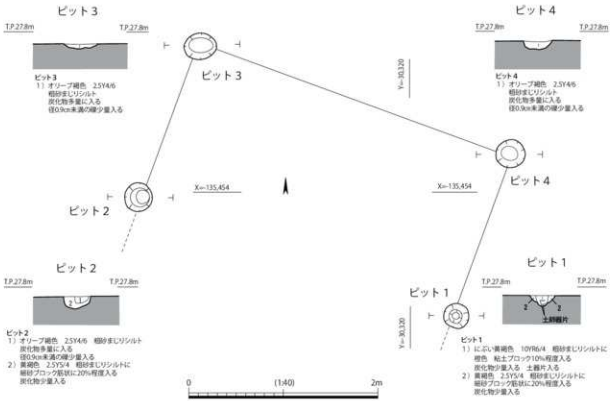
掘立柱建物6ピット10　掘立柱建物6の中央において検出したピットである。平面形状はいびつな楕円形、直径は0.4～0.42 mを測る。断面形状は台形を呈しており、最大深度は0.19 mを測る。埋土は橙色シルトまじり細砂である。このピットでは、柱跡を確認できなかった。

柱列1　調査区北東部において検出したピット群である（第72図）。このピット群は、埋土に炭化物を含むため､比較的容易に目視することができたが､上面を大きく削平されているため､残存状態は悪い。確認できたピットが4基に過ぎないのは、削平をうけたことによって消滅したためと考えられる。図上復元を試みると、北東－南西方向に主軸をもつ建物状に復元できる。ただし、ここでは柱列としての報告にとどめておく。以下、個別のピットごとに記述する。

柱列1ピット1　柱列1のうち､南東に位置するピットである。平面形状は円形を呈しており､直径0.26 mを測る。断面形状は、柱跡が突出する逆凸形である。柱跡は、掘り方のほぼ中央において確認した。柱穴の直径は0.14 mである。掘り方埋土は、黄褐色粗砂まじりシルトを主体としており、細砂ブロックが筋状に入る。柱跡埋土はにぶい黄褐色粗砂まじりシルトに橙色粘土ブロックが少量入る。ともに炭化物片が認められた。埋土からは、土師器片が1点出土した。ただし、摩滅が著しく、詳細な時期は不明である。

柱列1ピット2　柱列1のうち、南西に位置するピットである。平面形状は円形を呈しており、直径は0.3 mを測る。断面形状は、椀形、最大深度は0.13 mを測る。柱跡は、掘り方中央より東寄りの地点において確認した。柱跡の直径は0.14 mを測る。掘り方埋土は、ピット1のそれに近似する。一方、柱跡の埋土は、オリーブ褐色粗砂まじりシルトであり、炭化物を多量に含んでいる。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

柱列1ピット3　柱列1のうち、北西に位置するピットである。平面形状は楕円形を呈しており、東西方向に長軸をもつ。長径は0.35 m、短径は0.28 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.05 m



第 72 図　第 5 調査区　柱列 1　平面断面図

である。埋土はオリーブ褐色粗砂まじりシルトを主体としており、炭化物および直径 0.9cm未満の礫を多量に含む。このピットでは、柱跡を確認することができなかった。また、埋土から、遺物の出土は認められなかった。

柱列 1 ピット 4　柱列 1 のうち、北東に位置するピットである。平面形状はほぼ円形であり、直径 0.3 mを測る。断面形状は、浅い椀形を呈する。最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、ピット 3 と同質である。このピットでは、柱跡を確認することができなかった。また、埋土から遺物の出土はなかった。

5．5-1 区検出遺構（溝・ピット・土坑・井戸）

溝 28　5-1 区南半部において検出した溝状遺構である（第 73 図）。北端を近現代の貯水池によって切られており、全体形状は明らかではない。確認できた遺構は南北方向に延び、最大長 3.35 m、最大幅 1.08 mを測る。断面形状は皿形、埋土はにぶい黄褐色～黄褐色粘土質シルトである。最大深度は 0.1 mを測る。溝状を呈するが、埋土に流水痕跡は認められない。埋土からは、土師器（7 世紀）、須恵器（7 世紀・8 世紀）、土製品（竈？）が、まとまって出土した。

調査時には、南端の広がる部分を落込み 11、東側部分を落込み 10 として分別したが、出土遺物の所属時期が同一であることから、大きな遺構群として扱ったほうがよいようである。ただし、遺物がもっとも濃密に出土するのが、この溝状遺構として一括した範囲である。遺構の用途および性格は現時点では不明である。

落込み 10　溝 28 の東側において検出した落込み状の遺構である。北辺を近現代の貯水池に切られるため、全体形状は明らかではない。残存する法量は、南北長 1.8 m、東西長 2.0 mを測る。断面形状は

浅い皿形、最大深度は0.08 mである。埋土は、黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。部分的に細砂ブロックの混じりこみが認められる。埋土からは、土師器（古墳時代～古代）、須恵器（7世紀）が出土した。

落込み11　溝28南側において検出した遺構である。平面形状は不定形、最大長2.2 m、最大幅1.8 mを測る。平面形状は浅い皿形、埋土は黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土からは、須恵器（7世紀）が出土した。

溝28、落込み10、落込み11から出土した遺物の時期幅は、概ね7世紀から8世紀前半までを示す。この年代は、調査区中央において検出した掘立柱建物の存続時期とほぼ一致する。他の調査区では、当該時期の遺構が希薄であることから、当時の生活空間の中心が、第5調査区周辺にあったと考えてよいだろう。

ピット18　ピット18は、5-1区北辺部において検出したピットである（第64・73図）。平面形状は、ほぼ円形を呈する。直径は0.27～0.28 mを測る。断面形状は浅い鉢形、最大深度は0.08 mを測る。掘り方より東寄りの地点において柱跡を確認した。柱跡の直径は0.14 mである。掘り方の埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土を主体としており、これににぶい黄褐色粘土質シルトがブロック状に入る。柱穴の埋土は、黄褐色粘土質シルトに灰色粘土ブロックが10%程度と少量の炭化物が含まれている。掘り方埋土は軟質である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

5-1区北西辺では、同様の埋土をもつピットがまとまって検出されている。ただし、現時点では建物跡を復元するには至っていない。

ピット19　ピット19は、ピット18の北側において検出したピットである（第64・73図）。平面形状は、東西に長い楕円形を呈する。法量は、長径0.33 m、短径0.27 mを測る。断面形状は、柱跡が突出する逆凸形であり、最大深度は0.39 mを測る。

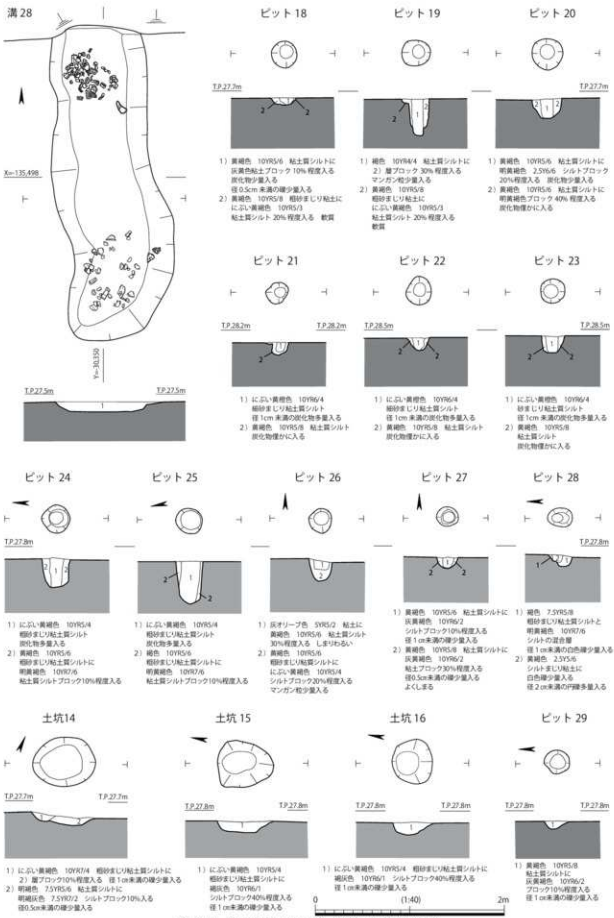
柱跡は、掘り方のほぼ中央において確認した。柱跡の直径は0.12 mを測る。掘り方の埋土は、ピット18同様、黄褐色粗砂まじり粘土ににぶい黄褐色粘土質シルトブロックが入る。柱穴の埋土は、褐色粘土質シルトを主体とする。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット20　ピット20は、ピット19の西側において検出したピットである（第64・73図）。平面形状は、ほぼ円形であり、直径0.32～0.33 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は0.2 mを測る。柱跡は、掘り方のほぼ中央において確認した。柱跡の直径は0.13 mである。掘り方の埋土は、粘土質シルトを主体とし、これに明黄褐色シルトブロックが40%程度入る。柱跡埋土は、掘り方埋土に比べて明黄褐色シルトブロックの含有率が低く、炭化物がまじる。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット21　ピット21は、調査区東辺部において検出したピットである（第63・73図）。平面形状は不定形、東西長は0.24 m、南北長は0.22 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は0.14 mである。掘り方中央に直径0.09 mを測る柱跡を確認した。掘り方の埋土は黄褐色粘土質シルト、柱跡埋土はにぶい黄橙色細砂まじり粘土質シルトである。掘り方埋土には、ごく少量の炭化物が含まれている。遺物の出土は認められなかった。

5-1区北東部には、同質の埋土をもつピットが多数検出されているが、現在のところ、柱列を復元するまでには至っていない。ただし、遺構の規模が小さいことから、柵列などのピットである可能性がある。

ピット22　ピット22は、ピット21の西側において検出したピットである（第63・73図）。平面形状は、南北方向に長軸をもつ楕円形である。長径0.3 m、短径0.27 mを測る。断面形状は深い鉢形、最大深



第 73 図　第 5 調査区 (5-1 区)　遺構平面断面図 (1)

度は 0.14 mを測る。掘り方中央において、直径 0.12 mを測る柱跡を確認した。ピット 21 同様、掘り方埋土は黄褐色粘土質シルト、柱跡埋土は炭化物を含む、にぶい黄橙色細砂まじり粘土質シルトである。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 23　ピット 23は、ピット 22の北西側において検出したピットである(第63・73図)。平面形状は、直径 0.25 mを測る円形である。断面形状は湯呑形、最大深度は 0.17 mを測る。掘り方中央において、直径 0.13 mを測る柱跡を確認した。埋土は、ピット 21・22 と同様である。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 24　ピット 24 は、5-1 区北西部において検出した遺構である（第 64・73 図）。平面形状は円形であり、直径 0.3 mを測る。断面形状は深い湯呑形、最大深度は 0.3 mを測る、掘り方の中央に柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.15 mである。掘り方埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトと明黄褐色粘土質シルトの混合層、柱跡の埋土は、にぶい黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。柱跡埋土には、炭化物が多量に含まれていた。明確な掘り方をもつ遺構であるが、掘立柱建物としては復元できていない。遺物の出土は認められなかった。

ピット 25　ピット 25 は、ピット 24 の北側において検出した遺構である（第 64・73 図）。平面形状は円形を呈しており、直径 0.27 ～ 0.28 mを測る。断面形状は深い湯呑形、最大深度は 0.45 mを測る、掘り方の中央に、直径 0.2 mを測る柱跡を確認した。掘り方埋土および柱跡埋土は、ピット 24 と同質である。このピットでも、柱跡から大多量の炭化物が出土した。

ピットの形状から、ピット 24 とピット 25 は柱列となる可能性が高いが、連続する遺構を検出できていない。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 26　ピット 26 は、5-1 区北西部において検出した遺構である（第 64・73 図）。掘立柱建物 4 の北側にあたる。平面形状はいびつな円形を呈しており、直径 0.24 ～ 0.36 mを測る。断面形状は椀形であり、最大深度は 0.21 mを測る。断面観察では、掘り方の中央に柱跡らしき落込みを確認した。この直径は、0.16 mである。

掘り方の埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトとにぶい黄褐色シルトの混合層、柱跡埋土は灰オリーブ色粘土を主体とする。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 27　ピット 27 は、5-1 区北西部において検出したピットである(第 64・73 図)。平面形状は、円形、断面形状は椀形を呈する。平面の直径は 0.2 ～ 0.22 m、最大深度は 0.12 mを測る。掘り方の中央において、直径 0.12 mを測る柱跡を確認した。掘り方の埋土は黄褐色粘土質シルトに灰黄褐色粘土ブロックを含む。柱跡埋土は、黄褐色粘土質シルトに灰黄褐色シルトブロックが混じる。遺物の出土はなかった。

ピット 28　5-1 区北西部において検出したピットである（第 64・73 図）。平面形状はやや南北に長い円形を呈する。長径は 0.31 m、短径は 0.28 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.17 mを測る。

埋土は、明黄褐色粘土質シルトににぶい黄橙色粘土ブロックが入る。これは中世包含層と地山の混合層である。このピットでは、柱跡を確認できなかった。また、遺物の出土はなかった。

ピット 29　ピット 29 は、ピット 27 の東側において検出したピットである（第 64・73 図）。掘立柱建物 4 の西側にあたる。平面形状はいびつな円形を呈しており、直径 0.25 ～ 0.28 mを測る。断面形状は浅い鉢形を呈する。最大深度は 0.08 mである。このピットでは、柱跡を確認することはできなかった。埋土は、黄褐色粘土質シルトに、灰黄褐色シルトブロックが 10%程度入る。周辺には類似するピットが多く検出されているが、柱列の復元にはいたっていない。埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑 14　土坑 14 は、掘立柱建物２の東側において検出した土坑である（第 64・73 図）。平面形状は、南西－北東方向に長軸をもつ楕円形を呈する。長径は 0.67 m、短径は 0.53 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.09 mを測る。埋土は、明褐色粘土質シルトを主体とする。底面付近には明褐灰色シルトブロックが混入する。埋土全体に、炭化物の細かい混じりこみを確認することができる。埋土から、土師器（８世紀）の破片が１点出土した。土坑の埋没時期が、掘立柱建物２の存続期間と重なることから、関連性が考慮される。

土坑 15　5-1 区中央部において検出した土坑である。平面形状は隅丸三角形に似る（第 64・73 図）。最大長は南北方向にあり、0.59 mを測る。最大幅は 0.6 mである。断面形状は浅い鉢形、最大深度は 0.12 mである。埋土はにぶい黄褐色粗砂まじりシルトに褐灰色シルトブロックが混じる。遺構の性格は明らかではない。底面付近から、サヌカイト切片が出土した。

土坑 16　5-1 区中央部において検出した土坑である（第 64・73 図）。平面形状は東西方向に長い楕円形を呈する。長径は 0.47 m、短径は 0.42 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.13 mである。埋土は土坑 15 に近似する。埋土から、サヌカイト切片が出土した。

土坑 17　調査区の中央において検出した土坑である（第 63・74 図）。平面形状は楕円形を呈しており、最大長 3.18 m、最大幅 1.0 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.15 mである。埋土は灰黄褐色粗砂まじりシルトを主体としており、底部付近に黄褐色粘土質シルトの堆積が若干認められる。埋土に細かいブロック土が多く含まれることから、人為的に埋め戻された遺構である可能性が高いと考えられる。

この土坑は、座標北に対して西へ 18 度振った方向に主軸をもつ。西側に位置する土坑 18、北東側に位置する土坑 19 も、ほぼ同様の方向性を示している。個々の土坑の用途は不明であるが、少なくとも、同じ性格をもつ土坑群として捉えることができよう。埋土からは、陶器（近世）の破片が１点出土した。

土坑 18　土坑 18 は、土坑 17 の西側において検出した土坑である（第 63 図）。平面形状は楕円形を呈しており、最大長 3.4 m、最大幅 1.2 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.12 mである。埋土は、土坑 17 と同様、ブロック土を多く含む灰黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

土坑 19　土坑 19 は、土坑 17 の北東側において検出した土坑である（第 63・74 図）。平面形状は隅丸方形を呈しており、最大長 2.18 m、最大幅 0.8 mを測る。断面形状は浅い逆台形である。最大深度は 0.1 mを測る。埋土は、土坑 17 と同様、ブロック土を多く含む灰黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑 20　土坑 20 は、調査区中央付近において検出した土坑である（第 63・74 図）。西側に土坑 17、北東側に土坑 19 が位置している。平面形状は、楕円形を呈しており、長径は 0.86 m、短径は 0.76 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は 0.1 mである。埋土は、明褐色シルトブロックが入る黄褐色粘土質シルトを主体としており、中世包含層に近似する。このため、耕作に伴う遺構であると考えられる。埋土からは、土師器の破片が出土したが、明確な時期の確定にはいたらなかった。

土坑 21　土坑 21 は、調査区南半部において検出した土坑である（第 63・74 図）。平面形状は、ゆがんだ隅丸三角形を呈する。最大長は北西－南東方向に長く、最大長は 0.65 m、最大幅は 0.40 mを測る。断面形状は不定形、北西半部に一段下がる落込みが認められる。埋土は、明褐色シルトブロックが入る黄褐色粘土質シルトを主体とする。落込み部分には、明黄褐色粘土質シルトが堆積する。この部分は含

水率が高く、軟質である。遺構の性格および用途は不明、遺物の出土は認められなかった。

ピット30　ピット30は、調査区中央付近において検出したピットである（第64・74図）。平面形状はほぼ円形を呈しており、直径0.40～0.41 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は0.18 mを測る。埋土は、明黄褐色粘土質シルトを主体とする。周辺に類似したピットは散在するものの、柱列としては復元できていない。埋土から遺物の出土は認められなかった。

ピット31　ピット31は、ピット30の西側において検出したピットである（第64・74図）。平面形状は、北東－南西方向に長い、歪んだ楕円形を呈する。長径0.54 m、短径0.48 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.1 mを測る。埋土は、明黄褐色粘土質シルトを主体としており、下位に地山ブロックが30％程度入る。埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑22　土坑22は、掘立柱建物1の南側において検出した土坑である（第64・74図参照）。平面形状は北西－南東方向に長い、不定形な三角形を呈する。最大長は0.9 m、最大幅は0.58 mを測る。断面形状は、浅い皿形、最大深度は0.1 mである。埋土は、明黄褐色粘土シルトに粘土ブロックがまじる。掘立柱建物1の埋土とは、色相を違えており、現時点では明確な関連性を見出すまでに至っていない。埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑23　土坑23は、土坑22の北側において検出した土坑である（第64・74図）。平面形状は角の甘い菱形を呈する。長径は南東－北西方向にあり、0.78 mを測る。短径は0.7 mである。断面形状は浅い鉢形であり、中央部が一段低い。最大深度は0.14 mを測る。埋土は、明黄褐色～黄褐色粘土質シルトを主体とする。用途、性格は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

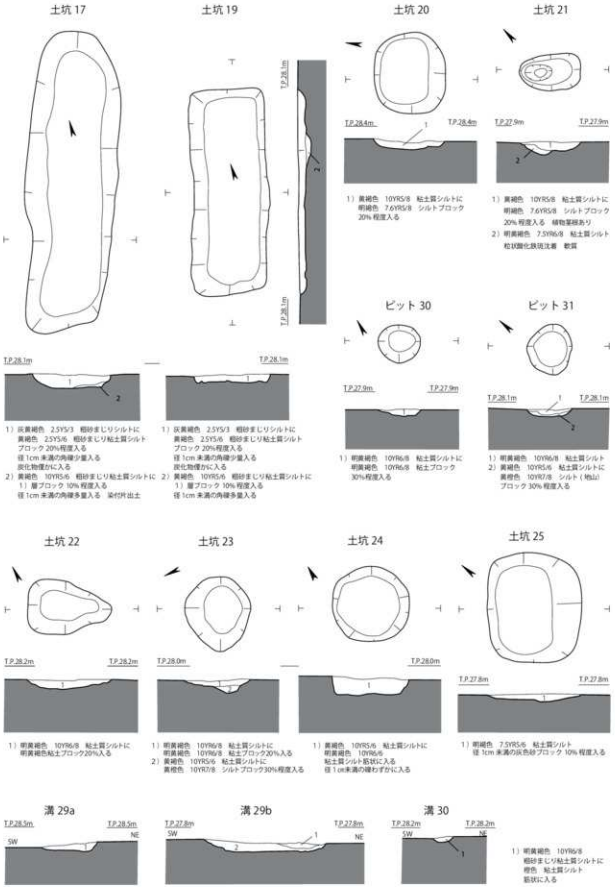
土坑24　土坑24は、掘立柱建物2の東側において検出した土坑である（第63・74図）。平面形状は不明瞭な円形を呈する。直径0.79 ～ 0.82 m、最大深度は0.19 mを測る。断面形状は、逆台形に似る。埋土は、黄褐色粘土質シルトに明黄褐色粘土質シルトが筋状に入る。掘立柱建物との関係は不明であるが、埋土の堆積状況から、水溜状の施設であった可能性がある。遺構内からの、遺物の出土はなかった。

土坑25　土坑25は、柱列1の東側において検出した土坑である（第63・74図）。平面形状はいびつな隅丸方形を呈する。最大長は1.16 m、最大幅は1.0 mを測る。断面形状は浅い皿形であり、最大深度は0.1 mを測る。埋土は明褐色粘土質シルトを主体としており、随所に灰色細砂ブロックを含む。柱列1とは、埋土を異にするため、関連性は明らかではない。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

溝29　溝29は、調査区東半部において検出した溝である（第63・74図）。残存する最大長は26.5 m、最大幅は1.3 mを測る。溝の主軸はほぼ東西方向である。最大幅は遺構の東端にあり、東端より9 m程度のところで二又に分かれ、幅を減じながら西へと続く。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.1 mを測る。埋土は、明黄褐色細砂まじりシルトまたは細砂と、にぶい黄橙色粘土質シルトから成る。水田区画段とほぼ平行して設けられていることから、耕作に伴う遺構であると考えられる。埋土から遺物の出土はなかった。

溝30　溝30は、溝29の南側において検出した溝である（第63・74図）。最大長8.0 m、最大幅0.3 mを測る。形状、埋土ともに溝29に近似することから、連続する遺構である可能性が高い。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑26　土坑26は、調査区東半部において検出した土坑である（第63・75図）。平面形状はいびつな隅丸方形を呈する。長軸は北西－南東方向にあり、最大長1.58 m、最大幅0.84 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.07 mである。埋土は、明黄褐色粘土質シルトとにぶい黄橙色粘土から成る。



第 74 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（2）

底部付近には、直径1㎝未満の礫～粗砂の流入が認められる。遺構の方向性が、他の水田遺構と同様であることから、耕作に伴う遺構であると考えられる。埋土から遺物の出土は認められなかった。

土坑27　土坑27は、土坑26の南側において検出した遺構である（第63･75図）。平面形状は不定形ながら、一角を損じた隅丸方形に似る。長軸は土坑26と同じく、東西方向である。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.28 mを測る。埋土は、明黄褐色粘土質シルトとにぶい黄橙色粘土を主体とする。土坑26と同様、耕作に伴うものであると推測される。遺物の出土はなかった。

土坑28　土坑28は、5-1区北辺部において検出した土坑である（第63･75図）。平面形状は方形に似るが、北東辺が不定形に湾曲する。最大長は北西－南東方向にあり、1.06 mを測る。最大幅は0.93 mである。ただし、遺構の北東部分は削平されていると考えられることから、本来の平面形状は、一辺1 m余りを測る正方形であった可能性が高い。

断面形状は、底面に凹凸をもつが、皿形に似る。最大深度は中央部にあり、0.13 mを測る。埋土は、明黄褐色砂まじり粘土、明褐色粗砂まじり粘土質シルト、明赤褐色粘土質シルト、にぶい黄橙色シルト、黄褐色粘土質シルトなどのブロックが、無造作に投げ込まれたような状態で堆積する。遺構の性格は不明であるが、人為的な埋め戻しがおこなわれた可能性が高い遺構である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑29　土坑29は、調査区東端において検出した土坑である（第63･75図）。平面形状は不定形を呈する。北西－南東方向に長軸をもつ。最大長は1.37 m、最大幅は0.9 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は0.18 mである。埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトと黄褐色粘土、褐色粘土の混合土である。明確な掘り方が認められるものの、遺構の用途および性格は不明である。遺物の出土はなかった。

土坑30　調査区東辺部において検出した土坑である（第63･75図）。平面形状は、角の甘い三角形を呈する。最大長は北西－南東方向にあり、1.65 mを測る。最大幅は、南西－北東方向に0.72 mを測る。断面形状は、浅い皿形、最大深度は0.07 mである。埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルトと明黄褐色細砂まじりシルトから成る。全体的に細かい炭化物が混じっており、特に底面付近において顕著に認められる。遺構の性格は不明である。埋土から遺物の出土は認められなかった。

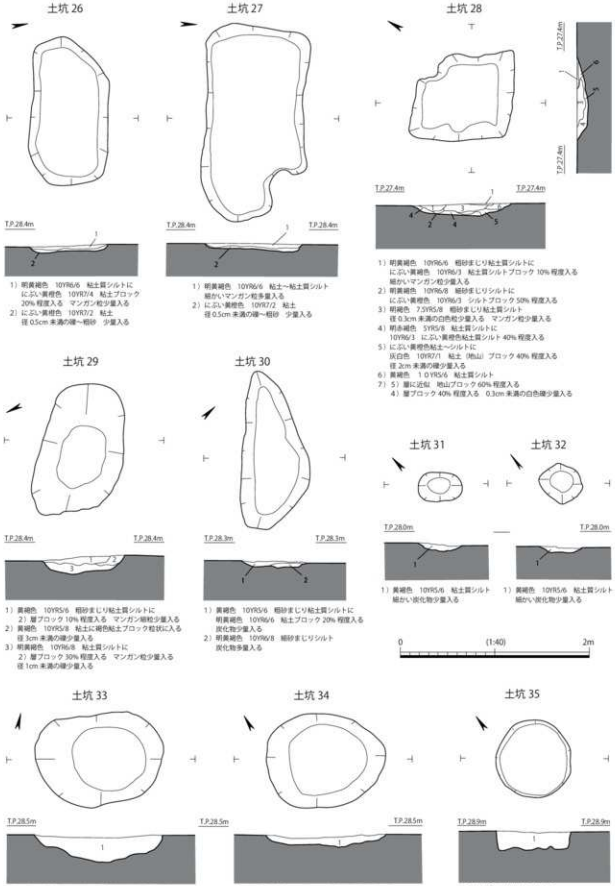
土坑31　調査区東辺部において検出した土坑である（第75図）。平面形状は、崩れた楕円形を呈する。長径0.47 m、短径0.31 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.08 mである。埋土は、黄褐色粘土質シルトに細かい炭化物が少量入る。調査区東辺部では、類似した土坑やピットを多数検出したが、建物等を復元するには至っていない。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑32　土坑32は、土坑31の北東側において検出した遺構である（第63･75図）。平面形状は崩れた菱形を呈する。最大長0.47 m、最大幅0.43 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.06 mである。埋土は、土坑31同様、炭化物を含む黄褐色粘土質シルトである。埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑33　5-1区南東部において検出した土坑である（第63･75図）。平面形状は、ソラマメ形を呈しており、東西方向に長軸をもつ。最大長は1.36 m、最大幅は1.0 mを測る。断面形状は、底面に凹凸が多い鉢形、最大深度は0.25 mを測る。

埋土は、総じて軟質であり、にぶい黄褐色を呈する粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。底部付近には直径2㎝未満の礫が多量にまじる。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑34　土坑34は、土坑33の東側において検出した土坑である（第75図）。平面形状は北西－南東に長軸をもつ楕円形である。長径は1.26 m、短径は1.0 mを測る。断面形状は浅い皿形を呈する。最



第 75 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（3）

大深度は 0.14 mである。

埋土は、上記２基の土坑と同様、にぶい黄褐色粗砂まじり粘土質シルトであり、軟質である。この土坑は埋土全体に、直径 2㎝未満の礫の混入が認められる。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑 35　土坑 35 は、5-1 区南東部において検出した土坑である（第 75 図）。平面形状はほぼ円形であり、直径 0.8 ～ 0.82 mを測る。断面形状は、底面に凹凸をもつ方形、最大深度は 0.2 mである。埋土は、褐灰色粘土に橙色粘土ブロックと、直径１㎝未満の礫が少量入る。

遺構の用途は不明であるが、水田脇に位置することおよび、遺構断面の形状から、堆肥入れなど耕作に伴う遺構ではないかと考えている。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑 36　5-1 区北半部において検出した土坑である（第 63･76 図）。平面形状はいびつな円形を呈する。直径は 0.74 ～ 0.81 mを測る。断面形状は、平行四辺形に似る。最大深度は北西端にあり、0.24 mを測る。埋土は黄褐色粗砂まじり粘土質シルト、褐灰色シルト、にぶい黄褐色粗砂まじり粘土質シルト～粗砂、褐色粘土質シルトの混合層である。明確な掘り方をもつが、その用途や性格は不明である。埋土には、ブロック土が多く含まれていることから、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑 37　土坑 37 は、第５調査区南東辺部において検出した土坑である（第 63･76 図）。土坑 33・34 とは、類似した埋土と堆積状況をもっており、性格、用途にも共通するものがあると考えられる。検出地点が水田区画の脇にあたることから、耕作にともなう遺構である可能性が考えられる。

土坑 37 の平面形状は、1.14 mを測る円形、断面形状は鉢形である。最大深度は 0.24 mを測る。埋土は大きく上下層に分けることができる。上層は、黄褐色粗砂まじり粘土である。下層は明褐色～明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトであり、やや軟質である。底面付近には、直径 0.5㎝未満の礫の流入が認められる。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑 38　土坑 38 は、5-1 区北半部において検出した土坑である（第 63･76 図）。平面形状は北西－南東方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径は 1.76 m、短径は 1.0 mを測る。断面形状は、鉢形を呈するが、南東肩の立ち上がりが緩慢であり、ほぼ直角に立ち上がる北西肩とは非対称を為す。

埋土は、明褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。遺構の性格および用途は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

ピット 33　ピット 33 は、5-1 区北辺において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状は円形であり、その直径は 0.23 ～ 0.24 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は 0.08 mである。上位の大部分を削平されたものとみられる。

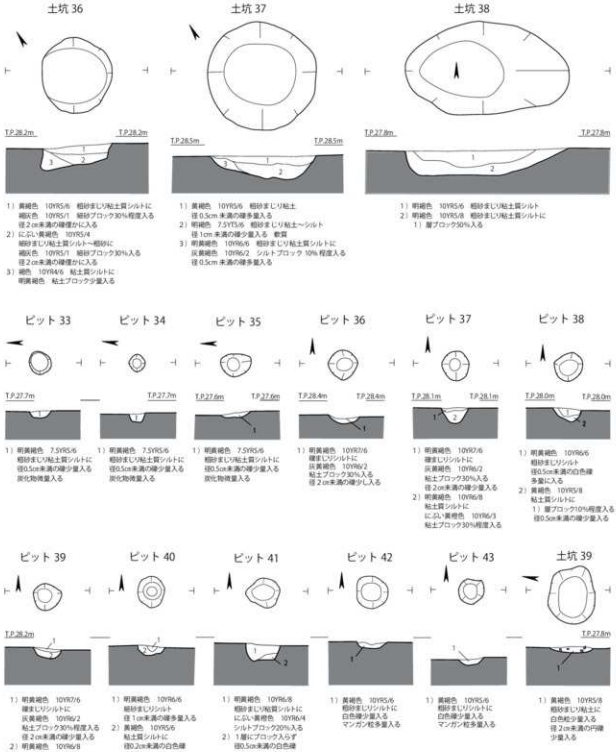
埋土は、明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体としており、炭化物を少量含む。このピットでは、柱跡を確認できなかった。また、遺物の出土は認められなかった。

ピット 34　ピット 34 は、ピット 33 の北西側において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はいびつな円形であり、直径 0.18 ～ 0.19 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は 0.09 mである。埋土は、ピット 33 と同様、炭化物を含む明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトである。このピットでは、柱跡および遺物の出土は確認できなかった。

ピット 35　ピット 35 は、ピット 34 の北側において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はいびつな楕円形を呈する。東西に長軸をもっており、長径 0.32 m、短径 0.23 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は 0.06 mを測る。埋土はピット 33・ピット 34 と同等である。ピット内では、

柱跡を確認することができなかった。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 36　ピット 36 は、5-1 区東辺において検出したピットである（第 63･76 図参照）。平面形状は隅の丸い菱形に似る。直径は 0.3 ～ 0.32 m を測る。断面形状は浅い皿形、椀形、最大深度は 0.09 m である。埋土は、明黄褐色礫まじりシルトに灰黄褐色粘土ブロックが入る。柱跡および、遺物の出土は確認できなかった。



第 76 図　第 5 調査区（5-1 区）　遺構平面断面図（4）

ピット 37　ピット 37 は、5-1 区東辺において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はやや南北に長い円形を呈する。長径は 0.31 m、短径は 0.28 m を測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.17 m を測る。

埋土は、明黄褐色粘土質シルトににぶい黄橙色粘土ブロックが入る。これは中世包含層と地山の混合層である。このピットでは、柱跡を確認できなかった。また、遺物の出土はなかった。

ピット 38　ピット 38 は、ピット 37 の北東側において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はゆがんだ円形を呈する。直径は 0.3 m である。断面形状は鉢形、最大深度は 0.14 m を測る。

埋土は、上位に明黄褐色粗砂まじりシルト、下位に黄褐色粘土質シルトが堆積する。このピットでは、柱跡および、遺物の出土は確認できなかった。

ピット 39　ピット 39 は、ピット 38 の南側において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はいびつな円形である。直径は 0.28 ～ 0.3 m を測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.1 m を測る。

埋土は明黄褐色粘土質シルトににぶい黄橙色粘土ブロックが入る。このピットでは、柱跡および、遺物の出土は確認できなかった。

ピット 40　ピット 40 は、ピット 39 の南東において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状はいびつな円形である。直径は 0.28 ～ 0.32 m を測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.1 m を測る。

このピットでは、掘り方の中央に柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.12 m を測る。掘り方埋土は黄褐色粘土質シルト、柱跡は明黄褐色細砂まじりシルトである。埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

ピット 41　ピット 41 は、5-1 区東辺部において検出した遺構である（第 63･76 図）。平面形状は不定形である。東西に最大長があり、0.35 m を測る。南北長は 0.31 m である。断面形状は、湯呑形に似る。最大深度は 0.18 m である。

埋土は、明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに、にぶい黄橙色シルトブロックが入る。明確な柱跡は確認できなかったが、掘り方中央より西寄りの箇所が一段窪んでおり、ここに柱が据えられていた可能性は否定できない。埋土から遺物の出土はなかった。

ピット 42　ピット 42 は、ピット 41 の北東側に位置する遺構である（第 63･76 図）。平面形状はいびつな円形であるが、本来は隅丸方形であった可能性を残す。最大長・最大幅ともに 0.33 m を測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.07 m である。

埋土は、白色礫を多量に含んだ黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。これは、地山土の特徴に近似する。柱跡および、遺物の出土は確認できなかった。

ピット 43　ピット 43 は、ピット 41 の北側において検出したピットである（第 63･76 図）。平面形状は、ほぼ円形を呈する。直径は 0.27 m を測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.06 m を測る。

埋土は、ピット 42 と同じく地山近似土である。マンガン粒を多量に含むことから、撹拌を受けた土であることがわかる。このピットでは、柱跡および、遺物の出土は確認できなかった。

土坑 39　土坑 39 は、5-1 区東辺部において検出した土坑である（第 63･76 図）。平面形状は、いびつな楕円形を呈しており、東西方向に長軸をもつ。長径 0.62 m、短径 0.5 m を測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.07 m を測る。

埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土である。直径 2 ㎝未満の円礫の混入が目立つ。遺構の用途および性格は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

井戸 9　井戸 9 は、5-1 区南半部において検出した井戸である。掘り方の平面形状は不定形であるが、

掘り方の中央に円形の井戸枠跡が残る。掘り方の最大長は 2.4 m、最大幅は 1.7 mを測る。井戸枠の直径は 1.2 mである。遺構面から 1 m程度を掘り下げたところ、掘り方埋土から青磁(17 世紀)が出土した。また、井戸枠内からは瓦(近世)が出土した。このことから、この井戸の掘削が近世を遡るものではないことが確認された。

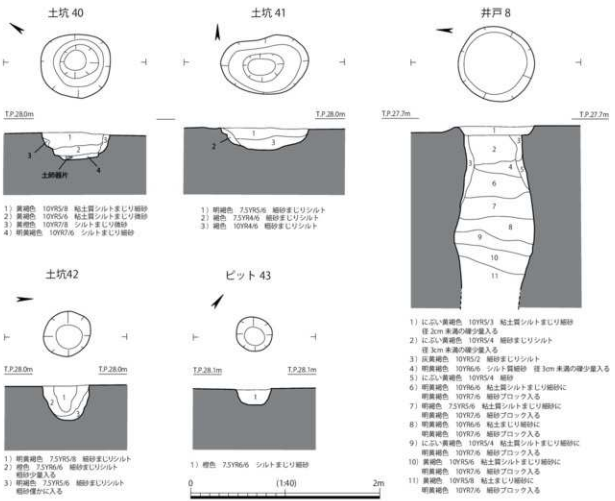
井戸 10　井戸 10 は、5-1 区北半部において検出した井戸である。掘り方の平面形状は円形であり、その中央に木枠を伴う井戸枠が残る。掘り方の直径は 1.5 m、井戸枠の直径は 0.7 mを測る。最大長は 2.4 m、最大幅は 1.7 mを測る。

遺構面から 0.5 m程度を掘り下げたところ、掘り方埋土から近世瓦が出土した。このことから、この井戸の掘削が近世を遡るものではないことが確認できた。

6．5-2 区　検出遺構（溝・ピット・土坑・井戸）

土坑 40　土坑 40 は、5-2 区南半部において検出した遺構である（第 77 図）。平面形状は、北西－南東方向に長軸をもつ楕円形である。長径 0.74 m、短径 0.65 mを測る。断面形状は不定形、側面に複数の段をもつ。最大深度は 0.26 mを測る。

埋土は、黄褐色粘土質シルトまじり細砂～微砂、黄橙色シルトまじり微砂、明黄褐色シルトまじり細砂で構成される。周辺には関連する遺構を確認することができず、その用途は不明である。底面付近か



第 77 図　第 5 調査区（5-2 区）　遺構平面断面図

ら、古墳時代の土師器が1点出土した。

土坑41　土坑41は、5-2区南東辺において確認した遺構である（第63･77図）。平面形状は、ソラマメ形に似る。長軸は東西方向にあり、長径0.92 m、短径0.6 mを測る。断面形状は底面に凹凸をもつ鉢形、最大深度は0.22 mである。

埋土は大きく上下2層に分けることができる。上層は明褐色細砂まじりシルト、下層は褐色粗砂まじりシルトである。土坑の用途および周辺遺構との関連は、現時点では不明である。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット42　土坑42の北東において検出した遺構である（第63･77図）。平面形状は、円形を呈する。直径は、0.46 ～ 0.48 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は0.32 mを測る。このピットでは、掘り方のほぼ中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は0.22 mを測る。掘り方埋土は橙色および明褐色細砂まじりシルトである。柱跡埋土は明黄褐色細砂まじりシルトを主体とする。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット32　ピット32は、5-2区南半部において検出した遺構である（第64･77図）。平面形状は円形、直径は0.34 mを測る。断面形状は椀形、最大深度は0.14 mである。

埋土は、橙色シルトまじり細砂を主体とする。このピットは、井戸8の南西側において確認したが、関連性は明らかではない。埋土からは、土師器（古墳時代）、須恵器（5世紀）が出土した。

井戸8　井戸8は、5-2区南半部において検出した遺構である（第64･77図）。平面形状はいびつな円形を呈する。直径は、0.8 ～ 0.82 mを測る。掘削調査は、遺構面より1.5 mまでをおこなった。

埋土はにぶい黄褐色細砂まじりシルト、明黄褐色シルト質細砂、明黄褐色粘土質シルトまじり細砂等で構成される。総じて軟質である。埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

7．5-3区　検出遺構（ピット・土坑）

土坑43　土坑43は、5-3区南東部において検出した遺構である（第63･78図）。平面形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。長径は0.93 m、短径は0.48 mを測る。断面形状は不定形、最大深度は0.14 mを測る。埋土は褐色粘土まじり細砂を主体とする。遺構の性格は不明である。遺物の出土はなかった。

土坑44　土坑44は、土坑43の北西側において検出した遺構である（第63･78図）。平面形状は、北西－南南東方向に長軸をもつ楕円形を呈しており、長径0.66 m、短径0.28 mを測る。断面形状は、角の甘い逆凸形を呈する。最大深度は0.13 mである。埋土は黄褐色粘土まじり微砂を主体とする。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑45　土坑45は、5-3区南半部中央において検出した遺構である（第63･78図）。平面形状は、洋ナシ形を呈しており、最大長1.98 m、最大幅1.06 mを測る。断面形状は段をもつ鉢形を呈する。最大深度は0.33 mを測る。埋土は褐色微砂まじり粘土、黄褐色微砂まじり粘土、にぶい黄褐色粘土から成る。下位の方が軟質である。

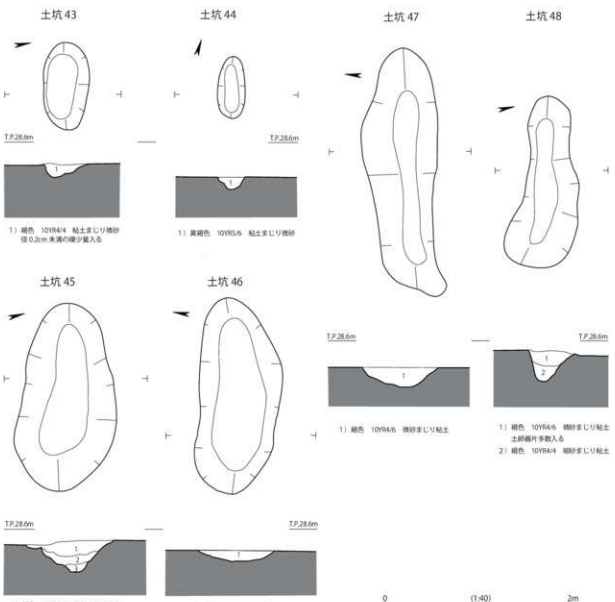
この土坑は、周辺の水田区画溝と長軸方向を同じくすることから、耕作に伴う遺構である可能性がある。埋土からは、遺物の出土はなかった。

土坑46　土坑46は、5-3区南東部において検出した遺構である（第63･78図）。平面形状は、歪んだ楕円形を呈する。最大長は2.05 m、最大幅は0.88 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は0.11 mである。埋土は、黄褐色粘土を主体とする。この土坑は、土坑45とほぼ平行して位置するが、その

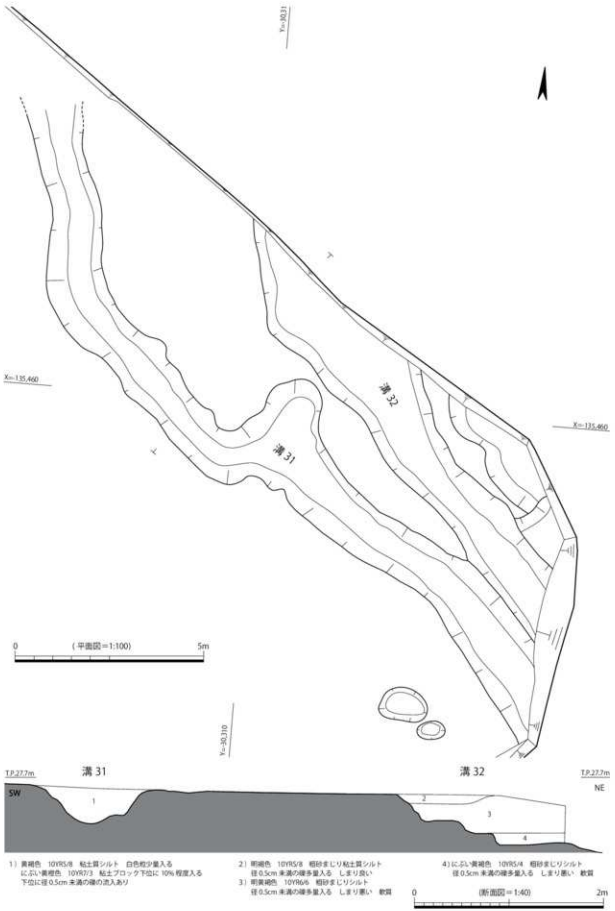
方向軸は、ともに水田の区画割りとは異なっている。遺構の用途および性格は不明である。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑 47　土坑 47 は、土坑 48 の北側において検出した遺構である（第 63･78 図）。平面形状は、細長く不定形である。最大長は 2.62 m、最大幅は 0.8 mを測る。断面形状は鉢形、残存する遺構の最大深度は 0.11 mである。埋土は褐色微砂まじり粘土を主体とする。並行する土坑 48 と同様、近世の水田に係る遺構であるとは考えにくい。埋土から、遺物の出土はなかった。

土坑 48　土坑 48 は、5-3 区南半部において検出した土坑である（第 63・78 図）。平面形状は不定形であるが、東西方向に長い。最大長は 1.81 m、最大幅は 0.73 mを測る。断面形状は深い鉢形を呈しており、最大深度 0.32 mを測る。埋土は、褐色微砂まじりシルトを主体とする。埋土の上位から、土師器（古墳時代）の破片が多数出土した。遺構の用途および性格は不明であるが、出土遺物の状況から、この地点に、竪穴住居やこれに関連する遺構が存在した可能性がある。



第 78 図　第 5 調査区（5-3 区）　遺構平面断面図



第 79 図　第 5 調査区北東部　遺構平面断面図

8．5-1区　北東部検出遺構

5-1区では、北東部において、第2層の堆積を確認した。第2層は、既述の通り、中世包含層である。5-1区の北東部は、丘陵が東へ向かって下がる斜面上にあたる。このため、削平が著しい丘陵尾根筋上に比べて、包含層が残存する環境下にある。第2層を除去した遺構面では、溝を2条、検出した（第79図参照）。

溝31　調査区北東先端部から調査区内へと流入し、北西へむかって延びる溝である。確認した最大長は82.0 m、最大幅は6.0 mを測る。丘陵崖面の湾曲に沿うようにに続き、そのまま調査区外へと流出する。断面形状は鉢形に似る。最大深度は70.7 mを測る。埋土は黄褐色粘土質シルトを主体とする。下位に砂礫の流入があり、弱いラミナを認めることができた。埋土内からは、遺物の出土は認められなかった。

なお、5-1区では、南東部においても、類似した遺構を検出している（溝33）。丘陵尾根筋から斜面地への変化点に位置し、湾曲しながら調査区外へ続く点などが共通する。埋土も近似しており、同様の性格をもつ遺構である可能性が考えられる。

溝32　溝32は、溝31の北側において検出した溝である。検出した最大長は40 m、最大幅は0.9 m、最大深度は1.0 mを測る。断面形状は、鉢形もしくは側面に段をもつ。埋土は、明黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。ラミナなどは認められず、常時流水があったとは考えにくい。

この溝は、溝31と同様、調査区北東片より調査区内へ流入し、そのまま、調査区外へと続く。ただし、崖下に位置する第3調査区では、特にその痕跡が認められない。丘陵斜面の切り崩しによって、その先は明らかではないものの、溝の水流が、崖面を滑落して、調査区外へと連続していた可能性は低い。

以上の観察結果から、この2条の溝は、崖際を廻るように掘削された区画溝や排水溝であったと推測される。

溝32の埋土からは、土師器の破片（古墳時代）が1点出土した。

第5節　第6調査区の調査成果

1．調査の概要

第6調査区は、調査地南側丘陵上に設定したトレンチである。

調査区の中央には尾根筋が通るため、東・北・西の三方には、斜面の先に谷地を見ることができる。南方向へは、なだらかに上る丘陵地が続く。

平成15年度におこなわれた確認調査では、第6調査区内に2本のトレンチを設定し、調査をおこなっている。その結果、丘陵尾根筋上にあたる調査区中央辺部において、古墳時代の竪穴住居が確認された。また、調査区南端付近において、炭化物の集積土坑が報告された。これらの成果から、調査区の分割には、検出が予想される遺構を分断することのないよう、配慮した。

なお、確認調査において成果が報告されるまで、古墳時代に遡る居住域は調査地北側丘陵上に限られると考えられていた。このため、住居跡の発見は、集落の広がりについて、再考を迫る端緒となった。今回の調査では、この居住域がどの程度の広がりを見せるかが、注目された。

調査はまず、重機搬入路の予定地である6-2区を掘削し、次にその残地である6-1区に着手した。この節では、すべてをあわせて報告する。

2．第６調査区　検出遺構面

第５調査区同様、この調査区においても、ほぼ全域において、近世耕作土層の直下に地山を確認した。このため、同一遺構面において、古墳時代から近世に至るまでの遺構を検出した（第80図）。

検出した遺構は、竪穴住居、土坑、ピット、溝である。これらは、出土遺物および埋土の類似性によって、時期を推測した。

調査区の中央北辺では、古墳時代中期の竪穴住居を１棟検出した。調査区西辺部では、古墳時代～古代のピットおよび土坑の集積があり、一部に柱列を復元した。また、調査区の東では、開析谷の起点とみられる落込みを確認した。

3．第６調査区　検出遺構（竪穴住居）

竪穴住居１　竪穴住居１は、調査区北辺中央において検出した遺構である（第81図）。確認調査により、南辺の一部に撹乱をうけるが、残存状況はきわめて良好である。丘陵尾根上に位置するにもかかわらず、床面は良好な残存状態を保つ。このことは、設営当初から、相当深度の竪穴を有する建物であったことを示している。

住居の平面形状は、隅丸方形である。最大長は、北西－南東方向にあり、5.8 mを測る。北東－南西方向の最大幅は、5.5 mを測る。周溝の幅は 0.24 ～ 0.4 m、最大深度は 0.24 m程度である。遺構の主軸は、座標北より、30 度西に振った方向を指す。竪穴の埋土は、大きく上下に分層することができる。上層は、黄橙色細砂、下層は明黄褐色微砂を主体とする。床面には、にぶい黄橙色シルトを用いた貼床が、５～６㎝の厚さで残存していた。

竪穴内では、柱跡を４基検出した。また、西隅には、排水溝かと推測される小溝を検出した。この竪穴住居は、北西へ下がる斜面に位置するため、竪穴の西隅は、もっとも低い箇所にあたる。

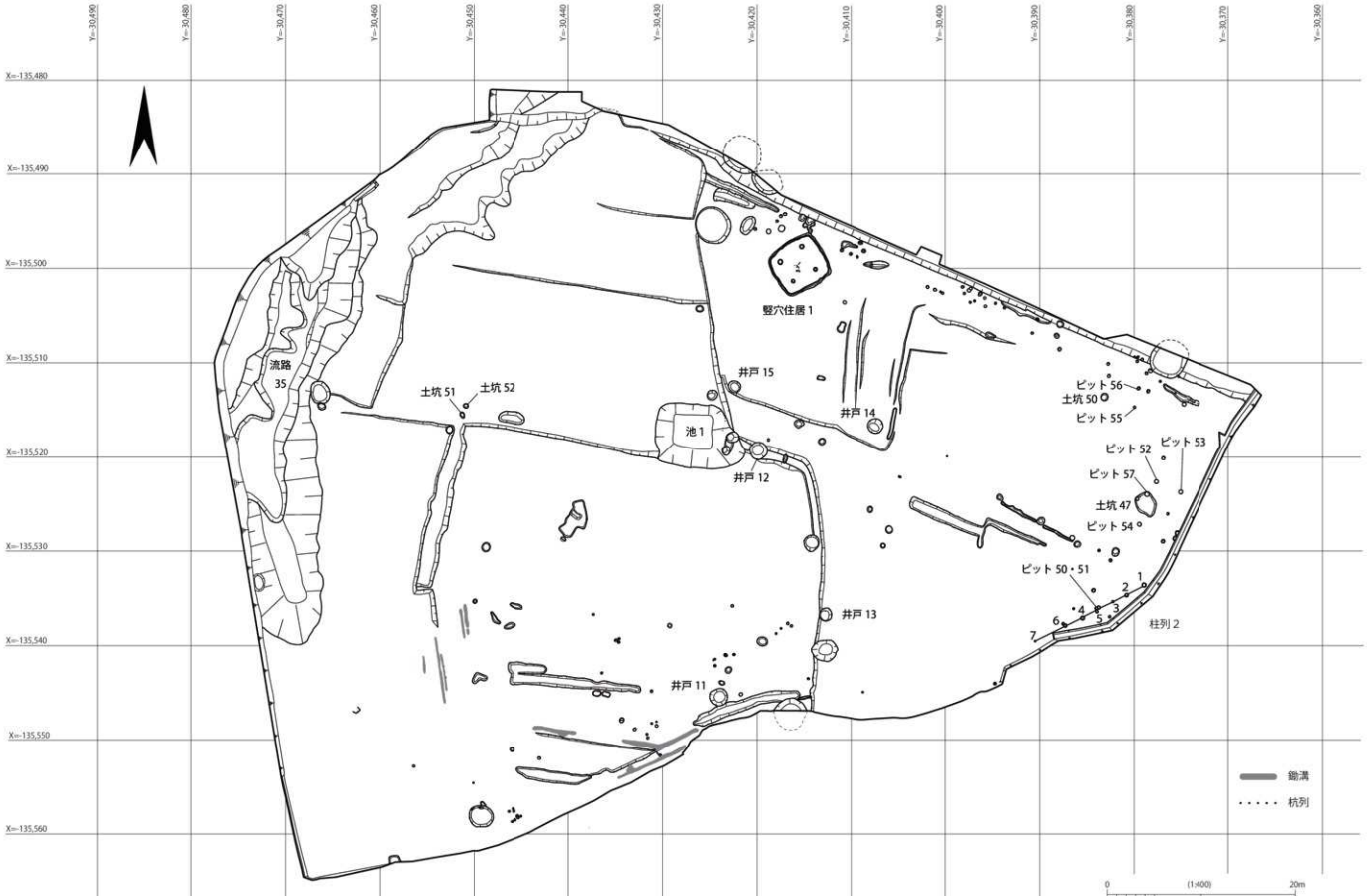
埋土の上層からは、土師器（古墳時代）、須恵器（７世紀）、サヌカイト切片が出土した。埋土の下層（床面直上）では、中央部から土師器甕片がまとまって出土した。また、周溝からは、弥生土器（後期）鉢３点、土師器（庄内式）鉢が１点、甕や高杯、鉢等を模したミニチュア土器が４点出土した。このうち、ミニチュア土器は、北西辺側溝の２箇所から２個体ずつ出土した。

これらの出土遺物から、竪穴住居１の存続時期は、弥生時代後期～古墳時代前半期であり、古墳時代後期には最終埋没したものと考えられる。

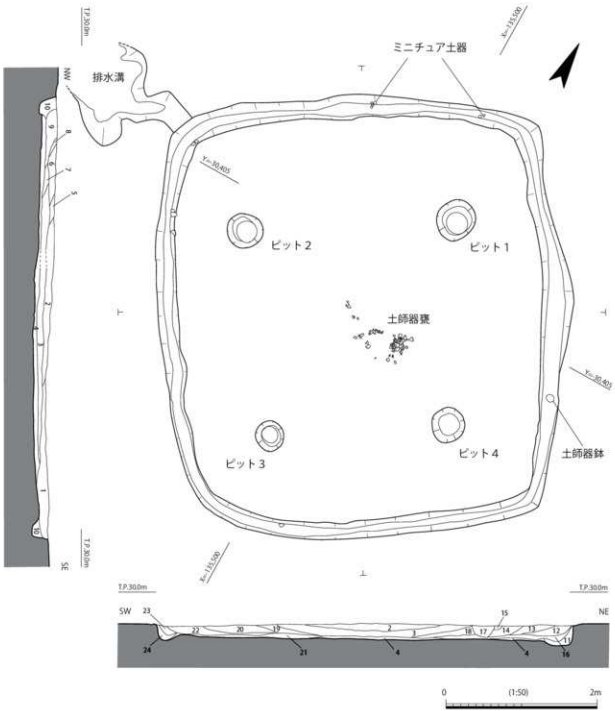
竪穴住居１ピット１　竪穴住居１より検出した４基の柱穴のうち、北に位置するものをピット１と付番した（第81・82図）。平面形状はほぼ円形であり、直径は 0.50 ～ 0.53 mを測る。断面形状は、底面に傾斜をもつ筒形を呈しており、最大深度は 0.7 mを測る。断面観察では、ピット中央より東南寄りの地点において、ほぼ直立する柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.27 mである。

ピット掘り方の埋土は、灰黄色粘土質シルトに黄橙色粗砂まじり粘土である地山をブロック状に含む。柱跡埋土はにぶい黄色粗砂まじりシルトを主体とする。柱跡埋土からは、炭化物を少量検出した。埋土から、遺物の出土はなかった。

竪穴住居１ピット２　ピット２は、竪穴住居１柱穴のうち、西に位置する遺構である（第81・82図）。平面形状はほぼ円形を呈しており、直径は 0.45 ～ 0.47 mを測る。掘り方埋土は深い湯呑形であり、最大深度は 0.64 mを測る。掘り方中央より南東に寄った地点において、柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.3 mを測る。

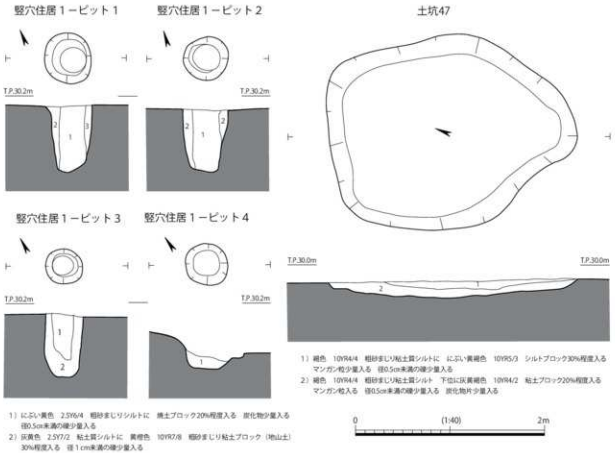


第 80 図　第 6 調査区　古墳時代～中近世遺構面　全体図



1）明黄褐色　10YR6/8　粘土質細砂まじりシルト　径2.0cm未満の礫多量含む
2）にぶい黄橙色　10YR7/4　細砂まじり微砂　径3.0未満の礫多量含む
3）黄褐色　10YR5/6　細砂まじり微砂　径1.0cm未満の礫多量含む
4）にぶい黄橙色　10YR6/4　細砂　径2.0cm未満の礫多量含む
5）浅黄橙色　10YR8/4　微砂　径1.0cm未満の礫少量含む
6）明黄褐色　10YR7/6　細砂　径1.0cm未満の礫少量含む
7）浅黄橙色　10YR8/4　細砂まじり微砂
8）黄橙色　10YR8/6　細砂まじり微砂
9）にぶい黄橙色　10YR7/4　細砂まじり微砂　鉄分沈着あり
10）黄褐色　10YR5/6　細砂まじり微砂
11）明黄褐色　10YR6/8　細砂
12）黄橙色　10YR7/8　細砂　径1.0cm未満の礫少量含む
13）黄橙色　10YR7/8　細砂　径1.0cm未満の礫少量含む
14）浅黄橙色　10YR8/4　細砂　径3.0未満の礫多量含む
15）明黄褐色　10YR6/6　細砂まじり微砂
16）明黄褐色　10YR7/6　細砂まじりシルト
17）黄褐色　10YR5/6　細砂質シルト
18）明黄褐色　10YR7/6　微砂　径3.0未満の礫多量含む
19）にぶい黄橙色　10YR7/3　微砂まじりシルト
20）黄橙色　10YR8/6　細砂　径1.0cm未満の礫少量含む
21）にぶい黄橙色　10YR7/4　シルト
22）明黄褐色　10YR7/6　微砂
23）黄褐色　10YR5/8　細砂
24）黄褐色　10YR5/8　細砂まじり粘土質シルト

第81図　第6調査区　竪穴住居1　平面断面図



第 82 図　第６調査区　遺構平面断面図（１）

埋土は、ピット１と近似する。遺物の出土はなかった。

竪穴住居１ピット３　ピット３は、竪穴住居１柱穴のうち、南に位置する遺構である（第 82 図）。平面形状は円形を呈しており、直径は 0.36 ～ 0.40 mを測る。掘り方埋土は深い湯呑形、最大深度は 0.65 mを測る。掘り方のほぼ中央において、柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.23 mである。埋土は、ピット１と近似する。埋土から遺物の出土はなかった。

竪穴住居１ピット４　ピット４は、竪穴住居１柱穴のうち、東に位置する遺構である（第 82 図）。残存する平面形状は円形である。このピットを含む一角は、確認調査時の掘削をうけた箇所であり、今回の調査では掘り方底辺の一部のみを確認した。直径は 0.43 mを測る。残存する深度は 0.23 mであるが、遺構面から概算すると、本来は 0.4 m程度の深さに復元できる。

埋土は、にぶい黄色を呈する粗砂まじりシルトである。埋土から遺物の出土はなかった。

４．第６調査区　検出遺構（土坑・柱列・ピット・井戸）

柱列２　柱列２は、調査区 6-2 区東半部において検出した遺構群である。周辺には、ピットが多く確認されたが、そのうちの７基が同一線上に並ぶことから、これを柱列として認識した。その主軸は、座標北より東へ 60 度東へ振った方向を指す。柱間は、1.8 ～ 1.9 mを測る。ピットの規模に大小があるため、柵列とは考えにくい。

ピットの埋土は、総じて上下層に分層することができる。上層は、近世包含層である黄褐色粗砂まじ

りシルトを主体とする。下層は、褐色粘土～シルトである。時期を特定できる遺物の出土はなかったが、埋土は、古代～中世に掘削された遺構の埋土に近似する。

柱列２ピット１　ピット１は、柱列のうち、もっとも北東に位置する遺構である（第 83 図）。平面形状は円形、直径は 0.42 mを測る。断面形状は不定形、最大深度は 0.33 mを測る。掘り方中央より南東寄りの箇所が一段下がるが、柱跡となるかどうかは判断できない。埋土は、上位ににぶい黄橙色粘土質シルト、下位に褐色粘土が堆積する。埋土から、遺物の出土はなかった。

柱列２ピット２　ピット２は、柱列のうち、北東より数えて２番目にあたるピットである（第 83 図）。平面形状は、北東－南西方向にやや長い楕円形を呈する。長径 0.32 m、短径 0.28 mを測る。断面形状は、丸みを帯びた逆凸形を呈する。最大深度は、0.21 mを測る。平面検出において、直径 0.15 mを測る柱跡を確認した。埋土は、にぶい黄橙色粘土質シルトである上層と、褐色粘土に褐灰色シルトブロックがまじる下層から成る。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

柱列２ピット３　ピット３は、柱列のうち、北東より数えて３番目にあたるピットである（第 83 図）。平面形状は、直径 0.3 mを測る円形である。断面形状は椀形、最大深度は 0.14 mを測る。埋土は、上位ににぶい黄褐色粘土質シルト、下位に褐色粗砂まじりシルトが堆積する。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

柱列２ピット４　ピット４は、柱列のうち、北東より数えて４番目にあたるピットである（第 83 図）。平面形状はほぼ円形、断面形状は深い椀形を呈する。直径は 0.4 ～ 0.42 m、最大深度は 0.3 mを測る。ピット中央に一段下がる範囲があり、この部分が柱痕跡であると考えられる。

埋土は、上位に明黄褐色粗砂まじり粘土質シルト、下位に褐色粗砂まじり粘土質シルトが堆積する。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

柱列２ピット５　ピット５は、柱列のうち、北東より数えて５番目にあたるピットである（第 83 図）。平面形状は、直径 0.41 mを測る円形である。断面形状は、椀形に似るが不定形である。最大深度は 0.29 mを測る。掘り方南西寄りの地点に一段落ち込む箇所があり、これが柱の痕跡にあたると考えられる。

埋土は、にぶい黄橙色粘土質シルトとにぶい黄橙色粗砂まじり砂質シルトの混合層から成る。埋土から、遺物の出土はなかった。

柱列２ピット６　ピット６は、柱列のうち、北東より数えて６番目にあたるピットである（第 83 図）。平面形状はダルマ形、断面形状は椀形を呈する。最大長は 0.69 m、最大深度は 0.32 mを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂まじり粘土質シルトである上層と、にぶい黄色橙色粗砂まじり砂質シルトの下層に分けられる。埋土からは、遺物が出土しなかった。

柱列２ピット７　ピット７は、柱列のうち、もっとも南西において確認したピットである（第 83 図）。他のピットと同一線上にあるものの、他に比べて柱間が広い。これは、ピット６とピット７の間に、本来存在したピットが削塌されたためと考えられる。

ピット８の平面形状は円形、直径は 0.22 mを測る。断面形状は浅い椀形、最大深度は 0.09 mを測る。これより南西側は、後世の水田整形による削平が著しく、連続するピットを確認することはできなかった。埋土は、上位に灰白色～淡黄色粗砂まじり粘土、下位に褐色粘土質シルトの堆積がある。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑 47　土坑 47 は、6-2 区東半部において検出した遺構である（第 82 図）。平面形状は、角の丸いゆがんだ五角形を呈する。北東－南西方向に最大長があり、2.64 mを測る。これに直交する最大幅は、

2.6 mを測る。断面形状は浅い皿形を呈する。最大深度は0.18 mである。

埋土は、褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。上位には、にぶい黄褐色シルトブロックがまじる。下位には、灰黄褐色粘土ブロックが少量入る。底面付近には、炭化物の小片が認められる。埋土から、土師器高杯（布留式）が1点出土した。

この遺構は、出土遺物や埋土の堆積状況から、古墳時代に属する遺構であると考えられる。周辺には同時期に類されるピットが確認できることから、建物等が存在した可能性が高い。

土坑50　土坑50は、調査区北東部において検出した遺構である（第83図）。平面形状はほぼ円形、直径は0.73～0.76 mを測る。断面形状は、逆台形に似る。最大深度は0.45 mを測る。埋土は表層に黒褐色粗砂まじりシルトがあり、その下に褐色粗砂まじりシルトが堆積する。底面付近には、直径6㎝未満の円礫が多量に入る。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

土坑51　調査区西半部において検出した土坑である（第84図）。平面形状は角の丸い三角形を呈する。最大長は0.7 m、最大幅は0.6 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は0.18 mである。埋土は、黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。近世の遺構であると考えられる。

埋土から、土師器片（中世？）、瓦質土器の破片、染付（18世紀）が出土した。

土坑52　調査区西半部において検出した土坑である。平面形状は円形を呈する（第84図参照）。直径は0.5 mを測る。断面形状は、方形に似る。最大深度は0.35 mを測る。埋土は、上下に分層することができる。上層は、褐色粗砂まじりシルトを主体とする。下層は、黄褐色砂質シルトに同色粘土ブロックが少量入る。

この土坑は、掘り方の形状から、小型の井戸であったと考えられる。埋土からは、須恵器（中世）および瓦質土器が出土した。中世の遺構である。

ピット52　ピット42は、土坑47の北側において検出したピットである（第83図）。平面形状は、直径は0.41 mを測る円形である。断面形状は、底面が丸い角笛形に似る。最大深度は、0.53 mである。断面観察により、掘り方中央において柱跡を確認することができた。柱跡の直径は0.17～0.2 mを測る。

掘り方埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄色粘土、にぶい黄色粗砂まじり粘土質シルト等である。柱跡埋土は、灰黄褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトから成る。深い掘り方を有することから、建物等の柱穴である可能性が高い遺構である。

埋土から、遺物の出土は認められなかった。

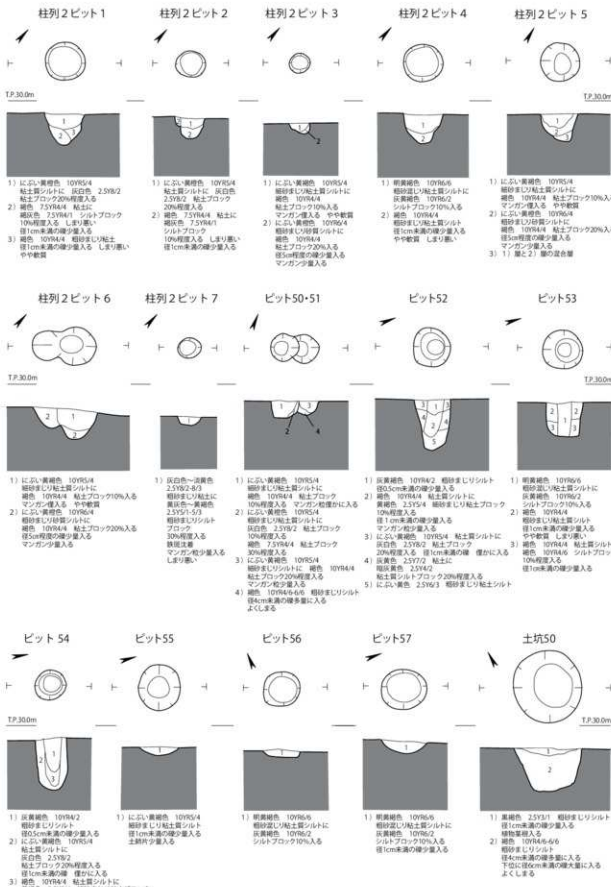
ピット53　ピット43は、ピット42の南西側において検出したピットである（第83図）。平面形状は円形、断面形状は、角が甘い方形を呈する。直径は0.4～0.42 m、最大深度は0.36 mを測る。断面観察により、掘り方中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.16 mを測る。

掘り方埋土は、褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。柱跡は、明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに、灰黄褐色シルトブロックが入る。明確な掘り方を有することから、ピット42との関連が注意される。埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

ピット54　土坑45の南側において検出したピットである（第83図）。平面形状は円形、断面形状は底が丸い筒型を呈する。直径は0.31～0.34 m、最大深度は0.55 mを測る。

このピットでは、掘り方のほぼ中央において、柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.24 mを測る。

掘り方埋土は、にぶい黄褐色粘土質シルトに、灰白色粘土ブロックがまじる。後者の粘土ブロックは、地山構成土の一種である。柱穴埋土は、灰黄褐色粗砂まじりシルトを主体とする。埋土から、遺物の出



第 83 図　第６調査区　遺構平面断面図（２）

土はなかった。

ピット 55　ピット 55 は、調査区北西端において検出したピットである（第 83 図）。平面形状は円形、断面形状は皿形を呈する。直径は 0.4 ～ 0.42 mを測る。最大深度は 0.1 mである。埋土はにぶい黄褐色細砂まじり粘土質シルトを主体とする。遺構内から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 56　ピット 56 は、調査区北西部において検出したピットである（第 83 図）。ピット 55 の北側にあたる。平面形状は円形、断面形状は浅い逆台形を呈する。直径は 0.36 ～ 0.39 m、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに灰黄褐色シルトブロックが入る。この埋土は、近世包含層に近似する。このピットでは、柱跡および遺物の出土は確認できなかった。

ピット 57　ピット 57 は、土坑 45 の上面において検出した遺構である（第 83 図）。平面形状は楕円形、断面形状は浅い鉢形を呈する。北西－南東方向に長く、長径 0.48 m、短径 0.44 mを測る。最大深度は 0.09 mである。埋土は、にぶい黄褐色細砂まじり粘土質シルトを呈する。この埋土は、近世包含層と同質である。底面付近から、土師器（中世）の破片が出土した。

井戸 11　井戸 11 は、調査区中央南辺において検出した素掘りの井戸である（第 84 図）。東西に長い楕円形を呈しており、長径 2.75 m、短径 2.25 mを測る。掘り方の北西に寄った箇所において、直径 1.1 ～ 1.3 mを測る円形の水溜部を確認した。

遺構面より 1 m程度の深さまで掘削をおこなったところ、掘り方埋土から、近世瓦が出土した。これにより、この井戸の掘削が近世以前にさかのぼるものではないことが判明した。

井戸 12　井戸 12 は、調査区中央において検出した素掘りの井戸である（第 84 図）。直径 1.8 mの円形を呈する掘り方のほぼ中央において、水溜部を確認することができた。水溜部の平面形状はソラマメ形に似る。南北方向に長く、長径 1.06 m、短径 0.9 mを測る。最大深度は、遺構面より 0.46 mである。

掘り方埋土は、にぶい黄褐色粗砂まじり砂質シルトに、地山ブロックが少量入る。水溜部の埋土は、近世包含層に近似する。埋土からは、瓦質土器（中世）が 1 点出土した。これにより、この井戸の掘削が中世以前にさかのぼるものではないことが判明した。

井戸 13　井戸 13 は、調査区中央南辺において検出した素掘りの井戸である（第 84 図）。平面形状は、北西－南東方向に長い楕円形を呈する。長径 1.35 m、短径 1.1 mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、最大深度は 0.7 mを測る。埋土は明黄褐色～黄褐色細砂まじり粘土質シルトに、灰黄色細砂まじりシルトブロックが入る。中央部には近世包含層の落込みが認められた。

埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

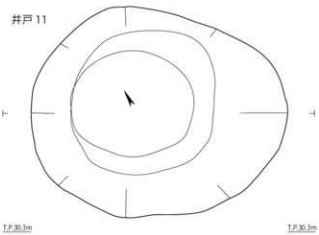
土坑 14　土坑 14 は、調査区の西半部において検出した土坑である（第 84 図）。平面形状は、北西－南東方向に長い楕円形を呈する。長径は、1.04 m、短径は 0.9 mを測る。断面形状は皿形を呈しており、最大深度は 0.18 mを測る。

埋土は、にぶい黄橙色粗砂まじり粘土質シルトと暗灰黄色細砂まじりシルトである。ともに近世包含層と同質である。水田隅にあることから、耕作に関する遺構であると考えられる。埋土から、染付の破片が 1 点出土した。近世後半期の遺構である。

井戸 15　井戸 15 は、調査区中央において検出した素掘りの井戸である（第 84 図）。掘り方は、不明瞭な楕円形を呈しており、北西－南東方向に最大径をもつ。長径は、1.3 m、短径は 1.15 mを測る。断面形状は、側面に段をもつ逆凸形、最大深度は 0.78 mを測る。埋土は、近世包含層に近似する。

埋土から、染付と陶器（近世）の破片が出土した。

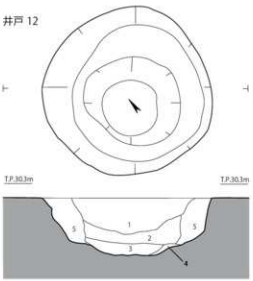
井戸 11



1）にぶい黄橙色　10YR7/2　細砂まじりシルトに　浅黄色　2.5Y7/3　粘土質シルトブロック20%程度入る
　明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック10%程度入る　径3cm未満の礫多量入る
2）にぶい黄橙色　10YR7/2　細砂まじりシルトに　浅黄色　2.5Y7/3　粘土質シルトブロック40%程度入る
　明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック10%程度入る　径3cm未満の礫多量入る
3）灰白色　2.5Y7/1　細砂シルト　径2cm未満の礫少量入る　鉄分沈着あり
4）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに　にぶい黄橙色　10YR7/2　細砂ブロック30%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る
5）にぶい黄色　2.5Y6/3　シルトに　灰黄色　2.5Y7/2　粘土ブロック入る　径1cm未満の礫少量入る
6）にぶい黄橙色　10YR6/3　細砂まじりシルトに　明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック10%程度入る
　細砂　ラミナ状に入る
7）にぶい黄橙色　10YR7/3　シルトに　灰白色　10YR7/1　細砂ブロック30%程度入る
8）灰黄色～にぶい黄色　2.5Y6/2-6/3　細砂～細砂まじりシルト　径3cm未満の礫少量入る
9）黄褐色　2.5Y5/6　粘土質シルトに　浅黄色　2.5Y7/3　粘土ブロック（地山撹乱土）30%程度入る
　鉄分沈着　マンガン粒少量入る

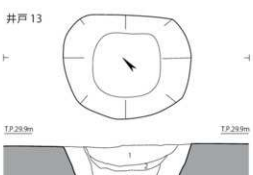
0　(1:40)　2m

井戸 12



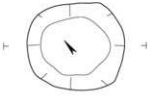
1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに　明黄褐色　10YR6/6　粘土質シルト
　筋状に入る　径1cm未満の礫少に入る
2）にぶい黄橙色　10YR6/3　粘土質シルトに　黄灰色シルトブロック20%程度入る
3）明黄褐色　10YR6/8　粘土ブロック10%程度入る　径0.5cm未満の礫少量入る
　鉄分沈着
4）にぶい黄橙色　10YR5/3　細砂混じり砂質シルトに　1）層ブロック20%程度入る
5）4）層に地山ブロック 10%程度入る　鉄分沈着　径1cm未満の礫少量入る

井戸 13



1）黄灰色　2.5Y6/1　シルトまじり細砂に　黄褐色　10YR5/6　粘土ブロック
　20%程度入る　径3cm未満の礫少量入る
2）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに　褐灰色　0YR6/1　細砂ブロック
　20%程度入る　径1cm未満の礫少量入る
3）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじり粘土質シルトに　径1cm未満の礫少量
　入る　下位に4）層ブロック 20%程度入る　マンガン粒入る　鉄分沈着
4）明黄褐色～黄褐色　10YR7/6-7/8　細砂まじり粘土質シルトに
　灰黄色　2.5Y6/2　細砂まじりシルトブロック 10%程度入る
　径2cm未満の礫少量入る　鉄分沈着　マンガン粒少量入る

井戸 14

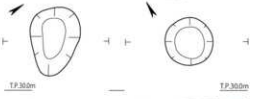


1）にぶい黄橙色　10YR6/4　粗砂まじり粘土質
　シルトに　浅黄色　2.5Y7/4　粘土ブロック
　20%程度入る　径2cm未満の礫少量入る
　鉄分沈着　マンガン粒少量入る
2）暗灰黄色　2.5Y5/2　細砂まじりシルトに
　明黄褐色　10YR6/6　粘土質シルトブロック
　30%程度入る　鉄分沈着
　マンガン粒少量入る
　径0.5cm未満の礫少量入る

井戸 15

1）黄褐色　10YR5/6　粘土質シルトに　明黄褐色　10YR6/6
　粘土質シルト筋状に入る　径1cm未満の礫僅かに入る
2）にぶい黄橙色　10YR6/3　粘土質シルト
　径1cm未満の礫少量入る
3）黄灰色　2.5Y6/1　シルトブロック20%程度入る　鉄分沈着
4）にぶい黄橙色　10YR5/3　細砂まじり砂質シルトに
　地山ブロック10%程度入る　径1cm未満の礫少量入る

土坑 51



1）黄褐色　10YR5/6
　細砂まじり粘土質シルト
　径1cm未満の礫少量入る

土坑 52

1）褐色　10YR4/4　粗砂まじりシルト
　径2cm未満の礫少量入る
2）黄褐色　2.5Y5/4　砂質シルトに
　黄褐色　2.5Y6/2　粘土ブロック20%程度入る
　マンガン粒少量入る

第 84 図　第 6 調査区　遺構平面断面図（3）

第６節　第７調査区の調査成果

１．調査の概要

第７調査区は、今回の調査対象地のうち、もっとも南側に設定したトレンチである。原地形では、相当の角度をもつ斜面地であったと考えられるが、水田際に 30～50㎝程度の段差を設けることによって、その緩和が図られている。

第７調査区は、工程上、7-1 区と 7-2 区に分割して調査をおこなった。この節では、両者をあわせて報告する（第 85 図）。

調査は、重機による現代耕作土および近世耕作土の除去から開始した。この調査区では、重機掘削をおこなった近世耕作土の直下において、地山の露呈が確認された。このため、地山上面が古代～近世の遺構面となる。

調査区西半部にあたる 7-1 区では、近世水田に伴う畦畔や溝、井戸、ピット群を確認した。7-2 区では、南西隅において竪穴住居を１棟検出した。

２．第７調査区　検出遺構（竪穴住居）

竪穴住居２　竪穴住居２は、7-2 区南西隅において検出した遺構である（第 86 図）。

この遺構について、実際に掘削調査をおこなうことができたのは、北西の一角についてのみである。遺構の南半部は、調査区外へと続くため、今回の調査では確認できていない。また、遺構の東半部は、後世の削平によって大きく削り取られている。このため、竪穴住居１棟のうち、約４分の１程度の範囲についてのみ、調査をおこなった。

この竪穴住居は、上位面の削平が顕著であるため、床面は、まったく残存していなかった。遺構面の検出時に確認できたのは、鉤型に屈曲する壁溝と、炭化物および焼土の集積土坑（炉跡）、ピット１基のみである。

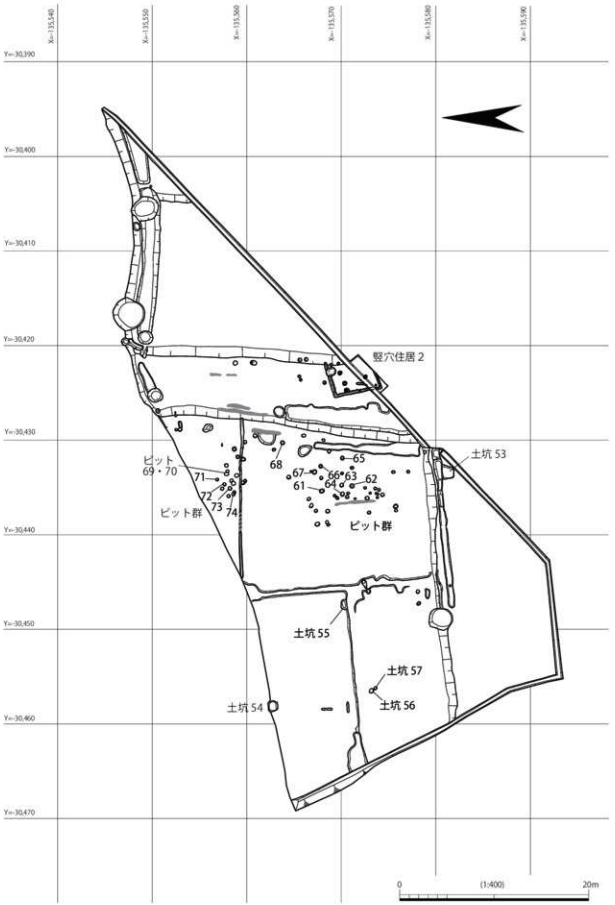
調査を進めるうち、壁溝より遺物の出土が認められ、調査区外へと続く様相が示された。このため、急遽、調査区を道路予定地極限まで拡張し、遺構の広がりを確認することとなった。

住居の平面形状は、方形である。周溝のコーナーは、直角もしくはやや鋭角に屈曲する。住居の全体面積は明らかではないが、北西－南東方向の最大幅は 5.1 ｍを測る。第６調査区において検出した竪穴住居１（最大長 5.8 ｍ）より、小規模である。

遺構の主軸は、座標北より、10 度西に振った方向を指している。この住居は、南南東へ緩やかに下がる斜面地上に立地することから、等高線に直交する方向軸を意識して築造されたと考えられる。

今回の調査において確認できた壁溝の長さは、約 11 ｍである。壁溝の幅は 0.2 ～ 0.34 ｍ、最大深度は 0.16 ｍ程度である。壁溝の埋土は、にぶい黄褐色細砂まじり粘土質シルト、にぶい黄橙色細砂まじり粘土質シルト、暗灰黄色細砂まじりシルト等である。この中には、一定量の炭化物や焼土が含まれている。後述する竪穴住居の柱穴埋土には、焼土が含まれていないことから、壁溝が機能している段階で、焼土が堆積する状況にあったとみてよい。これは、他の調査区において検出した竪穴住居とも、異なる様相である。

住居内では、大小６基のピットを検出した。また、周溝の北側において、１基のピットを確認した。また、この遺構の北辺部では、焼土および炭化物を多量に含む浅い土坑を発見した。この土坑は、丘陵斜面の



第 85 図　第 7 調査区　古墳時代～中近世遺構面　全体図

上方にあることから、杭跡の痕跡であると推測される。

周溝埋土からは、土師器（古代）鉢１点、鉄製鎌１点、ほか土師器の小片が数点出土した。

竪穴住居２ピット１　ピット１は、竪穴住居内北半部において検出した柱穴である（第 87 図）。平面形状はいびつな円形を呈する。直径は 0.4 ～ 0.43 mを測る。断面形状は逆凸形を呈する。最大深度は 0.42 mを測る。断面観察により、掘り方中央において柱跡を確認した。柱跡の直径は 0.17 ～ 0.2 mを測る。

掘り方の埋土は、灰黄色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトを主体とする。柱跡の埋土は灰黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに、黄褐色粘土ブロックが入る。柱跡埋土には、少量の炭化物が含まれていた。埋土からは、遺物の出土は認められなかった。

竪穴住居２ピット２　ピット２は、竪穴住居内北西部において検出した柱穴である（第 87 図）。建物との位置関係から、住居の梁もしくは桁を支える北西柱であったと考えられる。

ピットの平面形状は、ほぼ円形を呈している。直径は 0.44 ～ 0.45 mである。断面形状は、深い湯呑形、最大深度は、最大深度は 0.5 mを測る。断面観察により、掘り方中央より南に寄った地点において、柱跡を確認した。柱跡の直径は、0.22 mを測る。

このピットの掘り方埋土と、柱跡の埋土は近似する。ともに、明黄褐色細砂まじり粘土質シルトに、黄褐色粘土ブロックおよび灰黄褐色シルトブロックが入る。両者の上位には、灰黄黄褐色粗砂まじりシルトの堆積する。この層に炭化物が含まれていることから、このピットでは、柱穴が抜き取られた後、建物全体が埋没した可能性がある。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

竪穴住居２ピット３　ピット３は、竪穴住居西側壁溝の内側に接する地点において検出した柱穴である（第 87 図）。平面形状は南北に長い楕円形を呈する。長径は 0.51 m、短径は 0.43 mを測る。断面は、底面が波打つように落ち込む形状を呈する。最大深度は 0.22 mである。

ピット北側の落込み部分は、埋土および断面の形状から、柱跡と捉えることはできない。ピットの埋土は、にぶい黄色粗砂まじりシルトを主体としており、底面近くに灰黄色粘土質シルトが堆積する。両者ともに炭化物の混じりこみが認められた。埋土からは、遺物の出土はなかった。

竪穴住居２ピット４　ピット４は、竪穴住居周溝より北側において検出したピットである（第 87 図）。竪穴住居との関連性は明らかではないが、他に連続する遺構が確認できないことから、ここへ併記する。

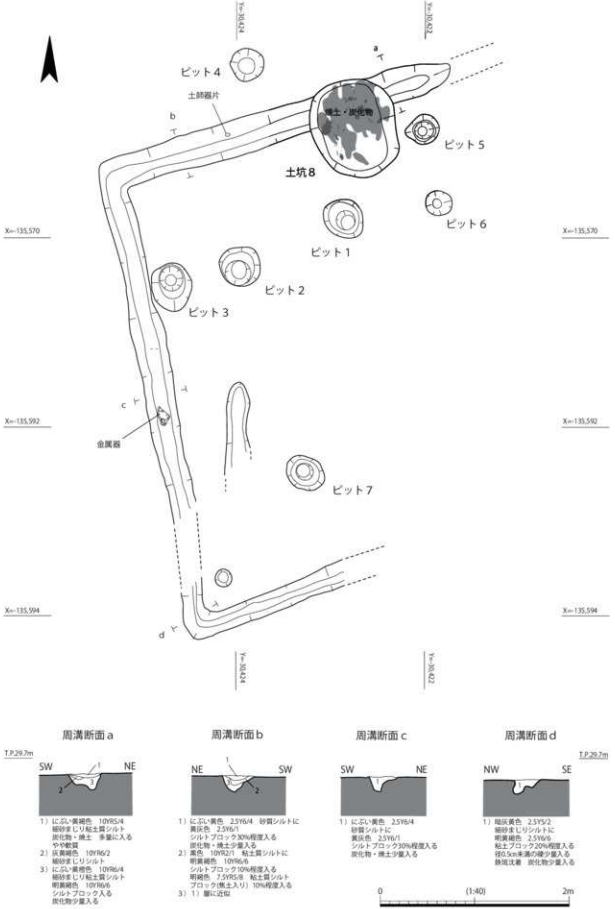
平面形状はほぼ円形、直径は 0.35 mを測る。断面形状は柱跡が突出する逆凸形を呈する。最大深度は 0.22 mを測る。このピットでは、柱跡を確認できなかった。

埋土は、にぶい黄色粗砂まじりシルトを主体とする。層内には、赤色化した焼土ブロックおよび炭化物が含まれている。埋土から、遺物の出土は確認できなかった。

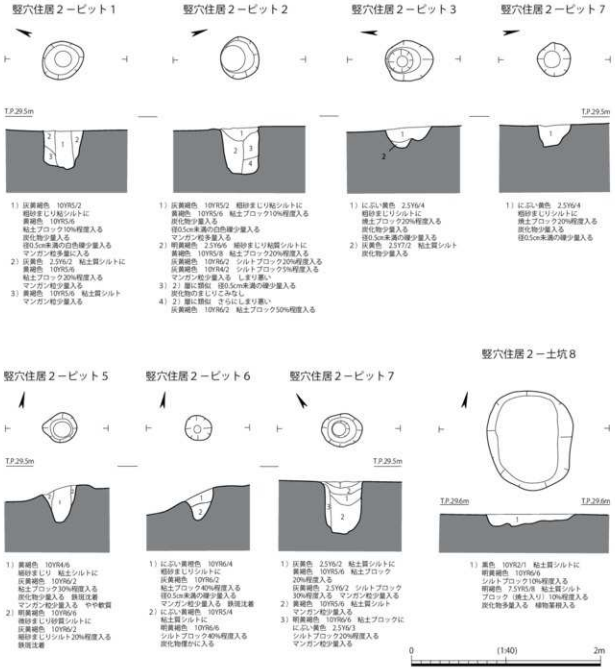
竪穴住居２ピット５　ピット５は、竪穴住居北半部において検出した柱穴である（第 87 図）。平面形状は、一部が突出したような、いびつな円形を呈する。長径は 0.36 m、短径は 0.31 mを測る。断面形状は、先端部が丸いＶ字形に似る。最大深度は、0.37 mを測る。このピットでは、掘り方中央において、柱跡を確認することができた。柱跡の直径は、0.18 mである。

掘り方の埋土は、明黄褐色微砂まじり砂質シルトと、灰黄褐色細砂まじりシルトブロックの混合層である。柱跡の埋土は、黄褐色細砂まじり粘土質シルトを主体としており、炭化物の含有が認められる。埋土から、遺物の出土はなかった。

竪穴住居２ピット６　ピット６は、ピット５の南側において検出した遺構である（第 87 図）。上面に削平を受けるが、住居との位置関係から、住居の上部構造を支える北東柱であると考えられる。



第86図　第7調査区　竪穴住居2　平面断面図



第 87 図　第 7 調査区　竪穴住居 2　遺構平面断面図

ピットの平面形状は、円形を呈している。断面形状は、先端部が丸い角錐形に似る。直径は 0.27 ～ 0.28 m、残存する最大深度は 0.26 m を測る。埋土は、にぶい黄橙色粗砂まじりシルトを主体とする上層と、にぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする下層に分層できる。下層には、僅かながら炭化物の含有が確認された。なお、このピットでは、柱跡および出土遺物は確認できなかった。

竪穴住居２ピット７　ピット７は、竪穴住居南半部において検出した柱穴である（第 87 図）。ピット２に相対する位置にあることから、住居の南西柱であると考えられる。

ピットの平面形状は、北西－南東方向に長い楕円形を呈する。長径は 0.43 m、短径は 0.34 m を測る。断面形状は、先端部に丸みを帯びる筒型、最大深度は 0.53 m を測る。このピットでは、明確な柱跡を確認することはできなかった。

ピットの埋土は、灰黄色粘土質シルト、灰黄褐色シルト、黄褐色粘土質シルト、明黄褐色粘土などが積み重なる混合層である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

竪穴住居２土坑８　土坑８は、竪穴住居北辺上において検出した土坑である（第 87 図）。平面形状はいびつな楕円形を呈している。竪穴住居とほぼ同方向に長軸をもつ。長径は 1.03 m、短径は 0.91 m を測る。断面形状は不定形であり、明確な掘り方を認めることはできなかった。最大深度は 0.12 mを測る。

土坑の埋土は、黒色ないし明褐色を呈する被熱した粘土塊の集積である。埋土内には多量の炭化物のほか、摩滅した土師器の細片も含まれていた。

これらの状況から、この土坑は、竪穴住居の炉跡であると推定される。なお、掘削を進めたところ、焼土を取り除いた下には、壁溝が貫通することを確認した。

３．第７調査区　検出遺構（ピット・土坑）

土坑 53　土坑 53 は、7-1 区西半部北辺において検出した遺構である（第 88 図）。南北方向に主軸を持つ土坑であるが、北辺半部が調査区外へ続くため全体形状は明らかではない。平面形状は、いびつな隅丸方形を呈する。残存する最大長は 1.22 m、最大幅は 1.52 mを測る。断面形状は、方形、最大深度は 0.3 mを測る。埋土は大きく三分することができ、上位に黄褐色砂質シルト、中位ににぶい黄褐色粗砂まじりシルト、下位ににぶい黄橙色細砂～中砂が堆積する。この土坑は、主軸を水田畦畔の方向軸と同一に取ることから、水田に伴う遺構であると考えられる。埋土からは、瓦質土器と染付の破片が出土した。

土坑 54　土坑 54 は、7-1 区に市半部北辺において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状は、いびつな方形を呈する。残存する最大長は 1.1 m、最大幅は 1.0 mを測る。断面形状は、浅い皿形、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、明黄褐色粗砂まじり粘土ブロックを含む灰黄褐色粗砂まじりシルトである。底部付近には、地山ブロックの巻き上げが認められる。

この土坑は、埋土の堆積状況から、近世水田に伴う遺構であると考えられる。埋土からは、土師器（中世）の破片が 1 点出土した。

土坑 55　土坑 55 は、7-1 区西半部において検出した土坑である（第 88 図）。平面形状は不定形である。東西方向に長軸があり、最大長 0.97 m、最大幅 0.61 mを測る。断面形状も底面に凹凸があるため、一定ではない。最大深度は、0.19 mを測る。

埋土は明黄褐色ないし明赤褐色を呈する粘土～粘土質シルトである。埋土から、サヌカイト切片が 1 点出土した。遺構の性格や用途は明らかではないが、調査に先立って行われた確認調査では、この土坑埋土に類似した明赤褐色粘土層から、サヌカイト切片が出土することが報告されている。

土坑 56　土坑 56 は、7-1 区西半部において検出した土坑である（第 88 図）。平面形状はいびつな楕円形を呈する。長径は 0.5 m、短径は 0.42 mを測る。断面形状は浅い皿形、最大深度は 0.07 mである。遺構の埋土は明黄褐色を呈しており、土坑 55 と類似する。埋土からは、サヌカイト切片が 1 点出土した。

土坑 57　土坑 57 は、土坑 56 の南東において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状はいびつな円形を呈する。直径は 0.28 ～ 0.32 mである。断面形状は、浅い鉢形、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、土坑 56 と同質である。この土坑からは、遺物の出土は認められなかった。

ピット 61　ピット 61 は、7-1 区東半部において検出したピット群のうちのひとつである。周辺では、

50 基におよぶピットを確認したが、建物跡等の復元は困難であった。ここでは、残存状態が良好な遺構について記述をおこなう。

ピット 61 の平面形状は、ほぼ円形、直径は 0.22 mを測る（第 88 図）。断面形状は方形に近く、最大深度は 0.09 mを測る。埋土は暗灰黄色細砂まじりシルトに、地山ブロックが少量入る。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 62　ピット 62 も同じく、7-1 区東半部ピット群において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状は、ほぼ円形、直径は 0.4 ～ 0.44 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.09 mである。埋土は明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに灰黄褐色シルトブロックが少量混じりこむ。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 63　ピット 63 も同じく、7-1 区東半部ピット群において検出したピットである（第 88 図）。ピット 59 の南側に位置する。平面形状は、いびつな楕円形である。長径は 0.42 m、短径は 0.39 mを測る。断面形状は浅い鉢形、最大深度は 0.1 mを測る。ほぼ円形であり、直径は 0.39 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.1 mである。埋土は明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトに灰黄褐色シルトブロックが混入する。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 64　ピット 64 も同じく、7-1 区東半部ピット群において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状は、ほぼ円形、直径は 0.4 ～ 0.44 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.09 mである。埋土はピット 63 と同質である。底面付近から、土師器（古墳時代？）の破片が 1 点出土した。

ピット 65　ピット 65 は、7-1 区東半部ピット群の西辺において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状は、北東－南西方向に長い楕円形を呈する。長径は 0.38 m、短径は 0.3 mを測る。断面形状は湯呑形、最大深度は 0.17 mを測る。埋土は、灰黄褐色シルトまじり細砂である。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 66　ピット 66 も同じく、7-1 区東半部ピット群の北辺に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状は、ほぼ円形であり、直径 0.29 ～ 0.31 mを測る。断面形状は隅丸方形、最大深度は 0.1 mである。

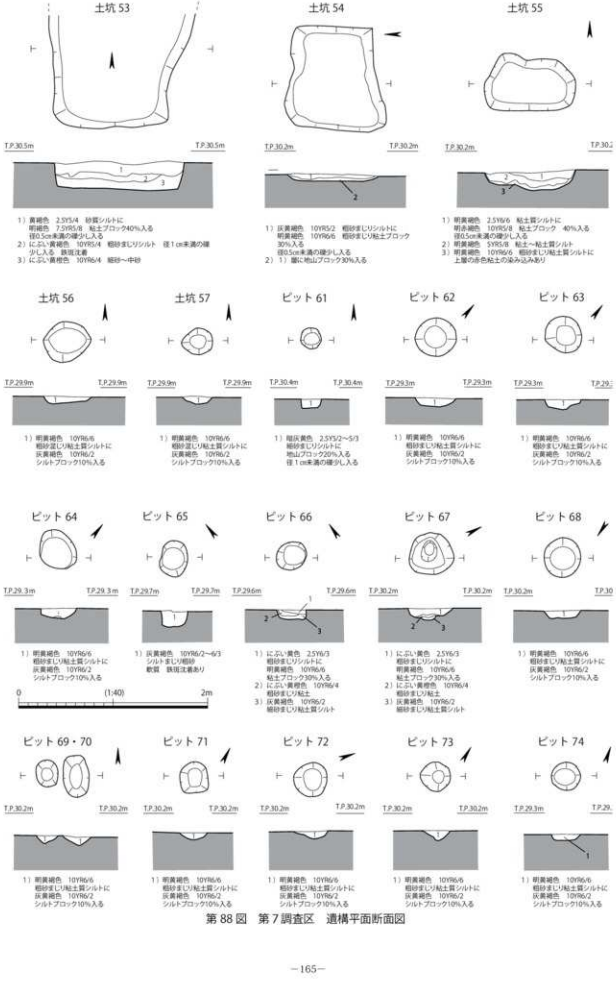
埋土はにぶい黄色細砂まじりシルトに明黄褐色粘土ブロックが入る上層、にぶい黄橙色粗砂まじり粘土である中層、灰黄褐色細砂まじり粘土質シルトである下層に分けることができる。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 67　ピット 67 は、ピット 66 の北西において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状は、隅丸三角形に似る。最大長は北東－南西方向にあり、0.48 mを測る。これに直交する最大幅は 0.43 mである。埋土の組成は、ピット 66 に近似する。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 68　ピット 67 は、7-1 区東半部ピット群の北東に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状は楕円形であり、長径 0.41 m、短径 0.38 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.08 mである。埋土は、明黄褐色粗砂まじりシルトに黄褐色シルトブロックがまじる。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 69　ピット 69 は、7-1 区北東部において検出したピット群の中に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状はほぼ円形であり、直径は 0.26 ～ 0.28 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、灰黄褐色シルトブロックが入る明黄褐色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 70　ピット 70 は、ピット 69 の東側に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状は、南北に



第 88 図　第 7 調査区　遺構平面断面図

長軸をもつ楕円形を呈する。長径は 0.44 m、短径は 0.31 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.09 mを測る。埋土は、ピット 69 と同質である。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 71　ピット 71 は、7-1 区北東部において検出したピット群のうち、北辺に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状はいびつな円形、断面形状は皿形を呈する。直径は 0.3 ～ 0.33 m、最大深度は 0.07 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、ピット 69、ピット 70 と同質である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 72　ピット 72 は、7-1 区北東部ピット群において検出した遺構である（第 88 図）。平面形状はほぼ円形であり、直径は 0.36 ～ 0.37 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.08 mを測る。埋土は、同ピット群に位置する他のピット埋土と同質である。埋土から、遺物の出土はなかった。

ピット 73　ピット 73 は、7-1 区北東部ピット群の中に位置する遺構である（第 88 図）。平面形状は、いびつな円形を呈する。直径は 0.32 mを測る。断面形状は鉢形、最大深度は 0.1 mである。埋土は、同ピット群に位置する他のピットと同質である。埋土から、遺物の出土は認められなかった。

ピット 74　ピット 74 は、7-1 区北東部ピット群のうち、西辺部に位置するピットである（第 88 図）。平面形状はほぼ円形であり、直径は 0.3 mを測る。断面形状は皿形、最大深度は 0.07 mを測る。埋土は、同ピット群に位置する他のピットと同質である。遺物の出土はなかった。　〔黒須亜希子〕